明治三十五年九月五日發行
毎月一回五日發行

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

# 女學世界

## 第二巻第十一號

口繪






三井呉服店
東京日本橋駿河町
大阪高麗橋二丁目
東京電話本局 特五三五、一二一七、一八六〇、二三二三
大阪電話東 特四七三、一六五〇
新柄流行の反物品々階上階下にのこらず陳列し尚休息室をも取設け候間ゆる〳〵御遊覧奉願上候
地方よりの御注文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送可仕候尚注文案内書も有之候

# 女學世界 第貳巻第拾壹號 目次


二八水は
肌を白くきめをよくし●にきび●あせも●ひび●すべて肌のあれ、おしろい下に用ゐて尤もよし又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり
登録商標
本品縮圖
中瓶一本拾五錢
花王石鹸
品質善良と衛生に經濟を旨として製煉したる佳品なり
●賣捌所は全國到る處にあり
東京日本橋區馬喰町二丁目
發賣本舖
長瀬富郎
（電話特浪花九二二）

## 秋草



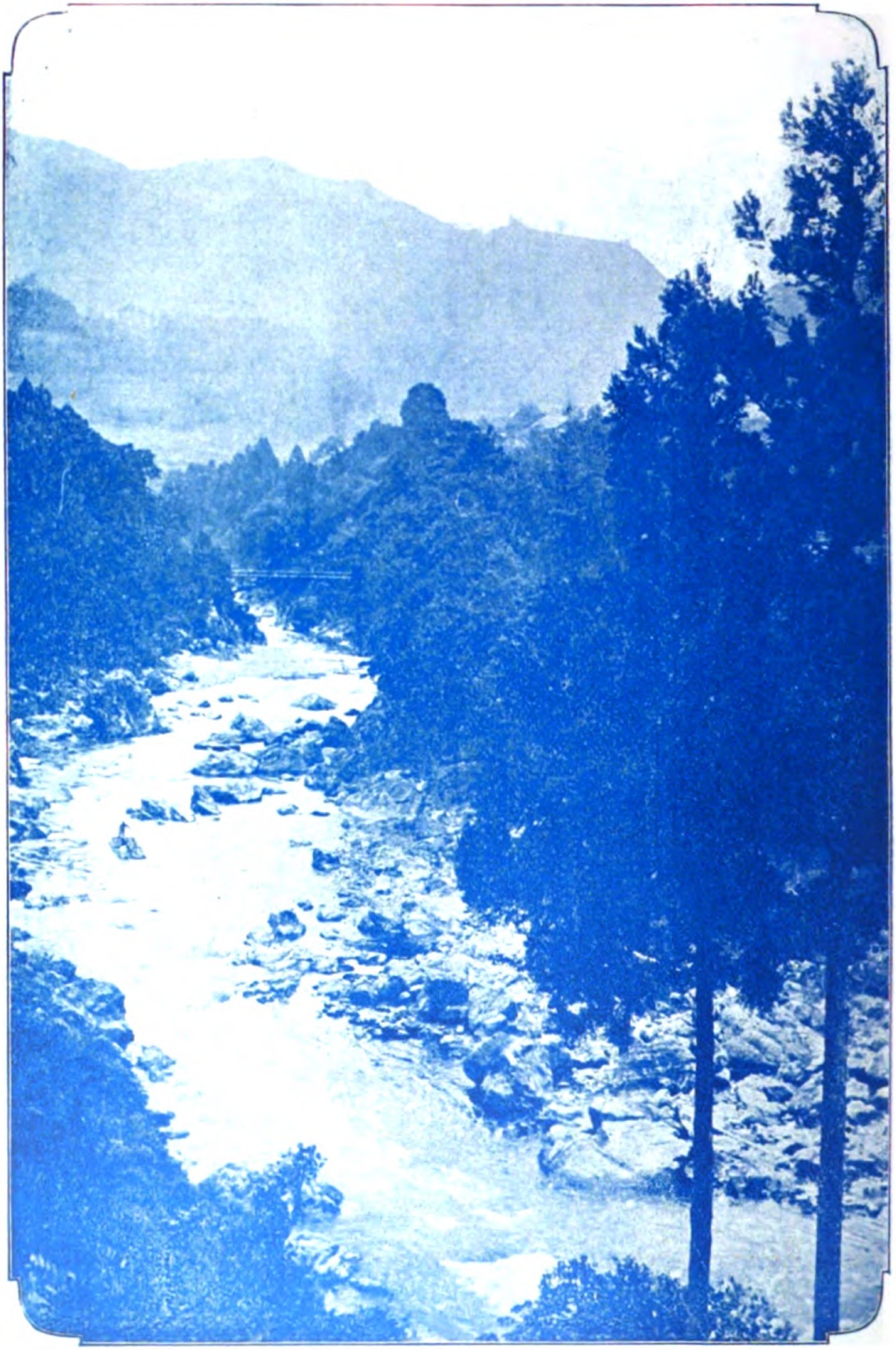
武内桂舟筆

小川一眞製



跡見花蹊女史

## 多摩川の上流 (武藏國)



多摩川より御嶽山を望む

美人の末路



（第九頁參照）

（大野靜方氏筆）

楊貴妃殺害に遭ふの圖

# 受驗問答叢書

天溪 長谷川誠也君編

## 新撰西洋歷史問答

全壹冊

洋裝袖珍上製
正價二拾錢
郵稅四錢

本書は通常の問答書の如く只管及第を目的とする速成術を授くるものにあらず說述簡單にして爾も正確なり而して生徒は教師の解說を待たずして西洋史の大要を了解し得へき樣記述せり是れ本書が普通の教科書に勝る特色なり去れば固より試驗用として適當なるのみならず常に座側に供へなば他書よりは得べからざる大多の便宜あるを知るべし

**既刊**

| | | |
|---|---|---|
| 第壹編 | 新撰日本地理問答 | 上村左川君編 |
| 第二編 | 新撰日本歷史問答 | 宮田修君編 |
| 第三編 | 新撰世界地理問答 | 武田櫻桃君編 |
| 第四編 | 新撰東洋歷史問答 | 松原岩五郎君編 |

**續刊**

| | | |
|---|---|---|
| 第六編 | 新撰國文問答 | 鷹野勇雄君編 |
| 第七編 | 新撰漢文問答 | 大田才次郎君編 |
| 第八編 | 新撰算術問答 | 竹貫登代太君編 |
| 第九編 | 新撰代數問答 | 竹貫登代太君編 |

**定價**

●一冊金廿錢●六冊前金一圓十錢●十二冊前金二圓十錢●二十四冊前金四圓●郵稅一冊金四錢●一冊紙數二百四十頁以上

(甲の一)

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

（甲の二）



大判
小判
池田製

# 帝國百科全書

貴族院書記官兼内務省參事官
日本法律學校行政法講師法學士 小原新三先生著

## 帝國百科全書第八十八編 行政法各論

（近刊）

上製五拾錢 郵税拾錢
並裝卅五錢 郵税八錢

凡そあらゆる法律中に於て其範圍の浩汎なるものは行政法也、其實積の尨雜なるものも行政法也、其活動の變幻なるものも行政法也、而して國運と人民權利との消長に關すること最も大なるもの、一も亦行政法也然れども行政法學の發達は極めて晩近の事に屬し、之に關する學者の見解の如き一途に出るもの少く却て人をして之か觀念を捕捉せむと欲して而も茫然自失せしめざる者甚稀也我國に於て更に困難なる事情の一として擧げざるべからざるは之に關する其の著書の缺乏せるに在り、著者は現に立法及行政の二要部に在り且つ行政法に關し教鞭を私立學校に取らるゝもの數年夙に博識にして見地の卓拔なるを以て名あり而して文章は先生の最も得意とせらるゝ所なり本書の行政法理を斷するは恰も快刀亂麻を斷するが如きものあり學者及實際家の志を行政法の研究に寄せらるゝ士の苟も一讀せざるべからざる良著也

### 續刊

● 養蠶及製絲　農學士 井上正賀先生著

● 心理學　文學士 速水晃先生著

● 行政法各論　法學士 小原新三先生著

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（甲の四）



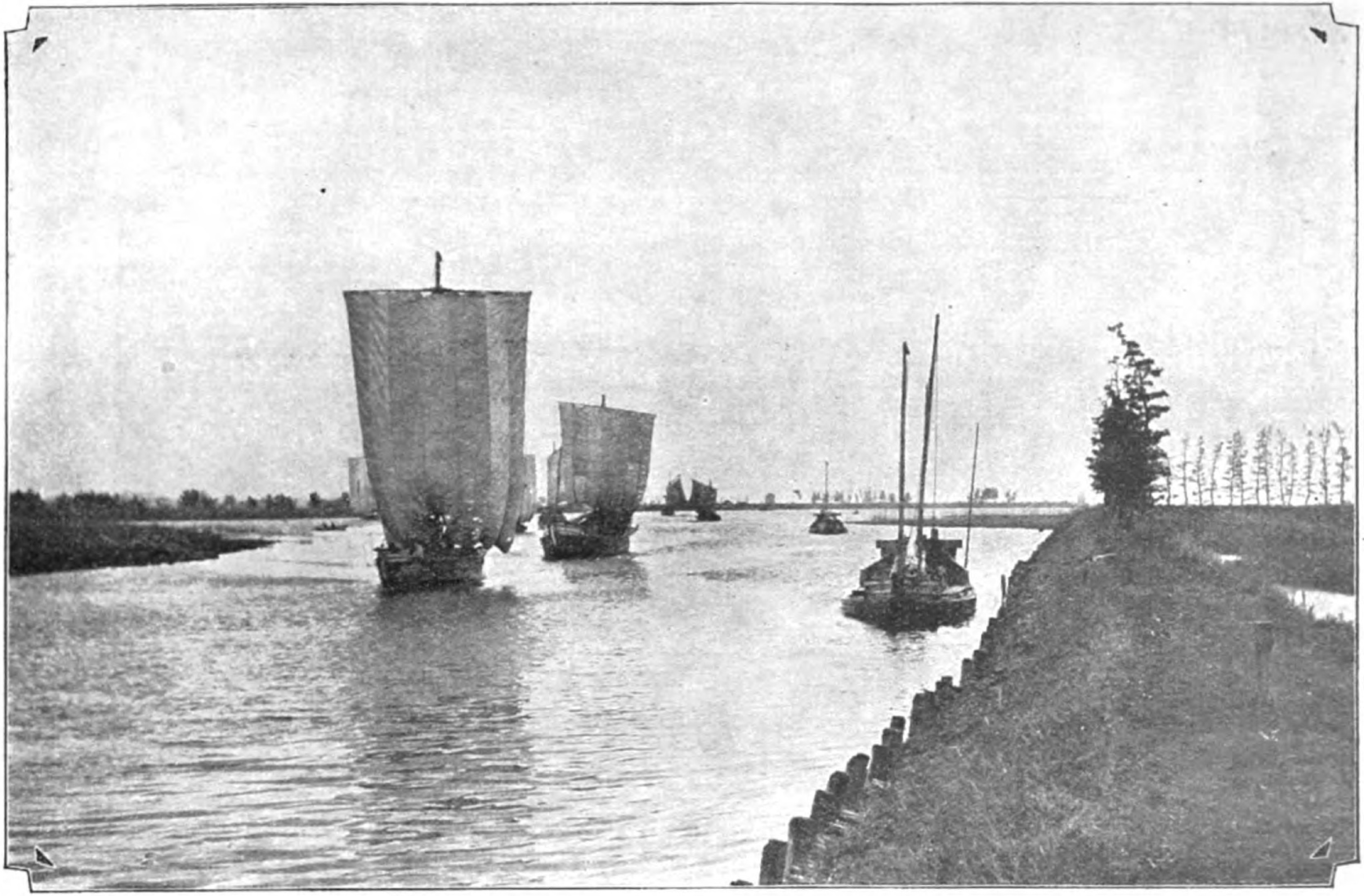
京都平安女學校生徒



南部支那富豪の邸宅



長崎の玉浦同窓會



武州羽田浦の夕景

日本鐵道株式會社編纂

# 日本鐵道線路案内記

銅版（日本鐵道全線路詳密圖◉東京市街圖◉仙臺市水戸市高崎市宇都宮市◉盛岡市青森市最近地圖入）挿入

全壹册洋裝
並製四六版
紙數五百頁
正價金未定

## 寫眞銅版口繪

日本鐵道株式會社◉上野停車場◉秋葉原貨物取扱所構内◉上野機關庫◉上野公園◉淺草觀世音◉向島◉靖國神社◉宮城二重橋◉衆議院と貴族院◉上野雪景◉飛鳥山◉東京府廳◉招魂社遊就館◉兩國橋◉九段大祭◉伊香保温泉市街◉伊香保金太夫ホテル◉高津戸◉榛名山湖◉足利鑁阿寺◉足利學廟◉前橋公園より利根川を望む◉小山思川の景◉大谷觀音◉宇都宮二荒神社◉日光街道の杉並木◉日光陽明門◉華嚴の瀧◉湯本温泉◉日光三代將軍廟内陣◉日光外山臺より小西別館を望む◉大宮公園◉隅田川鐵橋◉柴又帝釋天表門◉江戸川鐵橋◉土浦眞鍋公園◉布施辨才天◉笠間胡桃下稻荷神社◉加波山雨門觀音◉霞か浦入口◉水戸公園の梅◉常陸國大洗◉常陸國河原子海邊◉常陸國助川◉常陸國高萩停車場近傍◉常陸國高戸◉磯原二ッ島◉常陸國天妃山海邊◉常陸國平潟港◉勿來關趾◉勿來關下松川磯◉入山炭礦◉平潟港外國道隧道◉岩澤竹駒神社◉請戸濱金華山公園◉盤城太田妙見◉松川浦近傍原釜海水浴場◉盤城國原釜◉盤城國松川浦（夕顔觀音堂前面）◉松川浦の眺望◉白川南湖◉甲子大熊女瀧◉甲子温泉◉郡山開成山◉龍ヶ崎の瀧◉飯坂温泉◉鎌先温泉◉青根温泉◉福島市阿武隈川◉白石材木巖◉仙臺榴ヶ岡公園◉小牛田山の神◉仙臺青葉城正門◉仙臺榴ヶ岡公園の老櫻◉鹽竈神社◉青麻神社◉松島五大島◉五串の飛橋◉平泉中尊寺◉盛岡公園招魂社◉淺虫海濱遠景◉奥州の雪景色◉雪拂機關車青森驛出發◉松島不老島◉馬淵川◉磯部温泉大津海岸◉原釜等

一區線●自上野至高崎
二區線●自大宮至白河
三區線●自白河至仙臺
四區線●自仙臺至盛岡
五區線●自盛岡至青森

山手線●自品川至赤羽
海岸線●自田端至岩沼
海岸線●自友部至小山
日光線●自宇都宮至日光
兩毛線●自小山 前橋ヲ經由シテ一區線ニ接續ス

尙本書は前掲の外前付に本社各課所在地、及び、諸般の統計、旅客の注意、入場切符の發賣驛、定期乘車券、回數乘車券、學生の乘車賃金割引、多人數乘車券、列車仕給、旅客列車の別仕立、客車貸切、旅客の手荷物幷に小荷物其他の賃金表、大貨物運賃及手數料、日本鐵道貨物取扱人名簿等、あらゆる旅行に必要なる事項は秋毫も漏らさず明細に列記して遺憾なく實に從來坊間にありふれたるものとは大に其趣きを異にせり故に旅途に上る人は常に旅鞄中本書を收めたらんには旅情の慰籍となるのみならす精細に地理人情物産等をも知悉することを得べし

**發兌元** 東京日本橋區本町三丁目 **博文館**

## 新刊發賣

# THE STORY OF DON QUIXOTE.

文學士畔柳芥舟君解說
英學新報社編輯部校訂

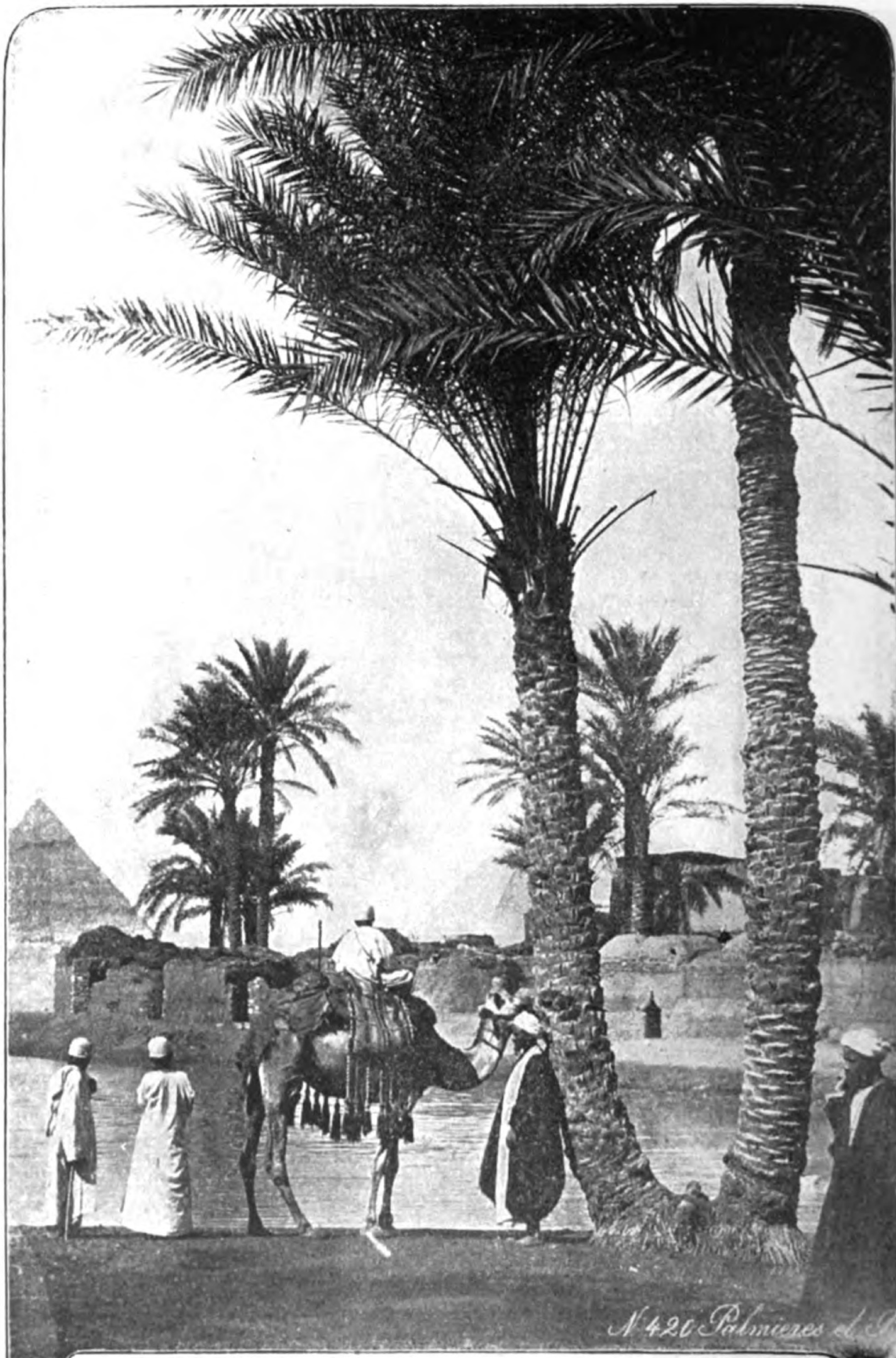
（製本出來）

## 英文 頓機翁物語

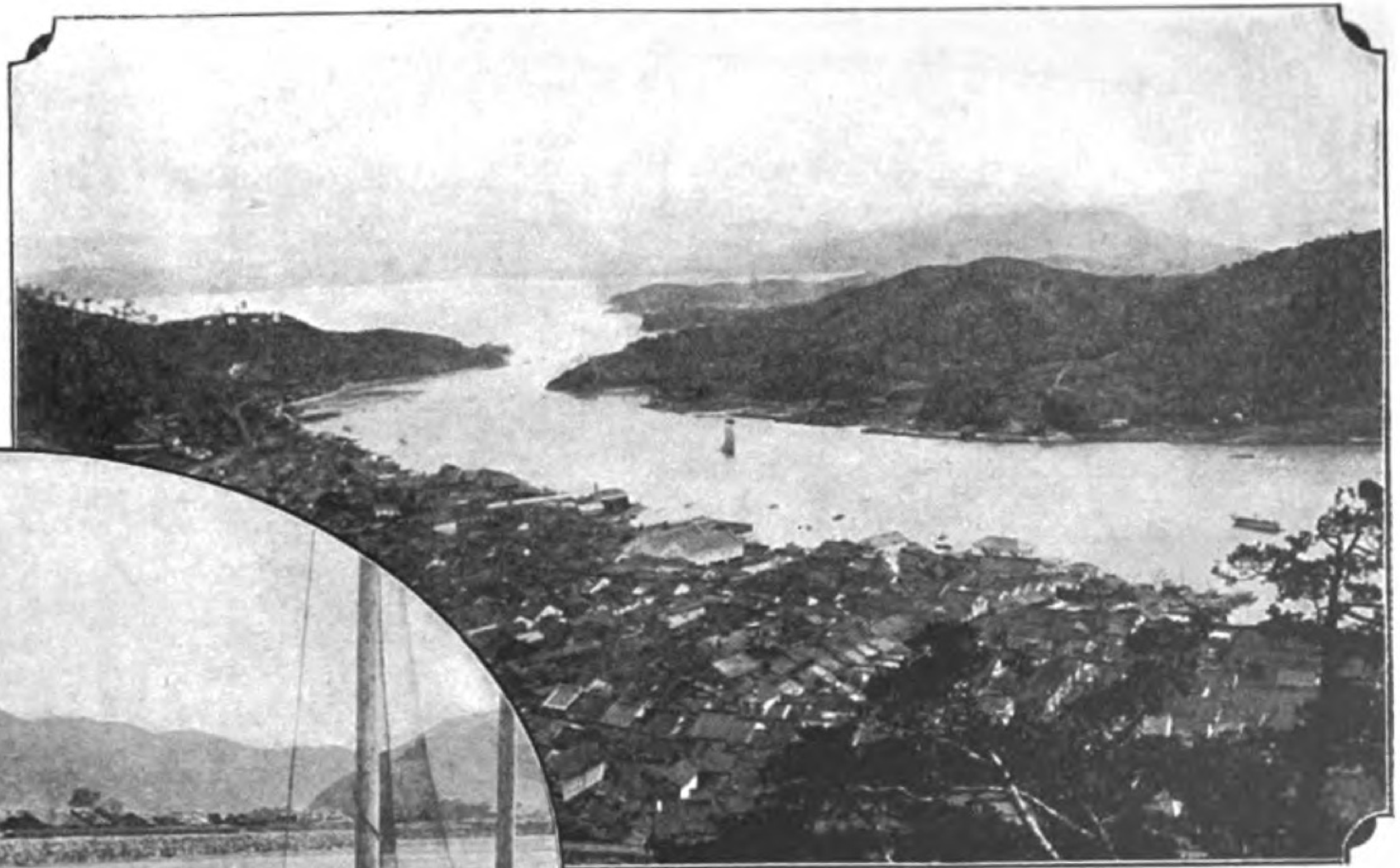
袖珍全壹册
洋裝美製本
正價參拾錢
郵稅四錢

西班牙の文豪セルヴアンテスの傑作ドン、キホーテは世界文學の寶典なり、これ實に歐洲の武士時代を葬る吊鐘なりき。一介の平民を以て銹槍瘦馬、大勳爵士に擬する洒落の好漢キホーテ、從臣に擬する常識的人物バンザこの兩者の行動を描き出す處、騷壇曾て見るの大ユーモアなり。苟も歐洲文學に志あるもの必ずや此書を繙かずんばあらす、然るに此書素と尨然たる一大册子を成し容易に讀了するに苦しむ、即ち本社は爰に平易通俗なる英文を以てこの大著の梗概を記述したるものに就き、更に日本英學生の知らざるべからざる部分を摘拔し、加ふるに解說を以てし一册瀟洒たる美本となして出版す。

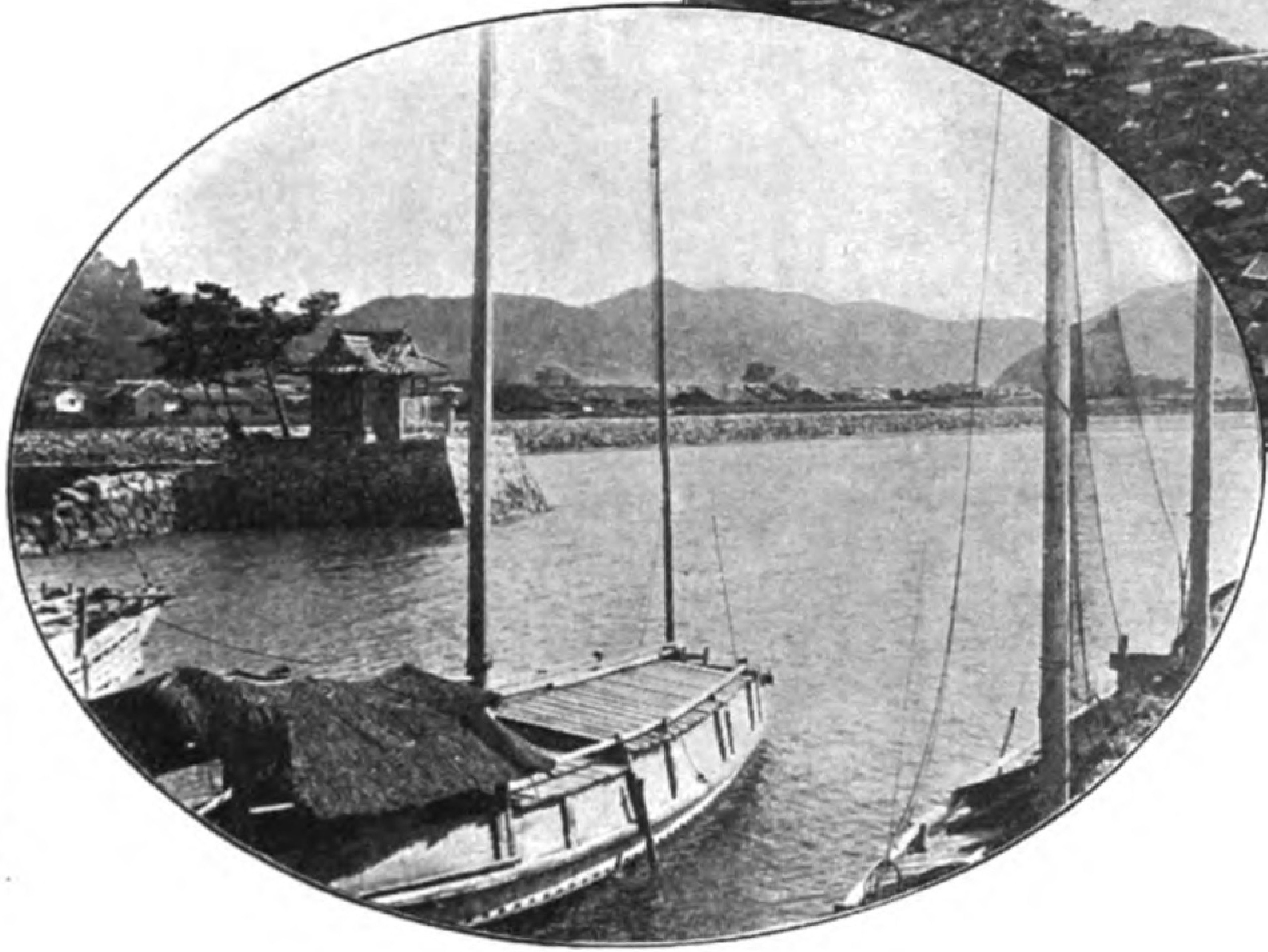
發賣元 東京日本橋區本町 博文館 東京神田表神保町 東京堂




埃及國の椰子樹

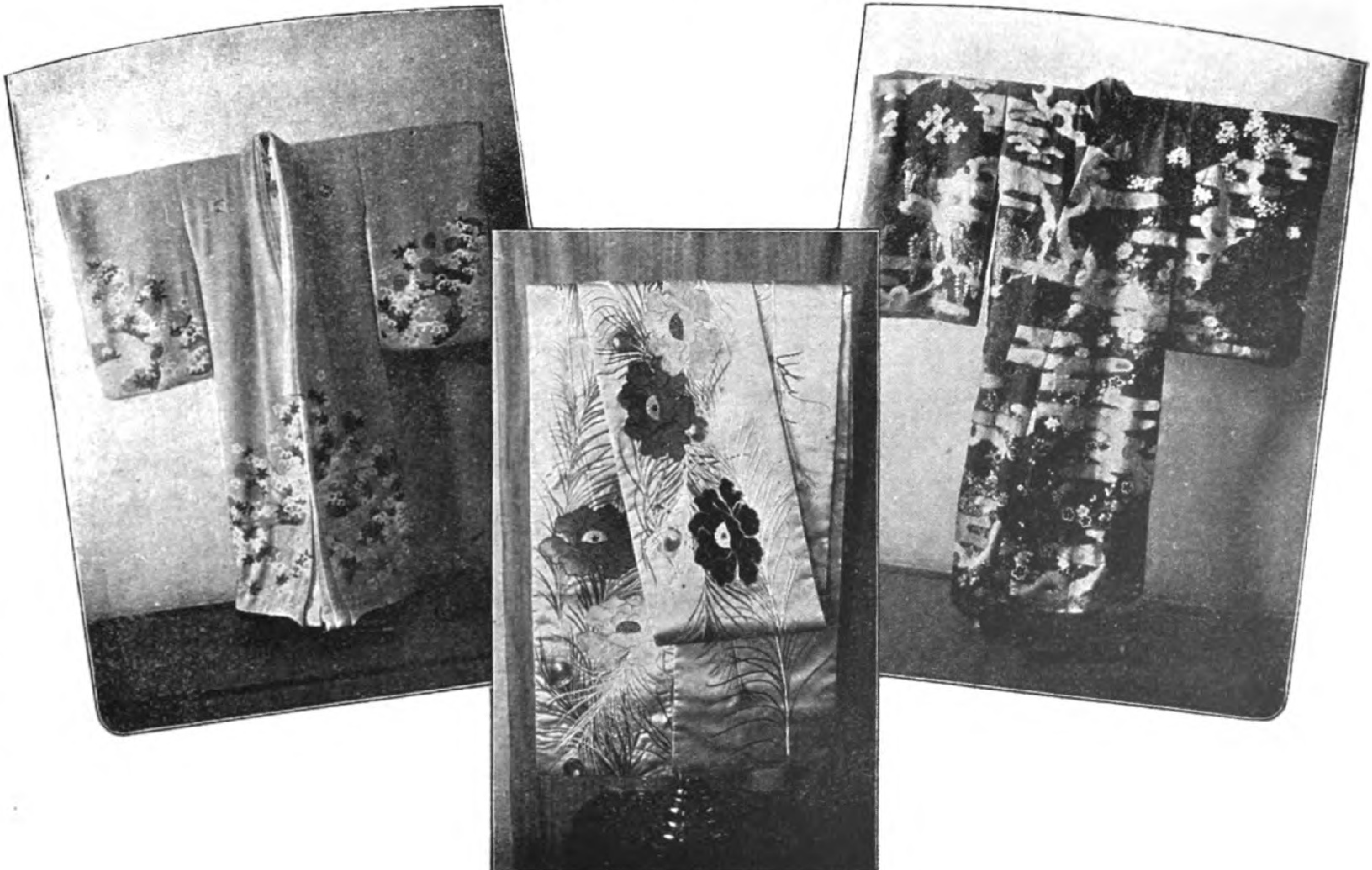


備後尾之道港



讃岐高松港

# 日本の式服



（雜報參看）

# 初秋



京都後素會員　八田青翠氏筆

**The English Student.**

# 英學新報

毎月二回
一日十五日
定期刊行

定價
壹部金八錢○拾貳部(半ヶ年)前金九拾錢○貳拾四部(壹ヶ年)前金壹圓七拾錢○郵税壹部五厘宛

**第十九號** 八月十五日發行要目

社説 **言靈論。日英婦人同盟の一學**

英國女學生書を馳せて日本女學生との交際を求む **英國女學生**の日本女學生に與ふるの**書簡** 貳種

講義 **英語の研究法** 本田增次郎述

**時報** 數件 **逸話** 數種

會話 **鎌倉海濱** 簡易會話 **米國大學生**

註釋 **夏の雨** ロングフェロー作 **武道士** 新渡戸博士著

飜譯小説 **金色夜叉** 英譯 **哲人の死期** クオヴアヂス和譯

**英作文** 諸國物語 答案修正

雜錄 ドンギホース解説(畔柳文學士)。カーライルの秘事、笑話、讀者の領分……其他。

**英國皇后陛下**の**總裁**し玉ふ**倫敦**女子大學校**學生**數十名書を裁して**日本女學生**との通信交換を求む、**本誌**爰に仲保者となり**日英婦人聯合の美**を擧げんとし**本號**即ち其委細を説明し而して**英國女學生**の贈り來れる**書簡**は大に讀むべきものなり

---

英學新報社
## 近刊書類

英文 **近江聖人**
*THE SAGE OF ŌMI.*
村井弦齋君原著 在米國 高柳龍吉英譯
洋裝全壹册 袖珍美製本
正價貳拾錢 郵税四錢

英文 **從軍記者**
*A WAR CORRESPONDENT.*
米國戰事通信者原著 櫻井鷗村校訂詳註
洋裝全壹册 袖珍美製本
正價貳拾錢 郵税四錢

---

發兌元 東京神田區表神保町三番地 **東京堂**

●賣捌所全國各地諸雜誌販賣●

(丙の一)

日本鐵道株式會社編纂

銅版（日本鐵道全線躰詳密圖◉東京市街圖◉仙臺市水戶市高崎町宇都宮市盛岡市青森市最近地圖入）

# 日本鐵道線路案内記

全壹冊洋製
並製四六版
紙數六百頁
正價金四拾五錢
郵稅拾四錢

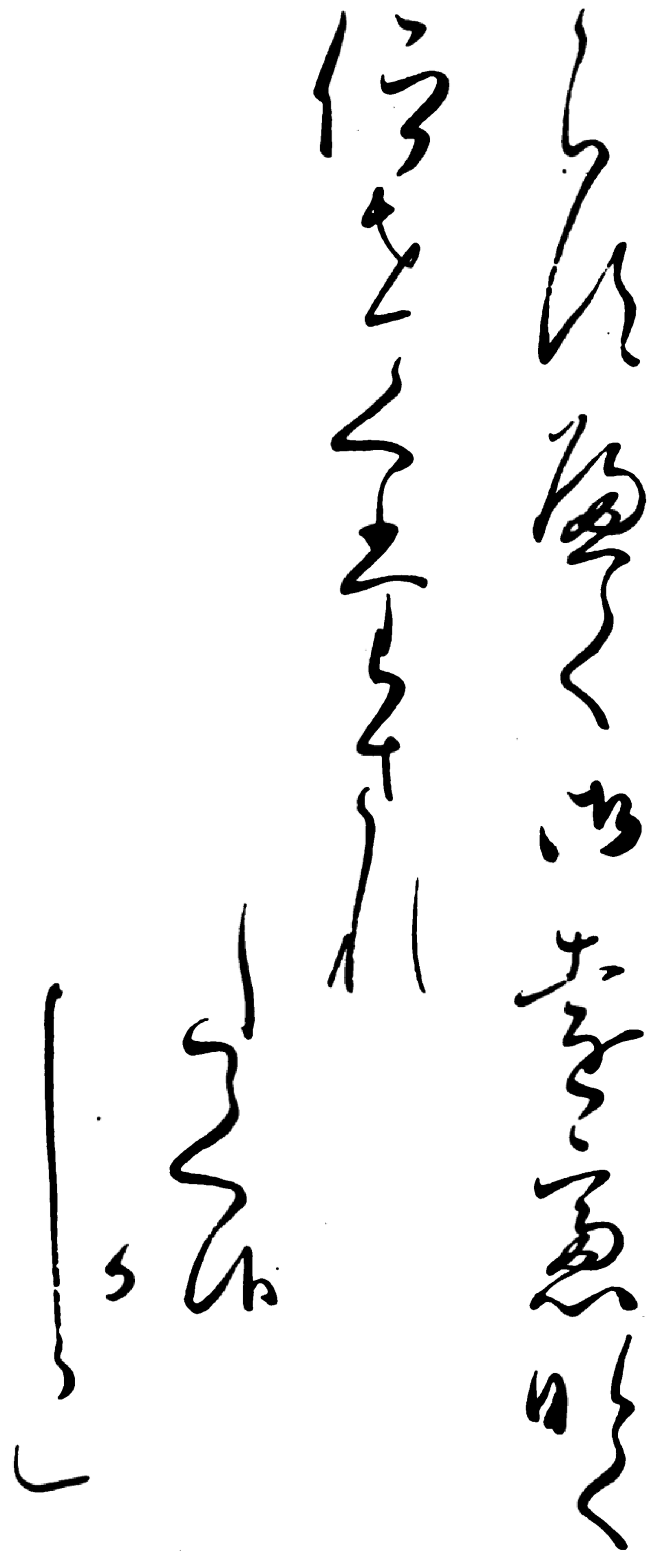
## 寫眞銅版口繪

日本鐵道株式會社●上野停車塲●秋葉原貨物取扱所搆內●上野機關庫●上野公園●淺草觀世音●向島●靖國神社●宮城二重橋●衆議院と貴族院●上野雪景●飛鳥山●東京府廳●招魂社遊就館●兩國橋●九段大祭●伊香保溫泉市街●伊香保金太夫ホテル●高津戶●榛名山湖●足利鑁阿寺●足利聖廟●前橋公園より利根川を望む●小山思川の景●大谷觀音●宇都宮二荒神社●日光街道の杉並木●日光陽明門●華嚴の瀧●湯本溫泉●日光三代將軍廟內陣●日光外山臺より小西別館を望む●大宮公園●隅田川鐵橋●柴又帝釋天表門●江戶川鐵橋●土浦眞鍋公園●布施辨才天●笠間胡桃下稻荷神社●加波山兩門觀音●霞か浦入口●水戶公園の梅●常陸國大洗●常陸國河原子海邊●常陸國助川●常陸國高萩停車場近傍●常陸國高戶●磯原二ッ島●常陸國天妃山海邊●常陸國平潟港●勿來關趾●勿來關下松川磯●入山炭礦●平潟港外國道隧道●岩澤竹駒神社●請戶濱金華山公園●盤城太田妙見●松川浦近傍原釜海水浴塲●盤城國原釜●盤城國松川浦（夕顏觀音堂前面）●松川浦の眺望●白川南湖●甲子大熊女瀧●甲子溫泉●郡山開成山●龍ヶ崎の瀧●飯坂溫泉●鎌先溫泉●青根溫泉●福島市阿武隈川●白石材木巖●仙臺榴ヶ岡公園●小牛田山ノ神●仙臺青葉城正門●仙臺榴ヶ岡公園の老櫻●鹽竈神社●青麻神社●松島五大島●五串の飛橋●手泉中導寺●盛岡公園招魂社●淺虫海濱遠景●奥州の雪景色●雪拂機關車青森驛出發●松島不老島●馬淵川●磯部溫泉大津海岸●原釜等

一區線●自上野至高崎　山手線●自品川至赤羽
二區線●自大宮至白河　海岸線●自田端至岩沼
三區線●自白河至仙臺　海岸線●自友部至小山
四區線●自仙臺至盛岡　日光線●自宇都宮至日光
五區線●自盛岡至青森　兩毛線●自小山前橋ヲ經由シテ一區線ニ接續ス

尚本書は前掲の外前付に本社各課所在地、及び、諸般の統計、旅客の注意、入場切符の發賣驛、定期乘車券、回數乘車券、學生の乘車賃金割引、多人數乘車券、列車仕給、旅客列車の別仕立、客車貸切、旅客の手荷物幷に小荷物其他の賃金表、大貨物運賃及手數料、日本鐵道貨物取扱人名簿等、あらゆる旅行に必要なる事項は秋毫も漏らさず明細に列記して遺憾なく實に從來坊間にありふれたるものとは大に其趣きを異にせり故に旅途に上る人は常に旅鞄中本書を收めたらんには旅情の慰籍となるのみならす精細に地理人情物産等をも知悉するとを得べし

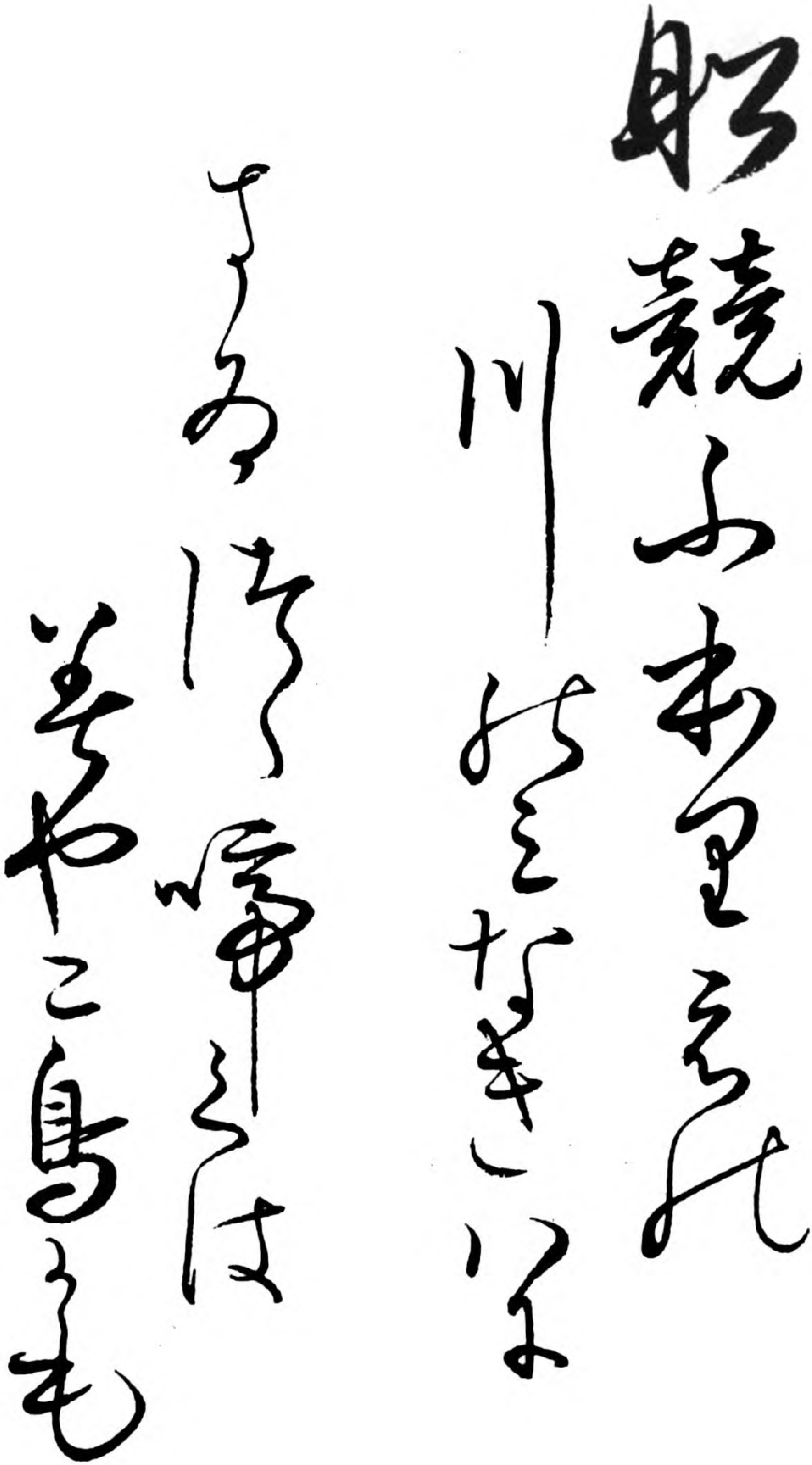
發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

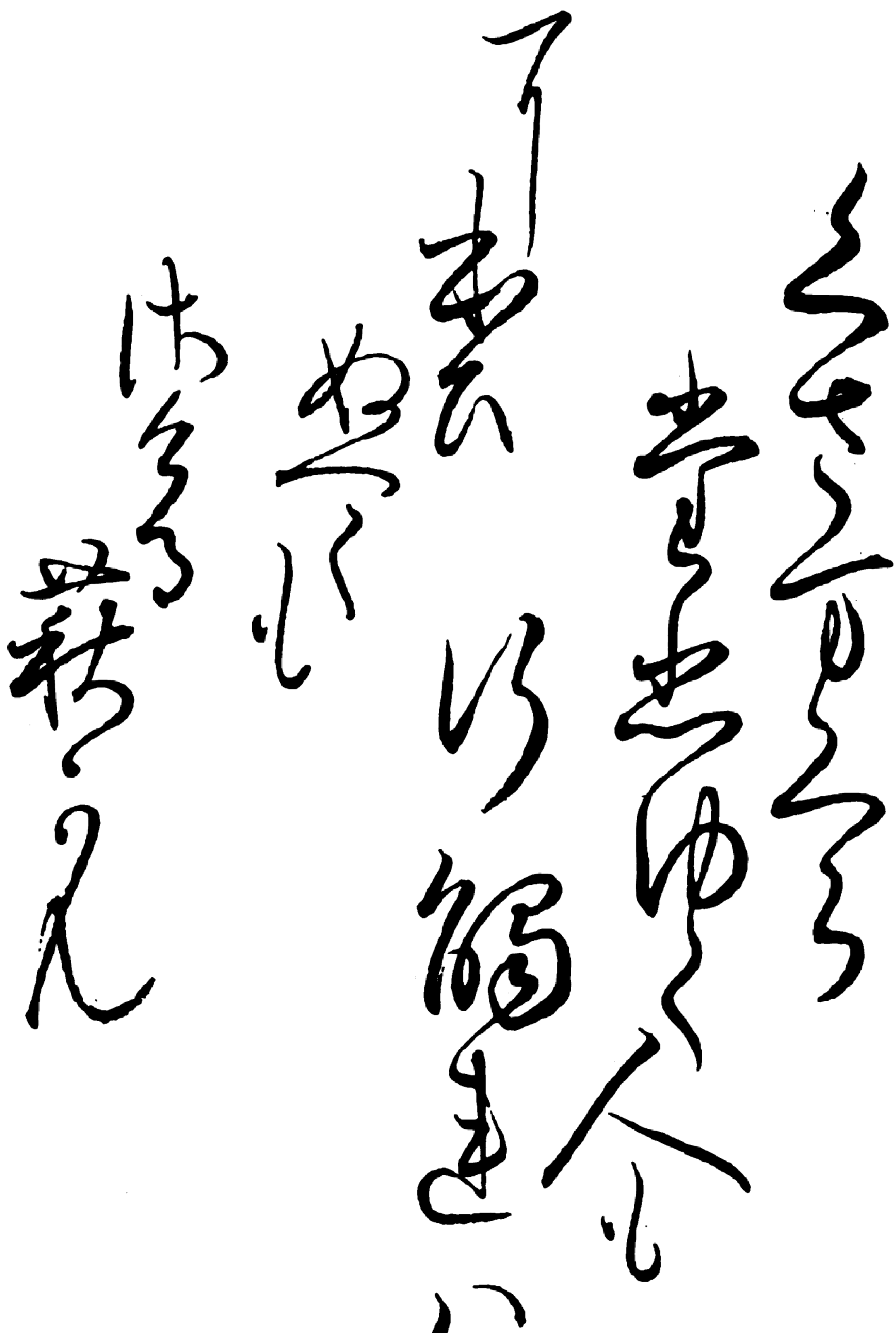


多田親愛先生筆

庭前の萩花咲出
てらぬめはいとゝしくも
あましく候へ共一
枝差上申候御清覧に
いつもいゝ候かしこ

坂正臣先生筆





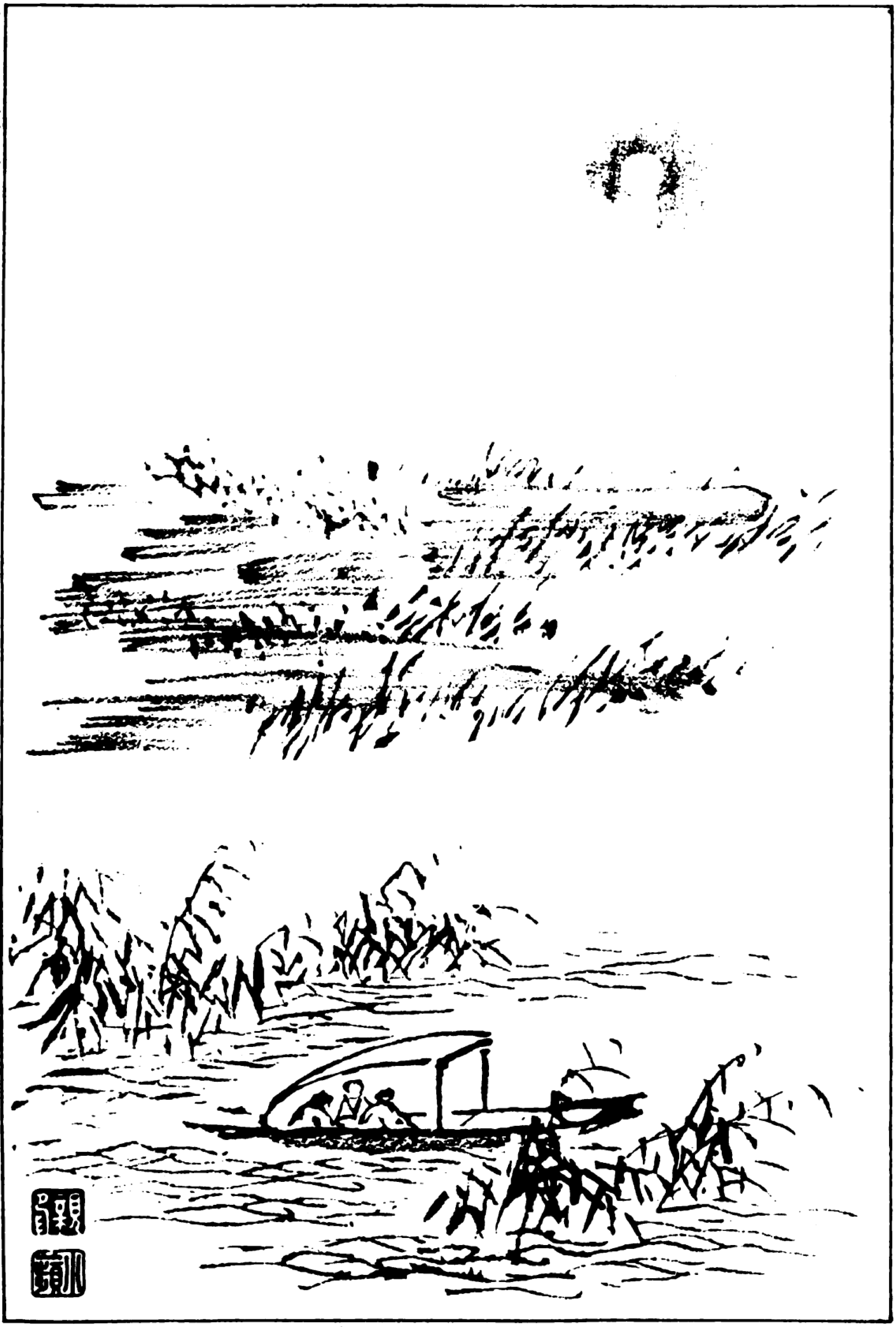
坂正臣先生筆

# 芙蓉白鷺



# 秋江觀月

野口小蘋女史筆



## 桂花



野口小蘋女史筆

# 葛に撫子

野口小蘋女史筆



# 血塊月やく

忽ち下る
確證新藥

本劑（調經丸）は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑参劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ惡血毒血を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるに付き**妊婦**の服用を嚴禁すもし妊婦服藥せば**即座に流産**するを以てなり尤も本劑は何人服用するも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分六拾錢貳劑分壹圓拾錢参劑分壹圓六拾錢特別製分貳圓貳拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似偽藥顯はる用藥者は深く注意ありて「専賣元日新館藥房」の名義に着目し購求あらんことを乞ふ

# ●わきが（腋臭症）

根治確證
新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにて**誓て根治**し決して再發或は他病を發するも憂なき廿世紀的改良根治[illegible]藥なり價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増しの事

以上
求藥

専賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話本局二五四六番）

獨逸伯林萬國衛生會考案

# 歐米汎用 救急函

價 金一圓以上 金貳拾圓迄

救急箱は、歐米文明國にて戸毎に常備せらる、自他危急救助上缺く可らざる必用品にして、救急用藥及び繃帶消毒材料品一式を、一函中に完備せし者なり

●内外旅行携帶用●家庭、學校、商店、工場、旅館常備用、御注文次第即刻調製可仕候

日本一手發賣元 東京日本橋大通り本石町角電話本局二八六番
内外藥品醫械賣品 直輸出入卸小賣 **大橋博愛堂**

生徒六十名募る望者九月廿五日迄履歴書持参
高等小學卒業又は之に相當者滿十七歳以上

東京駿河臺袋町十三番地 **東京産婆講習所**

# 治肺新法

附錄 肺病全快實歴談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵券三錢封入申込者に無代施本致すべし

東京下谷上根岸町百十一（電話本局一二五九番）

藥學得業士 **金澤巖**

（丁の三）

# 女學世界秋期增刊 初紅葉

口繪には泰西偉觀、秋の名勝、支那風景、天寧寺の塔其の他例に由て內外の勝地風俗數十面を挿入す

正價金貳拾錢
郵稅金貳錢

九月十五日發行

▲小說
▲和歌
▲新體詩
▲抒情文
▲叙事文
▲消息文

歌は心の花なり、文章は思想の錦なり、うるはしかるべき婦人にして其の心に花のかざりなく、思想に錦のよそおひなかりせば、如何ばかりもの足らぬ心地さるべき、昭代教育の發展に伴ふて、女子の文藝は著るしく其步を進めぬ、茲に女學世界の才媛詞藻は來るべき秋涼の好季節を以て又更に其の定期增刊を發刊せんとす「初もみぢ」即ち是なり、さればうるはしき心の花のいみじき思想の錦が我才媛詞壇を飾りて千紫萬紅の美は送迎に其遑もなからんめり。

博文館發兌

（丁の四）




第貳卷
第拾壹號

今朝の朝け雁金寒く聞しなへ
　野邊の淺茅ぞ色附にける　聖武天皇

神風の伊勢の濱荻おりふせて
　旅寐やすらんあらき濱べに　讀人しらず

女郎花匂へる秋の武藏野は
　常よりも猶むつましきかな　紀貫之

吹荒ぶ風は昔の秋ながら
　ありしにも似ぬ袖の露かな　小野小町

庭艸の露のかすそふゆふぐれに
　夜深き虫の聲ぞ悲しき　左大臣實朝

一村の萩の盛に埋もれて垣根の
　井戸は汲れさりけり　香川景樹

我宿の垣根あはぬをおもひしに
　萩は花こそ咲まさりけり　熊谷直好




# 婦人の生涯

女子大學講師
三輪女學校長　三輪田眞佐子

婦人は男子に比して苦は樂よりも多く、男子は婦人に比して樂は苦よりも多きか。若し婦人の身には苦のみ集まるものとせんか、天道公平と言ふべからず。否、今假りに苦は婦人の天職人分なりとせば、これがため報いらるゝものは果して何にか。おのれつねにこれを極めんと欲しぬ。定めて讀者も然らんかし。

彼の國の白樂天は人生婦人の身となるなかれ百年の苦樂他人によると歌ひ以て婦人は男子より不幸の境遇に居るを明にせり勿論古より歴史的に婦人の位地を考ふれば不幸みのぞ多かりけん亦現今の社會に於ける婦人の位地を見ても決して男子よりも幸福なりと言ひ難しされど禍を轉じて福となし苦を變して樂となさん方法なきか若しありとせばその方法を採らさるべからず契冲阿闍梨の歌に

うきふしもしばし待ち見よ竹の子の
生そふのちの蔭もこそあれ

と實に野分せし秋の景色を見あるは木枯の風吹きすさぶ冬の四邊を眺むれば世は慘憺たるものならんと疑はれんも霜の朝、雪の夜の苦を忍ばん後ちは春風氷を解き千紫萬紅のめでたき花を見るに至るべしされは苦には樂を伴ひ樂には苦の隨ふものなりと言はんも誤にはあらさるべし故に婦人の身に苦しみ大かれとせは、亦樂も多からしめ得べし否苦に相應したる樂あらしむるも難事にあらさるべし、從ひてわれ〳〵婦人は強ち恨

むに及はじ亦悲むに足らじ。
いてや以下婦人の生涯中に於ける樂の主なるものをものせん、されは婦人はその生涯を如何に費すべきか將たその生涯の價値如何を知るに足らん。

(一)家政上の希望　凡そ婦人の天地は家庭なり、從ひて婦人生涯の樂は殆と家庭にあり而して樂しき家庭と否らさる家庭と相分るゝ點は全く家庭を主る婦人の技量如何に存ず、されは家政上の希望を滿足せしめんためには千百の苦も苦と感せざるべし、現におのれの知る婦人たちか夙に起き夜に寢なから毫もこれを苦とせさるのみならずこれを以てこよなき樂とする所以のものは獨り家政上の希望を充さんとてなればなり
是を以て婦人にして家庭の趣味を解せす、亦家政を主る資格なく以て事意に戻り物心に適はず始終不平憂鬱のため一家の樂しき分子を失はんかこれより不幸なるものはあらじ、故に女子教育の主なる目的は能く小女をして家庭の趣味を解せしめ亦家政を主るに足る實力を養成せしむるにあり、あはれ教ふるもの學ふもの共に心してよ。

(二)子孫の行末　愛に種々ありといへども親子の愛を以て最も純に最も切なるものと信す、わきて子たるものが親を思ふ愛情よりも親たるものが子を思ふ愛情こそまさりけれ、されは婦人にして未だ子なきものは眞の愛情を知らさるものなりと言ふべし土佐日記に

世の中に思あれども子を戀ふる
　おもひにまさるおもひなき哉

とありこれ紀貫之か親たるものゝ眞情を表しゝものなり亦吉田松陰の獄に下るや

親おもふ心にまさる親ごゝろ
　今日の音づれ何にと聞くらん

と歌ひけるも親たるものゝ眞情を知るに足るべし。
斯く親たるものは燒野きゞす夜の鶴に比するばかり終

始子を思うて止まざるもこれ悉く苦の源なりと言ふへからす否その苦こそ最も樂みなれ相摸の家集に

何事も心にあらぬ身なれども
　このたからこそまづはほしけれ

と見るも子は樂の一となること疑ふべからす

されど子は親の玩弄視しすべきものにあらす苟も子を擧げし以上はこれを成育して相應なる立身を踈らさるへからず故に婦人の生涯に於ける任務の一は母としての本分を全うするにあり然らは專門にあらさる限の女子敎育は母たる資格を養成するにあり若し母たる資格なくして口能く古今の歷史を談し東西の地理を暗んするも何の取るところかあらん是を以て女子敎育を主るもの亦敎育せらるゝものは、形式上の卒業狀を得んとつとむる勿れ唯善良なる感化を受けて異日良妻賢母の實を擧ぐることそ肝要なれ而して婦人の名譽は其の學校の敎室のみにあらす將に將來に於ける家庭の裏に存すと言ふべしおのれか屢々紫式部を以て淸少納言にまさること數等とする所以のものは納言の品行か惡しきためのみに止まらすその子孫の敎育上に於て式部は成効せしに由るなり古語に曰く始あらさるはなし能く終あるもの鮮しとこれ味ふべき戒にこそ。

(三)生涯の責任　人のこの世に生るゝは偶然にあらず親恩海の如く深く國土の恩山の如く高し又國民相互の恩決して淺しとも低きとも言ふべからすされはわれら婦人とはいへ各諸の恩に報いてやはあるべきこれ婦人の生涯中に果すべき責任なり故に婦人たるものはその親を養ふに於て孝女となり夫に事ふる上に於て貞女となり將た子孫を養育する上に於て慈母となるを以て足れりとせず更に餘力を以て世のため慈悲恩愛の淵源となる大覺悟こそ望ましけれ

されど言ふは易く行ふは難し、おのれ未だ餘力ある婦人にして婦人の本分を全うせんため勞を厭はす財を惜

まさるものを多く知るあらず思ふに身をつみて人の傷さぞ知られける理なればにや反りて位地を占め衣食に困難なき分限のものは同情心に乏しく唯夏は涼風の吹く所に遊び冬は快温の地を求めて行き朝夕食前方丈の奢を極め自ら我を尊しと信ずるありされど無常の風は時を撰ばず人を問はずして襲ひ來るべし故に苡と時めきしものもいつしか春草の茂る墳墓に於て白骨となるべしされば人生を一方より見れば

世の中を何にたとへん朝ぼらけ
こぎ行く船のあとの白波

と古の歌人が詠へし意に外ならざるべし而れども亦他の一方より見れば古今人事の跡歴々として靑史に存じ掩ふべからざるものあり。故に人間萬事棺を蓋ふと定まると言はざるべからず亦名譽の花は墓前に咲くといふ諺も味ふべきなり。されば婦人の生涯を空々寂々と過すは惜むべき至ならずや要するに婦人たるものゝ第一要務は良妻賢母となりて一家を整理するにあらんも餘力を以て婦人らしき行動を離れずして婦人に相應なる外事をもつとめざるべからず即ち教育事業慈善事業若しくは一般の社會上に於ける道德的事業は婦人の手に由りて決行せらるべきものならんか必ず消極的のみに安んじ、我のみを顧みる如きは今日の時勢に適せざるものなり。孟子曰く學者須らく時を知るべしと良いかなその言や。

おのれこれまで度々淸國若しくは韓國より歸りしものゝ語を聞くに彼の兩國の婦人は古人が婦人は位を內に正しうすとか或は閨門の內を出でずとか或は百里にして喪に走らすとか或は男女席を同しうせずとか言ふ古聖賢の金言を誤解して一種閉門の風をなし施いて文明進歩の潮流に戻ること著しと固より利刀は以て人を殺すべし亦た生かすべし彼等兩國の婦人は金言の意義を取らずして字義に泥み今日の弊に陷りしものなり若し

古聖賢にしてこれを知らば必ず地下に於て憤慨し給ふらんされど亦輕浮なる流行を追ふものも卑むべきなり故に眞に婦人の責任を全うせんと欲するものは必ず中途を離るべからず實踐を去るべからず眞に婦人生涯の價値はその言に由りて決すべからず其の行を見て定むべきなり。

# 家庭時言

愛情滿れば粗食も旨く愛情欠ぐれば膏粱も旨からず　スペクテーター

文學士　大町桂月

## 男女の權

力これ權也。力あるもの、權あり。必ずしも男と女とを問はざる也。

今日我國の下等社會を見るに、働いて食してやるものは、御亭主殿なれど、概して嚊天下多し。亭主殿は、かはいさうに終日外に勞働すれども、嚊殿はあんかんと足ふみ伸ばして晝寐し、晝寐があきれば、井戸端に出張して、例の會議に、雄辯を揮ひ、亭主殿汗になつて歸り來れば、ついでに水一つ汲んであがつておいてよと、げにすさまじき山神の御威勢哉。もし腕力をくらぶれば、如何に二本棒をたらしても、男は男也。安んぞ山の神に劣らむやたゞ。悲しきは、男も女も教育なき身の上、而していづれかと云へば、裏店生活には、男よりも、むしろ女の方が智者也、優者也、あつぱれ男一匹を尻に敷きて、われこそ山の神とすまし込む次第かと覺ゆる也。

中等社會に至りては、さうは行かず。それも多くの持參金ありて、もしくは夫の身を引きたてゝやりて、富豪の家より天降りしならば、格別、夫の鼻下を長うせしむるだけの姿色あらば又格別、たかゞ高等女學校程度の所を卒業した處で、到底專門の學問したる男子の智力にはかなはざる也。

西洋にて、比較的に女子が權力あるが如くに見ゆるは、

當初移住の際、女すくなくして、男はみな女を大事にせし遺風でも傳へたるものにや。

## 女子の文章

女子の文章の、優雅ならざるべからざるは、吾人之を諒とす。されど、女子は、何故に、ことさらに、こそ、けれ、侍る、などの死語を用ゐざるべからざる乎。今の實用に遠き擬古文ならざれば、果して優雅ならざる乎。吾人解する能はず。

今の高等女學校の生徒、もしくは卒業生の文章を見るに、多くは擬古文也。その書簡も、亦擬古文也。これ優雅を尙ぶの餘、死語多き擬古文が女子に適するものと敎員先づ認定し、多數の女子、其方針に從へるもの乎。もし果して然らばこれ人の子を賊する者也。文章の用法を誤れるもの也。

文章の第一義は、達意に在り。中等敎育の作文は、方針を之に取らざるべからず。未だ達意の城に至らざるに、徒に形式の優雅を求む。これ人形に美衣をつくるが如し。衣裳如何に美なるも、人形は人形也到底生動せざる也。衣裳も全く美ならず、多少の見處あるべきも、半熟の古語を羅列するは、古き錦をつぎつぎしたるが如し。見られたものに非ず。古語、古躰を以て、眞に文章を躍動せしめむとは、大家といへども、なほ困難也。況んや中等敎育程度のものをや。それも達意の文が自在に書ける上ならば、餘力を以て、一種の文躰として學びても可なれども、まだ筆の廻りもせぬに、困難なる擬古文を作り、以て優雅なる女子の文躰を得たりと考ふるは、其愚竟に及ぶべからず。

さらでだに、中等敎育の程度にあるものゝ文は、筆が廻りかぬるもの也。痒い處に手が届かず、一見歯がゆき心地す。之に死語、古躰を強ふれば、益拘束せられ、悲しき事かきても、悲しく聞えず、折角の文章の用をなさざる也。平生吾人の耳に熟せる言語、豈に悉く野卑な

らんや。而して最も言ひ現はし方に注意し、筆先に氣が利くやうにし、言語の選擇をつゝしまば、自から優雅なる文章成るべし。文體は男子と同一にて可也。女子なればとて、わざ〳〵男子と文體を異にするは、封建時代の陋習にして、毫も意味なき事也。いづれの點より見るも、女子がわざ〳〵擬古文を作らざるべからざる理由なき也。

女子の文章も、今の普通文にて可也。言文一致體にても可也。たゞ言ひ廻はし方を巧にして、意を達すれば、文章の能事畢ばれる也。優雅の如何も、自からその言ひ廻し方の中にあるべし。浴衣一枚にて、衣服の用は足れり。つぎはぎの古錦襴を要せざる也。女學校の教員たるもの、願くは反省せよ。女學生も亦。

## 妾字の用法

女子が自から妾と稱するは、男子が自から僕と稱するが如し。第一人稱の僕は、婢僕の僕に非ず。第一人稱の妾も、妻妾の妾にあらず。如何に蓄妾が男子の不道德、女子の恥辱なりとは云へ、女子が自から卑下して妾と稱するを恥辱とするにも及ばざるべし。語根の如何は問はず、語意も訓方も全く異り居れば也。

されど、「妾」の代りに、「われ」もしくは、「おのれ」を用ゐても差支なきこと也。口語にありては、男は「僕」と云ふことあれど、女は「妾」と云ふことなし。男も女も「わたくし」といふが常也。されば、文章にありても女子が男子と同じく「われ」「おのれ」を用ゐて可なるべき筈也。何ぞわざ〳〵「妾」と稱して、男子と區別するを要せむや。それも先方に相手がある場合、即ち對話の文、書簡文などに、「妾」を用ゐるは、差支なけれど、第二人稱のなき場合の普通の文に、なほ「妾」を用ゐるもの多し。これ餘りに「妾字」を濫用せるもの也。妾字は、今こそ第一人稱の場合に、「せふ」とよむとあれど、本來のよみ方は、「わらは」にて、毫も妾の意なし。あらゆる場合にも「わらは」と云へば、謙遜して結構なることなれど、男女もと二樣の文體を用ゐるを要せず。男が僕と云はずして、われと言ふべき場合に、女子のみ馬鹿に謙遜して、わらはと云ふを要せざるべし。われと云ひたればとて、優雅を害するものに非ず。わらはと云ひたればとて、優雅をますものに非ず。余は害のなき限りは、男女の區別を徹去せむことを主張するもの也。

# 美人の末路

楊太眞は支那唐朝八世の主、玄宗皇帝の后妃なり、玄宗即位の始は唐朝の盛を極めし時代にして天下泰平四海無事なりしかば皇帝政治に倦みて遊宴を事とし、日夜聲色の娯みに耽り後宮の佳麗三千人と稱す。三千後宮の中に在りて元獻皇后、武淑妃の二人最も寵ありしが、間もなく二人共に逝いて一時後苑に燭の消へし如くなりき。玄宗追慕の念禁じ給はず、心怨々として樂まず、爲に殆んど寢食を廢し玉體も疲れずなりぬ。宮廷の侍臣之を患ひ奈何にかして帝の心を慰へさんものをと、それより普く宮外に物色して美貌を索めしめたり、時に侍臣一人高力士なるものあり、弘農縣楊玹が家に一女を得て之を獻ず、名を太眞といふ。天の生せる麗質自から捨がたく、紅顏翠黛又あるまじき美人なり、玄宗一見して戀に禁へず直ちに後宮に容れて妃となしぬ、所謂首を回らして一笑すれば百媚生じ、六宮の粉黛をして顏色なからしむるに至る、爾來玄宗此の妃を寵し日夜歡侍、燕宴間暇なく後宮三千の寵を一身に集めて言聽かれざるなく、內外の政務又遂に後宮の纖手もて左右するに至り、榮華極まりて醜聲漸く外に漏る時に、太眞の從兄に楊國忠なるものあり、太眞貴妃となるに及んで擢てられて大臣となる是より先營州の雜胡種安祿山太眞に結んで君寵を專らとし一身を以て、吐蕃の三節度使となり威勢頗る盛んにして又密かに非望を懷く楊國忠の宰相となるに及んで遂に反し楊氏を討つの名を以て吐蕃の戎狄を率ゐて帝都に向へり朝廷即ち楊國忠を以て大將となし之に征討の印綬を授け以て安祿山を討たしむ、然れども楊國忠は元と將帥の器にあらず、倨傲にして兵を用ゆるの術を知らず忽ち敵に打ち破られ敗北して長安に逃れ歸れば沿道の各地皆敵の有となれり、安祿山勝に乘じて遂に長安を陷れんとす、時に玄宗皇帝は驪山宮に幸して楊貴妃と霓裳羽衣の舞をなして樂みけるが、戰塵の近づくを聞いて即ち駕を枉げ、鳳翔殿より蜀の地へ落ちんとす、當時護衞の官軍六餘萬騎あり、帝が馬嵬亭といふ所を過ぎんとしける時、親衞隊の壯丁等道を遮り駕を拒んで曰く、抑も今回の國難畢竟するに楊國忠が權を弄したるが故なり、されば今國忠が首を刎ずんば天下の人心一に歸する事能はず縱令我々安祿山が鋒先に討死するとも國忠の首を刎れ給はずんば龍駕を進めまいらす事叶ふべからずといへり、皇帝奈何ともする事能はずして遂に楊國忠に死を賜ふ、官軍大に喜び即ち國忠を馬より引落し戈の先に刺貫きぬ、楊貴妃之を見て心中悲むと雖も又之を奈何ともする事能はざりし、然かも猶官軍慊らず、駕に迫つて底事をか請はんとするの色あり、皇帝重ねて其の意を問ひ給へば一人面を犯して敢ていふものあり今、國步艱難にして龍駕駐まる處を知らず此時に當つて后妃の纏透かはゞ天下靜謐に歸するの時なからん。宜しく速かに楊貴妃に死を賜はらば臣等忠誓の爲めに胸を裂いて旻天に血を灑くべしと、玄宗之を聞いて胸忽ち塞がり、魂消へて鳳輦の中に倒ふれ伏す、太眞も又帝の御衣に隱れんとす、親衞隊一同此の光景を見て皆涙を催し誰とて手を下さんとするものなし、時に一人の壯丁列を脫して鳳輦に近づき太眞を帝より引離し樹の下へ引摺して之を弑しぬ金玉の釵鈿碎けて地に委し、雪白の肌膚泥土に塗れて狼藉たりと晩唐の詩人白樂天は之を歌ふ、長恨歌は即ちこの楊貴妃を詠じて千古の絕唱となる

家庭

# 男女兩尊の眞相

ドクトル 川瀬元九郎

古來我が國に於ける男女の關係は男尊女卑である、然るに歐米に於ては是れに全く反對して居る女尊男卑主義が行はれて居る樣に吹き立てる人があるか、吾輩の見聞に依れば歐米に於ける主義は無論男尊女卑でない、又女尊男卑でもなくして、男は女を女は男を、互に相尊び相愛すると云ふ主義、即ち男尊女尊主義とでも言ふべき風が實行されて居ると言ふて差支がなきかと思ふ、抑々人間は男女互に助け合ひ相敬愛して世渡りを致さなければ、到底繁榮し且幸福に生活することは出來ないものである、日本流に女子を奴隷的に取扱ふて居ては男子とても完全の快樂と幸福を得ることは出來ない、從て其國民は繁昌するものでない、是れが反對て男子が奴隷視されても無論不都合であるに相違ない、そこで婦人は尫弱なものであるから、男子が婦人を憐んで弱さを助けて遣ることが米國なぞでは切りに行はれて居るので、決して女尊男卑なぞと言ふことが行はれべきのしてない。

外國に行たことのなき人々でも、我が國へ來遊し又は在住せる外國の男子が婦人の靴を穿かせて遣ることを見もし聞もしたらんと思ふ、是れを見て女尊男卑なぞと惡口を言ふのは、ちと大早計かと思はれる、西洋婦人が我が國の撃劍を行ふ時に用ゆる御胴の樣な硬き「コーセット」を以て胸や腹を強く壓迫して居ることは誰れしも知て居ることである、硬き「コーセット」で以て胴躰を引き緊め其上に緊密なる衣服を着して居てからに、上躰を前方に屈して自ら靴を穿脱することは甚だ

困難な仕事である、それで西洋婦人は衣服を着けるときに襯衣と靴足袋を着して、次には靴を穿ち、それから衣服を着けるのである、故に婦人同士で歩行して居る時などに於ても、一人の靴紐が解ける場合があれば必ず同伴して居る婦人が紐を結んで遣るものになつて居る、是れ自分の靴紐を結ぶことは甚だ困難であるが、婦人でも他人の靴紐を結ぶのは幾何か容易であるから、斯様に互に助け合ふのである、婦人でさへも他の婦人をして自ら靴の紐を結ばしむるに忍びずして助けて遣るに強壮で其上に身躰を自由自在に動かすことが出來る衣服を着けて居ながら、弱者の困難を見て憐れまざる樣な不人情なる男子には一向威服が出來ない、一體日本の男子は同情心が薄弱であつて威光ばかり振り回はす僻がある、婦人自らより是れを見るも、それ位の親切心のなき男子には頼み甲斐のなきものであると言ふ裁断を來すであろう。

歐米に於て婦人を先にし男子を後にするは弱きを助けると云ふ主義の實行に外ならぬのである、乘合馬車其他公開場に於ては無論家庭内に於ても席を婦人に譲るのである、吾々日本人には仲々實行が出來難い。昨年の春頃家内と小兒とを同伴して乘合馬車に乘て用達して出掛けたことがある、小兒は馬車の窓から外部を切りに見物したがるから、紳士らしき服装をして居た隣りの人に、家内が頭を低ふして小兒の爲に席を交換して呉れまいかと願ふた、無論席を交換したりとて其人には別段に不便はないのであつた、すると彼は大變な返答をした、「馬鹿にするな、誰れが左樣なことをするものかと、大音を以て叫んだ、馬車中に居た人々が此の一言に打たれて互に顔面見合はせて沈默して居た、彼の人は身には立派な絹布を纏ひ、金の指環を三四箇もはめ、金時計を腰にして居たが、彼の面相から判断すれば土方か其類の親方位であつたらしい、嗚呼假令へ土方でも勞働者でも歐米人であつたならば先方から進んで好意を表したに相違ない、内心は兎も角も人前丈けでも人間らしき行爲をしたらば其人の價値が上がるのである、日英同盟を以て誇る日本人の行爲としては實

に殘念で堪られない。

然し外國人でも日本に長く住居して居ると日本流の男尊女卑主義に墮落するものが澤山にある、先達ても婦人を同道して滊車に乘た所が、横濱の商人らしき洋人が二人入り來り　直に無遠慮に喫煙を始めた、日本人であると思つて輕蔑すると心中で怒て見たが致方がないから忍んで居た。其后外人は皆墮落者ばかりかと注意して居たが、そうでもない、或る日鐵道馬車に乘て居た所が、數人の男女の洋人が入り來つた、先づ婦人が着席して次に男子が坐を占めた、二三分間にして馬車が停止して二三人の婦人が又入り來つた、吾輩は彼等洋人は如何にするかと思ふて席を立たなかつた、洋人等は直に立て「サー御上さん是處へ御坐はりなさいと」言つた、吾輩は實に心内にて感謝した、洋人が下等の婦人を見ても輕蔑する色なく席を讓たには有難かつた。今一ツの實驗談が玆にある、吾輩の知友たる米人が昨秋汽車旅行をして居た時に、二三人の令孃らしき婦人が乘合はして居た、然し日本婦人は一向平氣であるからと思ふて喫煙して居た、すると一人の婦人が近寄りて煙草の火を借りに來た、あー其時は滿面が眞赤になりて身躰が顫ひ來て如何して宜しきか知らなかつた云々と冷や汗を出して吾輩に話した、日本婦人は仲々横着である實に驚き入た、外人が日本の婦人を輕蔑するのも無理のないことである、日本の男子が女子を非道に取扱ふのみならず、婦人自ら尊嚴を落とすのであるから致方がない。

扨て斯樣な美風が歐米に行はれて居る其本源は何れにあるかと問ふに、家庭から沸き出るのである、吾輩が外國に參つて僅に數日の後であつた、一日牧師の宅を訪問した、其時に客間には夫人と五六才になる男兒と七八才位の女兒とが居た、男兒は愉快らしく室内を駆け回つたり、倒れ回りて居た、男兒が追々亂暴になつて來たらば、夫人は「婦人の前で斯樣な風躰をするものでない」と言聞かした、アー玆にあるのである、三つ兒の時代から「レーデー」なる語を深く心裏に灌ぎ込むのである、先入主となるから容易に墮落しないのである、吾々

の如き接木とは大に趣きを異にして居る、幼少の頃から婦人に對する心得を敎込まれ且男子は「ゼントルマン」たる資格を落さない樣にと注意せられる、其上に父親が母親を叱咤付ける恐ろしき言語を聞き又は父親の手拳が母親の頭上に落つる樣な惡むべき所爲を家庭て見る樣なことがない、又日本ては「女であるから」と云ふ一言を以て女は壓制束縛せられ、男ばかりが威光を振り回はすが、斯樣なことは西洋には更にないのてある、兎に角家庭に於ては男女同等に取扱ひ强きは弱きを助ける精神を養成しなければ國家の繁榮を望むことは出來ない男尊女卑の弊習が征定せらるる迄は隆盛を得ることは六ケ敷かと思ふ、國の繁榮と國民の幸福は軍艦の數や富の程度のみに任れることは無理てある。

# 家庭の規律

正人君子を幸福ならしむるは單に良番を擇ぶに在り

梅軒居士

何が、さて、家庭ほどに、屈托の少い處はあるまい。世間の人の前ては、どんなに暑くても、假初に出來ないが、家庭ては、悠然と打寛いて、團扇片手に思ふ存分の涼を納れることが出來ます。結構な招待を受けて、山海の珍味を列べられても、家庭て小い膳に向つて、手料理の惣菜を味つた方が遙に旨いてはありませんか。

家庭は、此の樣に便安の場所てあります。窮屈を感じた冷汗も、此處に歸れば、忽ちに乾いて了ふ。又眞面目汚さに疲れた頭腦も、一時に洗濯されて了ふのです。誠に、我々は、家庭のある爲に、百年の壽を保つのみか、これに依りて、親子の恩愛も、夫婦の親情も、總て一家骨肉の鏈鎖を堅く密にすることが出來ます。

所て物事は、一利あれば一害ありと申して、家庭が右の樣に、便安の場所であるだけに、又限りなく惰弊の蟠る所てあります。總て便利安樂といふことは、兎角すると放惰になり易いものてある。今日の家庭て、何が最も甚しい惰弊てあるかと、指を屈すれば、先づ不締とか、不極とかいふことが、拇指にかゝるでしよう。此の不締、不極、即ち不規律といふことは右にいふ放惰と申

すことに當つて居るのです。

どうです、一つ此處に事實を擧げて、讀まるゝ方々にお考を願ひましようか。

▲第一に、食事の時が嚴密に定まつて居るであらうか。正午の時が打てば、直ちに、一家が、食堂に集まれるように、日々、寸分違はずに行はれて居ますか。食時の間には、必ず不時の間食を採らずに、極つて居ますか。賓客があれば、未だ時刻でもないに、酒肴を命ずることは、ないでしようか。

▲第二に、毎朝、床を離る刻限が、果して一定して居ますか。昨日は五時に起きたが、今日は六時であつたというふ如きことは、決してないでしようか。夜十時の點鐘が聞えるや否、一家惣立ちに、起ち上りて、寢に就く用意をなすことは、毎日あるでしようか。主人が外出して、夜正しく寢る時刻までに歸るでしようか。




▲第三に、客に接する時や、日が、定まつて居るでしようか。又自分が客となりて、人を訪問するに、出鱈目の時間にしないであらうか。其の訪問の時間の長さか、用向相應に、豫め定められてあらうか。

▲第四に、一家の主人主婦の房が、定まつて居るであらうか。それは定まつて居るとしても、小供の遊ぶ房が定まつて居ようか。座敷であれ、又主人の机や仕事場

であれ、或は又臺所であれ、家の中、到る處に、小供の翫具や、紙片などが散亂して居ることはないか。一家の食堂が一定して居るであらうか。主婦の裁縫する房が、定まつて居るですか。

▲第五に、一家の勞働する役割が、判然と立て居るでしようか。例へば、或る者は庭廻りの掃除、他の者は床の上の箒き拂ひ、又他の者は雜巾掃除とのように、掃除に分擔を設けることはあるか。又庖厨の仕事にも、或る者は、專ら煮烹の事を、他の者は、水汲み役、器皿洗ひ役などを務めることはあるまいか。其の外にも、種々の分業が行はれて、居るであらうか。

▲第六に、一家の掃除が、怠りなく、都度々々行はれて居るか。毎朝の分は勿論のこと、其の他、風立ちて塵埃の甚だしい日には、必ず、猶ほ、臨時に掃除することはあるか。一週間、若くは、少くも一ヶ月間毎に、戸棚の上、欄間の間、簞笥の後などが、掃除せらるるか。塵芥は一々一定の箱に、紙屑は一々籠に投げらるるか。便所の如きも、時を定めて、怠らず掃除されて居るか。庭廻りの草も、度々取り去られて人目に汚苦しい所を見せないか。

▲第七に、其の他、一家に關する何事も、規律正しく、始末されて居りましようか。縱令、履物を脫ぎ置く所にも、客人を通す昇降口と、家人の常に上下する口に由りて分けてあるか、好しや、分けられぬとも、客人の昇降口には、ゴロ〱と家人の下駄、靴などが、脫ぎ棄てられてはあるまいか。外出するには、一々常着の衣服が、丁寧に疊みて仕舞はれるか。外出して歸れば、外出用の衣服は直ちに其れ〱の始末付けらるるか。主人の帽子の置き所、杖傘の置き所、手拭の置き所、雜巾の置き所、など何れも皆、一定整頓して居るか。

數へ來ると、家庭を規律正しくする事實は、決して右に擧げた位では足るべくもありません。現に、規律正しくして居る家庭では、恐く右の事實よりも以上に勉めて居るであらうと信じますが、併し家庭によりては、其の二三をさへも、如何はしいと思はれるのもあります。そうして右に擧げた事實は、ホンの形に現はれた知れ

切つたものばかりて、其の他、主人などが外出するに、一々行先を知らせることや、小供に約束したことは、必ず實行して見せることや、他人より書面を貰へば直ちに返書を出すことなど、隨分、無形に又有形に事實のあるものであります。

さて何が故に、家庭の規律が必要であるが。大躰に於ては既に前に述べたゞけでも分りましようが、よく〳〵と考へると、此の事は恐らく、家庭を組み立てゝ居る中に、一日も、缺けてはならぬ、最も大切なものであらうと思ひます。先づ

▲第一に、家庭教育の上に由々しい關係があります。



小供の寢る時限、食る刻限が一定して居るなどは、何よりも一番に小供の精神に差し響きます、小供の年齢や、身躰の状况に由りて一槪には申されないが、例へば、夜の八時に寢に就かせることに定まつて居れば、たとひ何んな、面白い遊事があつても、時計の八つの音を聞かせれば、直に寢衣に更め「お休みなさいの」挨拶を以て、床に入らせるようにしたり、又午後には只一度だけ菓子などを與へてそれも、是非とも、三時の音を耳にせては、叶はないとして置けば、それて、小供心に、寢時は八時、間食は三時のものであると覺悟して、他には種々の妄念の起ることはありません。其の他、一家の仕事が、

其れ其れ正しく分擔せられ、器物用具の位置が堅く定められ、下駄一足の脱ぎ方も正しくせられ、机、火鉢の置き方も決して斜になり居らぬなど、種々の規律正しい點を視るにつけては、小供心が自然に感化され、謂はゆる方正廉直の人となり、又正義には一歩も志を枉げぬといふ確固な人物となることは保證ひます。世には愛情が充分にあつて、そうして引締りの足りない人間が隨分あるようだが、是れ等は多く家庭の規律が缺けて居るから生じたのであらうと思ひます。

▲第二に、規律の益あるとは、啻に小供の教育上ばかりではなく、家族互の間にも、大したものです。先づ、一家の仕事が、分擔されて居る所からして、或る物は大變に忙しくて或る者は閑に過ぎることがない、從つて、恨む者もなければ、怠る者もない譯です。外出には一々出先を通知するから、隠立をすることもなく、亦、手違の起ることもない譯です。一家を監督する者でも、誰々が何々を分擔して居るかを知る所から、少しも責任を盡さないものがあれば、直ちに見出されるし、それに又、自分の責任をさへ盡し置けば、後は公然遊んで居るも、心に咎める點がないから、安樂に生活して一家が、樂しくなつて來ます。マア、食事の時か、皆々一定して、一室に會合するからでも、自然と一家團欒の愉快を得られます。

▲第三に、世間と交際する上にも、大なる利益があります。先づ家の内が總て整頓して、サツパリして居るから、訪問の客に、不快な心地を決して起させることのないのみか、客によりては、深く感服して、此の家庭、此の家人を喜ぶようになる人もありましよう。又書面の贈受にも、始末が速いから、先方に滿足を與へることが出來る。又客に接する時を定めるによりて、生憎の不在て客を困らせることもない、又其の飲食の饗應を正しくするによりて、當方の主義に敬服じ、自然に尊敬の念を起させることもあります。

▲第四に、衛生の上には、最も著しい成績が見えます る。何よりも先づ、食べると、寝るとの時間が定まつて居るといふことは、一番に分り易いことてあります。

其の外、塵芥のような汚物を、無闇と散らし置かないでとや、衣服布團などを日に曝らすを課業とすることなど、皆衛生に叶つて居ることとてあります。毎朝便所の手洗水を入れ換へたり、二三日毎に其れに使ふ手拭を取り換へたりするも、皆至極宜しいとてある。何も、手洗水が濁らなくても、又盡きなくても、手拭とても、汚れなくても、一々定まつた課業として、これを換へ更めることが、即ち莫大な利益があるのです。傳染病の原たる病毒は、濁らぬ水にも、汚れぬ手拭にも、含んで居ることがありますから。其の他仕事の分業や、客を接待するに、規則立て居ることなど、



聖母と幼き者

總て人間が、毎日生活して居る中に、何事も規則の正しいことは、其の心も其の身も共に調子良くなつて來て、それが自然と衛生に適つて參ります。老人が、毎朝早く起きて必ず太陽を拜しなければ、其の日の仕事にか〻らぬ例がよくありますが、此の老人は乾度健康で、それはお天道樣のお庇陰だというて居るが、しかも、其れが毎朝清潔なる空氣を吸ふてとの、規則正しいからであることを知らないのであります。體操や運動が、如何に我々を強健にするとはいへ、それが或る日は行ひ、或る日は行はないといふように、規律正しくないければ、一切何の効用もないもので、終つて仕舞ひます。これを

見ても規律が、どんなに衛生上に利益のあることが知られます。

▲第五に、規律は、經濟上に大きな關係を持つて居ることを考へねばなりませぬ。經濟上に利益なるとは時間の上、勞力の上、及び金錢の上の三點に渉ります。時間の經濟といへば、寢食の時刻、應接の定限、などを始めとして、仕事の分擔の如きは、大きな經濟になります。又勞力の經濟といへば、分業を第一として、それから家の掃除に於ても、毎週若くは毎月に、定めて、少しづゝ大掃除をして置くから、年末とか、又惡疫流行の時に、非常の勞力を要することが少くて、邊り近所の家が、大騷をして終日役々として居るに、此方は平氣で殆んど平日に變つたこともなくて濟む譯です。衣服の取扱ても、時々、日に曝すとか、風に當てるとか、定まつて居れば、そんなに屢々洗濯をしないで宜しいことがあります。次に、金錢の經濟からいうても、大變な利益があります。日々時々の掃除草除等を怠らずにして居る家屋は、どうも其の保存がよくて、長く普請修繕にかゝる要がありません。衣類とても、其の取扱に規律があれば、汚れ損することが少いて、新に買ひ求めることは、多くは要りません。其の外、何んな器具でも、左樣である。たとひ、人間の身體でも、休息と勞働とを、規律正しくして行けば、病み煩ふことはないから、醫藥などに餘計の金錢を要しません。

規律といふことが、どの位に利益のあるかは、上に述べた所で、大略推察は出來るでしよう。しかし實際には、未だゝゝ利益のあるもので、此處では何分時間と紙面とが許しませんから、ザツトとしただけの話であります。いはずとも、讀む人の考に任せて置けば、續々胸の中に涌いて來るでしようから、もう、大概にして置きます。

此の樣に、大利益大効用のある家庭の規律といふものは、家庭としては、片時も等閑にしてはならぬことであるが、こゝに亦注意して置かねばならぬことがあります。それは、餘り規律々々と、崇め祭りて、度を過してはならぬことです。規律とは、一に引締りともいうて、

兎に角、人を檢束することであるから、究屈といふことは免れません。一家に非常なことであるか、誰れか病氣に罹るか、などの出來事のあれば、それ相當に、規律の檢縛を弛めねばなりません。規律に拘泥すると、嚴格に過ぎて、家庭の本質たる愛情を滅して仕舞ひます。

但し現在の日本の家庭では、どうも愛情に偏つて、規律が乏しくあります。小供が日曜日の一日家庭に暮らしたゞけでも、翌日は既に學校で持餘して居る程である、況して暑中休暇のように、永く家庭の生活に慣れた後は、其の恢復に中々骨が折れると學校敎師は呟いて居ります。それで見ても、我が家庭の甚だ不規律であることが推し量られます。




所が、其の家庭でも、富んで居れば居る程、不規律であるといふことは、如何にも殘念ではありませんか。富んで居る家は、兎角、金錢に任せて何事も辨じますから、自然、自分が手を下して家事を營むことがないから、主人主婦を始じめ、家人に閑暇の多いものが出來て來る。それが家庭に惰風を持ち込む原因となり、それから又一方に贅澤三昧にも耽るから、愈々規律のどの邊にあるかを見出し得られないことになります。その點になりますと、反つて中等以下の生活を營む家庭の方が、寧ろ

正しく行つて居ります。謂はゆる貧乏暇なしとか申して、それが一切怠惰を容れる餘地をなくし、日夕役々と稼きて居るのが、即ち自然と寢るにも、食べるにも、規律が立ちて來る譯てす。但しそれにも、規律を重ずるといふ考がなければ、皆無駄目であります。家庭が稼に忙しいければ、又それはかりに役々として、清潔も整頓も何も顧るに暇がなしといふ風に陷つて仕舞ふこともあります。

詰り、家庭の規律は、最初から、これを遵ひ守るといふ精神を有つて、かゝらねばなりません。そうして、これを行ふにも、手加減のあることも亦承知して居らねばなりません。我々は事實、家庭の規律の重いことを承知しながらも、兎角悉く實行する勇氣の乏しいに耻ち入ります。

終りに、一つ言ひ添へて置くことがあります。今日の女學生には、口に學問など立派な事を喋舌り立てゝは居るが、一家の主婦となつた曉には、舅姑や世の人から存外に價のないものだと評價されることの多いには、全躰どうした譯であらうか。我々の考る所では、學問や智識を幾分か鼻にかける所から、家事などの事共を鎖細なものと見做して、一向氣に留めないようになり、それで一家の規律に全く無頓着となるからであらうと思ひます。現に、女學生の多くは、男書生のように、品物を大切に取り扱ふこともなく、机の中には、芋の皮が、紙屑古筆などとゴタ／＼に雜居して居るようなこともあり、衣服にしても、脱ぎ棄たまゝて、氣の向く時までは、之を疊むこともなく、足袋や下衣が幾個となく溜まつても洗濯を怠り、自分に石鹼や手拭がなければ、他人のを借りて、平氣で濟まし込んで居るなど、擧げ來れば、數々不締不極な事實があります。それに顏髮の粉飾や表服の扮裝には中々注意します。それで家庭の規律が保てましよか。

# 家庭雜話

劇しく働かんよりは寧ろ方針を正しくせよ—英國俚諺

羽仁もと子

（一）

○女子學院の三谷民子氏が、一昨年米國に行かれて、去年お歸りになつてのお話に、

「西洋人の注意深いのは前から知つて居ましたが、米國に參つて一層この感じを深くいたしました。私の逗留して居りましたのは、御承知の私の先生のミス、メリケン御兄弟のお宅でありました。始めてお目に懸る方々ではありますが、至つてお親しいやうな心地はしながらも、外國の土ではあり、何所にか心細いやうな思ひもいたして、ステションに着きました。果して皆樣が迎ひに來て居て下さいましたので、御一緒にそのお



宅に參りますと、玄關には日米の兩國旗が交叉されてあるのです。私は此樣な習慣になれませぬゆゑ、頗る異樣に感じながらも思ひかけず日本の國旗に出遇ひましたので、ドンナに嬉しかつたで御座いませう。坐敷に通りましてからの詳しいとは措きまして、「あなたのお部屋はこれに定めて御座います、晩餐まで此所でゆる〱御休息遊ばせと」おいひになつて、ミセス、メリケンの案内して下さいました部屋は、しんに日本の自分の部屋に歸つたのではないかと思はるゝ程でした。一躰私は桑港に着いてから、漸くの間彼方此方と寄道をいたしました

のて、荷物だけが私より數日前に此お家に着いて居るのです。ソシテ私の途中に居ります、間に、ミセス、メリケンからのお手紙がありまして、あなたのトランクの上部に蓋を開けても宜いかとのお尋ねてありましたから、ドーゾお開け下さいとお返事をいたして置きましたが、この部屋に入りまして初めてミセス、メリケンのこの御照會の意味が分つたのです。部屋に入るなり直ぐ目に附いたのは、私の四五人の親しい友達の寫つた寫眞が壁の正面に懸けてあるので御座いました。私は此時實に懷かしいやうな嬉しいやうな心地で、思はず叫ばうとした程てありました。やつとの事で落ついて部屋中を見まわしますと、私のトランクの側に置いてある簞笥が抽出の隅々までも奇麗に掃はれて、トランクの中から取出した着物などはいつでも私の思ふまゝに簞笥の中に仕舞はれるやうになつて居ますし、机の中には大小の狀袋から半切れ　それゞ白色や青や桃色や色數までも取揃へてありますので郵券や端書がまた別の箱に要意されてありました。机の上に飾つてあるものゝ中は、ツマラないものではありますが、私の日本で始終机の上に置いたもので、ナンダか暫くでも置去りにするのがいやなやうな心地で、前の友達の寫眞など一所に荷物の中に仕舞いこんだものなどもあつたので御座います。ミセス、メリケンは何うして斯うも行屆かれたものであらうとほと〳〵感じ入つたのでありました。一方には清らかな寢臺が用意されてありまして、被布の端がチヨツト折返されてある所など、疲れた身体が我知れず運ばれて、いつかその上に心地よく橫たはつて居りました、此事はホンの一例でありますが、私は米國に居る間何事につけても、彼の國の人達の注意深いのに感じますと共に、私供はどうして斯うまで不注意であらうかと幾度も耻かしく思つたのでありました。

と云はれたとを記臆して居りますが、御尤もなお話であると思ひます。ソシテ更にこのミセス、メリケンのなされた事を注意深いと申すとの外にモー一つ他の方

面から考へますなら、三谷さん即ち來客の感情をよく推しはかつて、それを滿足させるやうにお勉めになつた、即ち來客に對して厚い同情を持つて居られたといふとです。之に反して私供はすべての事になれぬ故でもありませうが、客を待遇すのにも斯うしたら笑はれやうかとか、御馳走しなければ、惡るからうとかいふやうに、來客の感情などは殆と忘れて仕舞つて自分のとばかり思ひすぎる傾きはありはしないかと思はれます。人に依つては「先日お宅でアンナにお世話になつたんですもの、ソンナに早くはお歸し申ませんよ‥‥どうしても、お歸り遊ばすと仰る‥‥のぢやア私も今度からお宅に參つても何も頂きませんよ」などゝ一度御馳走になつた人には、次には是非御馳走しなければ氣が濟まないといふやうな自分勝手の感情のために、來客に非常な迷惑をかけるやうな、塲合もあるので御座います。主人は義理づくて種々の待遇をすると思へば、客もされる儘になつて居ては餘り遠慮がないと思はれはせぬかと云ふやうな氣遣も出て、双方互に氣を揉んで、果ては人を訪ねたり訪ねられたりする事は一種の苦痛のやうに思はれるともあります。接客の要義は第一に同情を以て之に對し、次に綿密な注意と工夫を以て之をもてなし、客はいつか自分の家に居るやうな氣になつて平和に樂しく相語り、また主人の厚意をば何事によらず少しの、疑もなく喜んで充分に受けるとの出來るやうにするとであらうと思ひます。

○益田孝氏の夫人榮子氏などは、有名な家政家だけ接客に就ても實に行屆いて居らるゝと兼て伺つて居りましたが先日同夫人のお話に、

「一家の事と云ふものはなか〳〵用事の多いもので御座いましてねえ、此節のお暑い時分で御座いますと十五人のお客をするにも、浴衣はどうしても三十枚はいるので御座います。暑いのに洋服は御窮屈さうでありますから。まづおいてになると浴衣に着換へて頂く、その中行水代りのお風呂が出來ます。折角濟々とおあがりになつたのに、さきの汗になつたお浴衣もお氣の毒で御座いますから　お代りのがいる

のて御座います。それに大きい方もおありになりますし、またさほどにない方もありますから、殘らず同じ寸方でも間に合ひませんしねえ、キチンとお身体に合ふと云ふほどに六ヶ敷いまでも大中小の三通位はして置きたいと思いまして、見分けのためには襟先などにしるしをつけたりなんどして、こしらへて置くので御座いますよ。それに宅(御殿山の邸を指)などは遠方で御座いますから、夜分のお客様はお歸し申すのもと存じてお差支ない限りお泊め申すヿにして居るので御座います。些細なヿではありますが、折角おいでになつた方にお氣持の惡い目を知させ申したくないと思ふと種々なところに心配りのいるもので御座います。」

坐談の序に僅かお洩しになりました一節でありますけれど、前のミセス、メリケンにも劣らぬ、夫人の接客振の一端は窺ひ知らるゝてありませう。來客を滿足せしむるためにはなかく\に綿密な工夫のいるものとは、眞に夫人の御經驗より出たお言葉かと思ひます。

# 素人看護法

淑徳女學校講師
醫學士　佐藤恒久

## 血行器の話

前々お話を致しました通りに、血液は身體の營養に必要な物を供給する上は、此必要品を身体の外から再び供給を得なければならぬ譯であります、それで其必要品と申しまする物は第一に肺臓に依て空氣中の酸素を血液が取り、第二には腸に依て飲食物中の滋養の分を血液が取ります、尤も此腸の中から取る滋養分と云ふものは直接に血液の中に入るのではなくして、淋巴の助けに依て入込むことは前淋巴の時にお話した如くであります、それで此血液が內臓に必要な營養を給供する方法をお話致しますると、臓器の內に毛細管と云ふ細い血管が縱横にあります、此毛細管の中には血液が流通して居りまして毛細管の薄い皮を通過して中の血液の成分と臓器の成分とが交易されます、此交易に依て血液中の營養分は臓器の中に移り往き、又臓器の中

て出來た廢物は血液の方に移り往きまして遂に體外に排出さるゝ譯になるのです、斯樣に臟器の營養を司るに付ては血液の新陳代謝即ち流通と云ふことがなければならぬ、それはどう云ふ譯であるかと云ふに何時も同じ血液が同じ場所に居つて少しも流通しなかつたならば其血液中の營養分は遂に盡きて了ふ、又臟器の中の廢物が血液中に移り往くに付ては、其血液が矢張廢物其物と同じやうなものになりますからして營養分は少なくなる、且つ廢物を含んで居る所の血液は即ち惡い血でありますからして之を外の場所に送つてさうして新らしい良い血を其場所に持つて來なければならぬ、それをするには血液の流通と云ふことが必要になるのであります、詰る所は身躰の中にある血液は身躰の内をグルリ〳〵絶へず回つて居ります、それでグル〳〵絶へず回ると云ふのには其路が是非共輪のやうな形ちをして居らなければならぬ、輪と申せば指輪の如きものもそれであるが詰る所何處が初めと云ふこともなく又何處が終りと云ふこともなく周圍を環つて居るのが即ち輪の形であります、此輪の形に血液が流れて居ればこそ初めて身躰中の血液が絶へず身躰中を環る譯なのであります、斯樣に輪の形をなして血液が環つて居りますからして之を稱して血液循環と申し又單に血行とも申します

次に此血液循環を起す力と云ふものが又一つ必要になります、只だ輪の形になつて居る所の路がありましても其中を血が流通するやうになると云ふものは或る力があつて初めて流れるのであります、其力は主として心臟の働作に歸するのであります、心臟の力と云ふのはどう云ふ力であるかと申すに恰も喞筒の仕掛の如くでありまして所謂一時的收縮と云ふ働作に由るのである、一時的收縮と申すのは或時は收縮し又此收縮に續いて遲緩する事であつて心臟が縮んだり伸びたりする、其縮んだり伸びたりするのが一時的に出來て居つて、何時も縮んだなら縮んだなり、伸びたら伸びたなりと云ふのでは此血行の力と云ふものが出ないのであります、斯樣に心臟が收縮したり或は遲緩したりするの

を稱して心悸と申します、それで血液が心臟から出ましてさうして營養を與ふべき臟器迄行く路を動脈と申します、初め太くして別れ〳〵て細くなり遂には臟器の中に行きますと云ふと其動脈が毛細管となつて初めて臟器内の營養を司どることになるのであります、それから其臟器から心臟に歸る迄通過する所の血管を靜脈と申します、靜脈は初め毛細管に起つて此細い管が幾つも集つて小さな靜脈に合し、それから中位の靜脈に合し、遂には大靜脈となつて心臟に達すると云ふ工合に出來て居る、併し斯う云ふ風に血液循環の器械の出來て居るのは極下等の動物のみで人間のは是よりも複雜に出來て居ります、詰り人間のは重複循環と云ふことになつて居るのでそれを分り易くお話すれば、詰り心臟が右と左と二つに分れて居るものと假定め其右と左の心臟が別々に動脈も毛細管も靜脈も持つて居るから詰る所今お話したやうな單箇の循環が二つ人の身躰にあるものとしなければならぬ、それで右の方の心臟は黑血を含んで居つて之を肺動脈に送る

(此黑い血は惡い血であります)肺動脈に送られたものが肺臟に入込んで其處で以て空氣中の酸素を此黑い血が取る、又血液の中の炭酸を空氣の方に向つて排出して了ふ、そこで初めて今迄の黑い血が清潔な血になつて來る此良い血が再び肺靜脈に往き遂に心臟に歸つて來る、此路を稱して小循環とも或は肺循環とも云ふ、それで今お話した清潔な血は心臟の何處に歸つて來るかと云ふに左の心臟に歸つて來る、さうすると又此左の心臟に於て新たに力を得て此清潔な血が身躰の動脈に這入込み遂に其末が身躰の各部分に入込んで其臟器に營養を與へ、或は臟器内の廢物を受取つて再び黑血になる、其黑血が靜脈を通り復た右の心臟に這入込んで來る、それから先は前にお話申す通り右の心臟から肺動脈に行き再び清潔な血になるのであります、それで第二に御話した所の身躰の營養を司どると云ふ側の循環を稱して大循環と申します、それからもう一つ茲でお話して置くのは此大循環の靜脈の中には消化機から來る所の淋巴が這入込みますそれで以て初

めて前御話申したことが先づ大概お分りになるだらうと思ひます、尚もう一度繰返せば此大小循環に依て血液中の炭酸が肺臟て以て排出され、又空氣中の酸素は肺臟に於て血液中に移り行くそれて清潔な血になる、其清潔な血が臟器を回つて臟器を補ひ、又それに依て汚ない血が出來る其汚ない血の中には淋巴が注いで淋巴が注げば即ち飲食物から取つた所の營養分は此淋巴の中にあるのてありますから、血液が矢張其處で補なはれる理屈てあります、それて一方に於ては淋巴に依て血液が補なはれ、又他方に於ては肺臟に依て血液が清潔にされると云ふやうなことで初めて身躰に必要なる所の營養分を血液が含むことになるのてあります

（次號には心臟の話を紹介すべし）

健康を欲せば夏日も冬服せよ—西班牙俚諺

## 飲水と牛乳の試驗法に就いて

糸左近

「水は方圓の器に隨ひ人は善惡の友に依る。」と、いふことは、千古の名言て、今や三尺の童子も之を知る、然れど、「水は含有の物質に隨ひ人の健康は善惡の水に依。」と、いふことに、注意してゐる方は甚だ少いやうてある、これは私が作つた語なれど、前のに劣らぬ金言てあると、自惚てゐるのてあります、てありますから、水のことに就いて、滔々流るゝが如くに否溶々穩かに、聊か述て見ようと思ふのてあります。

偖何んな水が善いかと言ふに、第一に無色透明で何の臭氣も無く清涼の美味を有つてゐるもの、第二に有機物を含まぬもの、第三に格魯兒抱合物、硫酸鹽類は極少量で硝酸鹽類は唯その痕跡のみであること、第四に安母尼亞、亞硝酸は全く含んてゐないもの、第五にその温度は何時も大抵攝氏の九度乃至十一度位なることてある。

次に如何なる水が惡いと申すに、第一に濁つてゐて久しく經つと沈澱物の生ずるもの、第二に有機物を含むもの、第三に多量の格魯兒抱合物硫酸鹽類及び硝酸鹽類を含んでゐるもの、第四に少量と雖も安母尼亞及び

亞硝酸を含んでゐるもの等である。

斯う述べたとは言ふもの丶、これが鑑定法を知らねば何んの効もないことであるから餘り、複雜なる法や餘り高價の器械を要するものは、省いて、誰にでも出來る簡易な法を一々說いて見ませう。

透明な丈の高い硝子の器に試驗しようと思ふところの水を入れ、其の側に又同じ硝子器に蒸餾水を入れ、何れも白紙の上に置いて、上の方から其の厚い水層を見るに、善い水は其の蒸餾水と殆ど同じく無色透明である、少しても黃色を帶びてゐるやうな水は、酸化鐵鹽類を含んでゐるか、或は沼地から湧出たものである、次に誰が嗅いでも分るやうな臭氣のある水は、無論惡いといふことが分るけれども、唯嗅いでは一向に分らぬ水が、或る方法を以てすればプン／＼と臭氣を放つことがある、其の法は一杯の水に加里滷汁數滴を加へて熱すれば直ちに其の臭氣が分つてくる、即ち臭氣が無ければ善い水である、次に有機物の有無を試すには、水を小さな陶品の皿に入れ温めて蒸發せしめ、其の殘餘物を高度の温にて熱し、若し黑い色の物が殘る時は、有機物のあるのである、次に格魯兒抱合物を撿するには、硝酸及び硝酸銀を其の水に入るゝのである、若し多量に含んで居れば、雲のやうな著しい沈澱を生ずるものである、次に硫酸及び硫酸鹽類を試めすには、鹽酸或は硝酸に格魯兒重土の溶液數滴を加へて水中に入れ、若しも非常に濁つて甚だしく沈澱物が生ずるときは、多量に含んでゐる證據である、併し少しの混濁は善い水にも生ずるものである、次に硝酸鹽類を鑑定するには、その鑑定しようといふ水滴を硝子棒にて白い陶器の小皿に入れ、これは二滴ばかりのブルチン溶液を加へ、其の皿を搖かして其の液を能く混合せしめ、これは硫酸を加ふるのである、若し多量に含んで居れば一滴の硫酸で直に眞赤となる、されど五滴を加へて、初めて赤くなるものは唯硝酸の痕跡のみである、次に安母尼亞である、これは如何に少量を含んでゐても害となる、沸騰させても害がある、器物を洗ふだけでも害となる、これを含んでゐるといふことが分つたら、決して用ゐてはならぬ、

之を試驗するには、水大凡半合位に那篤倫滷汁五滴を加へ、更にチルレル氏液を十滴ばかり入るれば、安母尼亞あるときは黄色或は赤色となる、次に亞硝酸の有無である、これも安母尼亞と同じい害があるから、痕跡がある位でも用ゐてはならぬ、これは一合程の水に硫酸二三滴を點し、さうして後沃度亞鉛澱粉溶液を加へて藍色となれば亞硝酸を含んでゐるのである、この安母尼亞でも亞硝酸でも、或は急に或は緩く早晩命取りの種となるから、今まで安閑と暮してゐた方も、早速飲水の試驗をして頂きたいものである、以上用ゐる藥は藥舗が賣らずば懇意な醫者に、その譯をお明しになつて讓つて貰はるゝ方が善いと思ひます、東京の方ならば水道の水さへ用ゐて居られたならば、何の心配も要りませぬ、水道の水は水質が善いばかりでなく河水を一度砂礫で漉し、塵埃は固よりすべての細菌を濾し、之を導くに丈夫な鐵管を用ゐ、管外のものは一切這入らぬやうな仕掛になつてゐるから、縦令へ生水を用ゐても害は有りませぬ。

返す〳〵も人は水なくては一日もこの世に居られぬことなれば、一度の試驗の勞を厭ふ人は命知らずの非人と言はねばならぬ、今こゝに古人の言はれた水の四徳を述べて次に牛乳の試驗法に取り掛りませう。

沐二浴シ群生ヲ一通二流スレハ萬物ヲ一仁也。
揚レ淸ヲ激レ濁ヲ蕩二去スレハ滓穢ヲ一義也。
柔ニシテ而難レ犯シ弱ニシテ而難キハレ勝チ勇也。
導二疏シ河ヲ一惡レ盈ツルヲ流シテ而謙ニハ一智也。

明らけく治る御代の文明と共に身躰の衛生といふことを重んずるやうになり、今や我も人もと牛乳を飲むやうになつたのは實に結構なることである、牛乳の廉價にして滋養の功あるは誰も能く知つてゐるから今更喋々するの必要は無いが、其の需むる者が多くなるに從つて、牛乳屋は過分の利を貪らうとして色々の奸策を行ふ、飲む人はこれを知らないで牛乳であれば何れも善いものと思うてゐる、これはその贋物たることを見分ることが出來ぬからである。

偖何うして贋物を拵へるかといふに、第一に水を混ぜ

てこれを稀薄くする、されどこれは誰でも知つてゐるから今は段々上手になつて麥粉澱粉を入れ、小麥或は大麥の煮汁を混ぜて胡魔化し、或は護謨末・乳糖・甘草の煎汁を入るゝもある、斯様な贋物を賣るのは却つて大學御用とか、或は何々病院御用とか言つて他よりも直段の高い店に多くある、これは人が信用してゐると信じてゐるからである、今この贋物を見分るには、下端を閉ぢた而も目盛をした硝子管を均しく三部に分け、那篤倫涸液一滴を加へたる牛乳を下部に入れ、依的爾を中部に、酒精を上部に注ぎ、よく之を振盪し、餘り强く無い火で煖め、火から降して靜かに置けば、牛酪が表面に浮ぶ、即ち牛乳百に附き牛酪二以上無くば牛乳にして牛乳に非ずと思うて可い、之を幾つも行うて見て二より三三より四と澤山あるのを需むるといふことにしておけば、實に安心である、此の外尚色々の試驗法があるけれど、複雜であるから、これが最も誰にでも出來る簡易な法と思ひます。

牛乳を沸騰させて飲むのは、黴菌の恐を防ぐ善い法であるけれども、冷へてから張つた皮を取つて飲むのは、其の滋養品を捨ると同じいことであるから、能く攪拌ぜて飲まねばならぬ。

誰でも朝の牛乳を宜い様に思はるゝけれども、さうでは無くて、午後に搾つたのが宜い、何ぜと申すに、朝のは昨日の賣殘を混ぜて賣る上に、牛の運動が無いから牛酪分が少ない、之に反して午後のは牛が能く食物を採り、大空を吸ひ、而も運動をしてゐるから、其の牛酪分は甚だ多くある、又雨の降る日は晴天の時より牛酪分が少ない、これから考へて見ますと、人は大空に觸れて運動することの必要なることが分りませう、貴婦人方よ、徒らに深窓の下に居らるゝのが優美で無くて、或は緑なす樹蔭に琴歌を嘯き、或は渺茫たる原野に舞の稽古なさる事を、已の爲のみならず、大切なる稚兒の爲にも、怠るまじきことである、又以上述べたる水と乳との撿査法も外に忙はしき男子よりも、其の内政を掌らるゝ婦人方に仕て頂きたいのである。

檢査をばうしと思ひてせぬ人に

飲ませたいのは安母尼亞水

井水涸れて後始めて水貴のきを知る

# 装飾の栞

## 庭園と室内装飾の關係

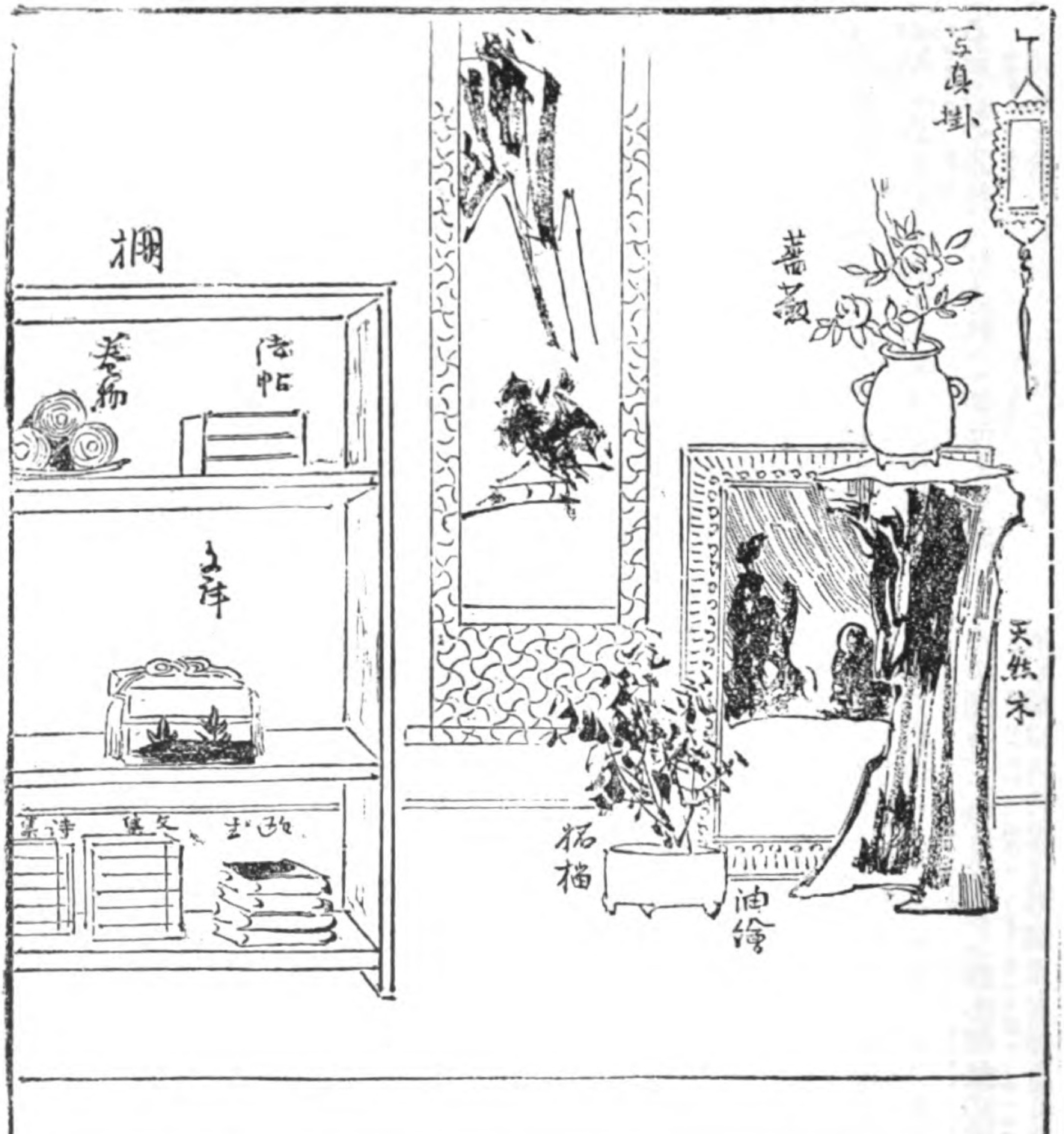
禮法講習會師範　近藤嘉三

屋外の林泉樹石の模樣は大いに室内装飾に關係を持つもので、それは丁度、床の掛物の畫樣、書樣が瓶花や他の置物などゝ關係を有すると變らぬ。花鳥や何かの派手な掛物を展してその前に牡丹や海棠を挿しては裝飾がだれて活氣が無いと同じ事で、櫻や柳を植え交ぜた華やかな、陽氣な庭園に面せる座敷には、どうも派手な飾りは相應せぬ。それも惡くも無かろうが然し陽氣な庭には寂ひた装飾、閑寂な庭園を有せる座敷には華やかな装飾が施し度いものである、この奇、正、陰、陽、の相對は大變に装飾に活氣を添へて面白味を増すものである。

然しこの配合對比は随分面倒なもので、甚しく打離るれは滑稽に陥る、又同じ樣なもの計り重複すれば平凡に流るゝ。恰も大絃、小絃相和して錚々さく〳〵として金玉の響を作す樣な工合に離るゝ樣で離れず、一致する樣で不一致の點が無ければならぬ。

雲埋老樹一聲飛とでも云いさうな閑寂幽靜の庭のある座敷には掛物も花も上品でそして麗はしい調度を用いたい、即ち掛物はこの節であれば子規か花橘の歌の大懐紙を卵の花重等の上品な表装にして、中央卓の上に青磁焼に銀火罩の懸かつた香爐でも置て下に古銅の一輪生に杜若か何かを挿む、敷物も段通織などの高趣な紺地に唐艸模樣でも染めたものを用いたい。又同じく當季の飾りでも高臺の二階建か何かで庭は遥〳〵と芝生か田甫に打續きて、ずつと彼方には遠くの山や川までも見ゆると云ふ登樓萬里春と云ふ詩句などの連想さるゝ樣な陽氣な座敷には少しぢみな飾りが似合ふ、然しぢみに過ぎては却て配合の中正を傷つくる。掛物は景文の清の花鳥の立物表装も餘り派手に過ぎぬもの、花は山合表か忍冬、磁器でも銅器でも少し黑ずん

だ、形の締つた花瓶を薄板の上に載せて挿む、竹籠も風情があろふ。敷物は無論淡緑の紺地、：：：紅色の加はつたものなどは騒がしくて斯樣な座敷には相應はぬ。中央に朱檀か螺鈿の極丈の低ひ大卓でも置いて上に一二帙の法帖位を飾る、扁額は言ふまでも無い書でなくては成ら




ぬ。若し山水や風景の書額などを懸くれば俄紳士の別莊か溫泉宿の二階を見る趣味も雅致も無かろふ。また飾り見たれば斯樣なものでもあろふか。

さて庭園の築造には種〳〵の趣向があつて、例へば花ものを植えて四時折〳〵の花の開落を賞玩するを目的とするもあれば、

多くの常磐木を植ゑ込んで紅塵萬丈の市都に於ても、林泉樹石の樣、さながら深山幽谷の景趣を摸するもある。乙は四時の遷り變りに由ても變化を見ないが、甲は變化が多い。巧みなる庭園築造家は拳大の地に於て能く世塵と相隔つる幽邃の趣を寫すものて、これは庭園築造の上乘なるものであるが、然し少い。

變化の多い庭も決して惡くは無い、然し只その遷り變りに由て室內裝飾の樣子を改めて屋外の狀趣に一致する裝飾を施さねばならぬ、即ち夏期には夏期らしく冬期には冬期らしく。例へば滿庭の新樹が鬱蒼として思はぬ綠の山を築く、春夏の交には、床の間花は牡丹か杜若、これは色の配合から申しても又陰陽の相對から申しても、決して詫びしい花や、閑寂な花は似合はぬ。花計りてなく掛物も置物もその通りて、一口に云へば澁味のある裝飾よりも何れかと云へば派手な裝飾が好いのてある。又木々の梢の錦が落ち盡して石燈籠や飛石まて寒そうに見える秋冬の季節にはそれに相應して寂びた中に何處となく陽氣を含むだ飾りが必要てある。

それで居室を飾るには只單に建築の爲方、間取造作の工合、並びに他の調度との配合、計りに關はることは出來ぬ、庭園の樹木泉石の配置、形狀、色彩と相待つて內外相應の裝飾を作る事に特に留意するのが一種の秘事である。

### ▲床の間の亂れ飾

一幅の掛物、一瓶の花、これ計りでも立派に裝飾が出來る。然りながら多數の器具調度をいろ〳〵と置き併べて、三つ具足飾り、五具足飾の樣な眞の飾りの眞面目なるに引換へて亂調に裝飾するのも亦た特種の風情のあるもので、一概に亂雜とか不調子とか申して排斥し去るべきでもなかろふ。勿論不調子の間に調子を整へ、亂雜不規則なるが如き中に規律を保つたことが必要ではあるが、先つどちらかと云へば規則正しい隊伍の整ふた軍隊に對して散兵のある樣な有樣である。

日本の裝飾は床の間以外に飾りが少いと云ふ、それはその通りて全く少い。然し建築の爲樣と住居の摸樣は床の間以外に多くの調度を飾ることを許さぬ出來ので

である。椅子やテーブルを置て多くの卓子を併べてその上に種々の器物を飾ることは坐作進退の助けとも成らぬが、日本流の坐つたり立つたりする室で然も歐風の家屋よりは狹い塲所に多くの器物を置けば、或は之を倒したり傷けたりするの恐れがある、加之壁が少い。斯樣に種々の原因があつて終に裝飾は床の間と云ふ面積の狹い塲所計りに成つたのである。この面積の狹い一坪にも足りない塲所にいろ〳〵の裝飾を施すも亦一種の慰であろふ。

床の間は長九尺奥行三尺の板床で床脇に一間の地袋が付てある。床壁は薄茶色。中央に唐畫の山水の立物の幅を掛けて、左方の壁に倚せて紫檀製の三重の棚の大なるを置て、棚の上段に二三帙の法帖と五六卷の經卷を盆に載せて飾り中段に硯盆、箱手などの文房具數種、下段は新刊の歐米文學書と一二種の詩文集などを置く、掛物の前即ち床の中央に方形白高麗の鉢に柘榴か何かの盆栽を置て、右の方に天然木の大花臺を飾つて上に紅玉の花瓶に純白の薔薇を挿す、掛物に接して風景畫の油繪の大額を壁にもたせ掛けて床柱の釘に銀製の寫眞掛を眞紅の紐で結んで掛くる。

床脇の地袋の上に世界地圖の帖と一基の置時計と塔狀の風雨計を飾るのであるが斯樣に長短方圓大小の器物を入り亂して參差として無造作に飾るのは甚た不規則な飾りの樣ではあるが實際は大變に面白みのある裝飾で某候爵の應接所などは常にこんな風に飾られてある。一寸考ふると譯も無く置てある樣であるが決して然樣で無い。その道の專門家に托して賑はしく斯樣に裝飾さるゝので、數の多い調度を狹い所に置き並べて嫌味の無い樣にするのは中々に困難で、これを下手にすると骨董店めくのである。

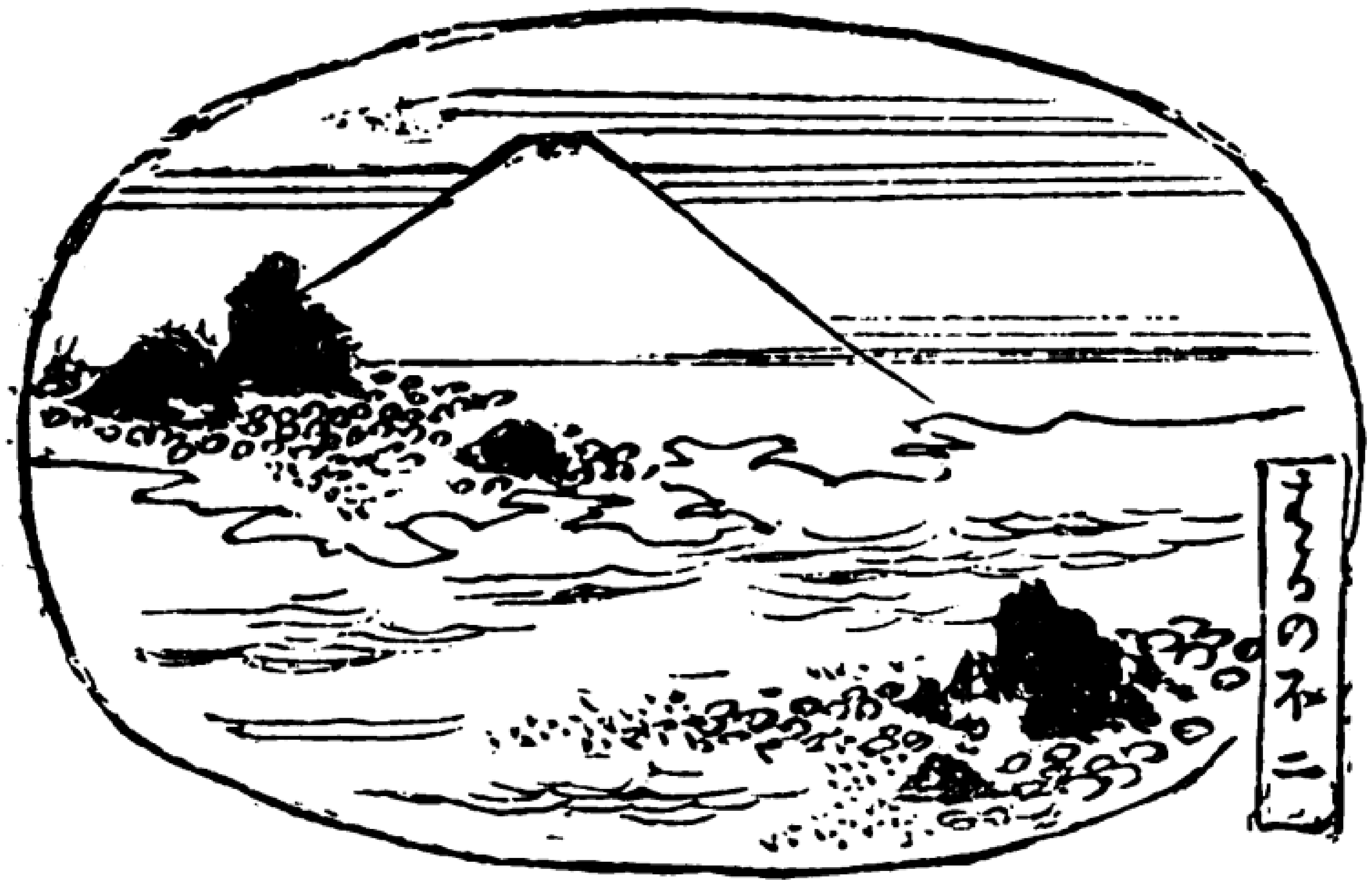
# 盆石の栞

彫琢以て文を生し抑揚以て音を成す

正瓢庵宗月述

◉盆石を飾るには須彌四洲とする事

昔し神武天皇即位の始、諸國に幸行したまひて日本の地を御覧じ、その形ちの蜻蛉に似たるを以て秋津洲と名づけせさ玉ふ。洲とは海邊をいふ、故に盆中に飾るには四海一山とす、四海一山は即ち須彌山四洲なり。須彌山は中央の主石にして是を巖に顯はす、その巖は石するどくして高く、聳へたるものなり。巖を又峯とも見るべし、山大にして高き形を岑といひ、小にして高きを峯といひ、その絶頂を巓といふなり。




盆中の巖は即ち須彌山にして洲は即ち沙濱なり、是れ蜻蛉を表すものなり。此の外に又日本の三島を表はすあり、三島とは蓬萊、方丈、瀛洲とす




盆石を立つるに七の數を用ゆる事

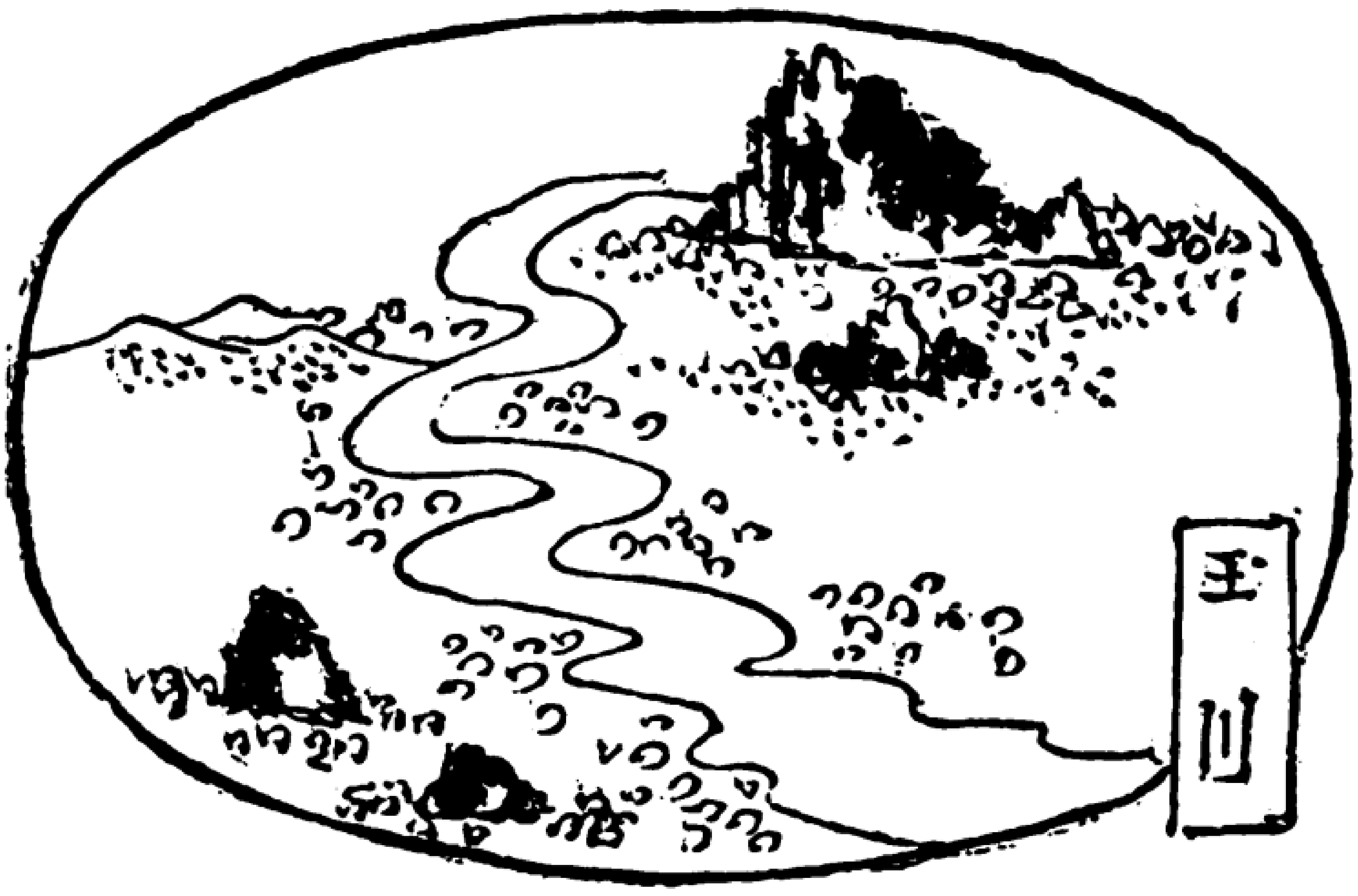
七段とは峯、澤、岬、澗、丘、洲、濱をいふ、峯とは水際の高き所をいふものにして澤は水のめぐり聚まる處をいふ。岬とは御崎の事にして山の一邊海中へ突出したる處をいひ、澗とは山の間に水ある躰をいふ、又四方高くして中央の凹みたる處を丘といひ、水邊の平衍なる處を濱といひ、その濱に小石あるを磧といふなりいづれも砂の盛りやうにて形造るなり。

●七三四六の法を守る事

盆石を立つるに七三四六の法を守る事はまづ七星を表はす

日、月、木星、火星、土星、金星、水星

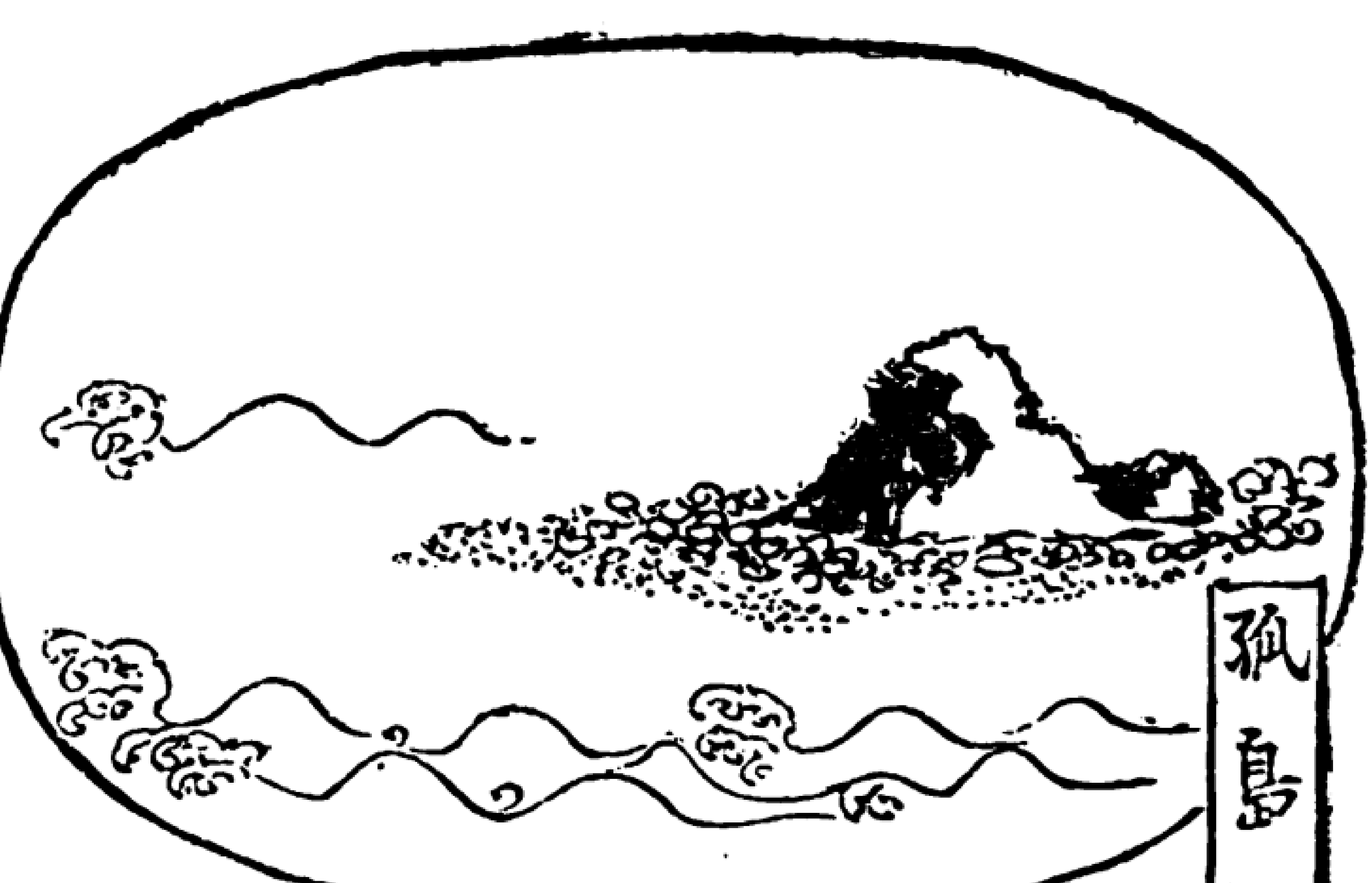
是を天の七星といふ、次に三の數は天、地、人、の三才にして四の員數は四方四撮を表はす、四方は四天王、四撮は慈悲、喜捨なり、六の數は大極、陰陽、日月星なり。一月元三の間は四海一山の盆を飾るべきなり。



玉川

置棚或は長板等に立る事

この時は地砂を厚く布くべし、地砂を洲濱の形にふり、主石は四七の寸を守るべき事なり、されど傳へて家の重寶とすべきは鉢に立べきなり、鉢なき時は丸盆に立つべし。すべて立つるとは巖を置くをいひ打つとは砂を蒔くをいふ。



孤島

●盆鉢の由來

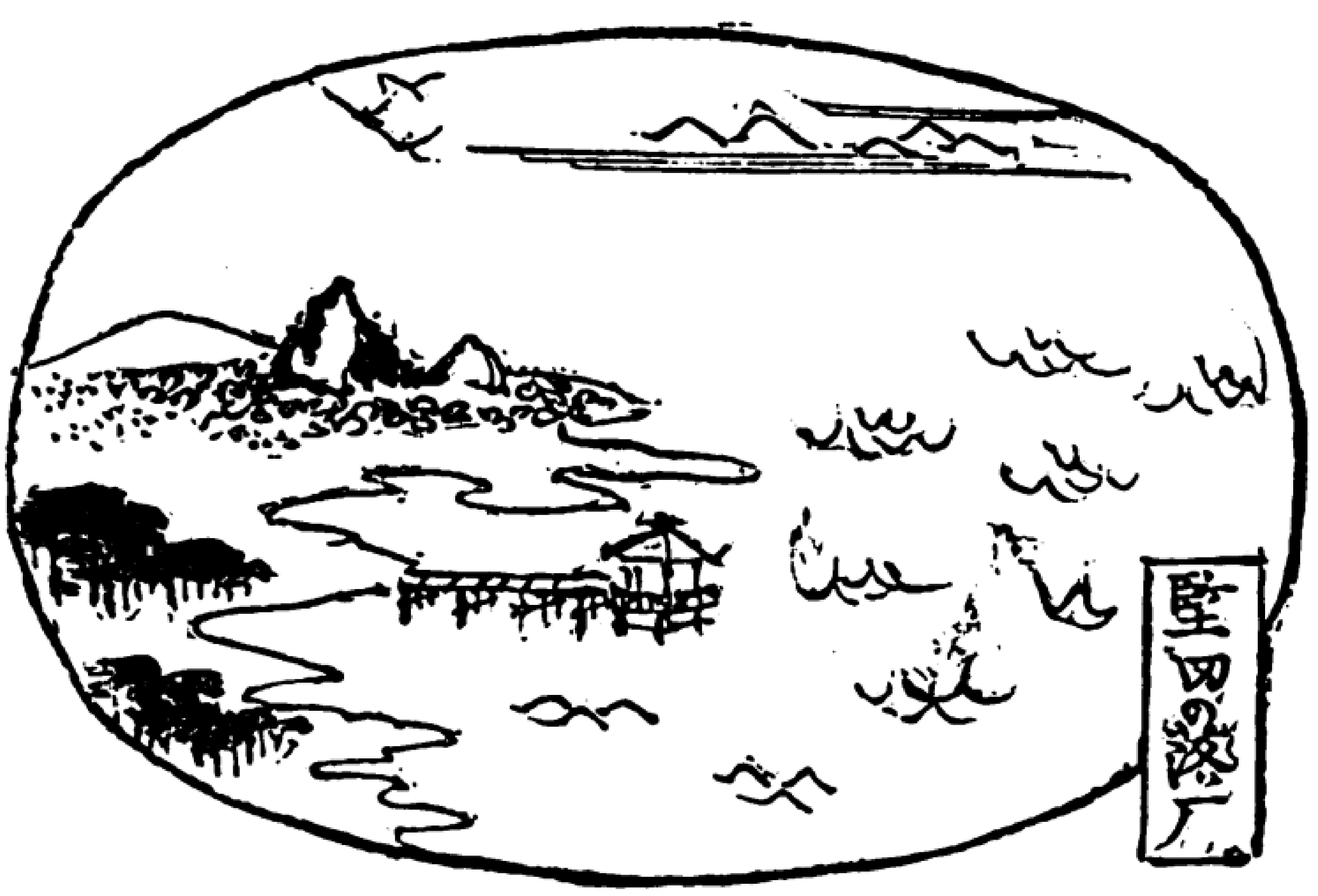
抑も盆鉢の始めは足利義政公此道に執心ありて種々に好みを造らせ、庭園の景色を御覽じて是を盆に移させ玉ひし始まり、此時既に盆鉢の規矩定まりしといふ。但し當時呂律石は庭の飛石と心得、七段ともに追ひ、主石は峰二つあるを吉とせり

●盆山の由來

次に盆山の始は人皇四十一代天武天皇未だ天智帝の皇

弟にてあらせ給ひし頃吉野の山奥に隠れ居たまひける頃、御づれ〳〵に鬘盆に砂を集め山となし、御手に持たせ給ふ笏にて砂を打たれ矢羽根もて浪の形を畫きて所〳〵の景色を形象て御慰みとなし玉ひけるが是れ即ち盆山盆石の始めなりと。天武帝は一に淸見原の帝と申し奉る是によりて盆石の一派に淸見原御流義といふあり。

註、鬘盆といふは官女の臥寢する時その下髮を載せる盆の事にして當時用ゐし盆は蔓を縁に入れて塗りし、故一に又蔓盆ともいふなり、又笏もて、沙を打たせ給ひしかば今用ゐる砂板は御笏の形なり、これを霞板ともいふ、是を作るには信州位山より出づる櫟の木をもてす、次に矢羽根を以て浪を繪かき玉ひしが故今も猶是を用ふるなり




盆石は天武帝に始りて其後暫く中絶せしが、東山殿義政公萬藝に通じ中にも茶の湯挿花、沫香を好まれ、尋て盆景にも其の嗜好をひろめられ蔓盆へ諸々の景色を繪かせ、坐石に在りし茶の灰を砂に利用して、景を打たれぬ、我が師飯野宗匠は元田安家に仕へ將軍家よりその傳來を得たり、當時將軍家の御詠歌にも

盆石は前に二つの濱びさし
後にとふき海は得ならん

とありたり

●盆山見樣の作法

盆山の飾りてあるを見る作法はまづ坐舗へ入り床書院にても盆に石飾り、掛物ある時は床前二尺ほど隔りて、まづ懸物を見、次に盆の主石を下より上へ見上げ、石の左右、砂の樣子並に會釋石に心をつけて見るなり、又後ろの會釋石をも一覽せんと欲せばそのよし亭主へことはり、挨拶の上一覽するが

法なり、猥りに山を打越して見るべからず、石と懸物は其の銘、落款等について尋ね問ふべし

石砂ともに名目のある事

主石を盆に置たるを立つといふ、砂を蒔くを打つといふ、いづれも盆山の専用語なりと知るべし此の外種々の口傳秘訣等あれども、そは實地につきて學ぶべし、右は只その大意のみ。

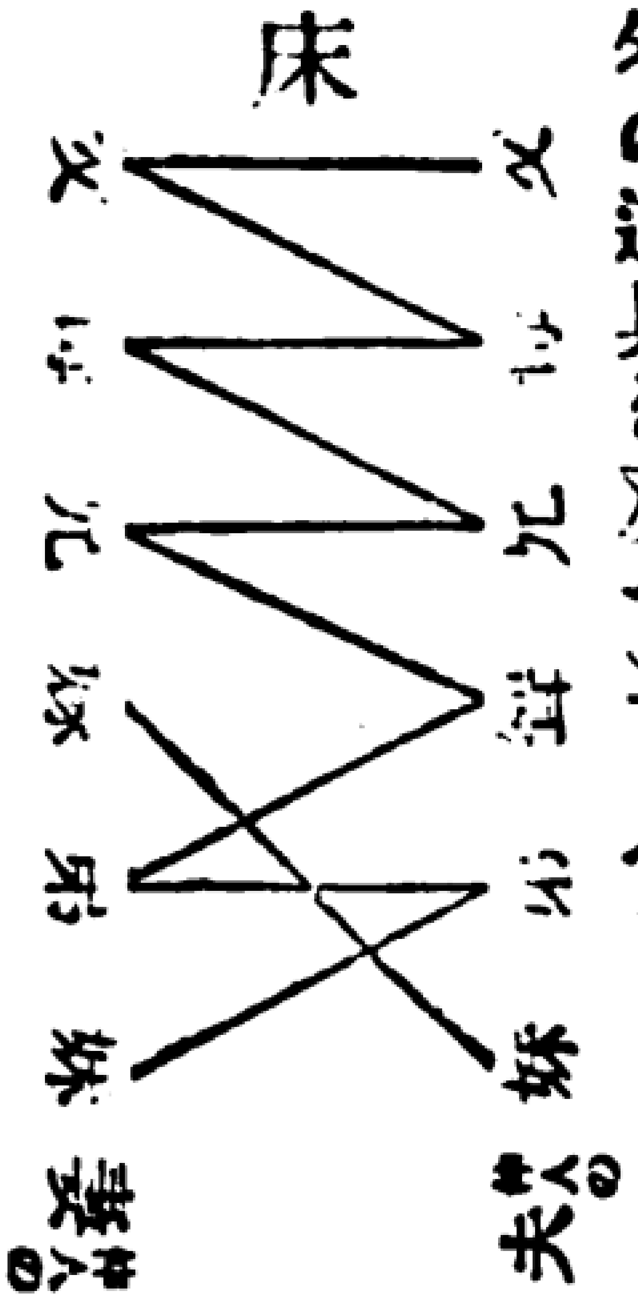
無垢の精神は最も貴重なる財産なり　羅馬古諺

# 婚禮の盃

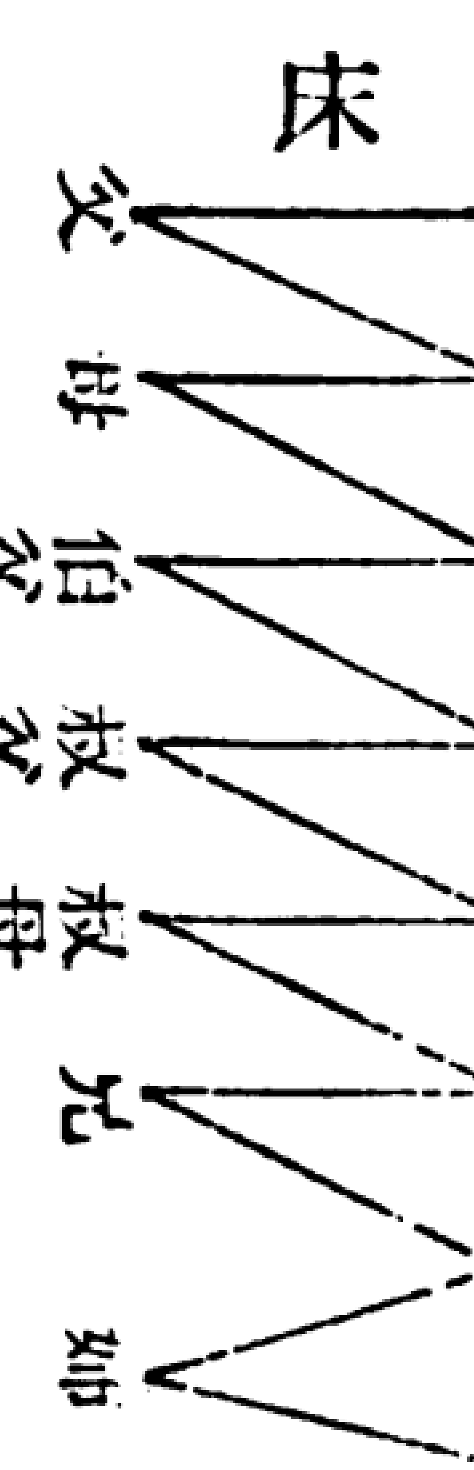
實踐女學校講師　田島秀子

親類の盃事を御話致す様前回に申せしが、先づ順序として兄弟の盃より御話致さう、之れは前の夫婦の盃をした座敷でよろし、その席順は左の圖の如く、床に向ひて右を上座とす、叮嚀にする時は、兄弟盃の前に舅姑の盃を致すのであるが、大抵は兄弟の時一所にすますがおほし、さうして右に聟の父左に嫁の父、若し嫁の方或は聟の方にても片親なる時は聟の父に向ひて、嫁の母又は聟の方母親のみなれば嫁の父と向ひて座し、次に右に聟の兄夫婦又は姉夫婦、左に同じく嫁の兄又は姉、その次右に聟左に嫁次聟の弟妹左に嫁の弟妹と座し、一同床に向ひて一禮して向き合ふ時、本酌の人のみ出てゝ、始めの如く一禮して立ち、静かに床の前に進み、長熨斗の三方を例の如く持ち上座にまはり、先づ聟の父に進めて一禮す、此時聟の父も同じく一禮す、又本酌人三方を持ち、嫁の父次に聟の母次に嫁の母と順に進めて聟に至り、嫁の弟妹聟の弟妹と進めて、終に嫁に進めて三方を元の床上におく、それより酌人一度次に下り、又加へて共に出てゝ床に向ひ一禮し、二人二列にて床前に進み、前の如くして加へ控へ、本酌土器の三方を聟の父に進め、盃を取り上し時酌人酒を注ぐ、又たつぐ、又注ぐ、皆前の如し、次に嫁の父に同じくし、聟の母に進め、嫁の母に進め、聟の兄或は姉に、次に嫁の兄又は姉に進めて聟に至り、嫁を除きて嫁の弟に至り、聟の弟に嫁の妹に聟の妹と進めて、嫁に進めそれにて式終る、此時媒人夫婦床に向ひ、一禮し式終りしを告ぐ、

さうして此席にては仲人夫婦末席に扣ゆるも盃を進むる事なし、一同互に挨拶ありて休息の間に行く、嫁のみは一人別の間に入りて化粧をなす、最も附添の女中若しくは仲人の妻共に仕度を手傳ふ、嫁の休息の間には始めより着坐すべき、後の方へ二枚折の屏風又六枚のにてもたつるがよし、鏡臺櫛臺其の外化粧に關する道具を位置よく錺り、冬なれば手あぶり火鉢の用意は勿論、衣桁なども用意し、又納戸は押入れをあけ戸を外し新薦をしき、その上へ緣女の持參したる簞笥長持その外の道具を双べおくべし



化粧すみなば同しく仲人の妻又は嫁の女中その由を聟方に告ぐ、此時嫁衣服を大抵は直して親類の盃の席につけとも、正しくは未だ夫婦の盃の式服のまゝつくのがよろし、之れより親類の盃此の席順に左の圖の如し、同じく本酌のみ出て、前の如く床前に至りて長熨斗の三方を持ち、極の末席迄



下り床に向ひて坐し、三方を前に置き一寸左右を見て一禮する時一同も一禮す、酌人又三方を取り上げ床前に進みて元の所におく、次に前と同じくして聟の父より始めて嫁に終る、仲人若し親類なる時はつくべき席につけて盃を進むるなり、又多勢の親類なれは大抵三分の一の人數をすませたる時、本酌次の間に扣ゆる加へて右に坐して加へさせて立ち上り又次の人より順ゝに進め、若し下の土器に酒充たば前の如く下り來りて坐す、加への者すぐ立ちて下の土器を両手に持ちて立ち、裨の蔭にて酒を捨てゝ元の如く、三方の上におきて元の坐につく、本酌は順ゝに又酒を進めて終に加への右迄下り、兩人共に立ち上り、床前に至り始めの如く長柄加への提を錺りて、次に行く本酌のみ聟より嫁

へのしん物を臺にのせ、兩手に持ちて仲人の前に置きて下り扣へ居る、此時仲人の夫妻を嫁の前に置き、一寸左右に一禮して披露する時、嫁方の人に嫁と共に一禮す、次に本酌人出てゝ、臺を前の如く持ちて下り、次の間へ行き、嫁の化粧の間に置かせすぐに嫁より聟への土産物を加への人と共に選びて聟方の人ゝの前へ双べおく、此時仲人の夫妻出てゝ披露する時、聟方の人ゝ一禮す、又前の如く兩人出でゝ土産物を次にさげ、聟の部屋に皆双べおく、之れ等の事すめば互に一禮し、いろ〳〵挨拶ありて休息の間に立つ、嫁又化粧室に入り、聟より貰ひたる衣服になほし休息す、次は一同打より普通の酒宴となる、緣女より當日土産物にそふる目錄は左の如くかき、何れも上包を用ふるをよしとす、又品物の上包に各〻の名をかき、叮嚀になせば一つ〳〵台にのせ、其上に長熨斗包をおく、畧なる時は一つの廣ぶたの上に皆双べて大なる長熨斗一つを添ふるもよろし、聟より嫁へのしん物は、大抵衣服及び帶とす、さうして嫁よりの如く、各〻へは進めず、嫁のみの事式及び酒宴もすみなば仲人はすぐ、家に行く、此時聟方の人ゝ又嫁方の人ゝも共に坐敷より先きには送らぬ物なり、仲人夫婦もよく心得直き、若し送らんとなす時は、仲人より當夜の事故御控へ下されと云ひて玄關に出づべし、下男下女は此限ならず、結婚後三日となれば兩家とも祝ひのしるしとして、紅白の鳥の子餅を親類朋友に送るが例なり、又七日目には嫁の實家へ新夫婦を招く、此の日は夫婦とも禮服をつけ、嫁の兩親及び兄弟姉妹その他下男下女などへも、相當の土産物を持參すべし、又里方

### 緣女よりの土産物につく目錄

志上ん

| | |
|---|---|
| 御ふくち | 一まき |
| 御下着 | 二枚 |
| 御あふき | 一箱 |
| 御さかな | 一折 |
| 御たる | 一荷 |

以上

志ん上

| | |
|---|---|
| 御袴地 | 一反 |
| 鹽たひ | 一折 |
| 御さけ | 二たる |

以上

志ん上

| | |
|---|---|
| 御わた | 十把 |
| するめ | 一をり |
| 御さけ | 二たる |

以上

にては室内の飾は勿論、門の内外その他を能く清潔にし、家内の人〻皆禮服をつけ、饗應の手續きに注意し、身分に應じ、何汁何菜の料理に心を用ふべし、新夫婦入り來らば、これを客室に導き休息の上舅姑出て〻對面す、此時一寸盃事あり、然し之れは場合に從ふべし、次に新夫婦よりの土産物を披露す、それより一同休息の間に行き、しばらくして酒宴の席につく、又新夫婦歸時は里方より相當の土産物をつかはすが、例にはあれどそれも時と場合によりてなすべし、次は出産の事、之れは皆身分に應じていろ〳〵のたがひあり、爰には普通の所を御話致しませう、婦人姙娠して五ケ月を經なば帶の祝ひをなす、その日里方の父母は勿論近き親類を招き、身分相應に饗をまうけてよし、里方の父母よりは、紅白の絹八尺づ〻を相當の紙に包み水引をかけ樽肴をそへておくるなり、此日は産婆を招き、嫁の腹に前の紅白の絹を卷きて帶とするが作法なり、さて此の絹は小兒生る〻前に、小紋に染め、祇園守りの紋をつけて紅絹をうらとし、衣服を造る習はしなりと云へども、

之れも場合によりては除きてよろし、此日産婆には祝義として金子を與ふべし、次は分娩の事分娩の催しあらば直に寢具を用意し、白の上しきを敷き屛風の二枚なるをたて湯をわかすべし、その他の事は爰に省きつ、出産後三日目は、産婆來りて小兒及び産婦の身のまはりを清潔にす、又前の如く産婆には心づけあるべし、後七日目を七夜といふ、此日は小供の名披露の祝ひなり、小供の名は大凡祖父伯父叔父の内年長にして幸ひある人より送るべし、その認め方は奉書、杉原、何れにても二枚重ねて折紙とし、その中央に名をかき、三つに折りて上包をなし、白木の台にのせ、樽肴をそへて送るべし、又産婦へは夫より時服一重ねをつかはす、里方の父母よりは小供の初着を贈るを法とす、さてその日は里方の父母を始め、親類を招き饗をなし、産婆へは前の如くに、昔は初着に男なれば、短刀女なれば守り刀を添へたるものとぞ、當時は隨意に計らふべし、但し初着には紋の染模樣に白小袖を重ぬるが正式なり、出産後百廿日目には、小兒の膳椀を新たに造り始めて食事を進む、

これを食ひ初めと云ふ、これも身分により相應になすべし、此日は前の如く、親類一同打よりて祝ひ、只小兒の膳はその母箸をとり小兒へすゝむるまねをなし、盃を取りて祝ふ容をする迄なり、百廿日を過ぐれば吉日をえらみ、小供氏神へ始めて參詣す、これを宮參りと云ふ、

葡萄を採るには地を撰び妻を娶るには母を擇べ

## 室内山水 避暑のしをり

千山萬水樓

### ▲輕井澤（信濃）

輕井澤は碓氷峠の西、高原の内にありて、海面を抜く事四千尺、後は白煙萬丈の淺間山を負ひ、前は渺茫たる原野を控へて遙かに茂來、飯盛の諸山に對し、東は蜿蜒たる碓氷嶺を仰ぎ、西は嵬峨たる離山を望み、綠樹森々、芳草連綿、空氣は新鮮なり、水質は淸澄なり盛夏と雖も八十度に昇らず、綠葉の蔭涼風を呼び淸流の濱玲瓏たる響聲を聞くの妙趣亦いふべからず、この地東京を距る三十七里、汽車賃一圓餘を投ぜば五時間にして達するを得べし

輕井澤の避暑の良地たる事世に知られたるは明治十八年、佐藤萬平なる人ありて一外人を伴ひ來りたるに創始す、爾後外人の來り遊ぶもの年々數百人に下らず、家屋の新築せられたるもの已に五十餘棟に上れり、驛中外人を宿泊せしむるもの萬平ホテル、通常の旅舍に萬松軒あり、何れも屋宇淸潔なり。

當驛を去る三里西北に向つて登らば以て淺間の山頂に達し深さ數千仭の大噴火口を辿りて一大奇勝を探ぐるを得べく更に鐵路に依つて西南に向ひ馳する事五里にして布引山の名勝に達す、閑雅にして怪奇山勢實に一賞三歎の價値あり

### ▲岐蘇の山峽

岐蘇は元來、山の幽峻と水の淸澄とを以て勝る處御嶽の高峻の幾多勝景の探るべきあり、岐蘇川の淸列亦多く人寰の外に出ず、而して千溪萬壑の間飛瀑あり、急湍あり、怪樹あり、奇石あり、人家は崖に臨み、棧道は山を

鑿し、嵐氣蕭颯清爽の氣人を襲ふ、今其景勝の探ぐるに足るものを擧ぐれば、曰く御嶽山、曰く橋戸、曰く寝覺の床、曰く棧道、曰く小野の瀑 曰く駒ヶ岳の登臨、等とす王瀧は王瀧村より瀧越に至る山道の溪湍にして、雨崖に奇岩怪石の峙立す、其高さ數十尺、溪水其下を流れ岩に激して瀬最も急なり、即ち王瀧より川に沿ふて溯る三里風景の絶勝、蘇峡第一と勝す、然れども地遠く、境僻なるを以て人の訪ふもの稀なり、

## ▲米子の瀑布（信濃）

信州の地、四圍皆山、是を以て溪流の間に發するもの概ね奔流激湍ならざるはなし而して激湍の飛瀑となり奔流の深淵となるもの亦枚擧に遑あらず、今其顯著なるものを擧ぐれば米子の瀑布を以て最も壯觀となす、米子は上高井仁禮の山中にあり、幽谷深溪總稱して瀧の澤と云ふ、溪の北崖は危岩削立して斷岸絶壁をなし、仰て壁上を眺むれば稚松岩際に生じ老樹其跡に茂り、幽奥實に別乾坤をなす所、二條の大瀑此の間に懸れり、一を權現瀧と云ひ、東にあり一を不動瀧といふ西にあり、不動瀧は其高さ九十丈、岩壁崔嵬の所に懸りて淙々たる大響轟々として溪に滿つ、權現瀧は其高さ六十五丈、溪風の吹く處ろ飛沫此に應じて奇狀を呈す、溪間に岩燕多く岩際を飛翔する樣一段の風趣あり、瀑下に不動尊の小祠あり、夏期遠近より參拜するもの多きを以て山中に堂坊宿舍ありて以て旅客の便を圖る、清遊閑適眞に銷夏の好境なり

## ▲湯田中の溫泉（信濃）

地は信州高井郡にあり、上州前橋に達する縣道に沿ふて一ヶの浴場を爲し、笠岳横手の諸山其の東南に峙立し、妙高の山脈蜿蜒として北方を擁し、西方稍開濶なる處遠く濃飛の高山を望み得べし湯平の小岳は此邑を抱き、星川の急湍脚下を過ぎ土地至つて高燥なり。此地海面を拔く事二千尺、東北に山を負ひ南西廣濶なるを以て、極暑と雖も、寒暖計概ね八十度前後、朝夕は七十度以內にあり、特に山中の通患たる空氣の濕潤氣候激變の憂ひなく一般浴客の攝生を保持するに適せり。泉質は硫黄、鹽類の二種あり、醫治効用は僂麻質斯、慢性

痛風、神經機能の亢盛及び貧血諸病によし。

道路は縣道にして豊野停車場を距る三里半、人力馬車の往復極めて自在なり、東京よりするの浴客は上野一番列車に乘ずれば、夕陽未だ西山に沒せざる間に達するを得べく、越後、直江津地方よりの來客も又信越鐵道の便を假りて、五時間有餘にして達すべし。

温泉の外近郊勝地の梗概を擧ぐれば、湯平山の春光、地獄谷噴泉の奇觀、閼滿瀑布の秋色、二僧塚の蒼古、其他勝景附近に多し。

### ▲淺間温泉(同上)

信州の地四圍皆峨々たる峻嶺、是を以て奇勝、淸凉の地に乏しからず、淺間温泉の如き其一なり、松本を距る約一里、道路平坦山國に稀なり、人車を驅れば半辰にして達すべし湯壺凡そ八十、温泉滑かにして能く塵垢を洗ふ、爽快比なし、浴後欄に凭つて眺むれば、淺間の大嶽眉端に聳へて女鳥羽の河流溶々として脚下に流る、更に眼を放てば遠く乘鞍、御嶽、鎗ヶ岳等の高山白雪皚々として雲表に聳立するを望む。

### ▲寺泊の海水浴(越後)

朔風肌を劈き怒濤天を捲ひて皚々たる銀界に襲ひ來るもの之を北越地方玄冬の光景なりとす、而して夏日蒼海漫々波靜かに風淸く沿岸は平丘軟砂相交りて海濱の眺望いふべからず寺泊の崎の如き蓋し其勝地の一なり、近來海水浴の効を知りてより此地に遊ぶもの多く此所は佐渡の島へ渡る要港にして啻に眺望の絕佳なるのみならず日蓮、親鸞等宗界聖人の事蹟多く片石寸土も亦歷史を語るの材料たるもの多し、而して此地夏季海漁多く鮮鱗の風味は越路第一等と稱す價の廉なる亦驚くに堪たり若し夫れ終日の散策に信濃川を上下して長岡、新潟の勝地を訪へは兩岸の風景に畫も亦及ばざる處あり、附近の壯遊を欲せば彌彥山に登るへし距里僅かに三里、山頂に一の宮あり、海拔二千一百尺東南は蒲原郡一帶の靑田渺望として萬頃に亘り北は漫々たる蒼海を隔てゝ遙かに佐渡が島を望む、

彌彥山は山脈長く蜿蜒として海中へ斗出し巖角獅子鼻の如き、火山岩の日本海の激潮に洗はれて奇狀百出し、

瘠松其上に生ひ細流其間に迸しる岩角に踞して釣を垂るの風流あり朝夕の景色は朝ぼらけの白帆、佐渡ヶ島晩景の遠望誠に得難き勝地と云ふべし東京よりする客は上野一番列車にて發し午後七時直江津に着し夕食後て一泊し翌日正午に着す

## 伊豆山溫泉（伊豆）

豆相の地元來山水に秀麗あり、夏は避暑に、冬は避寒に、四季共に筇を曳くもの多くして熱海、修善寺等其尤なるものとす、然れども近來名勝の地多く俗氣に襲はれて林々厭ふべきものあり、伊豆山は北田方郡あつて熱海を距る十八丁未だ塵垢に染まさるの仙境なり、南は太平洋に面して雲煙漂渺の間遙かに大島の山突を見、東西北の三面山を負ひ、百四十戸の人家層々斷崖に軒を並べ東方遙かに房總の山に對す

逢初川の清流は村の右を流れて俗襟を洗ふべし甘緣園子戀の森の幽境其の背後に接して徐ろに詩興を催さしむ彼の鎌倉右大臣の

　伊豆の國山の南に出る湯の

　　はやきは神のしるしなりけり

と詠ぜし走り湯は巖穴の間より湧出し戸々の客舍は筧を以て其湯を導き瀧の湯を設けて旅客に供す而して海水浴の如き亦百年の壽を延すべし

## ▲伊豆の御濱

沼津の停車上より海上三里、南方にあたつて好漁地あり、御濱と云ふ。岬端の三角長く海中に突出して自から一區域を爲す、老松岸邊に生じ、岩角海波に洗はる。灣內水淸くして、夏時魚族の遊泳するもの歷々數ふべく、其の多き時は浴客手に任せて摑むを得べし、通路は沼津より毎日二回の汽船便あり、旅亭に松城館あり、天明の昔、露國軍艦の沈沒せし時、人命を救助せし由緒ある家なり。

## ▲修善寺（伊豆）

修善寺は豆州君澤郡にあり。東海道沼津を距る事六里、馬車の來往頗ぶる便なり此地蒲冠者範頼、鎌倉二世將軍賴家、幽死の地として其名高し。溪流邐迤として欄下を流れ、丘陵起伏して楣端を壓す、湯泉あり、柱の

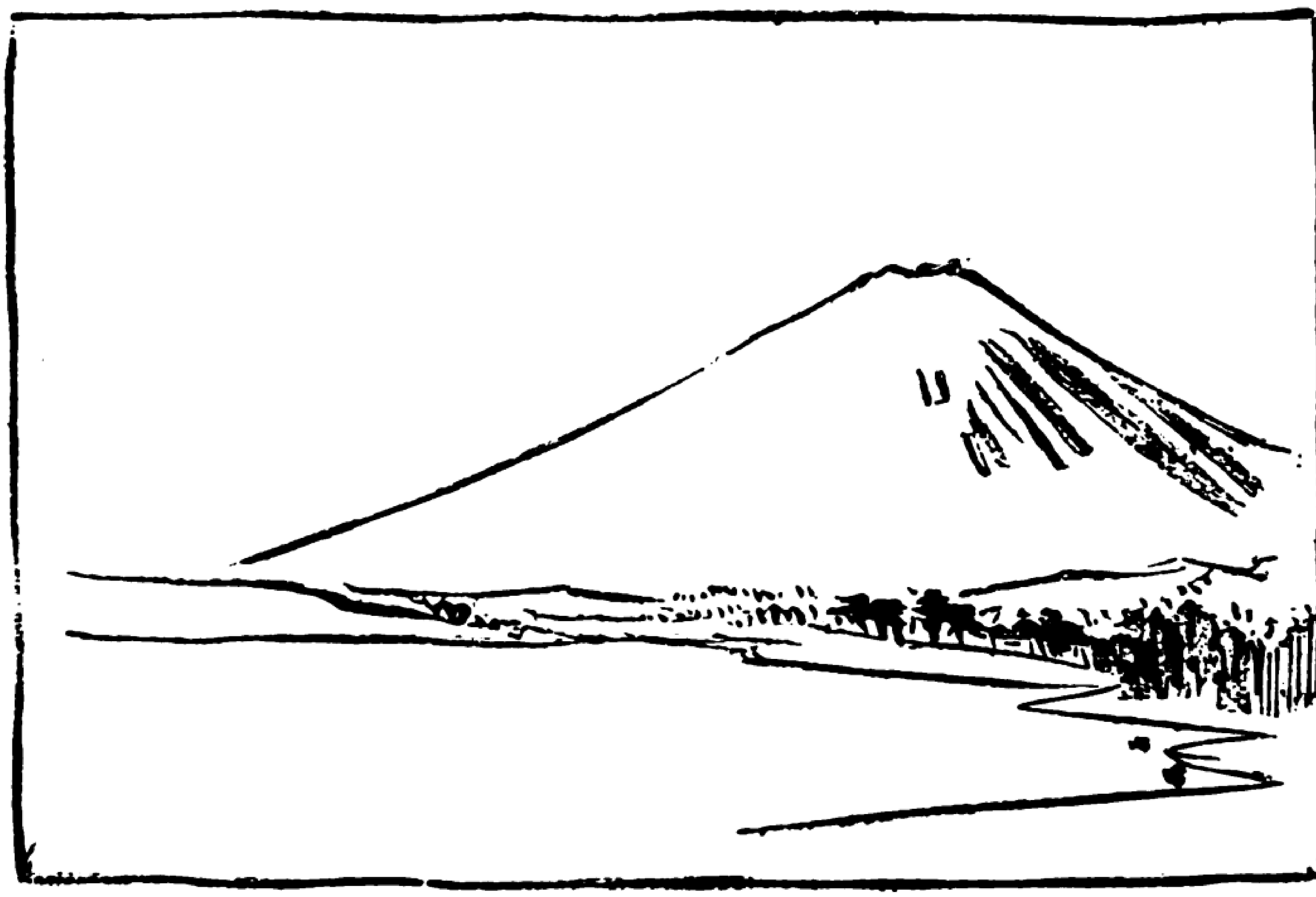
川の中心より湧出す銅鈷の泉と云ふ。渡月橋、虎溪橋、あり、稚兒の瀑、白糸の瀑、あり此邊暑を避くるに適す。範頼の墓は小山の林中にあり、賴家埋骨の地は一切經堂の傍にありて、古蹟亦少からず、風俗敦厚物價低廉。

▲箱根蘆の湖

函山の勝景は湖邊の遠眺に於て一段眼界の豁然たるを認む、土生屋の沿岸より舸を浮べて湖心の勝景を捜れば雲煙の間に峯頭を隱見する駒ヶ嶽の淸容を見る、湖邊の峯頂悉く影を倒にする處前に離の宮白壁を望み老杉岸を擁し巉岩水に涵す

▲同木賀

函關の一區由來都人が避暑納涼



の地たり、凉を納るゝと共に亦景を賞し、景を賞すると共に亦優遊して翠滴瀝り墜つるの仙境を辿る尤も妙、木賀の如き、亦函嶺勝地の一なり、湯本より一里廿三丁、早川の激流は怪樹鬱林の間を縫ふて兩岸の茅屋四面の峰巒に圍遶せらる、見晴しの臺より是を望めば木賀の温泉眼下にあり其幽邃函嶺中の第一とす

▲同玉垂の瀧

是亦函根山勝景の一なり、湯本へ行く人は一見すべし箱根山麓湯阪山の下にあり。瀧は幾多の線狀となりて岸角に激し、屈折幾段をなして落つる樣頗ぶる奇なり、綠陰日光を蔽遮して爽凉謂はん方なし瀧の前に小亭あ

り。客の休憩に供ふ。息ふて涼を納るゝによろし。

### ▲眞壁の鑛泉（常陸）

地は常州加波山の麓にあり、右に葦穗左りに加波、常陸の三山を後に控へて西北に結城下館の平野を見渡す、一望開闊の處、遙かに日光淺間の諸峯を看る、眼界闊大にして景象自から雄偉なり。鑛泉の坌湧する處は眞壁町より十二町櫻井天目山の半腹高燥の地に在り、文永年間眞壁氏爰に居る、梵刹あり、傳正寺と云ふ法身國師の開基なり境內、山に沿ふて綠陰深く眼下の眺望頗ぶる佳、末寺十二ヶ坊あり、境內擧つて、二十町餘總稱して天目山と云ふ、山內に十五の勝景あり、第一を不動の水といふ、巖角に激しく飛沫珠を綴るの處、第二を龍頭松と云ふ、自から蒼龍の蟠踞するに似たり、第三を緬湊松といふ、其形ち佛弟子の結跏に肖たり、第四を觀水石と云ふ盤石に座して水流を觀る一種の趣あり、第五を弘法大師の護摩壇石と云ふ由來のものなり、其他飛來峯あり虛空藏の岩窟あり、玲瓏石あり相生松あり、仙遊石あり、共に盤桓徘徊するに足るべし、鑛泉は黃濁色にして鐵氣を含むこと多量無味無臭にして反應性の夜なり明治廿四年始めて浴室を置く當地浴場四五棟、貧血性に尤も効驗あり、京客多く來らず、宿泊極めて廉、地は未だ俗了されず、高燥にして山淸く水澄めり、閑雅幽邃の境來つて塵襟を洗ふべし位置は水戶より十里、鐵道線路に沿ふて加波山麓の岩瀨に下る、東京よりするは、小山より水戶線へ乘り替へて、下舘より下る其所より各三里人力車を僦ふて眞壁の町へ到る

### ▲懷古園（信州）

仰げば淺間山高く其東北に峙ち俯しては千曲の水崖下を流れて潺々磐あり舊城墟の今開かれて公園となり古木老勁松檜森々たるもの小諸の懷古園とす、左は深溪にして林樹蓊蔚し、右は石垣高く築きて塢徑蜿々し以て園に達す、園の正面に懷古神社あり、碑を植て園の由來を勒す、池塘、水冷かにして潺湲たり、綠樹蓊鬱として翠滴たらんとす、此間茶亭あり淸遊して以て酷暑を銷するに便す。

## 史傳

# ラッセル夫人

文學士　中山蝶二

高木は風の爲に仇せられ、秀才は他のために嫉まるゝならひ、哀しむべきは浮世なるかな。紀元千六百年代の半頃、英吉利の國王チャールス二世の朝に仕へしラッセル卿といふは、誠忠硬直を以て世に聞こえ、英國自由黨の鼻祖、民黨の救ひの主と仰ぎ尊ばるゝほどの名士なりしも、壓制なる時の政府の爲めに惡まれて、つゆ犯せる罪もなき身の、墓なく斷頭場の露と消え失せぬるこそ無慘なれ。

そもやチャールス二世と云は、昏愚頑冥の君にして、天下を御すべき道を知らず、重き税を下に課しては、萬民を塗炭に苦しめ、ひたすら酒色をあさりては、宴樂を恣まゝにし、淫風盛に吹きすさみて、宮廷の裡、さながら娼家に異ならず、奸臣この機に乘じて、巧言を弄して上の意を迎へ、良臣を斥けて君の寵を專らにし、帝室の二字を笠に着て、不辜の良民を蔑げしかば、天下の怨みは上に集り、慷慨の士、かたみに黨を結びて、有司の專橫に抗し、同胞の疾苦を救はむとぞはかりける。

英國自由黨の生れしは、げにこの時を以て初めとすべく、かねて天下の望みを負ふたるラッセル卿は、推されて民黨の首領となりぬ。かくと見たる內廷の奸臣ども、打ち棄てがたしと額をあつめて隱謀をめぐらし、無智の賤民と、頑迷なる保守主義の輩を煽動して、こゝに保守黨の濫觴ともいふべき政府黨を組織し、あらゆる惡策を施して民黨に反對する傍、何とかして、この人望あるラッセル卿を亡きものにせばやと、ひそかに其機を待ちつゝあるぞ危うき。

卿は疾くより反對黨の陰謀を知れるものから、國家の大事を前にひかては、もとより其身の危難をかへり見

るべき遑もあらねば、直言敢へて憚る所もなく、満腔の熱誠をさゝげて、盛に同胞のために力をつくしてけり。時にチャールス王の庶子に、モンマス公といへる人ありき。かねてより、父の王位を継がむことをのぞみけれども王にはヨーク公とて正統の太子あれば、とても其大望を全うすべくもあらず、疾くにも心にあきらめべきを、元來性質よからぬ人なりしかば、なほ其希望を達すべき悪策をのみ企みける折柄、偶まチャールス王は病ひに打ち臥して、危篤の様子に見えしかば、時こそ來れと打ち喜び、萬一崩御のこともあらば、太子を亡きものにして、自から王位にのぼらむと、ひそかに同士をかたらひて、今日か明日かと待ちけるほどに、思ひきや、危篤に見えし王の病氣は、日まし快き方に向ひて、にはや全快の日も近づかむとはモンマス公を始めとして、悪人ばらが失望はいふばかりなく、この上は破れかぶれ、最後の策を取るより外なしと、大膽にも弑逆の謀をめぐらしけるうち、この事いつしか外に洩れしかば、事ならずして、徒黨の人數悉く誅せられぬ。

日頃ラッセル卿を忌み嫌へる反對黨の人々は、卿を陷すこの時に在りと、しめし合はせてあらぬ噂を立て、ラッセル卿こそは、かねて民黨の首領として、政府を覆へさむとはかれる人なれば、必定彼の陰謀黨の同類ならめと、事實を調ぶる遑もなく、捕へて牢獄の裡にぞ押し籠めてける。

この大難の際に於ける卿が夫人の擧動は如何に、これやがて我が讀者に語らむと欲する所なり。

ラッセル夫人は、かねて良人が民黨の首領と仰がれし時より、願はくは、我が愛する良人の身に、變りし事なかれかしと、たゞ其事をのみ神に祈り、心に念じてありしを、今この難儀に遭ひぬる驚きはいかばかり、あまりの悲しさに、暫しは茫然として爲すべき事をも知らざりしが、やうやう心を取り直し、かりにも政治家の妻ともいはるゝものゝ、かく心弱く涙にくれてのみありては、世の人の思ふ所もいと耻かし、たゞ政府の暴虐と有司の無情とにまかして打ち棄て置く時は、良人の安危も心もとなきに、この上は、その筋に願ひ出てゝ、飽ま

ても寃を辨じ、良人の災害を救ひまゐらさてはあるべからずと、愈よ良人の裁判の開かるゝに及び、自から進むで辯護の勞を執り、良人の傍に座を占めて、熱き涙と共に其寃を訴へけれども、政府は事實の有無に拘はらず、ラッセル卿を除かむとの決心なれば、無情にも死刑の宣告をぞ下しける。

卿は固より覺悟の前なれば、敢て驚く色はなかりけれど、百年の苦樂を共にせむと誓ひし我良人の、罪なき罪に陷されて、怨みを呑むで此世を辭せむとするを見る、夫人が嘆きは如何ばかり、天を怨み地を怨み、腸を斷つ思ひながら、若しわが悲嘆きのために、良人に卑怯れたる振舞をさせては、死後に醜名を殘しやせむと、涙を呑みて其場を去りし、其心根ぞいぢらしき。




夫人は此期に及びても、なほ有らむ限りの力を盡して、良人の助命をはからむものと、或は國王にまみえて哀を訴へ、あるは有司に就いて懇請しけれども、遂に用ひられざりしかば、今ははや詮方なしと思ひあきらめ、この上は、良人と共に最後の暇乞をせばやと三人の兒女を伴ひて、再び獄の裏に到りぬ。

夫人は、さま〴〵に言葉をつくして良人を慰め、いつまでも側離れじと思ふものから、獄則嚴しくして長く留まるによしなく、夜半近くなりて、泣く〳〵別れて家に就きぬ。

かくて、ラッセル卿は、夫人が心づくしもあだとなりて、遂に斷頭場の草葉の露と消えぬ。夫人が嘆きは筆にも言葉にもつくしがたきほどなりしが、もとより人並すぐれ雄々しき心の、はやくも思ひかへして、よし無き嘆きに日を暮らさむよりは、つとめて良人の遺孤を發育だて、家の譽を揚ぐるには如

かずと、心を教育の道に寄せて、兒女の成育に餘念なかりしほどに、三人とも長じて名ある紳士、貴婦人となりたりとかや。

夫人は卿に別れてより四十年の其間、松の操の緑の色深く、列女の鑑と世にたゝへられて、家は常盤にさかえしが、八十六歳を一期として良人の跡をぞ追ひゆきける。

（をはり）

良操は不貲の財寶にして譬へ萬乘の位に在る皇后と雖も是を得んと欲せば市人の妻と競爭せざるべからざるなり　シルレル

# 傾國の三婦人

鈴木げん子

人はいふ婦人は禍亂者なりと、婦人夫れ眞に禍亂を胎生する歟、抑も禍亂なるもの果して何なる歟。

請ふ見よ、建國三千年時に變遷あり世に治亂ありと雖ども、よく變に應じ亂に處し、凝ては即ち百錬の鐵となり、發しては即ち萬朶の櫻となり、千狀萬態其形狀を異にすと雖ども、要は邦家安危のかゝる毎に淸麿となり、正成と現し、以て衰退せる大勢を皷吹し、地に委せる道義を發展して一世を救濟し、皇家萬歲の計をなし奉る、神州の精氣に正反して、恰も影の形にそふが如く終始一貫其裏面に存じ、人類の間に乘じ隙を倖し苟も事物の成功を破壞し苟くも亂離苟くも紛擾苟くも不平和たらしめんとして巧みに變幻出沒し極力撃拗を事として最後の目的成れりとする無形の靈氣及び時に志を果さず世に意を得ず空して恨を飮み憤りを含んで地下に入る、佛者の稱して浮ばぬ魂といふなる、必竟不得處不歸着の靈氣と共に恰も狐鼠の穴を窺ふて漫散浮遊するに等し　、宙宇の間に磅礴として空處を求め、其特性を洩さんことに汲々たるものありて存す、而して人生自己の確認覺束なく、小智小才あるが爲めに妄りに事を好むと雖ども大觀逕識の明なくして動し易く疑ひ易く迷ひ易く犯され易き婦人の性格は實に此種の靈氣を寄宿せしむるに適合す、禍亂者の名を得る所以蓋し玆に因す。

思ひめぐらせば古往近來一家若くは一國の上に大小禍

亂の原動となり魂を後世に遺せるもの一にして足らずと雖ども母子三人相繼ぎ相受け天下を騷がせ一世を苦め上は皇上の大御心を煩はし奉り、下民衆を堵に安んぜしめず、幾多生靈の滅盡を行ふて身も始めて沒し思へは實に此種靈氣の好餌となり了せる織田氏お市の方の如きもの蓋しいまいはんとする處の最なるものか、

## ▲淺井長政の室

夫れ足利氏の末世天下亂れて麻の如く群雄割據して四方爭亂止む時なく劍戟血に鳴る響老幼途に叫ふの聲相應して物すさまじく、あやに尊き九重の都の内も日と共にうらさびれ行くを其他は況して屍の山紅ひの流れも新らしからす昔て太平をうたへる山松風のしらへもあとなく改りてなり行く其の末を怨むと聞は、咲出る花も憂ひ滿ちて色香淺し秋の枯野に打まねく尾花の袖葉末にすたく虫の聲々、いつれ悽愴の絶趣なからん曉の雪のしげきも不祠の靈を宿し盡さす夕暮の露のまがきはよるべなき魂を包みぬわえす百怨罹るなく衆憤凝つて散せす彼の風勢のいと高木によるを見れは、之等悉く一度群雄を叱咤して天下を其双肩



に擔ふものに向つて集中せずんは止まざらんとす嗚呼其人果して誰か。

時は永祿の初年織田信長尾張清洲に據りて起ち拔群不世出の才武を以て中洲を平定し威望東海に震ふ、朝廷熱田祠に奉幣を名とし窃に敕旨を賜ふに際し、感奮決志意氣頗る昂る、あはれ一片の感情の爲めに積年の恩を顧みず、我形骸を包み燒く烟りの中に一世を籠絡し以て天下を握らんとする明智光秀更にまたそが屍を蹈すゑて四海を併呑せんとする羽柴秀吉を神ならぬ身に無二の左右翼と信賴し一

擧まづ江北を殉へんとして驍將淺井長政の抗せず服せさるか心にくゝ如何せばやと思ひ餘り計を秀吉にとふに秀吉献言して和を講じ、更に信長の妹子お市の方を贈り嫁して他なきを示さしむ、安んぞ知らん是や我の禍亂の基ならんとは太閤もまた人なりけらし、居る事六歲にして織田氏三女を擧ぐ巳にして清洲小谷の和破れ良人は阿兄の鋒鏑にかゝりて亡ぶ織田氏之を見すてゝ三女を携へて故家に歸る、已に否なり。更に況んや節をかへて柴田勝家に嫁し、再び女等を提けて北下するをやたとへ、撥亂操縱の勢ひの上に止を得ざるに出づとはいへ婦人生れて戰國に出づ何の不平か之に如かん、空しく媾和調濟の活ける器となりて昨日は敵の前に紅顏を賣り今者臣僕に侍して媚びさるべからず娼婦と何の異る處ぞ然れども若し淺井氏の滅亡に殉して其分と明らかするありしならばよしや阿兄が大業は本能寺一夕の煙と共に消失すとも織田氏が芳名は長く後世に傳ふべかりしを寔や死すべきに死せざるの愚は遠く百魂な遺すに至る鑑むべき哉。

## ▲豐太閤の側室淀殿

爾後十年時恰も天正十一年卯月の半ば秀吉漸く志を得て柴田勝家を城北の莊に圍み城事なくして陷るや勝家回すべからざるを知りて將士八十人を堂に會し歌舞管弦興を極めて夜を徹す織田氏を伴ふて深閨に入り別れを惜んで涙ふかし織田氏共に死を誓ひ而かも三女と共に遁れて仇敵秀吉により大阪城中に養はる、始め勝家秀吉相好からざる其源は織田氏にありとしいひ、かつやすでに三女を擧たる夫の死をすらふりすてゝ遁れ來し袢の不貞の人には今更ならねと

　さらぬたに打ぬる程も夏のよの
　　わかれを誘ふほとゝきすかな

勝家と別るゝ此の歌の心豈冷かならずや、更に其長女茶々(後に淀君と稱す)の秀吉の後閨に侍して日夕其寵を失はざらんことを之れ勉む、之等抑も人として特に武門の家に生れし女子として忍のび得る限りの事か、はた如何に耻をしらず義を忘るとも人の妻として

彼に忍び母として之に忍ぶべき事か、つく〴〵思へば時已に天下は豊臣氏の双拳に歸し、旭日東天の勢ひ猛なり、嫉妬怨根の靈氣一に秀吉の身邊に集合せんとして威盛んに犯すべからず、恰も不幸慘憺生れて八方に流離寄寓し嫉妬偏執習ひ性となれる可憐なる孤女が幼齢を全犯し、近いて以て其暴戻を逞ふせんとするの端緒ならずとせんや。故ある哉太閤在世の時より淀君か淫侈放逸底止するなく、所謂母の子たるに負かず而して寵をたのんで專横、秀吉糟糠の賢室淺野氏の威嚴をも壓倒せんとするの甚しきに至れども、後宮幾多の名媛一人嗣を出すなきに際し、淀君獨り太閤と年歯太だ差あるに拘らず秀頼を擧ぐ、淀妻爲めに内外の勢望日に重く秀吉の愛顧月に加はるのみならず又秀次早く已に關白の職を襲ひ秀頼の爲め故なく動かすべからざるに憂悶措かず、即ち三成か爲めにするの奸策をとり讒間至らざるなく、いつに寃を以て之を陥れ其妻妾三十有余人殘らず命じて自刄せしめ、名つけて畜生塚といふ蓋し秀次の正室菊亭右府の女先に名門に嫁して女を生む、此時年十三秀次又容れて寵せりといふに因す。何等の慘絶ぞ蓋し淀君か方寸に出づるものなり。凡そ本性人たるもの如何んぞ他をして此暴擧に出しめ得べきや、即ち怨恨の惡靈をして一に大に豊臣氏に歸せしめ衆人を離反して以て家を亡ぼさんとする魔力の巧妙思ふべき也而して織田氏は實に其後援たりし也思ひ見よ深宮の中故淺井氏の遺臣大野父子をも引きて參謀とし、堂を建て丶眞忠の舊臣を讒間して刻々豊氏を危殆の淵に導くの狀を、而も彼等自らは其由て來る處を知らずして然り世に恐るべきはめぐる因果の理法にぞあ



る、然かも遂に凡夫は是を知らざるなり寔や三軍を叱咤する英雄の心魂も鬼神猶且震駭する豪傑の鐵腸も魅られは綿の如く泡の如し淀君已に權を內外に專らにするや言々用ゐられさるなく請願行はれさるなし爾來其三寸の舌は此何斗り秀吉か天運を殺ぎ去るに貢せしか其一顰一笑は豊氏に享け得し幾多の天秋の抹却せしや知るべからず恐るべき哉魔力の强大なるや、秀吉身賤陋より起りて位人臣を極め晩年驕慢恣强敵に肉薄親炙せられて猶且天壽を全ふしたるものは其命運實に曠古唯一といひて可ならずや、之に反して薨後の大坂城は實に洪水堤を決するの猛勢を以て至れる魔靈の府となりぬ、此場合に於ては肉體は子にして靈は子ならず、妻は妻にあらず臣僕扈從悉く皆然り淀君の淺薄三成等の奸智は相よつて先人か墳土いまだ燥かざる前に早く已に關か原の役となり豊臣氏譜代恩顧の重臣をして刄を逆まにし楯をそむけて宗家に傷けしめ六十年櫛風沐雨の辛酸に成れる先人の功蹟を捧げて美事に敵の手に奉事天下の力をきわめて萬代不易と築きこめたる稀代の名城は空しく長く敵の子孫を護するに供す淺間しさよ此の如きは獨り豊臣氏に於てのみ然らず古來絕代の偉人豪傑概ね其嗣に人なく其祠を斷つの甚しきに至るもの多き所以由來一のみ

## ▲二代將軍秀忠の室

淀君秀賴及ひお市が死は惡魔か凱旋の血祭なり即今や此等の形骸を以て逞ふするの必要を感ぜざるに至つて彼等の肉躰は先に取り去られたる靈魂に後るる幾十年にも再ひ殘酷なる毒手に陷りたるものなり已にして德川氏豊臣氏に代つて天下を一統し巧みに人心を收攬し上は勤王奉公を陽を裝ふ流石に魔の乘する餘地あるを得さるか如くして而も禍根は既に已に植られた何ぞや淺井氏の第三女にして織田氏か不貞不義なる劣養の下に人となれる淫婦茶々が妹おゑよは實に二氏將軍秀忠の配として養父秀吉の贈る處なり秀忠已に天下に臨む前將軍家康は駿河に隱して大御所と稱す、秀忠二子あり竹千代といひ國松といふ臺母ゑおよ長子竹千代の材

武を忌みむしろ女子國松の優柔にして勿論天下の器ならざるを殊愛し當時天皇の勅諚猶且脅くべし而かも大御所家康の命に至ては死も以て辭すべからずと信ぜる德川全盛の時代に於て夫秀忠に泣訴し制を矯めて國松を三代の主たらしめんとす、秀忠また頗る意動く家康死に臨んて特に之をいましむ、おゑよ猶且主張をとつてまけず、間一髮にして德川氏また大坂の二舞を演じ魔の弄ぶ處たらんとす、臣下に人あり幸に英主家光三代の軍職に就き剛邁の英資を以て着々紀綱を張り大に其家を興すを得たり。

國松出てゝ駿河を領す、大納言に任し忠長と稱す居常鬱々として樂しますす憤慨の極暴横至らさるなし、病と稱して籠居し敢て將軍に臣任せず、已にして意を決して江戸に出て父に迫りて始めの志しを得すとす、秀忠怒りて高崎に逐ふ其傳本多上野途に要して別離を悲しむ、忠長戒飭を憚り敢て一語を出さず、眼中一點の血涙滿腔の反念を傳注して余りあり、幾程もあらず、將軍日光に參廟すと聞き、上野請ふて其居城宇都宮を旅館とす、大に土木を起して新たに殿を築き、其主か暗命を全ふせんか爲め、釣天井をしつらふ、蓋し大谷吉隆か家康を失はんとして其敦賀の城内に苦心經營せるもの、而も家康の高運之れに陷らずして九死に一生を得たるものなり、家光不知して江戸を發し身を以て虎口を遁れ忠長幽所に死して事漸く平く、然れとも之を要するに古來一點の魔力臺母おゑよを徹して此家の前途を傷けんとしたるものに過ず、轍は悉く一なり、由來幾多の事故と化して其執拗を弄ふと雖とも時勢は之を容れさりき、連綿十五代二百八十年の盛榮短しといふべからす、已にして太平に倦み上驕り下高ぶり、皇室を蔑如して大權を私せり遂に神怒り人服せず、維新の瓦解は實に天の下せる鐵錐なりと雖とも、其驕らしめ高ぶらしめたる源因に至ては必づやまたよる處ありて存す。

凡そ物缺點あれは水之より入りて腐蝕し、肉躰傷所あれば病菌之より侵して疾患を釀す夫れ婦人の性格は勿論男子に比して薄弱なり萬般の魔靈よつてもつて宿る而も之をして禍亂者たり了せしむるは他の罪のみ。(完)

# 本朝名媛佳話

能田千巵

## （十四） 和泉歸佛　衛門祈神

和泉式部は越前守大江雅致の女なり、長ずるに及び、和泉守橘道貞の妻となりければ夫の官名に依りて和泉式部とは呼はれける、小式部と云へる一女を擧けゝるが、不幸にして道貞死去しければ、上東門院に仕へまつりける、抑も上東門院と申すは御名を彰子と云ひ、關白道長の御女なるが、一條天皇の寛弘五年四月に中宮に立たせ給ひぬ、御前に召使ひ給へる女官は紫式部、赤染衛門なんど孰れも歌道に名高き人々のみにして式部も之れと名を齊しうしける、式部後ち丹後守藤原保昌の妻となり、共に丹後に下りけるが、或る日保昌明日は狩せんとて武具ども取集めけるに、其夜鹿いたく鳴きければ式部之れを聞きて坐ろに惻隱の心を動かし、わはれ明日死なんとて痛く鳴くにこそと嘆息しける、保昌聞きて左ほどに思さば明日の狩はとゞめん、其代りに好き歌詠み玉へと申しければ、式部取敢へず

ことわりやいかてか鹿の鳴かざらん
　こよひばかりのいのちと思へば

と詠みければ保昌終に狩をとゞめける、式部晩年佛に歸して尼となり、誠心院と云ふに住みけるが、播摩書寫山の性空上人に贈りたる

くらきよりくらき道にぞ入りぬへき
　はるかにてらせ山のはのつき

と云ふは彼の法華經の「從ㇾ冥入ㇾ冥、永不ㇾ聞二佛名一」と云ふに基つきたるにて、誠に秀歌なりとぞ持て囃されける。

赤染衛門は大和守赤染時用の女なり、後ち大江匡衡の妻となりけるが、父の時用衛門尉たりしをもて赤染衛門と呼はれ、和歌に堪能にして紫式部、和泉式部と其名を齊しうしける、或る時夫匡衡他より歸り來りけるが、常には似ず最と當惑らしげなる面色なりしかば、衛門怪しみて御心地惱ましう候にやと問ひけるに、匡衡首を打掉りて、否とよ、中納言公任故ありて辭表を捧げま

つらんと思ひ立たれ、其草案を紀齊名、大江以言に托されけれども、皆其心は愜はされはとて、改めて我れに頼まれたり、我れ餘儀なく諾がひけるものゝ、齊名、以言が如き名儒の書きたる文章さへ其意に滿たさるものを、爭かで我が力に及ぶべき、左れはこそ最と心苦しく思ふなれと語り出てければ、衛門聞きて暫し思案してありけるが、頓て膝を押し進め、妾が思ひ寄り候は彼の公任卿生得人に勝るの心ある人なれば、其父祖は代々攝關の榮職に在りたるに、近年官位の昇進滯りて最と不本意なる心を書き與へ玉はゝ、公任卿必らず滿足し玉はんと申しけるに、匡衡實にもと思ひ、先つ其表文の初めに盛んに其門地の榮を說き、轉して其身の不幸に說き及ぼしける、公任之れを見て深く我が心を得たりと打悅ひ、早速朝廷に上つられける、抑も公任は太政大臣實頼の孫にして太政大臣頼忠の長子なり、天元三年淸涼殿に於て元服せられ、天皇御手づから冠を授けさせ給ひて正四位に敍ぜられぬ、次第に官位昇進して中納言に至りけるに、偶々右衛門督齊信の爲めに超えられければ、公任最と本意なき事に思ひ、扨てこそ辭表を上つりけるなれ、天皇匡房を御使となし、是れは事ありげなる辭表なれは納むまじきなり、先つ齊信に一階を超えられよと仰せ下し給ひ、幾ほどもなく大納言に納められければ、公任喜びに堪えずして



うれしさをむかしは袖に包みけり

今宵は身にもあまりぬるかな

と詠しける、是れ皆衛門が働らきなりとや申すへからむ、衛門或る年其子擧周が重き病に罹り、日を經ると雖も癒えさりしかは深く之れを憂ひ、我が命を縮むとも

子の病を痊やさんと思ひ定め、住吉神社に詣で、幣三本に歌を書きて上つり、我が子の命に代らんとぞ祈りける、

かはらんと祈る命はをしからで
　さてもわかれんことぞかなしき

とは其が中のひとつなりける、神も哀れとや思しけん擧周の疾幾ほどもなくして癒えけるが、此事を聞きて驚くと大方ならず、假令ひ我が病癒えたりとも母を失ひなば何にかせんとて、自からも母の命に代らんとを住吉の社に祈りけるに、母子ともに恙がなきを得たりとなん。

## (十五)式部解疑　相摸招嗔

小式部は和泉守橘道貞の女にして和泉式部の產む所なり、後ち父死去し、母藤原保昌が許に再醮するに及びて其養ふ所となりぬ、小式部幼少の頃より才智特に優れげるが、五歲のとき乳母に抱かれて寢ねたりしに、足にて衣を踏み裂きけれは、乳母其を咎めけるに、小式部「いつのまに誰か玉章のかよひきて」と云ひければ、乳母驚きて其意を問ふに「ふみさくおとの懐にする」と云ひけるにぞ、乳母舌を卷きて驚き入りけりとなん、又或る時小式部重き病に罹りて所謂癒ゆへくも見えざりければ、母の和泉式部嘆き悲しむを大方ならず ひたと病牀に寄り添ひ、額を押へてさめ〴〵と泣きけるに、小式部僅かに目を見ひらき、つく〴〵と母の顏を見あげて、苦るしき息の下より

いかにせんいくべきかたも思ほへず
　おやにさきだつ道を知らねば

とわなゝき聲にて詠み出でけるに、不思議や天井の上に缺しさしたらんと思しき聲ありて、あな哀れと云ひけるが、其れより後ちは熱さめて間もなく病癒えたりける、其他少式部の詠み出でたる和歌多かたけるが、人々其才を妬みて、小式部の歌は多くは母の和泉式部が詠みて與ふるなりと言ひ合ひける、會々和泉式部は夫保昌に供して丹後國に下りけるに、間もなく都に歌合ありて小式部も歌詠に取られける、中納言定賴局の方

に詣て來て小式部に向ひ、歌い如何せさせ玉ふ、丹後へ人を遣はし玉ひてか、使は早や歸り候か、如何に心もとなく思ふらんなど戯ふれて立ちけるを、小式部つと寄りて袖を引留めつゝ

大江山いくのの道の遠ければ
まだふみも見ずあまのはしだて

と詠みければ、定頼且つ驚き、且つ耻ぢ、返歌にも及ばて其儘袖引き放ちて逃れ去りぬ、是れによりて人々の疑ひも解け、小式部の才名益々世に高まりける。

相摸は源頼光の女なり、本名を乙侍從と云ひけるが、後ち相模守公資の妻となりければ夫の受領によりて相模と呼はれけるなり、順德天皇或るとき女の歌にしては赤染衛門、紫式部、相摸などは昔にも耻ちぬ歌人なりと褒め給ひけるが、實にや相摸は其容貌の人に優ぐれたるのみならず、其和歌も亦た衆に抜んでけるに、夫公資も亦た歌道の達人なりければ、夫婦のかたらひ殊に睦まじかりけり、夫公資或る時豫ねて望たりし大外記に任せられんとしけるに、右大臣實資之れに異議を唱へて、公資は妻の相摸を抱きて秀歌を案せんほどに、役儀は自から疎そかとなり申さんと嘲けりければ、一座の人々斯くと聞きて窃かに打笑ひ、あはれ公資が多年の望みも此一言の爲めに宜しく水の泡とはなりたりけり、抑も實資は太政大臣實頼の孫にして、學問に達し、詩賦を善くし、小右記と云へる記録をも作りたるほどの人なれども、其性質陰險にして人を譏り傷ふこと多し、相摸の如きも其才色並ひなかりし爲め計らずも其毒舌には罹りけりなり。

愛情

愛情は家内より始まる
愛は金錢を輕んず
愛は危險を恐れず
愛の眼中には法律なし
童子の愛は籃中の水の如し
愛は百藝の母なり
愛は德の試金石なり

# 文苑

## 那木の若葉（竹柏會同人）

佐々木信綱

粟畑の粟の穂ひく〳〵うなだれて
　小雨さびしき畑の中道

老ませる古き師の君とはんとて
　たどる野道の野茨の花

麥畑の中に道あり門ありて
　椎の木高し村長の家

石榑千亦

海をあきて岩による島岩にあきて
　海に入る鳥磯に亂れとぶ

水鳥の波にはねうつ海ばらを
　をさなはらから小舟競ひこぐ

みちのくのつとをとこはゞ何にせむ
　それよ磯岩野いばらの花

小原頼之

すみなれし磯松かげをとひくれば
　音なき波にかもめなくなり

くれなゐの木の間〳〵に瀧見えて
　ましら友よび高雄やまみち

かへりくる脊子が釣舟打まもり
　夕げとゝのへつまやまつらむ

木下利玄

何事かいさかひあへる村の子の
　あひだをわくる法の師のさみ

尼寺のせどのあか棚あかだなに
　一枝のせし秋はぎのはな

氷りたるみ雪のうへにあら熊の
　足跡みゆるやまのおくかな

東郷矢一

花に醉ふ春の心のはてもなく
　夢よりゆめにたどる蝶かな

月みむと濱に出づれば磯松の
　梢はなれて影さしのぼる

松原を歸るさ急く馬かたの
　謡ふひなうた遠くなりゆく

夕にはの松の木かげに椅子据て
山の端いづる月をまつかな
永田芳次郎

苔むして文字さへわかず倒れたる
道のべの墓たがにかあるらむ

靜浦のうらの松ばらつきすみて
調もたかしあまのふなうた
笠原幡多雄

ほとゝぎす血になく聲に夜は明ぬ
西のは山につきひくゝして

入あひの鐘のひゞきはとほく消て
青葉にゆらぐ三日月のかげ

人の世はたゞ夢のごと過にけり
はたとせあまり泣て笑ひて
高見憲治

世の中の黄金こと／＼集めむと
南の島にいにし友はや

流れきて又流れ行て河みづの
終のとまりや何處なるらむ

雷おちて半やかれし小屋のうへに
白きひさごの花さかりなり
神山源之

あたらしき道は開けて新しき
橋はかゝりぬ山ぞひのむら

とま船のとまのひまより飯かしぐ
けむりなゝめに朝風ぞふく

ふじの根に夕日はおちて玉くしげ
はこね足柄やゝくろく見ゆ
龜山新一

賎のをは堤にねふるひる中も
めぐりてやまぬ水ぐるま哉

はせすぐる汽車のひゞきに道のべの
青田青畑小鳥むれたつ

岩うちし潮の山のくだけては
花とちりしく岩のうへ哉
多喜槐三郎

風そよぐあしたの庭におりたてば
小さきながらも緑すゞしき

行くまゝに瀧のひゞきの音近み
相語らひし言の葉消えぬ

ゆきゝする人もたえたる松原の
淋しきくれを我一人ゆく
東條正一

雲ゐより落ち來る瀧の瀧つぼに
飛び交ひ遊ぶ岩つばめかな

水清き流れこの比にごりけり
村の童べみづあそびして

突貫の夢今さめてさす月の
影おぼろなゝ病院のまど
樺山常子

まこと絵もおよばざりけり五月雨の
あめにきえゆくふじの芝山

しと〳〵とおつるかけひの音聞て
心しづかに木のめをぞにる

山ばとのよひつる雨はこぼれきて
夕ぐれ寒し水海のほとり

川村花子

山がつが背におひかへる草かごの
中にほゝゑむ撫子のはな

わがうゑし鉢の姫ゆり咲つらむ
見る人なきを恨みながらに

鳥がねもをり〳〵聞ゆおほ瀧の
岩かどたゝく音のたえまに

兒玉千代子

あまりにもやさしく咲る撫子の
ゑまひを見れば手折かねつゝ

岩がねをおちくる瀧の音たかし
やまの山彥とよむばかりに

釣人のこゝろいかにとしらねども
見るめたのしき沖のいさり火

小幡八重子

いまむかし語りつくして風かよふ
かはらおもての月を見るかな

うらもなくかたりかはさん友もがな
日をふる雨のともし火のもと

鳥の音によびさまされて今日も亦
こゝろ苦しきたよりをぞまつ

花戀ひてうせし胡蝶の塚の上に
うたて聲ありゆく春のあめ

末廣英子

客人の何よりもまづたゝへます
いけのあなたの山吹のはな

めだかすくふうなゐら數多集ひきて
土くづれする里がはづゝみ

大村八代子

うき草のたえま〳〵に影見えて
池の面すゞしなつの夜の月

ときしきぬ洗ふもはるも雨ふりて
せむすべもなき梅雨の頃

手向たる柳もかなしおくつきの
あたりに匂ふ露草の花

森田妙子

軒はくち垣はあれたる賤が家も
子のためたてしこひのぼり哉

共にうゑし其人はあらず白ゆりの
しぼめる花に五月雨のふる

雨にぬれて我家にかへる賤の男の
みのよりいでゝとぶほたる哉

中村文子

さま〳〵の望ゑがきしそのかみの
少女ごゝろになるよしもかな

まれ人の多き家よとおもひけり
夫なき後のさてもさびしき

たのしげに人の面わの見ゆる哉
いかでか一人心さびしき
市田豊子

乳母が背にねぶりてかへるをさな子が
手よりはなたぬ桑いちごかな

稚子おへる新藁賣の聲細し
夏のあしたの風きよくして

よもすがら蠶棚のもとに桑かひて
夢見るひまもなきすくせかな
有賀晴子

かゝる時慰むる人のあらばとも
さすがによわくなる心かな

思ひ出の文はけぶりとなし果つ
などかくきえぬ思なるらむ

いつはりを飾りしま玉池になげて
たゝずむ夕べ雨となりぬる
四方てつ子

とりためし袂のほたるこぼるゝも
しらでおひゆく少女子のかげ

山寺の法のともし火きえはてゝ
あかつきさびしふくろふの聲

なやむどち枕そばだて語らひて
しばし心をなぐさむるかな
西野のふ子

雨すぎし松原づたひいそづたひ
こゝろすゞしきけふの旅哉

きづかはしくはた樂しきは玉章を
ひらかぬほどのこゝろ也けり

あつき日を山路越えゆく旅びとの
つかれやすむる岩清水かな
鈴木やす子

かくばかり清き姿のはなうばら
それさへはりのある世也けり

旅にして寝られぬ夜半の明方に
山ほとゝぎすなき渡りゆく

埋火を中にかこみてたらちねの
昔がたりをきくゆふべかな
杉江松子

ゆきかひの常に見なれし道なれど
またためづらしき野べの撫子

梅雨に細きかはすぢ水こえて
こえゆく車ふねのこゝちする

梅雨のはれまを出る月かげに
なかぬもをしき時鳥かな
後藤のふ子

つくづくとたれ調ぶらむ月寒き
河べのやどのつま琴のこゑ

ふるさとの空はいづくと見かへれば
一ひら白しみねのしらくも

手折てもまだあきたらぬ心地して
かへり見らるゝ山さくら花

# 彫像

有賀晴子

某彫刻展覽會は、夏木立もの深き忍が岡に開かれつ。並べられたる、幾千の中によしと見る目は、浮世萬人同じうてや、我この彫像を呼び物に、はての日の今日も、かばかり人の集り來るかと、嬉しからぬにはあらねど、猶いひしらぬ物たりなさの、いづこにかひそめるよ。何故ぞ。何故ぞ。それは今日も昨日もをとつ日も、胸をさまよふ疑なれど、あやし。我にはときえず。いかにしても解きえずと、男はうしろざまに手をくみて、花の如き少女が立像の前を行き戻りしつ。

入日の小さき窓とざされて、やう〳〵人も稀に、今は手に紙きれのやうなるもの持ちて、あちこちはせめぐれる會員の外には、物かげもなく、場内寂寞たり。

つひに來らざりき。彼は來らざりき。彼が幸福をせめて嬉びて今は恨などいふきたなきものは、胸をさり、假にこの塵の中にあらはれ給ひし美の神と、昔の如、信じ居る我なることも、くり返し〳〵、君に昔のみなさけの片はしばかりもあらば、いかで一度は、わがこのいとしのものを見給へかしと、しかねもごろにいひやりしものを、うらめしうも來ざりき。さはいへ、彼なり。さが美しかりし彼なり。かの文見ば、必來べき彼なり。あゝとこしへに我をなぐさむるこの美の神の、かりの姿を唯一目、一目見せずば、さなから彫みはてたる像に、眼入れぬよりも更に物足らぬ心地もする哉。すべなし〳〵。あはれ彼は我を忘れたる女ならずや。失意とやいふらむ。失望とやいふらむ。詞にはいかゞ表はすべきか。知られぬなやみを、胸に與へし女ならずや。そこにも頼みつるよ。彼が眼には、黄金の光こそ尊からぬ。彼はそか故に愛をいつはりぬ。年月心と腕とを苦しめて作りいでし、これ見すべき女かは。嬉しうも穢れたる眼に辱しめられざりき。清きはこれよ。美しきはこれよ。こはきたなき女の姿ならず。尊き女神のかりのみ影なり。されば彼女のいといたうこの面わに似たるが、限りなう口惜しきぞかし。似たるは面わのみ。心は高

し。晴れし夜の星の瞳は美の幻をはるかに見つゝ、更にこがれの色を見かへらむともせざるよ。憎き薔薇はわが掌をさして、富人が庭にはこばれゆかむとす。ゆけ。とくいね。刺の恐しさを、とく知りえたるこそこよなき幸なれ。あゝ君こそ。君こそは我妻よ。いかに君、さならずや。さならずやと、袴のすそ輕う、風にひるがへれる少女が足もとに、身もだえして面を伏せぬ。夕暮は彼の如くによせ來て數多が中にそびえて高き、少女が花の姿のみ、闇にほの白う、實にかしこきばかりに。

## 遊子のおもひ

松寺久雄

小やみなき梅雨のつれづれに、來し方行末の事など、おもひつゞくれば、才なくしていまださすらへをる我身、悲しく別れ來て、七年相見ぬ故郷戀しく、たゞうつらうつらとなりて、文机によりそふほど、文机のもと小人のもてこしは、故郷なる親しき友の文なりけり。なつかしくて、急ぎ見もてゆくに、かねてよりの病、いつ愈ゆべしとも見えず。昨日今日は、秋までも覺束なき心地するに、君が歸省こそ待たるれ。殊に來月の始には、わか尾山神社昇格の、奉告祭もあればなど、くりかへしかけり。さらでも戀しき故郷の空の、いとゞ堪へがたくて、家あるじの君に、ゆるしの暇乞ふやいなや、身はいつしか新橋停車場にあり。金澤までといひし我聲の、いかに聲高に、はた樂しげなりけん。切符賣る人、我顔をながむるやうなり。汽笛はなりぬ。大船もすぎ、大磯もすぐ。こゝまでは年々の夏毎に、師の君が夏をさけます家ゐを訪ひし事あり。其折このまゝに故里にまでもと、思ひし事ありしをなど、思ひつゞくる程、箱根をすぎぬ。鐵橋いくつ。とんねるいくつ。數も覺えず。濱名の湖、名古屋の城も、いつとなくたゞゆきにゆく。米原といふに、かばん一ッの身がるく、誰よりもとく乘換へて、敦賀福井とすぎゆく程、乘る人降る人、皆國訛あるにも、胸あやしくをどりぬ。熊坂とんね るをいづれ

は、加賀の國なり。見馴れたりし白山は、七年の今日も姿更にかはらず。錦をかざれるにはあらず。志未だ成らざれど、友のいたづきと、故郷を思ふわが思とにかられて、おもなくも歸り來し我を、とがむる樣はなく、ゑましげに迎ふる心地す。大聖寺、動橋もすぎぬ。このあたりは小學校にありし頃、修學旅行に來りし事あり。柴山、今江、木場の三湖のけしき、皆其頃の面影あり。砂山ごしに見ゆる藍色は海なり。なつかしかりし海山、今目の前となりぬ。牛取川の鐵橋をすぎて美川につく。こゝには幼き頃、三年あまりをすみぬれば、親しき友も多かるに、いかでその一人にだに、逢見ん由もがなと思ふほど、小舞子と呼ばるゝ松林もすぎぬ。千町田の中をゆくに、左手に一むらしげれる森あり。近づけば松任町なる産土の森なり。こゝにも一年近くすみし事なれば、かの事この事思ひつゞく。停車場の前なる森は、古城趾なり。かしこの松の梢にのぼりて、降りわづらひし事もありしをなど、見るもの聞く事、皆そのかみの、なつかしき歷史を、さゝやきかたるが如く、心そゞろに夢現ともわかぬほど、なつかしき金澤の町はみえそめたり。かばんを持ちて、たちつ居つする間に、犀川鐵橋をすぎ、今ぞ今つきぬ。飛び降るゝ樣にして、プラットホームに出づれば、友あり。妹あり。妹の抱ける肥えたる男子は、弟にやあらん。たゞ夢の樣に相伴ひて、停車場をいでぬ。かばんと弟は妹にまかせて、友と二人語らひながらゆく友は思ひしよりもすこやかげなり。いと早かりつるよ。君にあひて心地もすがすがしくなりつ。綠會の臨時大會は、必ずひらきぬべし。遠足會をかねてにやせむ。會員の中には、君を知らざるも多かるに、明日一度我方に來ませなど、語りつゞけて道より別れぬ。我家は七年の間に、よそに移りすみて、所を知らず。そこかこゝかと求めつゝゆくに、それと見あたらず。しばしたゝずみてありしに、こゝなりこゝなりと、聞覺えある聲のするに、應といらへせる我聲の、あまり高さに驚き見れば、こは机によりそひしほどの夢にして、雨はいつしかやみけむ。軒の雫の音しづかなり。

# 月なき空

印東鏡浦

八幡に物せし歸さ寂しき松原をやうやくはつれてとある家の前にさしかゝれるに入口の障子明け放され火影は我踏む道にとさしつ何心なく內を見やればそこの妻を始め四五人の娘たち團居しつゝ手に手にトランプを持ち今や其遊び半なり妻といふはもと銚子あたりの料理茶屋に居たるなりと聞きしをさてもかしこに集ふ少女たちの行末遠き春の海をあたらあやしき方に舵とらるゝもとゐよと思ひつゝ通り過ぐるに左の暗闇より不意に出てゝすれすかひ行きし女のこも亦かしこにと入りたり

時は猶早かれと暮れては長き冬の夜とて大方は板戸さしてめつ酒屋の店にコップ三つ四つ並へる誰をか待つらん家の者は風呂なとに出行きしか主人唯一人して拂塵を製りつゝあり

そこを過ぎて半町あまり左側の古道具屋の店こゝも未たしめてあらす春慶塗の膳の上に置かれしブリキの湯わかしはランプの光に反射して其まはりなるからくたいとあらはに見ゆ都の內ならんには夜毎を荷車に乘せられさための大道に持てゆかれて寒き風に吹きさらるゝ頃なるべし

月なき空の星はひとりさえ渡りて今朝かりこみし髮のいみしうも衿寒しふと音するを何そと心すれは上なる電線のかゝりあるなりこなたよりかなたへか彼方より此方へか凶か吉か善惡さため難き世の中を今ゆく便りのやかて紙にうつされ名宛の家の門を入るらん一刹那とにもかくにも人の胸打動かすは此針金一筋の傳へぬるかしこき業なりけり人の心の他人の眼に他人の耳に他人の手に他人の口にあつからずして此針金のごと音にいつる其瞬間一直線にかなたの胸に至りつかんものならばと又も苦しき思の湧き立ちきつ

かなたより來る人影の近つくまゝに話ははたと絶えたり男は船乘の常に着ゐる萬祝をまとひゐしか顏はもとよりわからす女はうつむきて居たりゆき過ぎて又いか

なる話のつゝけらるゝにか豆腐屋の前を過ぐるに浪花節のたみ聲高く流し居りそを立とまりて聞きゐるは小提灯さけし年寄の男なり古着屋の店も薬屋の店も僅かに一二寸を殘して戸さゝれつゝひつそりとしたるに引かへそこより五六間をゆきし右角の立場にはこのあたりの若衆ら集まりゐて笑ひ聲とよみ渡れりかの浪花節の聲はこなたへと來るやうなるかてゝにては調子にのりて退引ならす銀貨すつる男もありなんなと見返りつゝ通りすぎて旅宿の門を入らんとするに闇を破りて聞えくるは館山灣に碇泊せる軍艦の時の鐘にや。

# 秋の消息

宮澤すみ子

○夢に玉章

けふよりを秋とや、金風やゝ動きそめて、雲井にこれが消息ありけん、小さき雁再びなきわたれば、花を見すてしうらみも忘られて、仰ぎ見る大空より薄様の色紙に、よき手の文一ひら「佐保姫様御事うつくしき紅の御袖、うちかへし〱、下界への御たびだち且は御趣向共御物語のもなかにて候、よろづは御目もうじの上にとて」かしくとさへ婉なるさまにはあらて、けだかき書きぶり、かくて世は夏にわかれて、秋のシイズンをきれさんとす、しかも都よりは早きが嬉しうまたつらしともおもひぬ、いてや我よりぞまづ秋の消息傳へ参らせんか、露になく夜の、蟲が聲には及ばずとも、殘んのあつさになやみ給ふ御方々の許へとて。

○萩

しほらしきはこれなり、品位ある白、濃からぬ紅、共に秋の前驅として、露をうらみぬ粧優しう、咲いては散り、散りては咲き、風のなぶれば、ほろ〱と亂れて、西に東に動くさま、世心知らぬ乙女心にたとふべくや、萩が花妻のふるきことのはもあれど、妻の字ふさはしからで、唯これがよろづの花の、處女時代を代表するべうおもはれぬ。

〇桔梗

つぼみいとをかし、ふくよかなるさまに、むすぼれて、いつ開くべしとも思はれぬを、次のあさぼらけ、ゆかり色こき紫ににほひいてゝ、これは〳〵と驚かれし主人に、恥づる面の、いさゝかうなだれたる愛らし。

一夜添寢の露がさゝやき、いかに興深かりつらん、人間さらに知らで、雨戸押しひらけば、白も紫と共に、花とぞなりにける、唯萩よりも、持てる心のつよう、涼風萬里に動けばとて、誘はれゆかんの念、見へぬぞうれしかりける。

〇女郎花

草刈男が馬の背に、露を其儘の草數多乘せて、歌うたひながら山よりくだれるに遇ふ、無造作に束ねし中より、まだ穗に出ぬ薄のそれはよし、女郎花の婉なるが交れることのつらく、心なの草刈や、鋭き鎌もて、きらんとせし時、汝は、これがうらみの露をなん、涙と見ざりしかと、こと問へばからく〳〵と、打笑ひて、都大路の夢破る花屋が聲をきこしめさずや、あれいかにして賤の男が小さき籠に、入れられつらん、武藏野のゆかりも、我が刈りし秋草も、いけにへなるはひとしかるべしと答へて、くだりゆきぬ。

節おもしろき松前の、朝風にとぎれ〳〵きこゆれば、小路に露もこぼれゆくらん、あはれはかなき女郎花よ。

〇秋をうしとや

誰がいひ傳なるらん、秋を興あるものにいはずして、寂寞の代名詞に用ゐ來れるいと怪し、ゆくてに霜と冬とのあるありてか、颯々たる山おろしに散り行く、紅葉の行方は悲しけれど、それは秋より冬にうつらんの過度時代、今や夏のすがたを綠の梢にとゞめて、まことをいはゞ夏ともつかず、秋ともつかず、籬の朝貌、朝毎に莟の數小さうなりゆけど、いづこに慘憺たる影のひそむらん、見給へ日ならずして、柿の實赤う、栗は月のゑまへにほゝゑむにあらずや、紫の葡萄房ながきも秋なり、香たかき松茸の膳に上るも秋なり。

〇隣の娘

誰がや、誰がや、徒らに涙を秋の空にぞ通はしむる！

お蝶といへるは隣の娘なり、三日月に似たる淡き光の鎌、うしろの帶にはさみて、畑へゆかんとす、雪よりしろかりしそばの、今は花悉く黑うなりしを刈らん爲なり、一村わかき薄原をへだてゝ彼女はゆく、美き聲にうたひながら。

お蝶みめよし顔よし、形よし、都へ上りて、よき人の館に事へずやときけば、秋野一面をゆびさして、このたのしき故里を捨てゝ他郷へと宣ふか、この住みなれし軒端を外に、いづこの館にかはた花を眺めんと、うらみしこと甞てこれありぬ、かくて村里はお蝶に樂土のおもひ、見渡す秋草、忘れがたなの契りを生れながらにこそと、其後は再び奉公の事すゝめざりき。

○露

朝日にきらめくは價千を以て數ふべき寶玉よりまさるが如く、夜の宮居に輝くは、やさしき母がちごに添寢の乳にもやとおもはれぬ、夫れ白露江に横ろ夕、詩人おもひに筆なりて不朽の好文字成りしにあらずや。

其露に等しきが團々として草にあり、花にあるのあしたゆふべ、何ぞ我が歌の拙なく、文のいたらぬやと、歎き悲めば、前栽の小萩が上より、ほろりと露ぞこぼれぬる、しかも音なきに音ある如く、色なきに色ある如く、何とはなしに、うつくしき感にうたれぬ、これらを美とや。

○芭蕉

小雨さと芭蕉葉に音して、夜の稍更けなんとする頃、うしろの山に男鹿なくこゑ細し、霧深うたちこめて、妻とふ道をまどふらんか。

隣といふも垣一重の近きならで、畑と木數多隔りたる納屋の方に、檮衣の手はたとやみぬ。

颯々と芭蕉におとなふ雨の絶間には、まどふ鹿のねいと近し、春夜花に對するの濃情に引きかへて、秋の夜ぞわびしかりける、しかも籬外には涓々として澗水の流るゝあれど、中には芭蕉葉ひとり、やみのなかにあり、これ能く夜に耐ゆるや否や。

○撫子

春は花高きに多く、秋はなべて低きぞやさし、見ゝや鐘

愛染草に扭てられつる撫子の、名さへいと可憐、いづこの母が生ほしたてけん花のなごりやと、顧れば、小さき花瓣の風にゆらぎて、我をば母のやう見まもりぬ。

折しも廻國巡禮の女が、七つばかりの手を引きて、奉謝を乞ひぬ、折も折、ところも所、山家の情致これを畫に、詩にと、我ひとりさゝやけば、ほゝとや笑みけん撫子の花。

○秋の天

月色空にかゝりて千里嬋娟、纖雲すこしく越の山上にかゝれど北信の天たかく澄みて一點犯すものもなし、

見わたせば月より外の影もなし
美登利の里の秋の夕ぐれ

これまさしう徒らなる三十一文字にあらず、都の人が金に悶ゆる時、智に爭へる時、はたまた情に狂はしき時、來りてこゝに遊び給はずや、風たかき梧葉をして、恣に月とかたらしむるなかれ。

秋の天、聖者の御敎をきく如し、脩德の道豈ひとり經文の中にのみあらんや、法華經にものおもひ給ふ博士の君も、一たびこのわたりにましまさば、自ら悟り給ふところあるべしと、遙にも右きこえ上げたくて。

○七夕

今年また雨多く、去年がうらみをくりかへして、天の河原の二星は空しうわかれ給ひけん、苦痛煩悶天上界に於て然り、いはんや、人間の世に於ておや。

里の子が七夕祭の竹たかう、笹の葉につくる願ひの數々はあれど、捧げまつる品のうすきもをかしう、まして九天のかなたすら希望のみたざるをとほゝゑまれぬ。

詩趣に富める國民よ、日本はなほ幾世の後までもおなじねがひを二星にくりかへすや否や。

○蓮

紅蓮白蓮、うらの泥水に咲きて、荷香十里の句もいかゞはしけれど、初秋のあした、めさむるばかりの眺なり、ひろき葉に動く玉の露、手に捕へんとすれば、ほろ／＼と水へこぼれてけり、我は惡しき事なしたらんやう思ひて、身もわなゝかれぬ。

美き女を、芙蓉のたとへふるし、さりとて何をかいは

ん、この美、この艶、ましてくろき泥中に咲ける花は非常なるコンツラストによりて益々其清きがしめされ、とほき樂土の妄想も、蓮のうてなに限られたらんやう、佛者の說ける理なきにあらず、まして白蓮のけだかさ、くれなゐを美の上々となす論者も、さなんおもふべし、蓋し白蓮は天使のすがた、我は寧ろ、紅蓮に於て、人間の美、人間の情をみとめ得るなり。

○うら盆會

苧がら賣りあるく聲、こゝなる山里へはきこへねど、葉月十三日の夕よりかけて、先祖代々の御靈來降ましますといふなるを、我等子孫たるもの、よろしく生きたるに事ふるが如くなるべし。

家々の端軒よりたつ門火、夕月の幽かなる影かくすらん、この烟が夢見るやうの末よりぞ、精靈の乘り給ふて、くだりましますか、迷信との罵はさる方に高けれど、我は習慣といふに重きを措くのみならで、かゝるは人間の至情にこそと唯親の敎へしまゝとり行ふ。

里の夕映漸う薄う、星の三つ四つ東に現はるゝ頃、三日月よりはやゝ大なるが、空にかゝりて、秋の初風まづ嬉し、やがて燃やすべき柴の傍へいたれは、子等も興あるものと口々に喧しう、母がひざまづきてなす眞似のをかしさよ、こゝにまた第二の國民がおのづからならひて、母なきとし每、かくてやなど、そゞろに夕への風の身にしみぬ。

○山のすがた

翠漸う老いて、山うたゝ淡き、昨日けふ、そこなる靈神がひとへに待つけ何、いふまでもなし、美なる佐保姬の畵筆にこそ、この折ぞ秋色漸く熟して、世は皆これ姬が支配のものたるらん、今は菊もみぢの上いふも早し、霧のこきうすき、蟲の音の高き、時雨のさびしき、添へてまた來ん月の幾日にゆづらばや。

○畑の花

うつくしきは藤豆といふが花なり、添枝にからめるさまやさしう、白と紅に咲きいてし、賤がふせやの風情すてがたう眺めらるゝはこれゆゑなんめり、幾畝つゞき、さくは、口惜しの花の契りや一枝をとの御隨身召す君

おはさねど、見捨がたなの情致、籬の朝貌にまされがあり、歌よむ君達、新らしき題を野の花にもとめ給はゞ、花も榮とやよろこぶらん。

○稻葉

田植うたいまだ耳に殘りて、早苗の上きづかひしを、それより日あまた重ねて、いまだ案山子の人らしきはなけれど、眼もはるぐ\と廣きぐ\田に、葉のいろづきたるはいふばかりなく嬉し、黄金の稻を刈りほすころは更なり雨にも風にも、田子がおもひの通ふは田面の稻葉がもとなるらんを、心なの嵐よ、今年は必ず亂すなかにらんといのる。

○佐保姫樣御もとへ

一筆しめし上參らせ候、やがてこゝなる里へ御降りの折は、まづ鶯谷の梢あかうそめ給へ、そこにはゆかりの人の御墓御座候て生前、紅葉をいたく愛でつるものから、かくは願ひ上參らせ候、

あなかしこ

○姫より御かへし

そこもと、ゆかりの人、信濃國は鶯谷とやらんに、永き眠りにつきたるまゝ、しるしの石のかたへ赤う、早くそめよとの事、たしかにぐ\承まはり候。やがて神無月のころほひ、時雨に乘りて御里に參るべく候、されど我が指もてそむるくれなゐは、ほろびの前驅と知しめさずや、おもひ見給へ、時雨も霜も、冬が誘へる現象にして、商女は知らず亡國の恨を、江を隔て、猶唱ふ後庭の花の、それ女々しうくりかへさねばよし、御心のほど伺ひたくて

しるし

○再び姫が御もとへ

悔、ざんげ、皆おのが爲しゝを罪とおもへばこそにて候、御手並早う見せ給へとこひ奉りしからには、我が里まづ世に先だちての紅うれしかるべく、さりとて、世に先きだちてのほろび、つゆうらめしとも思ひ申さず、徒らなる後悔をくりかへす女とおぼしめしたるがくやし、生あれば死あり、ゆめさら御うたがひ遊さて、まづそこなる梢をそめさせ給へと

しるし

○ゆめ

「聖人に夢なしと宣へど、バイロンは人間生活上第二の

世界たるねむりの生命は夢なり、夢に生あり、涙あり、又たのしみありといへりとか、」夏の短夜、月にあこがれ、子規におもひをこがす人の、夢や短く淡からん、我、筆とはいはじ賤の手業に疲れ果てゝ華胥の國のいとたのしく、バイロンならねど、かしこに仙郷あり、樂園あり、以てねむりの罪なきを味ふぞ嬉しかりけるな、あはれや不眠病となんいふをわづらふ人、故若松しづ子女史は久しくこの病にかゝり給ひしときゝしが、さても美しきはちごのねがほよ、西洋にてはエンヂェリックスマールといへるよしこれが直譯もいかゞあらん、この里にては産神わらひとぞ稱ふなる、そは産神の來降まして、まだ何の罪なき稚子にものがたり爲し給ふとや、さはれ我等女が夜まくらべにイみ給ふ御神は何？あな怖ろし、妬の神か、ほのふの神か、終生に一夜たりとも我はシューズの女神にもの申さんすべもがな、靜かなる夢の中にとおもひね、しかも憂慮煩悶日に月に加はりゆきて、末の世怖ろしや、到底耶摩夫人と聖母マリヤが夢をくりかへすこと能はざるなり。

〇栗の花

何の見所なき栗の花、幼き兒等は、これが散りたるを見て蟲よく〳〵とわなゝきぬ、梢にとまりたるは、等しく色彩なき花の、花といはんも深紅のさくらに恐あり、さりとて外に文字もなし、しかもこの花、やがての秋に美味をやどして、薄と共に月のおまへに供へらるゝにあらずや、容色なきを以て憂ふる乙女等、來りてこれになぐさめあれな、美にほこる麗女よ、御身等志ばしこの花を仰ぎ見て、よろしく其最後をおもへ、蓋し永遠につゞく美は何すれぞ一重の皮のよしあしならんや、而かも美婦ほこりて醜婦にうれひ多し、むべ櫻の美を稱へて栗の花をおもはざるの世人、罪は抑いづくにかあるらん。

〇たなばた

あはれなれや三千第一の美姫、銀盤に水をたゝへて化生を弄したりしといふ、これは君寵なきの怨、世には相思相愛の夫妻に一子なうして、おもはぬかたに多きがうらめしく、まして貧に泣く茅屋に、蠢々として餓にせまりつゝあるはつらし。さくならく天の河原に於て二

つの星相見へるに際し、五色の紙にかいつけて、おのが願事を記せば即ちきかるべしと、而かも知らずや、人世の憂苦、また天上にくりかへさるゝを、そは一滴の雨あらんか、銀河みなぎりて二星相見るを得ずと、多恨又多怨、天上界然り、いはんや人間界に於てをや。

○姫かゞみ

我が上代に弟橘姫尊あり、奈帝前皇后にジョセフィンあり、共に一代のヒーロイン、一つは身を殺して夫に至誠を捧げ、他は秋風の恨をわすれて英雄の末路を慰む。其至高至大なる心や、我ばとふとさの身にしみて、姫が最後をおもふ毎に涙潸然として下るを禁ずるあたはず、日本猛尊が吾妻こひしとのたまひつる、さても東洋の歷史にかばかり愛を發表せられたるありや、むべなり、身を殺して尊と同行の諸士を救ひたるの姫、また壯ならずや、上代の姉妹は此の如く勇なりけるを、今の世、我が子我が弟に、海軍希望あらせじとする日本の女、ひとりアングロサキソン女性に對しての恥辱のみならずまた祖先に對しても耻多し。ジョセフィン皇族の御事嘗て「史海」に田口氏が筆にて遺憾なく掲載されたりとおぼゆ、ヘレナ孤島の英傑が末路あはれむべしといへども、而かもこのヒーロインが王のかひなに再び慰籍をうけつる人の最後幽かなる光なくてやは。時を異にし國を異にし而かも夫に對するの至愛此の如し、松にからまるつた桂、影の形に添ふらんごとしとは、女性が獨立の不自然なるをいへるならんか。

（終）

---

海水浴に行きて日に焼けたりとて、少しも恥づるに及ばず、日焼は健康の證るしにして反てほころに迎るべけれども、甚だしく日に焼けし時はヒリ〳〵と傷を發するとありて、治療を要するとあれば一と通の注意をなし置くも海水浴歸りの人々のためには、必要ならん。鎭痛劑に二種あり一は手や顔の皮膚固くなりたる時と、一は皮にぶく〳〵と膨れたるもの出來し時に用ゆるの別あり。皮の固くなりたるものには糠にて屢々あらうふか、尙ほ直らざれば、リスリンを用ゆるか、燕麥の煮汁にて罨するを得べけれども、皮に水泡の生じたるものは熱さに堪へ得るだけに温めしコンニャク若しくは米飯或は煎糠に鹽を和せしものを以て屢々溫ため、水泡の能く熟して、中より水の溢れ出て來るを待ちて豕の脂を滑かしてぬるべし、たゞ皮の黑くなりてヒリ〳〵とするものには、扁桃油のクリームこそ最も良けれ。扁桃油の製法は藥舖より鯨腦油と西洋の白臘とを、各々半オンスづゝ扁桃油四オンスの柴花水を求め(すみれ水は唯香氣のために用ゆ)先づ鯨腦油と白臘とを鉢に入れ、その鉢を沸騰したる湯の入りたる鍋の中に浮かべて、臘の全く溶解するまで屢々かき廻し少しの塊なきに至りてすみれ水と乳皮とを混和し、之を口の廣き瓶に入れて、冷水の中にひやし置く時は、上皮を生ずべし、この上皮こそ唇のひゞわれ、手のひゞ日焼等に用ひて、最も効きめある藥なり

刺繡圖案

秋之意

中村鈴子



刺繡圖案





# 英　語　實　習　（單　語）

| | | | |
|---|---|---|---|
| Furnitures | 家具 | Thermometer | 寒暖計 |
| Bamboo-screen | 簾 | Berometer | 晴雨計 |
| Curtain | 窓掛 | Tablet | 額 |
| Clothes-horse | 衣桁 | Roll picture | 掛物 |
| Mosquito-net | 蚊帳 | Censer | 香爐 |
| Hammock | 釣床 | Flewer-vase | 花瓶 |
| Arm-chair | 肘掛椅子 | Painting | 着色畫 |
| Screen | 屛風 | Portrail | 畫像 |
| Wardrobe | 衣服戸棚 | Telephone | 電話 |
| Dinning table | 飯臺 | Call bell | 呼鈴 |
| Napkin | 手巾 | Gas lamp | 瓦斯燈 |
| Dish-cloth | 拭布 | Electric lamp | 電氣燈 |
| Sponge | 海綿 | Coal-oil | 石油 |
| Cover | 蓋 | Candle stick | 燭臺 |
| Trenches | 俎 | Kitchen range | 竈 |
| Cleaver | 大庖丁 | Wood | 薪木 |
| Sieve | 篩 | Pan | 鍋 |
| Vessel | 器具 | Baking pan | 炮烙 |
| Coffee-pot | 珈琲堝 | Tea-kettles | 藥罐 |
| Cake-plate | 菓子皿 | Tab | 桶 |
| Bag | 袋 | Flusk | 玻璃壜 |
| Sheet | 敷布 | Cork | 塞子 |
| Balance | 權衡 | Cork screw | 栓拔 |
| Duster | 塵拂 | Funnel | 漏斗 |
| Rod | 竿 | Jar | 甕 |
| Flag | 旗 | Bowl | 鉢 |
| Key | 鍵 | Tumler | 水呑 |

學藝

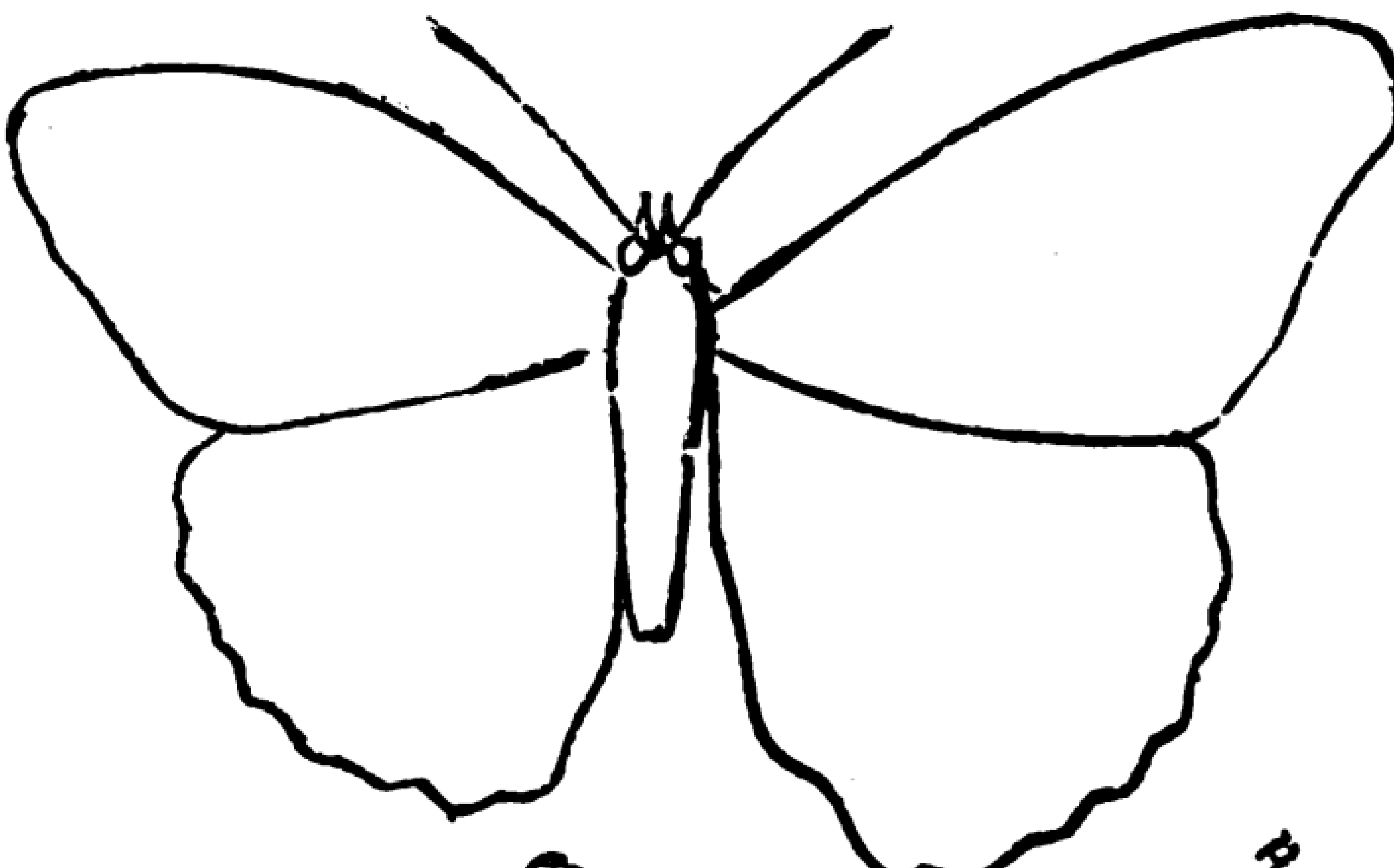
# 蚤の夫婦

理學博士　石川千代松

人間でも夫より妻の身躰が大きい夫婦を蚤の夫婦と云ひますが、蚤の夫婦は本統に妻の方が夫よりも大きいことは、誰れも知つて居ることとてあります。妻の夫より大きいのは蚤の外でも昆蟲には幾等もあるもので、バッタでも蝶々でも大概妻は夫より大きう御座りますし、エビやカニの類でも、又は蛔蟲杯の樣なものでも妻が通常夫より大きう御座ります。茲に謂いて置きました蚤を御覧になると此の事が直ぐに御分になりましようが、動物の種類に依りますと之れ等の動物どころてはなく、夫婦の大小が大層違つて居るものが厶ります。例へば茲にある蟹むしの夫婦を御覧なさい、其の雌と雄との大小は丸で象と豕位の違てありますが、魚の鰓や口の内に能く寄生じて居るエビの類であるとか、又は普通のエビの鰓のある處の腔處に棲んで居るギゲと云ふ蟲杯では雄は實に小さくなつて仕舞つて、丸で雌の身躰に喰付いて居る寄生物の樣に見へるので、之れが夫婦であると云ふことは久しひ間誰れも知らなかつたことてした。然し此の點でもつて面白いのはボチリアと云ふ海の虫て、此の蟲の夫は其の妻に比べますと非常に小さくて妻の生殖器の内に生活をして居るのてすから、蚤の夫婦どころてはなく、鯨とカツヲ位の違位で艦に乘つたまゝて鯨の腹の内に住んで居たミユシヒハウセンの話を本統にした樣であります。

けれ共動物の夫婦て面白いのは唯其身躰に大小がある計てあく、其の構造が大層違つて居るのてす。誰もコンドラカントだのギゲだのゝ雌雄を見て其の同種のものてあると云ふこと始めから承知するものは無かろーが

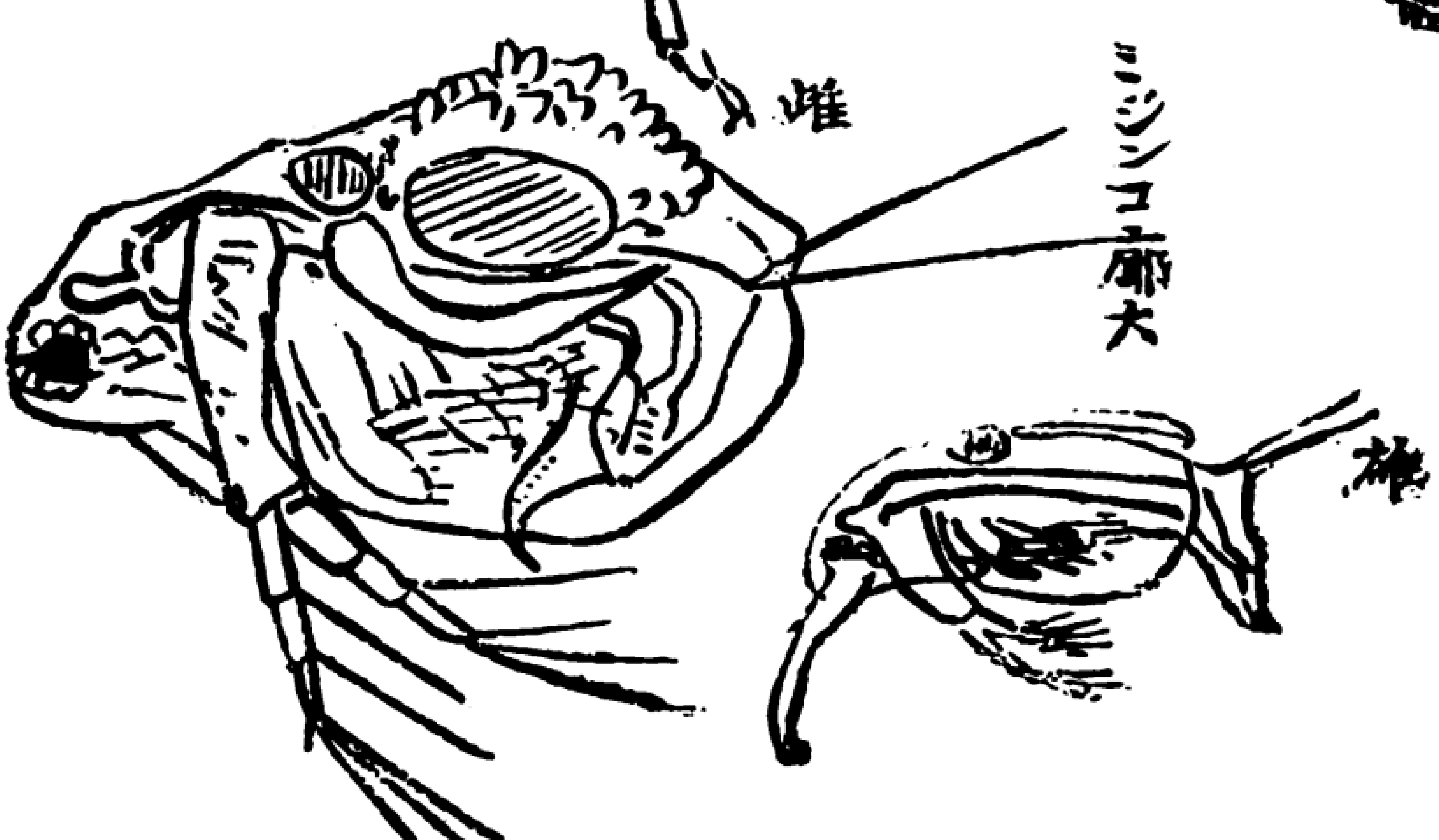
之れは此の二つの動物はエビやカニの類であるが其の雌は他の動物に寄生したから、其の身躰の構造が幾等か退化を始めたのであつて、ギゲではまだ其の甲殻蟲であると云ふてとが分るけれ共、コンドラカントでは御覧の通り躰の節も節肢も皆なくなつて仕舞たから其のエビやカニの、類であると云ふことは少しも分らない樣になつて仕舞つたのである。所が其の雄は小さくはあるけれ共雌の身躰にかぢり付いて居て、幾等か仕事を



ヒヤウモンテフ自然大
右は雌左は雄の輪廓




タイメウバツタ自然大




ミジンコ廓大

しなければならぬ故、雌程に身躰が退化をしないのである。之れとは調度反對でボーッアでは雄が雌の躰内に寄生して居るので、之れでは雄が大層退化して居ます。けれ共之れより一層面白いのは蠶むしで、其の大きな雌蟲には運動器もあれば、消化器もあるのに、小さな雄には運動器や感覺器はあつて自在に水中を泳いで居るが、其消化器は全く退化して仕舞つて居るので、卵から出て來た後雌の方は長く生活して居ますが、雄は直きに死んで仕舞ふのです。之れは實に妙なことで此の蠶むしの雄は何の爲めに世の中に出て來るのだか譯が分らない樣である。然し之れが事實で蠶むしの雄は生れて來ると本統に直ぐに死ぬのであります。夫れてすから又蠶虫の社會には寡婦が多い譯である。

然し何故蠶虫では雄と雌との壽命が此んなに違つて居るのかと云いますと、其の雌は卵子を産んでから、之れを自分の尻尾の根の處に喰つ付けて置いて、夫れて久しい間水中を泳游するので、つまり、此の卵子が孵化して子供が泳ぎ出す迄子守をする譯てあるから、其の守をして居る子供が充分に發生して獨りで生活することの出來る迄は生活て居る必要があるからであつて、雄にはこー云ふ必要が無いからである。そーすると蠶虫は何んの爲めに生活して居るのか、自分の爲めに生活して居るのか又は人の爲めに生活して居るのかと御問いになる御方もありましよーが、動物の生活、動物の壽命と云ふものは短かいのも長いのも或は多くは此の蠶虫の樣な譯なものではないかと疑い度くなるものであると云ふのは。動物の壽命の長短は多くは其の子供の生活に關係するものゝ樣で、前に出したミジンコ抔でも雄の命は雌に比べると短いので、蜂や蟻抔では雌が子供を養ふ譯ではないけれ共一度雄蟲と一所になつた後雌蟲は幾年も卵子を産んで行くことが出來るのであるから、雄は雌と一緒になると直ぐに死ぬけれ共、雌は長く生活て居ります。カゲローと云ふ蟲抔では雌も雄も水中から出て來た時には口も消化器も不完全で、雌雄が一緒になると直きに死ぬけれ共雌の方は雄より少し生活が長いのてある。夫れけ雄は雌と一緒になれ

は夫れでもー宜いのだが、雌は夫れから水のある所に來て卵子を産まなくてはならないのであるから其の卵子を産む迄のときは生活て居なくてはならない。けれ共之れも唯子供を産むと云ふことと計でなく、其の産んだ子供が充分に生活して行て自分の子孫が殘つて行くと云ふことが肝要である。

然しこー云ふても動物では雄が皆雌より小さいものであると云ふことは出來ない、犬や馬やの様な哺乳類では、一般に雄が雌より大きいし、鳥でも同じよてある。

車輪ムシ雌




車輪ムシ雄



ギゲ




コンドラカント




昆蟲の内では雌の大きいのが普通の様だけれ共カブトムシだの、サイカチムシだのでは雄が大きい。

然し雌と云い雄と云ふても、元は同じものであつて只今御話をした様に雌が大きいとか雄が大きいとか云ふのは二の次ぎのことで雌雄の違ひの元は其の一緒なる所の生殖細胞にあるも

のだと云ふことは私が茲に改めて御話をせないでも分り切つた事だろーと思います。

然し又若し之れかそーであるならば、なぜある種類では雌が大きかつたり、或る種類では雄が大きかつたりするのであるだろー、とは誰れも聞き度い事でありましよーか、此のなぜと云ふ問は答へる事は誠に六圖ヶ敷い事で、人間の力では固より答へる事の出來ないのが多いけれ共先づこんなことであるでしよー。

只今御話申した通り雌雄と云ふものは、其の生殖細胞が一緒になる爲めにあるものであるから、其の身體の大小とか、其の體色又は體形の違いとか云ふものは、全く此の一緒になることを助ける爲めのものであるけれ共又此の一緒になつて卵子が發生して次ぎの代の動物を殘して行つて其の種の絕へない樣にするものであるから、之れ等の違いは全く此の二つの事を完全にするの必要があつて起つたものでありましよー。

最も臆病なる動物は之を馴れしむる事最も難し

プルターク

# 名蹟雜話

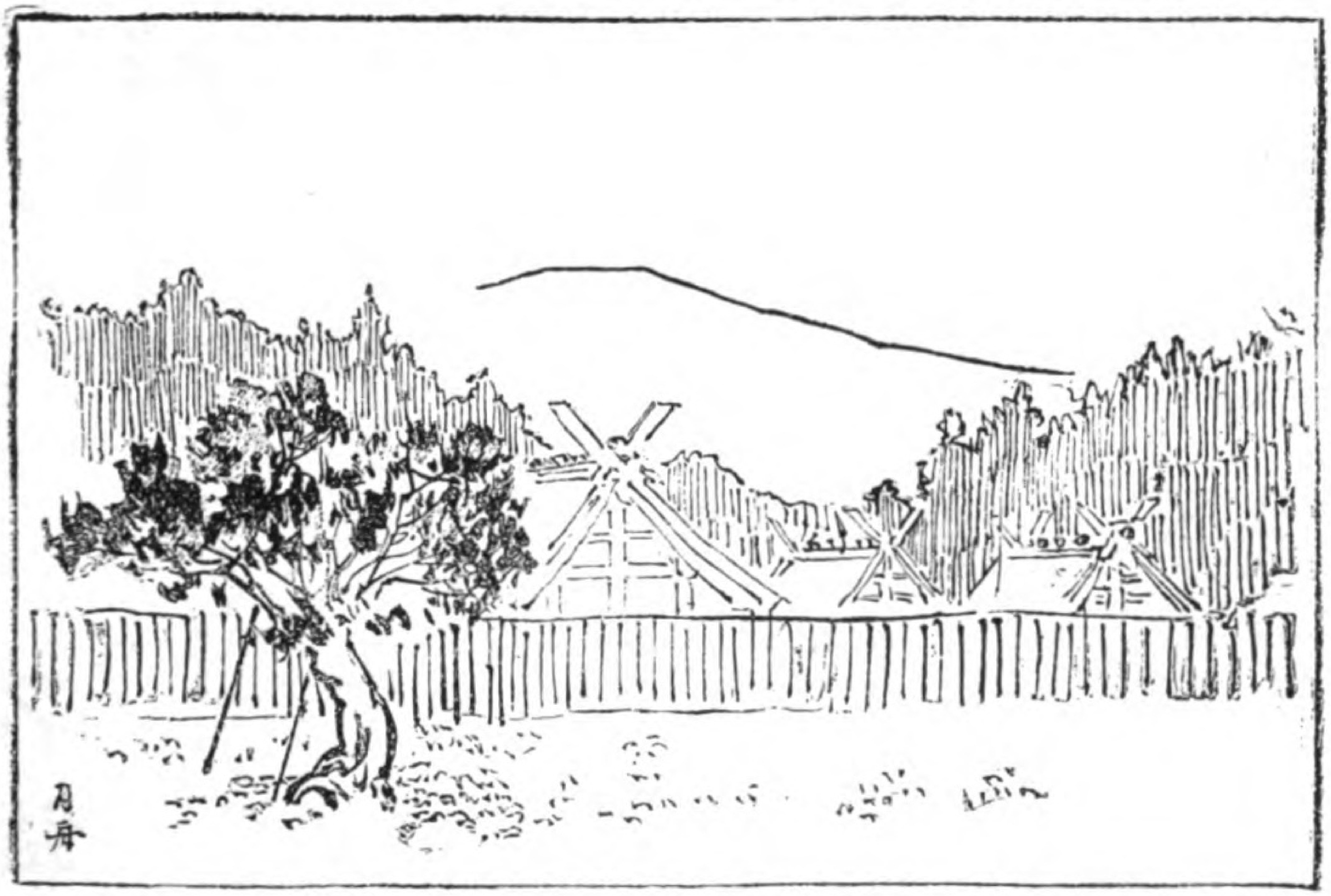
水原末瑳子

昔より八景といへる事は其源は唐土の瀟湘八景に始まりて日本にも近江八景を始め爰かしこの八景枚擧に遑あらずと雖今や明治の新天地文明の花開けたる世に敷島のやまとなど云ちいさき島根心をいふべくもあらず然るを猶ひたぶるに支那ぶりにのみ比するは事狹からずや抑我國の名所古より澤にあれど其所にのみ云なる八景にて廣く日本の國々西に東に渡りて世に比類なしといはむに憚るまじきを撰びては其數も豈八に限るべしやは日本廣からずといへども地球上をあまねくめぐれる西洋人も國內皆公園とし稱へいふなるいでや其名ぐはし處をかぞへみむにいつれを一何處を二といふにはあらねど先第一には

(一)神風の伊勢

五十鈴川の流こそ實淸しとも潔しともかばかり澄めるは又他にあらじかし、うべ日本の皇祖大御神の大宮所

天地のむたとこしなへに鎮まりましますおほみかみのみたらしなる哉たかきいやしき千萬の國民の時しくに詣てゝは此流に手洗ひ口そゝぎ旅衣の汗あえたる泥に汚れし足をすらさしひたせども忽にすみて露も濁らず清くゆたかに流るゝよいかなる穢心も一たび汲てばいかですが〳〵しからざらむ誠に皇國心の清く潔き源にこそ有りけれ内外の宮ゐのかう〳〵しきは更にもいはじ汐合の橋の渡り廣々と打開けていつく迄も清らかなる渡りはてゝめ省みのみせらるゝかしまよ拙き筆ことばにはいかで次には








（二）下野なる晃山

にこそあらめふたら山とは總名にて男體女貌をはじめかず〳〵の山々登るが上にも又そばだちて其規模の廣大なる湖さへあまた高嶺の上に打ひらけて溫泉もあり殊に大瀑布の多かるいつれも天然の奇工を極めたる奥深く入れはいる程ます〳〵あやにくすしき處々ありて夏の避暑はさらなり秋の紅葉はたよにたぐひなく幾度來ても見盡しがたくなむある況て山の名の黒髪の亂し世をおさめ賜へりし東照神の宮居は眞に金をのへ玉をちりばめ美といふ美の限りをあつめて覗かては見えぬ椽の裏までも彫刻蒔繪に名工の手を盡したる實こ

そ日光を見ずば結構をないひそと世の諺にさへ傳へにけれかくまて天然の奇人工の美ともに足らひたる名所は外國にも又あらじと思ふは我のみならずや一度にても行てみし人は必やうなづかんかし

(三)西の都

四方八方皆名所ありて何處よりかと惑ふばかりなむ中にも勝れてめてたきは嵐峡にぞありける花の春をはさる物にて新樹の緑したゝる比岩躑躅の照かゝやける夏は夕月に舟うけて螢狩つゝ涼みとり若鮎つるも興あり秋の紅葉は花にもまさりて櫻の枝の散はてゝ白うけぶれるに紅の色はえて松の緑とゝもにさかしまに大堰川の波に錦の影をうつせる冬は雪の朝山の名の嵐に花とちる風情はたいひ知らす實にたぐひあらしの山といふ古めかしき言も思はず口すさまるゝかし又三尾(高尾栂尾槇の尾)の秋の色は今染出たる友染を見渡すかぎり掛ならべたらむが如し東山は北なる黒谷より始めてつぎ〳〵に巡廻て東福寺稲荷山に至るまで花に紅葉にとり〳〵をかし其外加茂の下上のすが〳〵しき又大伽藍の多かる建築いづれも古雅にして見處の多きいひもてゆけば限りもなく凡日本のうちにかはかり見るべき名所古趾の多く集へる處は他國にあらず其山川風景共に優美にして雅趣に富たるは自然と都人の性質に顯れてみゆるも土地柄なるべし

(四)東海道の海岸

濱邊の景いづくはあれど爰には日本にふたつなき富士の神山の雲井に高く仰がるゝが異所には増れる也江尻濱松わたりゆく心地いひ知らず富士見村なる龍華寺の庭よりみれば向ひにふじの高根ありあしたが箱根の山〳〵立ならべる裾には三保の松原長く横たはり田子の浦雪のあしたは赤人の歌にいひ盡したれば又言葉なし其外東にては江の島鎌倉山には函嶺是又晃山にも多く劣るまじき處になんある川には天龍大井西によりては今ぎれの橋ゆく程高師の濱の景色すべて山も水もあかずながめやらるゝ處々多くなむ

(五)近江の琵琶湖

諸國に湖多しと雖是なむ日本第一とぞ云なる其形さ

へたぐひなくそかし昔より名に高き八景は更にもいはじ其外にも志賀山の花の比ひえおろしにちる花ふゞきの打出の濱の波にたゞよふ風情よわかずおもしろし北の方遙に浮ぶ竹生島に詣でむとて沖中遠く漕出れば大海の心地して實こそ滋賀の大わだとは知らるれ夏より秋かけて月の景色は「都にもかつ事ひとつ鳰の月と大津人のほこるもことわりと社覺ゆれ

（六八）大和

奈良の葉のふりし都は平安城に比しては規摸ちいさけれど國は山城よりも大きければ爰彼處に古跡多く皆物ふりて昔忍ばしさのみぞ進みける先春日神社のかうゝこしき鹿のたゝずみありくは爰ならで外にやはある大佛のすさましきもたぐひなしや吉野は昔より名高くて瀧も川もあれども花に添はねば嵐山には劣れるを明治の始櫻樹をいといたく伐て道の並木のみとなし只一目千本といへる處のみぞからくも昔の春をとゞめたる山〲の嶺より谷の底までもすゝな菜種植わたして見ゆる限りは畑なりけりとぞいふべくなりぬ今は多武峯こそ花は遙に見よかりけれ然る替に橿原の神武天皇柳本の景行天皇の雨みさゝぎは共にめでたく修理せられて餘くなりぬ其外三輪初瀨法隆寺龍田などすべて布留の社のふる〲しき處のみぞ多かる賑はゝしきによる俗客はさびし見る甲斐なしなど頗るいひけつめれど好古癖あらむ人には古色掬すべき物の多き處なりかし月の瀨は大和伊賀の國境にありて梅に名高く齋藤拙堂の一たび賞せしより文人雅客の尤悦ぶ所なりしを爰も又吉野をまねびてさしも有名の梅樹を伐て茶園とし大に風景を損じたりしが近來漸々悟りてや又梅苗を植るに至れり數年のゝちは舊に復すべし只其地の俗化せしこそ進みはすども元へはかへらじかし然れども山川は舊景を改めずつゝじ川（名張用のこゝにての名）の清流依然として梅花の匂はぬ候にも猶風光賞すべし初夏新綠の比川の名の躑躅尤よし此水源を赤目の瀑布とす赤目瀑布は名張川の源伊賀の山中にあり昔は行者の外人知らぬ處なりしも近來探檢する者次々あれと猶いまだ道路開けず車馬通はねば險岐を恐れざる健脚ならではわけ入るべく

もあらず鎌田梁洲が記によりてやゝ此勝地ある事世に紹介せられたり四十八瀑ありと云所謂四十八瀑とは佛の四十八願に依と云なるべし爰に限らず晃山にも靈原にも瀑多き山には皆しかいへり必しも四十八あるに非ず只數多の謂のみ爰なるは即ち行者瀧千手瀑不動瀧靈蛇瀧布曳瀧龍虎瀑瀧藤瀧柿窪瀧横潭瀧荷擔瀧は奇中の最奇なる物其さま物をになふに似たり琵琶瀧巖窟瀧大日瀑は雄大にして奇形也山水を好む雅人は一度ゆきてみるべき也瀑と潭との奇勝は晃山にもをさ〳〵讓らじかし

(七)陸前の松島

古より日本三景の第一と稱へ




たる名所なるを何事ぞ近頃に至りて此島々の松を殘りなく伐とりて今はむげの裸島と化し畢ぬ吉野の櫻は猶一目千本を殘せるを爰は何たる慘酷ぞや千島八十島にさしも榮えし千載の緑は影だにもなくはりなげなる小松の只ひとつふたつ孤の捨られて泣が如きさましてたてる哀とも無慙ともいはむも中ゝなり我は幸ひにもいまだ伐られざりし時一度行見たりし其景色心に染て今この光景をみてそゞろに涙止まらずせめて昔を追想して其おもかげを寫しいはむ先千賀の鹽竈より小舟漕いてゝ八十島影をめぐるにいづれも何れも緑の蔭さかしまに波を染めて汐風に晒

落たる老松ふして波を覗くが如く仰て空に踊るに似たり富山に登りて見渡せば只亂碁のさまなして島のかぎり一眸に集り松島の全景をみるは爰にあり大高森は沖の方遠くさし出て相馬の岬に對し遠名の濱の鹽やく煙足もとに立のほれるなと又樣替りてをかし猶沖邊遙なる金華山に至りて一夜を寺に泊りあくる日山鷄の渡をわたりて松島に歸りぬ爰のながめは船にありめもはるの海づら遠く近くみどりの松ども其色其姿何にたとへむ松島やさて松しまやまつしまやと翁も餘のよの葉はいひ得ざりけむ誠に日本は更にもいはず世界の名所とも稱へしも松の緑のありてこそかゝる奇特の松を伐て國の名譽をおとしても利に走れるおそのたふれらこそ淺間しくもうれたけれあはれ有志の人たち疾く松を植つぎて百とせのゝち又もとの緑の春に立かへり榮えむ事をせちに希ねかふるなん

（八）丹後の天橋

まだふみも見ぬ人はいさ知らず一たび渡りたらむには寶も三景のひとつといはむに足りぬとうなづかむ昔は大江山幾野の道の遠かりしも今は眞鐵路の便ありて京大坂よりも一日に至りつかるゝ也文珠堂前によき宿あり海士どもがとりてもて來る魚の跳おどれるを調じてくふ味ひ殊更なり舟に乘て籠神社に渡り成合山に登りて笠松の陰よりみれば松島の富山におけるが如く與謝の海の全景をみるべく宮津の町よりつゞきてさし出たる黒崎が端左よりめぐれる鷲が崎に重なりて大きなる池の如し入江なれば波たゝず玉の浦てふ名さへめでたし天橋は此江中を横斷して其長さ一里といへどまよは廿七丁半也とか白砂をゆく人松樹に隱顯し江上に釣する船波間に漂流す浦風颯々として松に韵あり波に瀾あり實に是天然の畵圖此美此妙拙き筆詞にいかで盡さむ天橋末によりて巾廣き所にはしだて明神とて社あり渚に石の鳥居たてり社前に礒清水とて井ありかゝる海中の洲に有ながら鹽氣なき眞清水なるも珍らし踊るさを丹波の龜岡にまいりて保津川を柴船に便乘して京の嵯峨に出谷川の岩にみなぎる急流を下る快こと云べからず清瀧川の落合獅々岩屏風岩群書巖大瀬の赤岩など

あやに奇しき若葉の頃躑躅の花匂ふ頃殊にすぐれたる名ぐはし處にぞあるや

(九)山陽道の海濱

此中に嚴島をこめたり先瀬戸内海の景色は神戸より始てゆく〳〵須磨舞子明石は殊に月に名高く只向ふ淡路島繪島かよふ千鳥ゐ島かくれ行船も今は汽車の窓より打ながめ衣ぬふ播摩の名處巡るには加古川より下りて名に高砂の松を始都戀しむ片枝松尾上の松に曾根の松別府の手枕松生石村なる靜が窟石寶殿は殊に古雅に奇し又八家の海地藏は波のぬれ衣いく世きるゝはとをかし備前岡山には後樂園あり其外猶有べけれどさのみはとてなむ安藝に入りて宮城停車所につけば渡船まちとりて有の浦にはたす嚴島は三景のうちとていとめてたし周回七里餘といへり船にて七浦めぐりする人多し宮柱太しく建つらねたる廻廊の下迄潮のみち〳〵てともしつらねたる燈火のうつらふさまよにたくひなしや御垣が原紅葉谷など鹿の人なれてよりくるとらうたし花に紅葉に四のときわかず晴好雨奇の名所になんありける

(十)豊前の耶馬溪

知らぬ火の筑紫には太宰府の菅公廟をはしめ山には崟山霧島山には神孫の天降らせ給ひけむ高知保の嶺なりとか今も猶天の逆鉾とて山の頂に奇なる物たてりとかや肥前の長崎松浦がた薩摩の櫻島國境の山こえに見おろしたる景色おもしろし此他にも多かめれと彼耶馬溪は頼山陽の文に依てぞ世に顯れたる豐前の國なる筑上と下毛の間を流るゝ山國川其水源を彦山に發して東流す中津町より遡る事三里下屋形村よりの上流南五六里をぞ耶馬溪とは云なる川を狹みて左右ともに山嶺相聳えて奇巖怪石天然の妙をきそひそばたてるは今もや飛ばむの勢ひをなし踊るが如く怒るが如く或はたち或は蹲に似たり嵒の間を流るゝ水勢のはげしさ吹雪の如く又白玉を散すに似て壯又凄みる者心身共に洗はるゝ心地す鮎返しといふ處を過て樋田の里猶ゆけば隧道あり是ぞ此耶馬溪中第一の奇勝今を去る事百五十有餘年の昔寛延三年の頃のとよ（桃園天皇御宇 徳川宗重將軍）江戸淺草に

禪海といつる法師在けり故ありて此國に下りし時此道を通じ開きなば國益廣大なるべしと思ひおこして以來三十年の長日月をたゆみなくいそしみて終に事成就したりとなむ今の如く物事の開けぬ世にありてかゝる偉大の工事を企て功を奏しけむ法師が膽力仰くもおろかなりや其隧道の長サ三百歩處々に窓をうがち其狀宛かも古城の壁に似たり爰を出づれば一の橋あり耶馬橋と云爰より道二つに分れて右は口の林森實に出左は有名の正行寺五百羅漢是也是また奇工のひとつ也此寺に地獄極樂ありと云案內の僧に導かれてゆけば黑白もしらぬ暗黑界に入る是地獄なりとぞ物に躓き突當りなどしつゝ辛うじてかゝぐりゆけば忽然あかき處に出づ見廻せば是堂の內にして廊を登れば佛ゐます是を極樂とぞ云なる耶馬溪の奇勝は既に頼氏の筆に盡されぬ後人又何をかいはむ凡天下の勝景多しと雖皆峻嶮鳥逕を攀るに非ざれば俗塵紛々として風致を損ずるもの比々皆然り而て耶馬溪ひとり其地は國道にして馬車通ひしかも俗氣に遠きは賴氏の口を極めて稱讃せしも溢美にはあらずとぞ思はるゝかし

こはおのれいたく山水を好む癖ありて年ごろ女に似氣なく機會だにあれば旅に出でゝ幾度にもめぐりみし中より尤規摸の大なるを撰出て其要を摘たる也くはしくは其折每の記あり猶いはゞ畿內にては山城の宇治男山紀伊の高野奈智の大瀧和歌の浦大坂の住吉天王寺四國の象頭山中國に渡りて出雲の大社岩國の錦帶橋山陰道にも探らば有ぬべけれど世人のいふもの尠し北越には敦賀の港名にたて山の地獄とか恐ろし氣に聞傳ふれど白山のしらねば いはず 又美濃の養老菊水の名水、長柄川の鵜舟、木曾路の谿川、寢覺の床、妙義榛名の奇巖、怪石、富峯の壯觀、筑波の眺望、水戶公園の梅香、大洗の波、伊豆の浦々、溫泉には熱田、修善寺、伊香保、鹽原、奈須、箱根、其外諸國に數多ありて數へ擧るに遑あらず又北海道には其入口なる函館に渡りて見しか其土地大かた津の國なる神戶港に似て背後は山高く前は入海巴となれゝば巴港の稱あり向ふには北海奥地の山に進りたる中にもめに立登るは駒ヶ嶽の煙なり名に聞えたる五

稜廊長くつらなりて遙に見え渡る谷地頭の公園にのぼりて見はたせば近江の長等山攝津の布引はたりに似て又様異にをかし土地の風俗言葉なとをかしき事多かりしも日記にくはしく出たれば今は省く此北海道は國廣く深山大川天然の奇勝もこゝら有べけれど未開の地なれば世に知られず内地の晃山なども勝道上人の踏そめし其かみはかゝりけむかしはてなかりし武藏野の大宮所となり東夷は都人と稱へらる蝦夷の北海道となり琉球の沖繩と呼ばるゝもことわり哉況や大灣までも旭の光新高山にかゞやき始ぬる大御代はそれらの國々も末いか様に開けゆくらむ床しさよ百年千歳のゝちもみむ鶴亀のよはひこそうら山しけれと思ふもいとふくつけしや。

秋早く寒ければ則ち必ず冬暖く、春雨多ければ夏必ず旱す天地兩つなる事能はず、況んや人類をや

呂氏春秋

# 鰹節の話（上）

今井金牛

鰹節は鰹魚の肉を煮て乾かし、夫から黴を付けて製したるものであります、鰹節の製法は、昔印度から傳來したものであると云ふ説もありまするが、本邦上古の時代に於て、既にあつたものゝ様に思はれます、又古事記雄畧天皇の巻に、初大后日下に座しける時、日下の直越の道より河内に幸行し、爾、山の上に登り座して、國内に望せしは、堅魚を上て舍屋を作る家あり、とありますのは、屋根の上に乾燥してあつたものであろうと思はれます、又賦役令に、堅魚三十五斤、煮堅魚二十五斤、堅魚煎四升など、云ふことが載つて居りまするし、延喜主計式に、志摩、駿河、伊豆、相摸、安房、紀伊、阿波、土佐豊後、日向の諸國は堅魚、駿河國は煮堅魚云々、など云ふ事が載せてある處を見ますれば、兎に角一千年前に既にあつたものらしく思はれます、

鰹節は食味の調理上には、是非共なければならぬもの

であります、特に山間の僻地に住つて、常に肉を食することの難い處等では、含窒素物食料として人間の生活上最も効用大なるものであります、故に日常諸嬢方が食物の調理をなさるに當ても、鰹節のことを能く御存してあつたならば、品質の良否を御撰擇なさるに就ても、多少は御參考にならうかと存じまするから少し掻い摘んで御話し致します、

元來鰹節と一口に言ひまするが、此節類は種々の魚から製したものがあります、多くは、さば科に屬したもので、まがつを、又まんだら(北陸)○すま又やいと(房總)又やいじ又のどくろ又わたなべ(相州)又おぼそ(關西)又うらまわりかつを(關東)○そうだかつを(關東)又めぢか(關西)又すぼた(九州)○すじかつを(關西)又きつねかつを(關西)又はがつを(九州)○さば○まぐろ等でありまして、其他鰮節、或は何々節と稱へるものもあります、之等は調味の材料には用ひまするが眞の節類とは又異つて居ります、

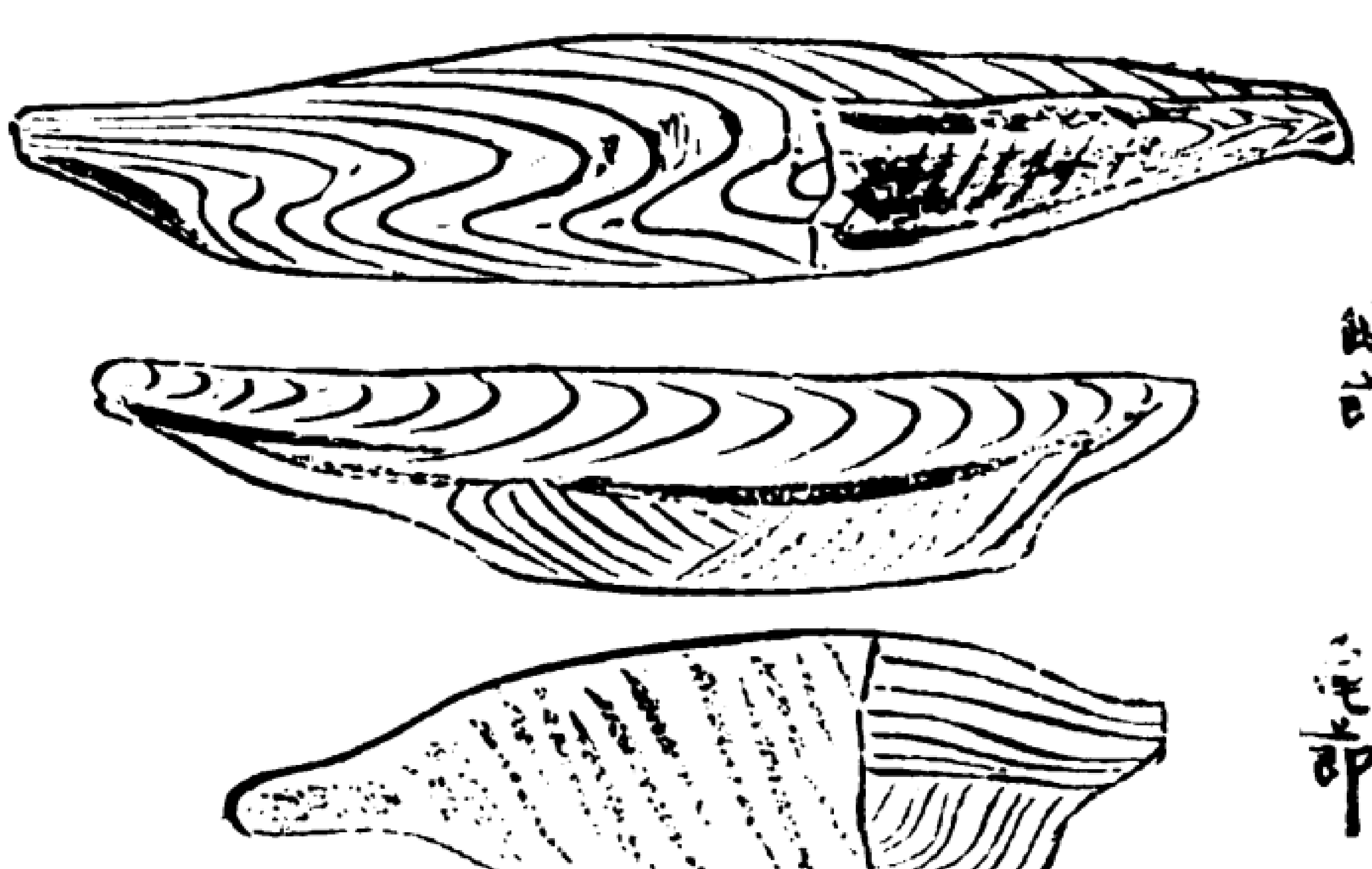
さば科に屬する魚は、何れも暖熱帶の海に產し暖流(黑潮又桔梗水又黑瀨川)を追ふて來游するものでありまして、年々漸く暖氣を催すに隨て南方より來り、八月頃になれば又南に歸ります、之れは所謂、魚類の深淺移轉と稱へるものであります、尤も黑潮の流域には常に棲つて居るものでありまするから、日本でも薩摩七島以南に至れば、周年多少は見ることが出來ます、本土の沿岸へ黑潮が近く流れて來た時に來游するのは、四月頃薩摩海に來り、夫から段々北に進んで、紀州沖から駿河海邊へ來た頃には、まかつをの產卵期(七月頃)であります、夫から房總の海へ來た頃には、既に熟卵のあるのは稀れであります、又黑潮の支流に沿ふて日本海の方へ參るのは極めて少ふ御座ります、

まがつをには、躰の扁平なるものと、稍丸きものとの二種ありまして、躰側に翠黑色斜走の線が、四條から八條まであります、而して背部にもあるものがあります、此のまがつをは、夫の、目に青葉山ほとゝぎす初かつを、の方で、主として棲息する處は、太平洋、印度洋等の暖熱海でありまして、大なるものは二尺位になります

○すま、と稱へるものは、大さは二尺以上にもなります

が、背部に縦走の波紋がありまして、波紋は大なるものもあり、又小さきものもあります、胸鰭の下に、四つ或は五つの黒斑があるものもあり、又ないのもあります、地中海、太西洋の暖帶及印度洋に産します、本邦では南方に至れば多く、北方には少く且つ小さくあります○そうだかつをは大さ一尺二三寸位までゝありまして、口に歯がありませんから他の鰹類と區別が出來ます、背の紋理は細かくてありまして横走して居ります○すじかつをは大さ二尺二三寸位までゝありまして、背上に九條の縦線があります、

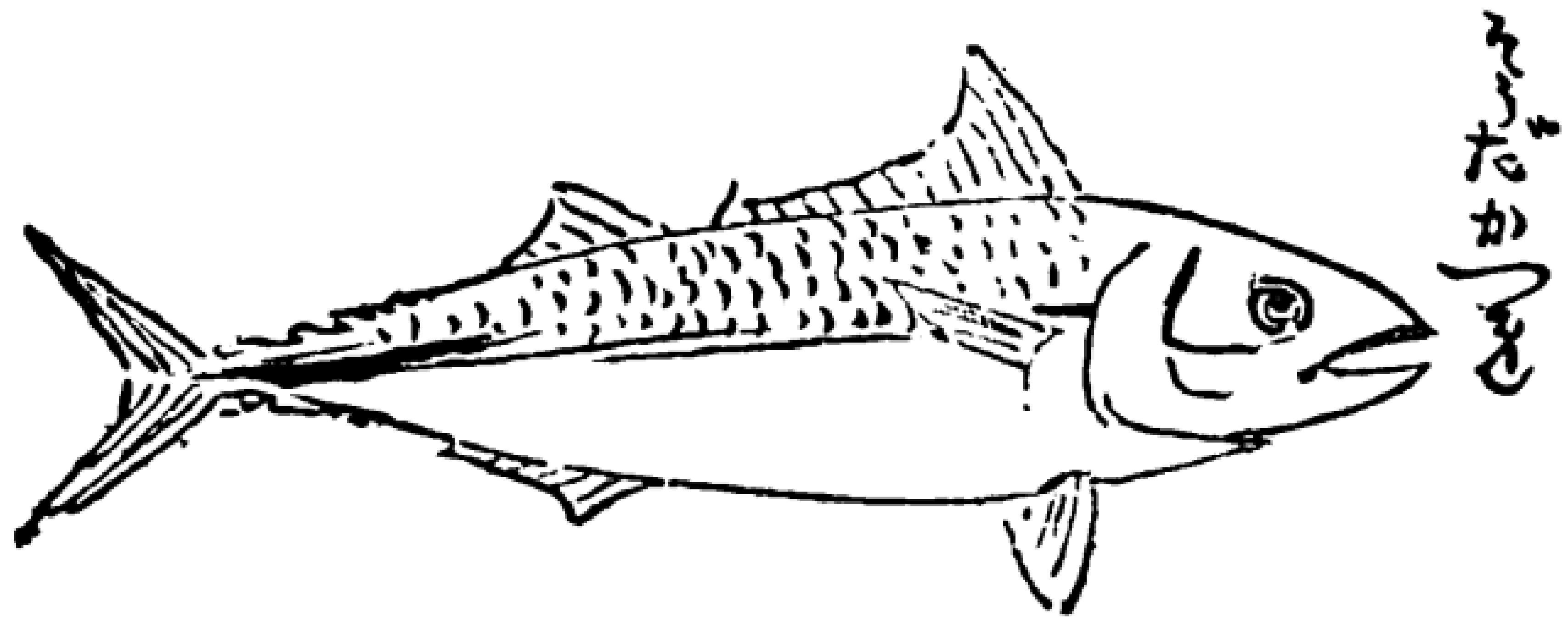
節には普通鰹節と、龜節と、鮪節との三種ありまして、



雄節

雌節

龜節



そうだかつを

普通の鰹節と稱へるのは、まがつをから製したもので一尾の魚から四本取ります、内背部二本を雄節と稱へ、腹部二本を雌節と稱へます、龜節と云ふのは、まがつをの小なるもの、又は其の他のかつを、及び鯖から製するものでありまして、左右兩側二本を製します、之れは何故龜節と稱へるかと云ふに、節に仕上げてから、龜の形をなして居るから斯く稱へるのでありますが、之れは主に羹汁に用ひます又まぐろぶしと稱へるのは、まぐろ又しび、から製したものであります、此等の節は、年々何程位の産額があるかと云ふに、凡百五六十萬貫位であります、

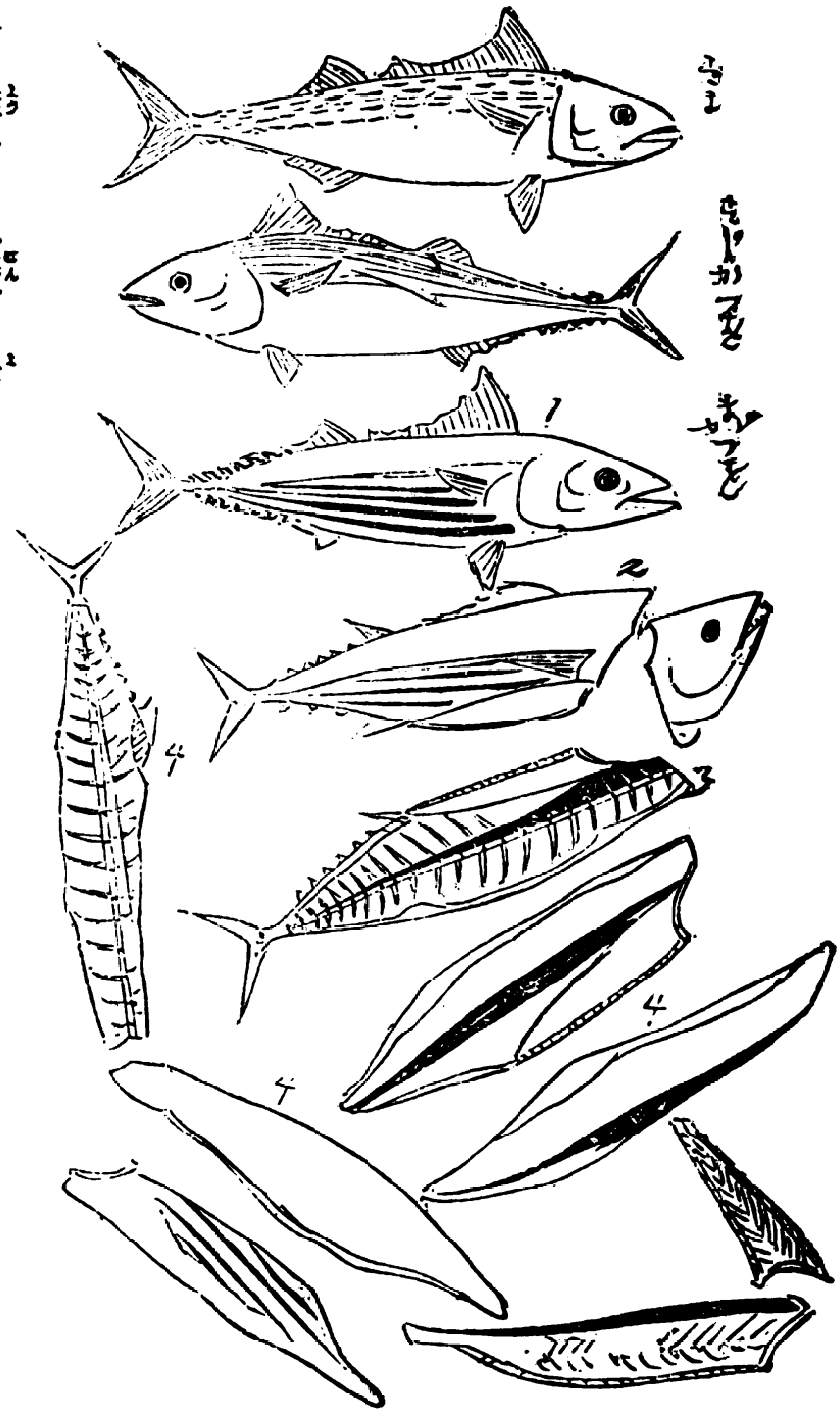
鰹の事は餘程古くから漁つたもの丶樣であります、萬葉集に、水の江の浦島の子がかつをつり、鯛つりかねてなどゝあります、又往古は毒魚などゝ書いた本などがあります、之れは元來鰹には、生きて居る中から肉中特に背部(血合と稱へ肉の色紫紅色にして血管の輻輳せる部分)の肉中には、蛆の如き虫が居るから、夫れを忌みて斯く云ふたものか、又は少し時を經た鰹の肉を食して、往々中毒を起し、皮膚が紅色を呈して恰かも酒に醉ふたるが如く、全身に蕁麻疹を起すことなどがありますから、毒魚と稱へたものかとも思はれます、伊勢雜記にも、かつを、と云ふ魚は、生にて食せず、乾したる許り用ひしなり、とあります又徒然草に鎌倉の海に、かつをといふ魚は、彼さかひには、左右なき物にて、此比もてなす物なり、それも鎌倉の年寄の申侍りしは、此魚おのれら、わかゝりし世までは、はかぐしき人の前へ出ること侍らざりき、頭は下部もくはず、きりてすて侍りし物なりと申き、かやうのものも、世の末になれば上ざまゝでも、入たつわざにこそ侍れ、とあります處を見ますれば、元弘年間の頃までは、生にては餘り食はなかつたものと見へます、

鰹と云ふ字は堅魚と云ふより來たものであります、漢語抄、倭名鈔に加豆手とし、延喜式に堅魚とあります、又新撰字鏡には鱃、鏡、鯖、鰹の字皆加豆乎と訓し、農家心得草には鮰鰹魚、和字雅には松魚、古名錄には鰹、海魚考には肥滿魚、古固魚、戞子魚などの字に書いてありまするが、漢字の鰹は大鮦、鮦は鱧に同じとありまするから全く別物の樣であります

古來鰹節は、琉球より支那福建に輸出し、長崎渡來の支那人中、携歸するものあり、之を木魚又戞魚と稱し、嗜好するものありしも、今は殆んど中絕同樣にして、福州府の如きは六十歲以上の人にあらざれは、木魚の何たるを知らざるに至れりと云ふて居ります、

古は、鰹節は只魚を煮て乾した丈けのものらしく思はれますが、慶長、元和の頃から、紀伊、志摩、薩摩等では、多少製法を改良したもの丶樣であります、夫から今より二百二三十年前、即ち延寶二年頃に、紀州熊野浦の

漁夫て甚太郎と云ふものが、土佐の幡多郡西の岬て釣つた鰹を、宇佐浦と云ふ處で改良法の節に製したのだそうてすが其の頃は、此の土地の漁夫は皆其法を知らなかつたものだそうでわります、然る處播摩屋佐助と云ふ人が、其の法を知つて傳習致し、夫から皆之に倣ふて製造をする樣になり、藩ても餘程奬勵した結果、段々盛大に趣いて、終には、鰹節は土佐が首位を占め、却て先輩の紀州は土佐程に進歩しなかつたものてあります、薩摩も隨分盛んに製造を施し、



改良を加へたるものと見へて、正德年間頃に大坂と江戸に鰹節問屋が出來、土佐、薩摩の二產を佳品として取り扱つたとあります、

只今でも土佐や薩摩は、上等の節を造りまするが、極めて製法の巧みな處は、伊豆、駿河であります、之れは元と節にする材料、即ち鰹が黑潮の流に沿ふて南から段々來游するに付て、薩摩から土佐あたりへ來た頃が、脂油の工合と云ひ、期節と云ひ、節に製するのに最も適當して居るから、自然上等な節が出來たのでありまするが、夫から北の方へ參りまするど、鰹の脂油が非常に多くなつて居りまするから、餘程製法に注意しなければ、上品の節を造ることが出來ません、（脂油の多き節は日を經るに從ひ段々ぼろぼろになつて碎け味は澁味あり）夫故に却て原料の惡い伊豆や駿河あたりは、非常に精巧な製法を施すから、今日に至ては土佐や薩摩を凌ぐ樣になつたのであります、伊豆の鰹節が世に知られたのは、極めて近年の事でありますが、明治十六年上野に開かれた第一回水產博覽會のあつた時に、伊豆の鰹節が優等であつたそーであります、此の頃から伊豆及駿河は段々進歩してまいつて、今日は製法に於ては最も精巧であります、

飢餓は最上の醬油なり而して貧民は常に之を欠かす

# 裁縫實習

女子職業學校教員　金子銅子

まだ日本服に就て申上る事もあまたありますが冬物の方になりますからあまり時候ちがひのものも面白くありませぬから、一寸こゝて小兒用洋服に就て少して御話し致しませう、しかし洋服をお話し致します前に其下着の裁方、縫ひ方を申して置きます、さて其下着となるものはシミツ、ヅローズ、ヘテコート、襦袢とてございます、て、其内のシミヅより初めませぬ、これも年齡格好等によりて違ひのあることは御承知でありますが一番需用の多さは三四才位の小兒のてございますからこゝでは其位の小兒用のに就て御話しいたすことゝ致

しませう、

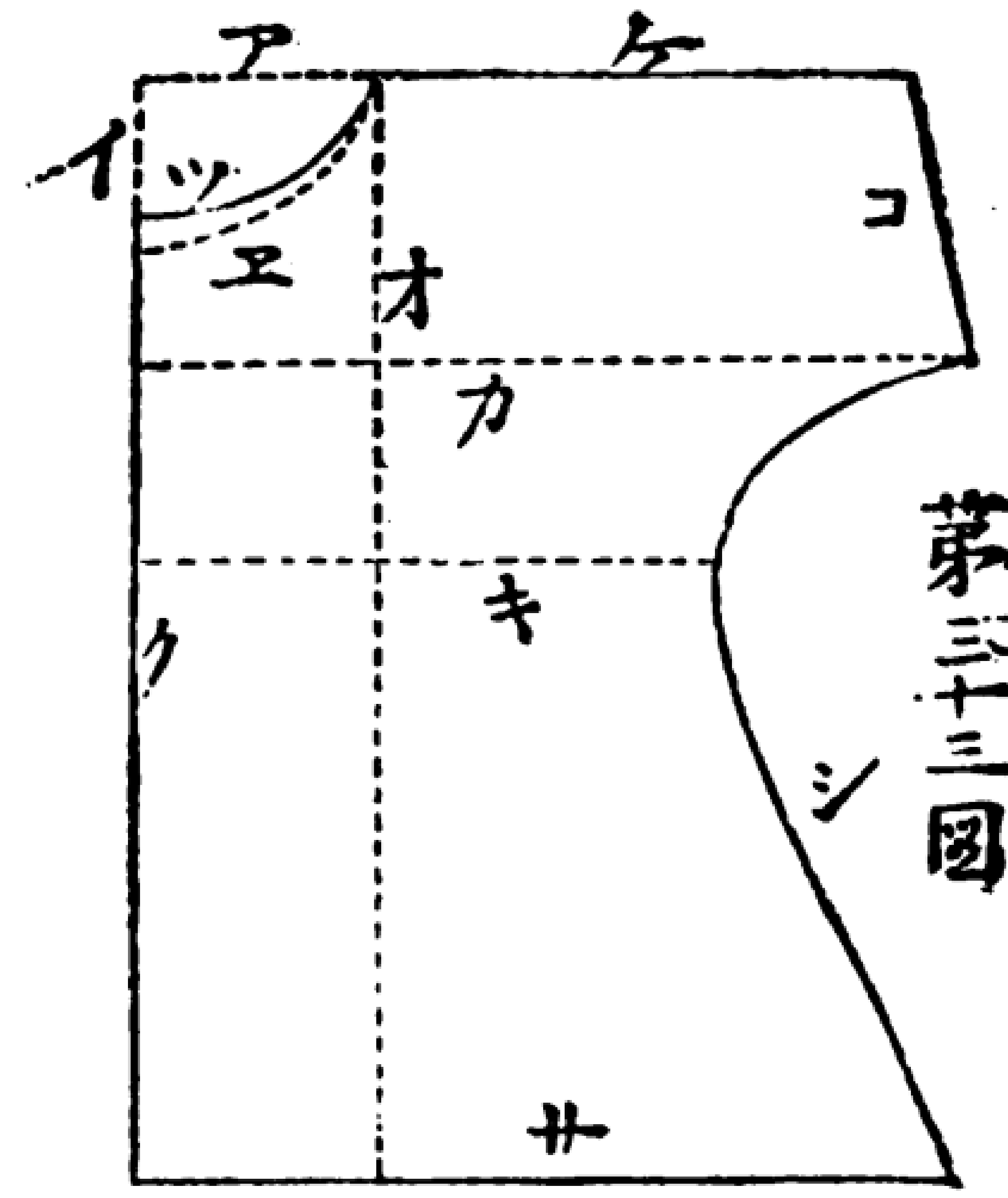
## ▲シミヅ

このシミヅも種類が澤山ありますがこゝでは極簡單の分を二つばかり申上ませう、裁ちかたは第三十三圖の通りで、この圖は前半身を見たるところでございます、用布はキヤリコ又はフランネルを用ゐます、先づ用布の巾を二つに折りそしてそれをまた圖中の(チ)の所より丈を二つ折にいたします、つまり四枚重なりますのでございます、丁度圖中の(ク)の所と(ク)の所とが折り目に當るので(こゝ)は切り離さずに置きます、扨圖に就て各部の寸法を申上ませう、(ア)二寸九分、(イ)一寸八分として、四枚重なりてあります其うちの下二枚を(ツ)の如く切りとります．これが後になるのでござります、次は上二枚を(エ)の點線の樣に切りとります、これが前になります、次に(ク)二寸三分(カ)五寸八分として(コ)を切りとります、(コ)の長さは二寸八分と致します、(オ)一尺一寸三分、(キ)は(エ)の點線の所より二寸下りまして四寸三分巾と致します、これが一番巾のせまき所でございます、(サ)は六寸といたします、これで裁ちかた丈終りましたから縫ひ方を申しませう、

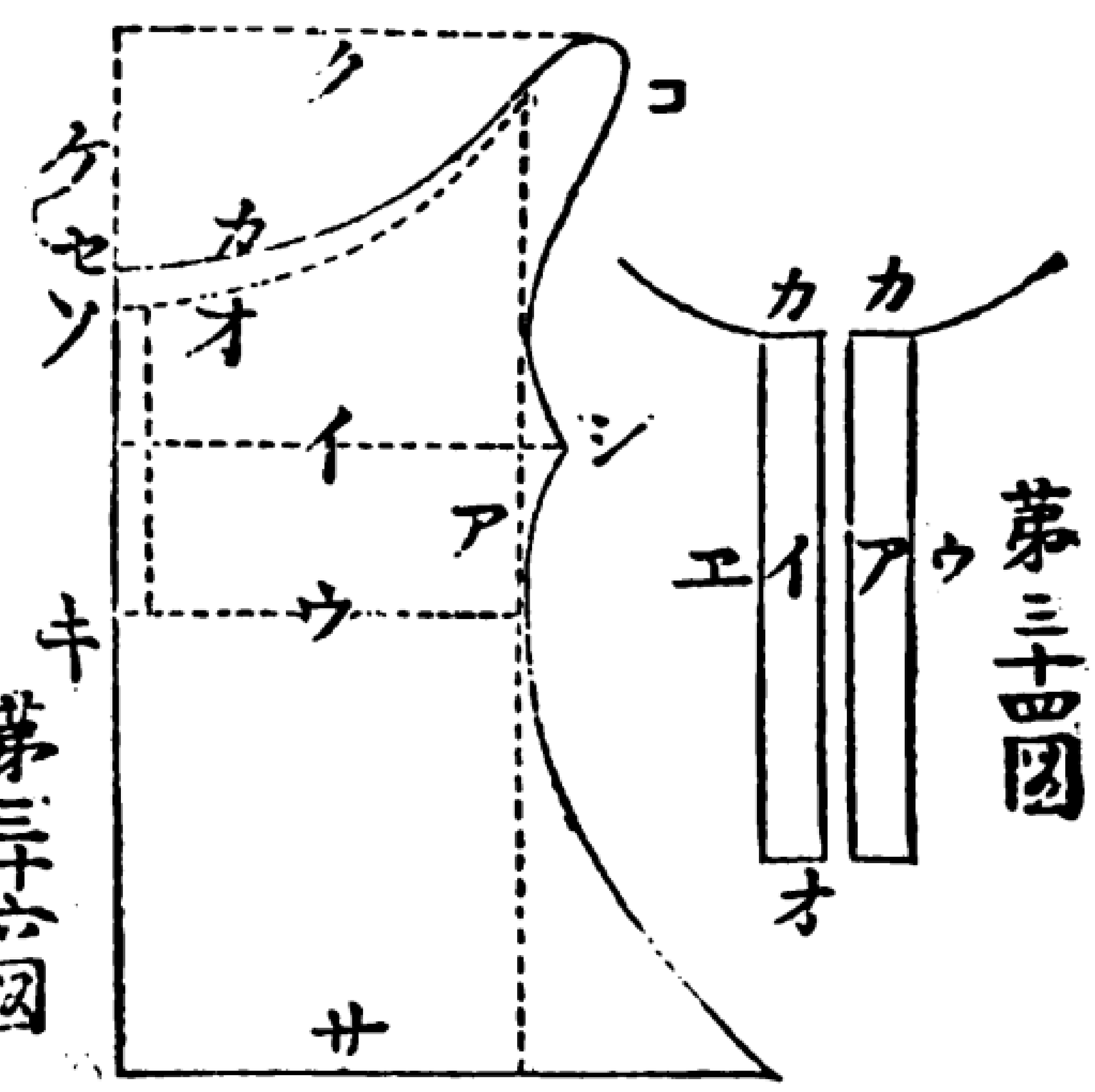
初に(コ)の所に見返しをつけます．こゝは飾として、エンブロイダ若くはレースをつけます、エンブロイダを付けまするには(コ)の所の切と見返しとの間にはさみましてつけます、レースのときは見返しをつけ終りましてから後にマツリつけます、見返しの付けかたは大人前掛其他にて申上ました通りでございます、(第一卷に委しく述へてあります、)次に前の衿の弓形に切りとりました所より下(ク)の所を四寸ばかり切りまして、下まへになる方即ち左の方(洋服類は前の合せめが並の着物と違ひますからこゝの重ねかたもちがうのでございます、)に持ち出しの切をつけます、この持し出しの切は巾一寸五分長四寸余で一方は表に縫ひつけて一方は裏にマツりつけます、下の端は眞直に縫ひます一寸申せば衿さきの樣に縫て置きます、つまり袋の樣にいたしますのでございます、)上まへは見返しをつけま

す、即ち第三十四圖の通になります、(ア)持出しの切、(イ)見返し、(ウ)下まへ(エ)上まへ、(オ)が持出しの下の端て(カ)が上の端て持出の切の輪になつた所を示したのでござります、第三十五圖は上まへと下まへと合せて出來上ました所で(ア)のとめを致ます、次第卅三圖の(シ)の所の袋縫ひにいたして裾がけを致します、(シ)の所の袋縫ひに致しますときは裾がけになる所だけは袋縫ひの下縫だけ致さすに置きます方が手まりよく出來上ります、裾がけは初めに一分五厘に折り次を八分位に折りまして、ミシンか手縫ひなれば返し縫ひに致しますしかし用布がフランネルの如き毛織物でありましたらミシンを用ゐるか千鳥がけに致します、次に衿に移ります、衿は初めに第三十三圖の通りに彎形になつてをる所を小針に三通り縫ひまして少々ギヤダを(縫ひちゞめのひだ)つくりまして見返しをつけますこゝも同圖の(コ)の所の樣に飾をつけます、次に第三十五圖の(イ)の穴をあけ穴かゞりを致し下まへには上まへの穴に相當した所にボタンをつけます。今一つ御話しいたしますのは第三十六圖の通りに裁ちますので前の裁ちかたのときの樣に四つ折りにいたしまして、(キ)の所が折り目になりてをります、(ク)四寸五分(チ)二寸五分として(カ)の如く下二枚をきりとります、これが後の衿でございます、次は(セ)より五分下りまして(オ)の點線の樣に上二枚をきります、これが前になります、(ソ)の所より一寸下りまして(イ)の巾を五寸五分にばかり(コ)より圖の如く彎曲にきりとります、次に(ソ)より三寸五分下りました所に(ウ)の巾四寸八分とし、(キ)の長さ(セ)の角より下まて)九寸五分(ア)一尺二寸とし(サ)の巾六寸として(シ)より(ス)まで又弓形にきります、扨縫ひますには初めに後の(セ)より(コ)、(コ)より(シ)まてと前は(ソ)より(コ)、(コ)より(シ)までの周圍に見返しをつけます、こゝも飾をつけますが矢張エンブロイダなれば間にはさみて見返しをつけ、レースなれば見返しをつけてあとよりつけます、次に(シ)より(ス)まで袋縫ひに致しまして(この袋縫ひの前の分と同樣に裾がけの所は一重縫ひにして置き

ます、)裾がけを致します、次に身の後の肩(コ)に穴をあけ穴かゝりを致し、前身の肩(コ)にボタンをつけます。




第三十三図



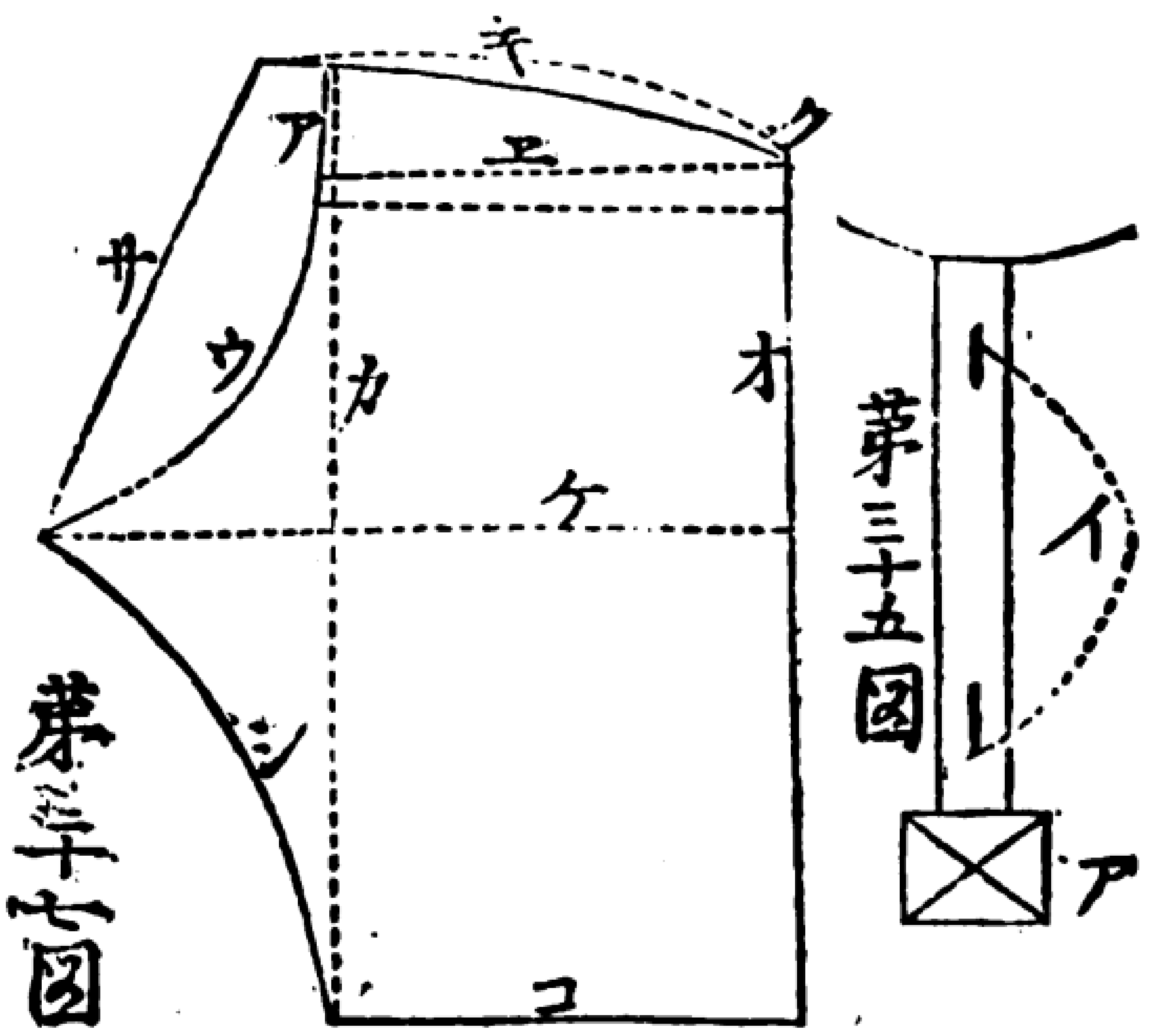

第三十四図

第三十六図

▲ブロース

これも前同様種々の形がございますが矢張てゝては簡單のものを申上ませう、用布もまたキヤラコか或はフランチルを用ゐます、扨裁ちますには用布の巾を二つ折にいたし又それ丈を二つ折にいたします、つまり前

にシミヅを裁ましたときの通りに折りますのでござります、そして第三十七圖の様に各部ときります、圖中の




第三十五図

第三十七図

(オ)は切の折目であつて續けてをくのでござります、この寸法は八寸次に(カ)九寸、(キ)(點線の如く端より端までの長さが五寸二分、(エ)四寸五分、(ク)より(オ)の長さ(チ)まで四寸三分といたして、(チ)の巾六寸八分、(コ)三寸七分とし又(サ)と(シ)との所を格好よく切りとります、次に(ア)一寸として四枚重りてありま

す切の上二枚をとりまして格好よく(ウ)(エ)の點線の様にきりとります、この切りまして短くなりました方が前になり長き方が後の切になります、次に(オ)の所を(ク)より三寸位切ります、次に長さ三寸五分、巾二寸の大サのもの二枚と長さ三寸五分、巾一寸のもの二枚、猶長九寸、巾二寸三分のもの一枚、長八寸五分巾二寸三分のもの一枚をとります、これより縫ひ方を申上ませう、初めに長三寸五分、巾二寸の切をとりまして、第三十七圖の(ク)より(オ)の所を三寸許裁ちきりました其所の前になる切に持ち出しをつけます、この持ち出しのつけ方はミシンのときに申しました通りに致しますこの持ち出しは左右ともつけます、次に長さ三寸五分巾一寸の切をとりまして、矢張(ク)より(オ)の所を三寸位切りましたそこの後の方に見返しをつけます、次にこの持出しの切と見返しの切との下部に第三十五圖の(ア)の如きとめをいるします、次に裾がけてございますがこれは斜の六分巾の切を見返しにつけるのてあります、この見返しは表につけるときと裏につけるときとございます、もし飾をつけまするなれば、エンブロイダ(これは前に申しました通り見返しの間にはさみ)レース(これを見返しをつけたあとにもつけます)などをつけます、次に裾より一寸二分位上りまして、一分位つまみてミシンにて縫ひます、手縫ひなれば返しぬひに致します、しかのこのあけの様な飾りはときにより て解とがありますからクシ縫ひを細くしてあげをいたした方がよろしうございます、次は又こゝより二分上りました所で一分つまみまして前同様あげを致します左右とも此様にして股下(シ)を袋縫ひ致しますがこのときはあげをいたした飾などがよく合ふ様に注意せねばなりません、そして左右を合せ終りましたら(ウ)の左右を合せ(サ)の左右をも合せます、其縫ひ込みは並の着物の背のかへりを反對にかへし内かはになる縫ひ込みの一枚を少々せまく切りとり外になる方の縫ひ込みの端を折込みてそこにミシンをかけるか手縫ひなればものによりて千鳥とかヤツリとかにておさへます、次に(エ)と(キ)の所を持ち出しのつきたる所と見返し

のつきました所とを除きて三通り小針にてぬひまして、ギヤダをつくりまして前の方は長八寸五分、巾二寸三分に裁ちてあります帯をつけ後は丈九寸、巾二寸三分の帯とつけます帯のつけ方はギヤダのかるよらぬ様に表に縫ひつけ兩端を縫ひまして、裏にマツリをつます、ミシンなれば表をぬひつけて、裏はかりぬひをさへてミシンをかけます、帯の兩はしに横に穴を一つつゝ中央に竪に前後一つつゝあけ穴かゝりを致します、これてクロースは出來上りました。

# 編物實習

女子職業學校教員　豐原繁尾子

## ▲夏手袋

少々順序がくるふ様でありますが、時候不相應のものであつくるしいものを御話しいたすよりは、かへりて其時節に適當したものゝ方が、これを御覽になる方にとりましても、直にその編みかたを用ゐて、品物を製作して實用に供するとかできれば、その方が興味が深からうと存じまして、此度は婦人用の夏手袋を御話いたすことにいたしました、此夏手袋は編方がいろ〳〵御坐いまして、一樣でありませぬが先つやさしき方から申上ませう、糸は主にレース糸を用ゐ、編棒は金屬製のヘーケルて針の先が極細き釣形になりて居るものでございます、初めに鎖編みを九十個ゆるく編みまして、それを捻れぬ様に注意してかけ、初めの目にヘーケルを入れて道の糸を引出します、これて九十個の鎖編が輪の様になります、それより五つ鎖編みを致しまして、はしめのかけ目の鎖編み三つをとばして帽子編みを一個いたします、かやうにしてこゝ一回致します、この五の鎖編みはよほどはしめの鎖編みよりかたく編む様にいたすのでございます、この五つの鎖編みと帽子編みとて第十七圖の(ア)の様な形のものが二十二個出來まして、初めのかけめの鎖が二つ殘ります、しかし二十二個の次の五つの鎖編みを致しましたらその二つの鎖編み

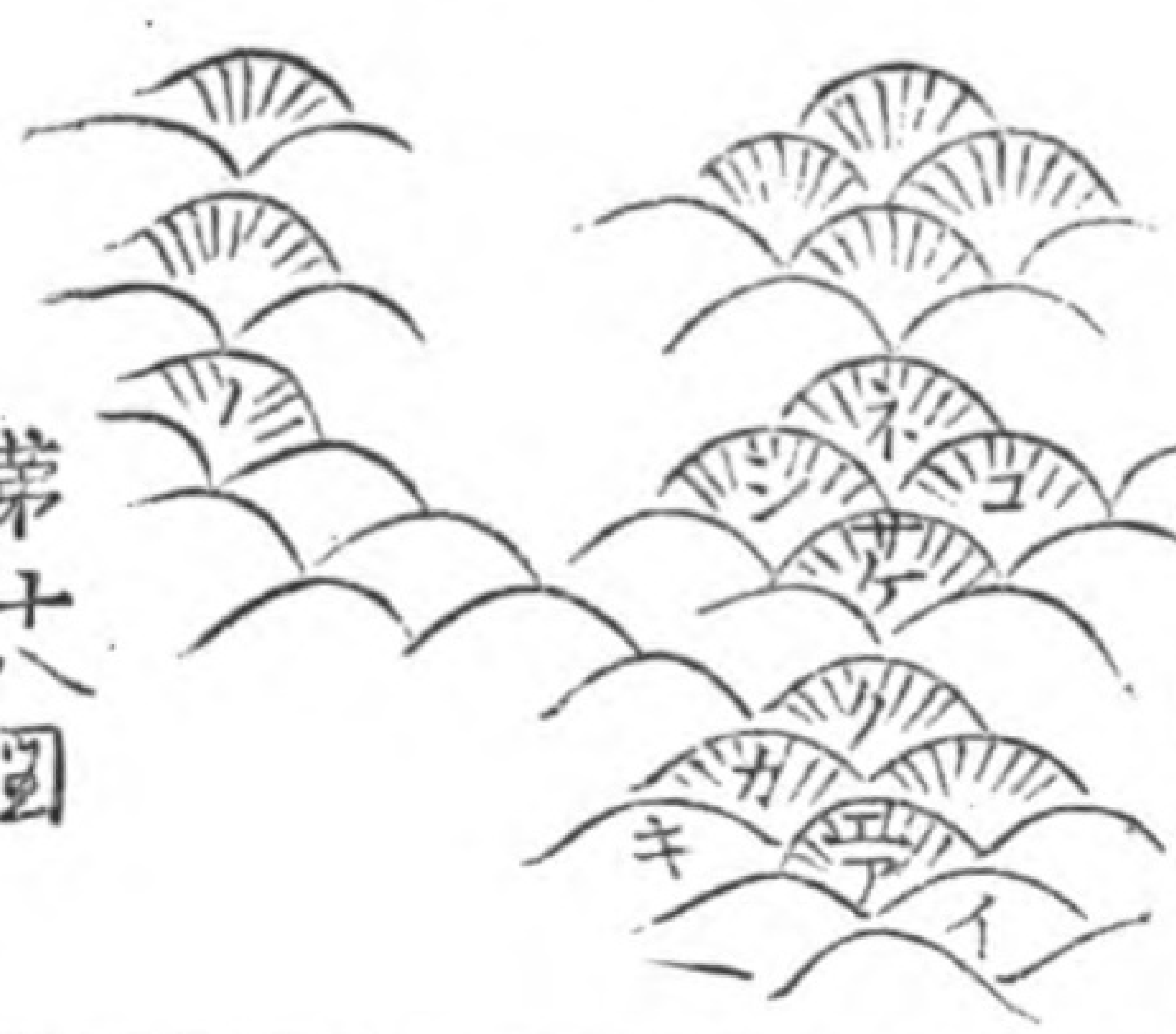
にかまわすに第一回めの五つの鎖編みの眞中の上の目一本をとりまして帽子編といたします、即ち圖中(イ)の如しいたします　次はやはり五つの鎖編みをいたして前の側で出來てをる五つの鎖編みの眞中の目の一本をとりまして帽子編みにてとめます、かやうにして編むこと九回致します、それ故圖中の(ア)(ウ)(エ)(オ)(カ)(キ)(ク)(ケ)といふ工合に數へてまゐりますと浪の樣な形が九つできて居りますから其九めの帽子編みの所に第十八圖の(ア)の如く長編み五つを同じ所に入れ編みます、この形は丁度松の樣に見えますからこれを松編みと申ます、これよりは並に只今まで編てまゐりました樣に一回致します、次の側は鎖編み五つ帽子編み一つと編てまゐりまして、前に出來てをる第十八圖の(ア)の右の隣(イ)の帽子編みの所に(ウ)の如く五つの長編みを一つ所にのくり(ア)の眞中即ち五つの長編みの眞中(エ)を皆すくひまして、帽子編みを致します、又次は(オ)の帽子編みの所に松編み(五つの長編みを一つ所に入れてあみましたもの)(カ)をつくります、

そして(キ)に帽子編みにてとめます、此他の所は皆並五つの鎖編みと一つの帽子編とて編でまゐります、次の側は並に編でまゐりまして、圖中の(ハ)に帽子編にてとめ(エ)の帽子編みの上に五つの長編み即ち松編み(ク)を編みます、次よりは又並に編て一回致します、次の側は松編みと致しませすに鎖編み五つと帽子編み一つとて並に一回致します、次の側になりますと前に松編みの出來てをる所まで並に編てまゐりまして、(ク)の松編みの上の眞中に帽子編みがいたしてありますからこの帽子編みの上に松編みを致します、其他は五つて鎖編みと一つて帽子編みとで編で一回いたします、次の側と(チ)の松編みの手前までは並に編てまいりまして、(マ)に松編みを致しまして(サ)に帽子編みをいたし又(シ)に松編みをいたします、其他は並に編て一回致します、次の側よりは拇指をこしらへはじめます、それ故此側は(コ)より右に數へて(ス)(セ)(メ)(タ)(チ)(ツ)と六つてめの鎖編みの所まで並に編てまゐり其眞中に並に帽子編みを致しましたらは五つの鎖編み

を致し又其所に帽子編みを致します、（つ）より帽子編みが一つ所に二度はいるのでございます）即ち圖中の（ツ）の中に（テ）の如きものができます、それより鎖五つ帽子編み一つと編でまゐること圖中（ム）（ナ）（ニ）と三度編ましたら松編みを致します、次に並に編むこと二度又（ナ）の上（コ）と（シ）の松編みの間に松編み（チ）を致します、あとは並に編て此側一回致します、次一回はいづれの所も並に編でまゐります、指のふやし目の所も並に編でまゐりますと第十九圖の（ア）及（イ）の通りに編てまゐります、これて二つの目がふえまに、次の側は指の増し目の兩わき圖中の（ウ）（エ）で二つ目をふやします、それより並に編でまゐり第十八圖の（ヌ）の松編みの上の帽子編みに松編みをいたします、次は並に二目（鎖編み五つ帽子編み一つとを二度いたします）編みまして、（チ）の松編みの上の帽子編みに松編みを致し又並に編むこと二度いたして第十八圖の（ノ）の上に又松編み一つを致して、次は並に編て一回致します、此の如く編てまゐり松編み四ツの上にはいつも四つの松編みをつくり其兩わきの松編み一つの上にはいつも一つの松編みをつくりて編てまゐりますと手の丈がのびてまゐります、指の所は第十九圖の如く（ア）（イ）（ウ）（エ）（オ）（カ）の如くふやしてそのふやしめ即ち第十九圖の（ウ）及（エ）の形が（キ）より數へさして六個出來ましたら次の側は一回並にまゐりもし松編を出さねばならぬ所に出あひましたらば手の甲の所には松編みを前よりの順序にしたがひて出します、）次の側には指のふやしめまでまゐりましたらば鎖の數をまして、（並は只五つの鎖編みをいたす所であります、）七ッの鎖編みを致し指の所をとばして次の鎖編みの眞中に帽子編みをしてまゐります、第二十圖の（ア）より（イ）までにわたる（ウ）の線が七ッの鎖編みで（エ）及（オ）は指のふやしめの終りの目でございます、これより上の側は拇指丈を殘して四本指のはいる所の周圍を編てまゐりまして、松編み四ッが一所にできてをる所即ち第十八圖の（ア）（ウ）（ク）（カ）（ケ）（コ）（チ）（シ）の如き形が六個重りて出來ましたら其上の側を一回並に（松編みの上ても鎖

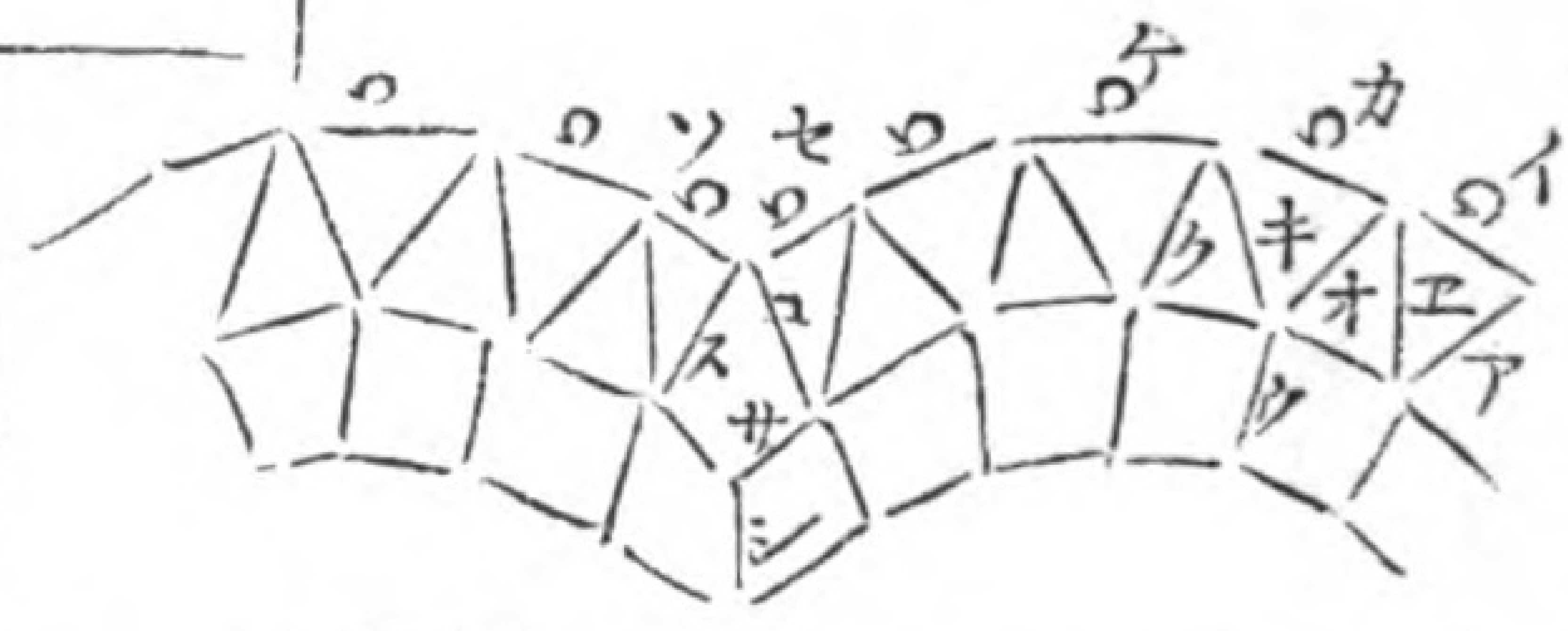
編みの上でもかまわずに)編てまゐりまして、次の側より飾をはじめます、飾は初め四ッの鎖編みをいたし前の側に出來てをる帽子編みの所に長編みを入れ又一つの鎖編みを致して前の側に出來てをる鎖編みの眞中の目に長編みを入れ又一つ鎖編みをいたしましては帽子編の上に長編みを入れます、即ち第二十一圖の(ウ)は長編み(エ)一つの鎖編みとで(ア)は鎖編み五つ(イ)は帽子編でとめたところでございます、かやうにして一回致しまして終にまゐりましたらばこの側の編み初めの四つの鎖編みの三つめの目に(四つの鎖編みの一つのめをのこしますのであります、)へ一ヶ所を入れ直に糸を引出しまして此側は終りました、次の側は今殘しました鎖編みの上に帽子編みを一つ致しまして、鎖編み一つを編み前の側に出來てをる長編み圖中の(ウ)の長編みを三つとばしまして、鎖編みのところを皆すくひまして、長編みを五つつくります、直に前の側であみてありました長編み(ウ)を三つとばしまして、帽子編みをいなします、又次は鎖編み二つを編みました前の側に編てあります長編み三つをとばして長編み五つを入れ又前の側に出來てをる長編み三つをとばして帽子編みを致します、第二十一圖の(オ)帽子編、(カ)二つの鎖編み、(キ)長編み、(ク)帽子編みでござゐます、かやうにして一周致しますこの側は大分つれますやうでございますけれどもあとの飾をつけますと格好がよろしくなるのであります、こゝ一回致しますと次の側に移ります初めに鎖編み二つを致して第二十一圖の(キ)長編みの上の目の向ふを一本すくひまして、長編み一つをあみ一つ鎖編みをいたしまして、次に又前に出來てをる長編みの上を向ふ一本すくひまして、長編みをあみ一つの鎖編み一つを編みます、かやうにして編てまゐり(ク)の帽子編みの目二本をすくひまして帽子編みを致します、次に又鎖二つを編みまして、前に出來てをて長編みの上の目に向ふを一本すくひまして、長編みをつくり鎖編み一つをして前の側にてきてをる長編みの上の目の向ふを一本すくひまして、長編みを入れますのやうにして前の側に出來てをる帽子編みの所に

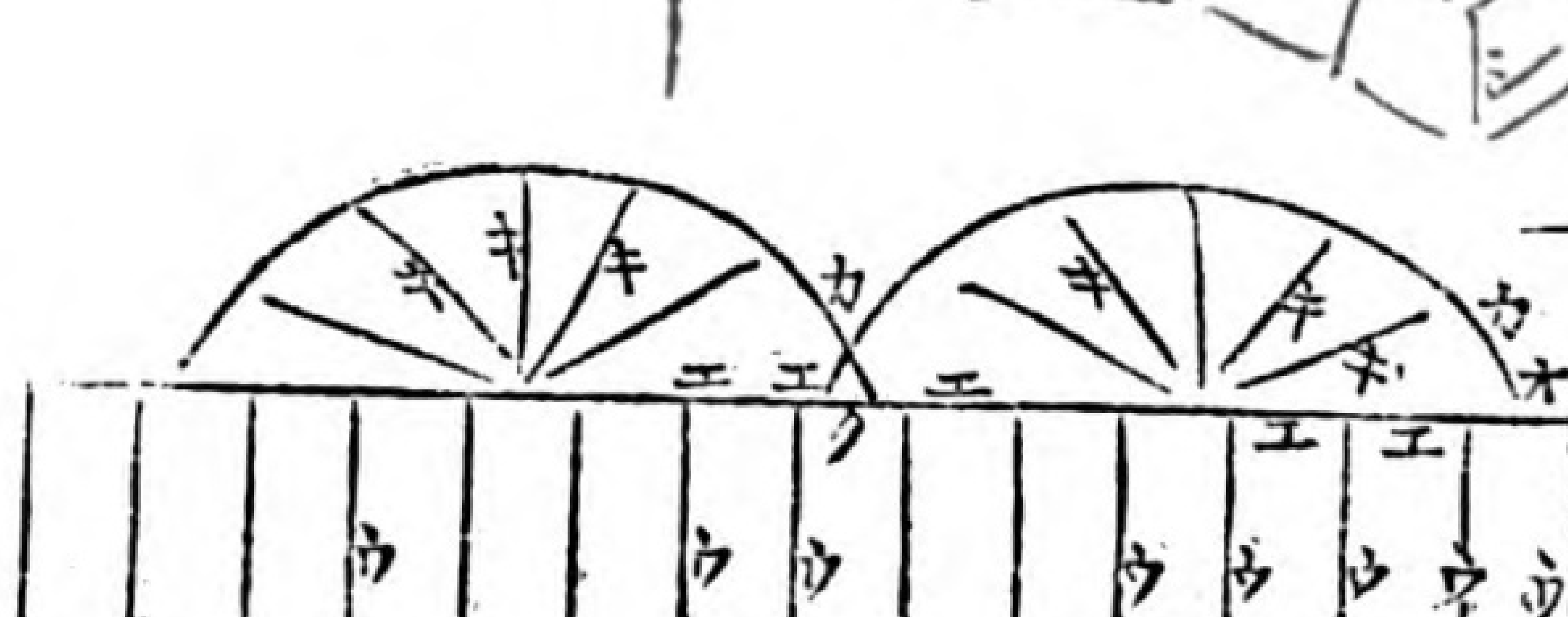
まゐりましたら又其上に帽子編みをいたします此の如くしてこの側一廻いたし終りに帽子編みを致しましたら次の側にうつるのでその次の側の初めは前の側て鎖編みが二つできてをるその目にヘーケルを入れ糸を直に引出し次の鎖にも亦ヘーケルを入れて糸を直に引出し長編みの上


第十八圖


第十七圖


第十九圖


第二十一圖


第二十二圖


第二十圖

の目までかやうにしてまゐりこゝて少しく糸を長く引出しまして長編み一つを編み第二十二圖の(ア)の如く致し鎖五つを編みまして其鎖の始めの目にヘーケルを入れ糸を引出しまして丸き形をつくります即圖中の(イ)の様なものができますそれより直にヘーケルに糸をかけて(ア)

の長編みと同しところにヘーケルを入れて、糸を引出し（いはゞ長編みの編みかけの様にいたしてをきまして）又直にヘーケルに糸をかけて圖中（ウ）の所の目の向ふ一本をとりまして、ヘーケルを入れ今かけました所まで糸を引出してこの度は前にヘーケルにかゝりてある糸（長編みを編みかけてやめましたときにかゝりて居ります糸）と此度のと同時に引出しまし、圖中（エ）及（オ）の様になります、次に又五ッの鎖編みをいたしまして（イ）の如く（カ）の丸き形をつくります、次は（キ）これは（エ）の通りに（ク）は（オ）の通りに編みまして（ケ）の丸き形をつくります、かやうにして（コ）までゝありましたら（サ）の鎖編み、（シ）の帽子編みをとばして次の（ス）を編みます、この（コ）より（ス）に移るとさよく注意いたしませぬと五つの鎖編みをいたして丸き形（セ）或は（ソ）を忘れますから念のため申してをきます、もし丸き形を忘れて編みませぬときは飾の間がすきましてをかしなものになります、かやうにしてこの側ができましたらば、四本の指がはいる部分だけは出來上りました。

これより拇指の方にかゝります、拇指は前に第二十圖に就て申しました同圖の（ア）（イ）の間の七ッの鎖編みの眞中に帽子編みを致し四本指のはいる方を（飾のつきました所）手前にして持ちまして、五つの鎖編みをしては前に出來てをる五つの鎖編みの眞中に帽子編みを一ッ編み又五つの鎖編みをいたしては帽子編みをして一回いたします、終の所は指のまたになりますから一ッの帽子編みを前の側に出來てをる五ッの鎖編みの上にいたし次の五ッの鎖編みの（これも前の側に出來てをるもの）眞中に帽子編みをいたします、この様に編みますと鎖編み五ッ編みまする所が一ッへります、又此上の側もこの様にして都合三度目數をへらします、次には其上を只一回並に編みまして、次の側よりは飾になります飾は四本の指のはいる方と同様に致しますこれで手頸より先ぎ丈は出來上りました

（つゞく）

新秋夜露濕荷葉　不斷清香逐曉風
滿目波華春意在　晩霞涵錦照芙蓉
明　宣宗

# 噴火山の話（上）

松琴女史

地球上で噴火山の多いのは、歐羅巴では以太利半島で、他は太平洋の沿岸の一地方、殊に島々に多く、太西洋で西印度諸島、氷州、並に南北亞米利加の西岸であります。

火山の中で、現今噴火して居りますものを活火山と稱します、現今噴火して居りませぬが、昔噴火した事があつたもの、即ち歷史口碑に噴火の事が殘つて居るものを消火山と稱へます、噴火山には違ひありませんが、噴火の事實が歷史にも口碑にも殘つて居らぬものを睡眠火山と稱します。

元來火山は、大陸では海岸に近くあり、又海島に多くあると云ふ事は、事實の上から示される事でありますが、我國も此例に漏れませんので、外の事では如何はしいが、火山の數では列强國に讓りませぬ。

此統計は少し古う御座いますが、地球上で活火山の數は、島に四十一座大陸に九十八座あります、合計百卅九座となります、睡眠火山は六百七十二座と申す事で御座います、日本のでは新しい統計で、消活火山を併せて百七十座あります、此中に火氣なく、硫化水素や亞硫酸瓦斯を吐出して居ります硫黃洞と云ふものが、卅八口あります。

## ▲火山作用

火山は如何にして出來るかと申しますと、地球の內部には、高溫度を保つ岩石で充滿されて居るらしいので、是が表面の岩石即ち地殼の爲めに壓し付けられて、固躰の有樣で居りますが、常に外部からの壓力に打ち勝つて、液躰の有樣に變じ地表へ跳ね出そうとして居ります、爲めに少しでも地殼に薄弱な部分があり、又地下の高熱躰に激動でも起りますと、內部から地殼を押し上げて、其處へ裂け目を作ります、そうすると此裂隙を

通して、高熱の熔岩(壓力が減じたる爲めに液體となる)が迸出しますので、此作用を稱して火山作用と云ひます、火山の噴火は此作用の一種であります。

此迸岩の併發は、古來數多の學者に觀察せられましたもので御座いますが、此恐しい現象は、實際如何にして觀察せられるかと申しますと、火山破裂の時に觀察するのであります、熔岩の迸發(火山破裂と云ふも熔岩の迸發せぬ事多し、盤梯山の如き是なり)します時でも、長時間中には平靜な時があつて冒險的ながらも火口に附寄つて十分な觀察を遂げ得らる機會があります。

好都合なのは、火山の小破裂の時で御座います、殊に小破裂が、數週間から一年以上も引續いて活動する際に得らるゝ機會で御座います、地中海の中にありますストロンボリー島は、其中央に噴火山を載せて居りますか、始終小破裂をして居りますので、觀察上には好都合であります、茲に學者は、四時何の危險もなく、恰も天然の實驗場と申して宜しふ御座います、西曆一千七百八十八年、スパランサニ氏によりて世に紹介せられましたが、氏の記事を見ますと、

「著名なるストロンボリー山は、平面圖にては、楕圓形にして、側面圖にては三角形なり、山腹は、水平線と三十度乃至五十度に傾斜し、三千呎の高さなり。

山頂には火口あり、火山壁の北方の部分が缺壞せり、此部分より山麓の海に至る迄の間の山腹は、滑らかなる平面の坂を作りて五十度に傾斜せり、火口よりの噴出物は、火口壁の上緣に投げ上げられて、此坂を滑り海に入り浪に洗はれて遠方へ運ばるゝなるべし」と。

千八百二十年に、スクロープ氏の實見の記錄によりますと、當時火口中には更に二つの噴火口がありまして、何れも黑色なる噴出岩にて圍まれて居ました、一の噴火口は靜かで、內には何物も見えませんでしたが、數分間を經過しましたら、轟々と物凄きがしますと、丁度熔鑛爐の口を開きました時の樣に、赤熱せられた蒸氣が迸出し、數分間に亘りました。

一方の噴火口は、直徑二十呎もあらんと思はれまして、前記の噴火口より數間を隔てたる處にあり、その內に

は、曾てさへ殆んど白熱に近しと見ゆる赤殷の熔躰が、明かに見られました、此熔躰は、十分或は十五分毎に噴火口を昇降して居ります、その噴火口の緣迄張ります每に、恰も大な水泡が破裂する樣に、沸騰して濃厚な瓦斯が垂直に吹き上げられ、之に伴ふて白熱の熔岩や、緣邊の燒石を數百尺の高さに吹き上げます、此中の一部分は、火口の外壁を超えて出ますが、大半は再び火口の中に落ちて再び投げ上げられます、噴出物の夥しき額は、前に述べました北方の缺け目から、坂を辷り落ちて海に入ります、此仕事は、數千年來間斷なく今日迄も行はれて居るのでありますから、早晚、地中海は此噴出物で海底を掩はれる事でありませふ。

ニカラグヮ湖の近邊にありますマサヤ火山は、航海者が惡魔の口と云ふ異名を附けて居ますが、是もストロンボリーと同樣に、永久噴火の有樣にある山で、白熱せられた燒石が、間斷なく火山口の底から放射せられて居ります、又十五分每に火山口の底即ち、輝く淵から熔けた岩の昇降するのが見えます、此迸出の現象は、少なくも一千五百廿九年以來のもので御座いまして、此年に此山を觀察致しました歷史家は述べて申しまするは。



「平靜なる有樣では、黑色の燒石を泛べたる熔岩の面は、火山口の外壁より數百尺以下に見ゆるが、之が俄然として泡起沸騰して火山口の緣に屆く迄に漲り赤熱の岩石を吐出す」等

此記事中に見える「永劫の光」は眞の炎にはあらざるなり、噴火口より出てます水蒸氣が、雲の有樣にて立ち昇る處へ、噴火口内にある白熱の熔岩が映じて、恰も炎の樣に

見ゆるのであります、此光輝は甚だ强きもので、火山の周圍の國を照して、恰も滿月の時の樣だと申ます。以上のストロンボリー火山と、マサヤ火山とは、四近の海を航する船には燈明臺の代りとなります。

其他の火山で、永久噴火でなく時々迸出致します火山ても、迸出の有樣は、以上の二例と同樣で御座います。

噴火口より迸發せられました彈力性の液躰は、多くの實檢によりますに、多量の水蒸氣を含有して居ります、サー、ハヒリー、テビー氏の觀察によりますと、噴火口より白き蒸氣の柱が卷き揚りつゝ立ち昇ります、若し風の爲めに擾亂せらるゝ事なければ、山頂にて、緻密にして重い雲となります、之は暫時にして、瀑津瀨の雨となつて四周の山麓に漲きます。

永久噴火の火山では、噴出せられたる蒸氣は、絕間なく白色或は鼠色の雲となり、天氣か靜かなれば、常に山頂に止りますし、又霧狀をなして山頂を圍みますし、又霧雨となつて山頂に漲きますし、又大氣の溫度、濕度に從て、風に吹き飛ばされ、通例の雲と混じます。

さて噴出せられた熔岩の固まつたのを取つて顯微鏡の下に照らして、其中の孔竅や空所を見ますに水分は少しも見えませぬ、噴出の際に、水分が悉く驅逐せられたのであります。

元來、水は外部よりの壓力次第て、其沸騰點が變はります、今、空氣と交通せぬ樣に、丈夫な器に水を密閉して、强く熱する時には、水蒸氣に變化する事なくして、溫度が昇り、赤熱の有樣になる水を得べし、今此器の一部を開いて、急に空氣と交通せしめますと、是迄高壓力あつたものが、壓力が減した爲めに、一時に氣化して猛烈な爆發が起ります。

熔岩迸發の時にも、之と同樣な事が起りますので、地下の深所にある溶岩は、粒狀の結晶を混じた飴の樣な物て、此中に赤熱せられた水や蒸氣の泡を含みます、是等は地下の壓力相當の密度を有します、之が流れて一旦噴火坑の下に來ますと、上層の壓力が減じた爲めに、溶岩中の赤熱せられた水は、大きな蒸氣の泡となりまして、比重の少ない爲めに、溶岩中を通して上昇しまして熔岩の表面で破裂します、此泡は、何程の深さの處から上りますかは、明かに分かりませぬが、熔岩の性質や、地層裂隙の形狀にも關係致しませう。

## 講義

# 歴代和歌評釋（八）後撰集の部

文學士　鹽井雨江

○

菅原や伏見の暮れに見わたせば
　霞にまがふ小初瀬の山

○此の歌は、後撰集十七の巻にありて、作者は知られず。伏見の里にて、折りからの眺望をうたへるなり。

○菅原、伏見。共に大和の國なる里の名にて、伏見は、菅原の中にある故に、菅原の伏見の里といふ意にて、かく言へるなり。やは感動詞なり。古今集に「いざこゝに我が世はへなむ菅原や伏見の里の荒れまくもをし」といへると仝じ。○伏見の暮れに。伏見の里にて、夕暮れに見わたすなれば、かく言へるなり。○霞にまがふ。まがふとは、ものの混りて、分け難きさまをいふ。されば、霞につゝまれて、山の明かに見わけ難きさまをいへるなり。○小初瀬の山。仝じく大和にあり。

○一首の意は、伏見の里の夕暮れ、見わたせば、小初瀬の山も、霞につゝまれて、ほんのりとたそがれて見ゆるさまなり。見わたす山邊も、夕の霞につゝまれて、暮色の靄然とくれかゝりたる伏見の里の眺望なり。

○ありのまゝの景色を、見たるまゝにのべたるなれど、折りからの風景、詞の上に動きて、眼前に浮びて見ゆる心地して、風韻限りなく深し。

○

今はとて立ちかへりゆく故郷の
　ふはの關路に都忘るな

○これも、仝集の十九の巻にあり。作者は藤原の清正にて、同じ家に久しう侍りける女の、美濃の國なる親の許を訪ひに歸りゆくを送りてよめるなり。

○今はとて。今は親の許に歸へらむとての意なり。

○立ち歸へりゆく。美濃の國へ立ち歸へり行く事なり。○故鄕。親の住む所なれは、美濃の國を、故鄕と言へるなり。○ふはの關。不破の關と書く。美濃の國不破の郡にて、其處に關のありたるなり。此の關を越えて、女の親の住む所へは歸へるなり。○都忘るな。都を忘るなよとたのみたるなり。不破の關路に都忘るなとは、畢竟、親の故鄕へ歸るとも、我がすむものと都を忘るるなよとたのみたるなり。

○一首の意は、今は親の許に歸へらむとて、お前は、美濃の國へ歸へりゆくか、誠に名殘り惜しや。不破の關を越えて、故鄕へ歸へるとも、必ず〱此の我が住む都を忘るるなよ、我が事を忘れてくれるなよといふ意なり。別れを惜みて、我れを忘れざる事をたのみきこえたる送別の歌なん。

○遠く故鄕へ歸へるとも都を忘るなといふに、關路に都忘るなといひたる、面白し。關路といひたる、面白し。關は猥りに人を通さぬ所にて、往來の容易ならぬ意もこもれば、自から遠く隔たりゆきて逢ひかたきなりゆくをかなしむ情景にひゞきあひたればなり。不破の關の名のふの音の、故鄕のふの音と重さなりたる所も、自から、音調の上に妙を得たり。すべて、一首の調わはれに、別れを惜む情、限りなくひゞきて、いとやさしくかなしき歌なりや。

○

いとどしく過ぎ行く方の戀しきに
　うらやましくもかへる浪かな

○これも、仝集仝卷にあり。作者は在原の業平朝臣なり。東へ罷りけるに、過ぎぬる方戀しく覺えける程に、川を渡りけるに、浪の立ちけるを見てよめるよしあり。

○いとどしく。いよ〱ますます〱といふ意なり。いよ〱益々戀しきなり。○過ぎ行く方。都をさして言へるなり。遠くなりゆく都の戀しき意なり。○戀しきに。戀しく覺ゆるをといふ意に見るべし。うらやましくも。もは感動詞なり。○かへる浪。岸にうち寄する浪の、ますやがて岸をはなれて引きゆくを、かへるといへるなり。

○一首の意は、いよ〱遠くなりゆく我が旅路、いよ〱都の方の戀しく覺ゆるを、見れば、岸にうち寄する浪は、やがてかへりゆく。あはれ、誠にうらやましくもかへる浪よといふ意なり。旋波いよ〱心細さに堪へ

ぬ旅情、都を戀しく思ふにつけて、かへる浪のかへるといふ詞より、はかなき浪をもうらやみたるなり。

○いよ〳〵遠く離れゆく我が身に反對せるやうに、浪を見立てて、それをうらやましといひたる趣向は、かへる浪のかへるといふ詞によりたる細工なり。然れども、其の細工、よく自然にして、毫も纖巧小細工の跡をとゞめず。これ、此の朝臣の千古に卓絶せる手腕を示せるものなり。

○藤氏の跋扈せる都門の浮世に憤慨して、去つてたづぬる東海の山水、世外に自然の友をもとめて、此の世を忘れはてむとする旅途、さすがに馴れし都の人の戀しさに堪へずして、おぼえずいでたる詩人の愚痴、げにあはれときこえたりや。或は餘りに愚痴とや笑はむ。然れども、かゝる愚痴は、思ひあまる感情のやる方なきまゝのわざにて、誠に面白き詩情なり。參議篁が隱岐の國に流されたまひける時、難波津を舟出すとて、「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人にはつげよ海士の釣舟」とて、はかなき釣舟をよびかけて、都の人に言づてよとたのまれしも、この手振りなり。

○

まだ知らぬ人もありけり東路に
我れも行きてぞ住むべかりける

○これも、全集の二十の巻にあり。作者は清愼公藤原の實頼なり。公の一男敦敏少將の死去せられし後、此の少將の乳母なりける女の、今は陸奥の國守の妻となり居るが許より、少將の死にたるを、未だ知らずして、少將の乘馬にとて、馬を贈り來たりける時に、公のよめるなり。

○まだ知らぬ。我が子敦敏の死去せる事をも未だ知らずといふ事なり。○ありけり。けりは感動詞なり。○東路。逢坂山より以東、陸奥に至るまでの道を、東路といふ。こゝは、東の方といふ意にて、陸奥のわたりを、おほよそにさして言へるなり。○我れ。公自身なり。○住むべかりける。住むをよしと思ふワイといふやうなる意なり。

○一首の意は、東の國には、我が子の、死にたる事を、未だ知らざる人もあるワイ。誠に憂き事を知らぬよき國なり。我れも、其の東の國に行きて住むをよしと思ふワイ。さる時は、かゝる憂き事も知らざらむといふ事なり。

〇理屈の眼より見れば、誠に馬鹿々々しき考へなり。されど、其の道理をはなれ、幼く馬鹿々々しきところ、なか／＼に、限りなくあはれなり。これ、去り難き愛情の極なればなり。

〇

別れにし程をはてともおもほえず
　戀しき事の限りなければ

〇これも、全集全卷にあり。作者は時望朝臣の妻なり。亡夫時望の一周忌の近づきたる頃、ある人の許より、いかに思ふらむと言ひおこせたりければ、よめるなり。

〇別れにし程。去年亡夫に別れたる頃といふ意にて、一周忌の頃をさしたるなり。〇はて。終りにて、忌服の終りの意なり。〇戀しき事。亡夫を戀しく思ふ事なり。

〇一首の意は、亡夫を戀しく思ふ事の、我れは限なき故に、一周忌の時が來たりても、なほ忌服の終りとは思はずといふ事にて、一周忌の近づきたる頃、或人の許より、いかに思ふらむと言ひ來たれるに答へて、一周忌をも、なほ忌服の終るとおぼえず、悲嘆にくれ居る意をのべたるなり。

〇何にといふ事はなけれども、亡き良人を戀ふ貞婦の心情、げにとおぼえて、かなしき歌なり。

〇

程もなく誰れもおくれぬ世なれども
　とまるはゆくを悲しとぞ見る

〇これも、全集全卷にあり。作者は伊勢なれど、題はしらず。

〇程もなく。間もなくやがて直ちにといふ意なり。〇誰れもおくれぬ世。世の中の人は、誰れとても、いつまでも世に生き殘りて居る事は無きをいへるなり。皆やがて死ぬものなるをいへるなり。〇とまるは。とまる人はなり。なほ暫時あとに殘り居る人なり。〇ゆくを。ゆく人をなり。死んでゆく人なり。〇悲しとぞ見る。悲しく思ふといふ事なり。

〇一首の意は、世の中は生者必滅、誰とても何時までも生存する者にはあらず、やがて間もなく死んでゆくなれども、さて、あとに暫時殘る人は、死んでゆく人を悲しく思ふヮイといふ事にて、人世無常、我れも誰れも、皆死ぬ事とは知られておれど、さて、なほ生存し居

る我が身には、人の死は悲しいといふ事なり。
○貫之の歌に「明日知らぬ我か身と思へど、暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ」といふあり。これと同じ着想の歌なり。人世の無常は、既によく知り悉くされたる理なり。然れども、人の死を悲むは、もと自然の人の愛情に出づ。生命のある間は、此の自然の愛情は去り難し。理論を以ても、此の愛情は滅し難し。これ、人情のことわりなり。此の二首、共に自然の人情をつくして、大に面白し。思想のあらはし方より言ふ時は、貫之の方やゝまさりたり。

○

悲しさの慰むべくもあらざりつ
　夢のうちにも夢と見ゆれば

○これも、全集全巻にあり。作者は大輔なり。保明親王の御乳母なりけり。親王の薨後、其の御息所なりける玄上朝臣の女、悲しみたまふ事いふばかりもあらず、折りから、大輔の夢に親王の見えたまへりといふ事を聞きて、いとうらやましく思はれ、「時の間も慰めつらむ覺めぬは夢にだに見ぬ我れぞ悲しき」と詠じて、大輔の許におくられけり。大輔、そのかへしに、この歌をよめるなり。
○悲しさ。亡き養君を惜む心の悲みなり。○慰むべくも云々。亡き親王樣を、夢に見たれど、其の夢に、我が心を慰むる事の出來ざりしといふ事なり。大鏡には、あらざりつをあらざりきとせり。意は同じなれど、きの方、調よし。○夢と見ゆれば。現に親王樣にあふと見たる夢にはあらずして、夢に親王樣にあふといふ事を夢に見たる故にといふ事なり。此の句、大鏡には「夢と見しかば」とあり。こゝも、大鏡の方にしたし。
○一首の意は、夢に親王樣にあふといふ事を夢に見たるにて、夢と知りつゝ親王樣を夢に見たる事故に、其の夢の間も、やはり悲しく、我か心の悲みは慰むる事は出來ませんでしたといふ事にて、玄上朝臣の女が、大輔にむかひて、夢の間は、現に親王にあふと思ひて、其の夢の間ばかりは、悲みを忘れたらむ、うらやましと言ひこされたるに答へて、夢と見たる夢故に、慰めがたかりしと言ひたるなり。
○別にさしたる歌にはあらねども、夢の中に夢と見しといふは、面白からずやは。

武藏野といつくたさして分入らん
　行もかへるも果しなければ　　北條氏康

# 國文學講義

## 憎きもの（上）（枕草紙）

文學士　尾上柴舟

急ぐことあるをりに、長ごとする客人。あなづらはしき人ならば、後になど云ひても、おひやりつべけれども、さすがに、心はづかしき人、いとにくし

○長ごと。長話なり。○あなづらはしき人。我心に輕く思ふ人。○後になど云ひても云々。後に來たまへ今急用あれば、など云ひて、追ひかへし得れどなり。○心はづかしき人。我心に恥かしと思ふ人、われよりは、氣品等級などの、すぐれたる人。○客人の下に、いと憎し、と云ふ語を添へて解すべし。

○急用ある時に、長座して、長物語する客人は、いと憎きものなり。されど、其客人、我心に輕く思はるゝ人ならば、何の遠慮もなく、今、用事あれば、また、後に來て話したまへ、など云ひて、追ひ還してもよけれど、然しながら、我心に耻かし、と思ふ人は、追ひ還すこともかなはねば、いと〳〵、憎くおもはる、といふなり。

硯に、髪の入りて磨られたる。また、墨のなかに、石こもりて、ぎし〳〵ときしみたる。俄に、わづらふ人のあるに、驗者もとむるに、例あるところにはあらで、外に在るに、尋ねありくほどに、待遠に久しきを、辛うじて、待ちつけて喜びながら、加持せさするに、此ころの物怪に困じげるにや、居るまゝに、すなはち、眠り聲になりたる、いと憎し。

○硯に、髪の入りて云々。硯の水に、髪の毛の落ち入りたるが、墨磨るまゝに、下になりて、磨られたる、いと憎し、といふなり。かゝる事、今もよくありて、些細の事ながら、何となく、不氣味に感ぜらるゝなり。古今人情の一樣なる、かゝる處に就きて、見るを得べし。磨られたるの次に、いと憎し、の語を加へて解すべし。次ぎ〳〵、書きさしたるところは、皆かくすべ

し。○墨の中に、石こもりて云々。石こもりて、は、石の混じたるなり。墨の中に、小さき石の雜りたるなり。ぎし〱ときしみたる、ぎし〱は、墨の中の石の硯の面に觸るゝ音。きしみたるは、思ふ樣に、墨の硯の上をすべらぬを云ふなり。○驗者もとむるに。驗者は、修驗者、いはゆる、山伏の事。修驗道（佛敎の一流派にして、神佛二敎を混合したる一種の敎）に入りたるより、しかいふ。當時は、迷信の深かりしを以て、病あれば、醫師よりも、先づ、修驗者を求めてこれに、平癒の祈禱を爲さしめしなり。○加持せさするに。加持は、祈禱といふにおなじ。修驗者をして、祈禱をなさしむるを云ふ。○此頃の物のけに困じけるにや云々。物の怪は、人に取り附きて、惱亂せしむる惡靈を云ふ。この事平安朝には、殊に多く、大抵の病は、この爲めなるが如く云へり。されば、物の怪を退散せしめて、病を癒す術ある修驗者は、諸處の病家に招待せられて、多忙なりしなり。故に折角、我方に招き來りても、諸處の物の怪の祈禱に、困却し、疲勞したればにやあらむ。座り居るまゝに、眠り聲になり行く、と云ふなり。

○硯の水の中に、落髮の交り居りて、墨を磨れば、共に磨られたるも、いと憎きものなり。また、墨の中に小さき石の混じたるが爲め、磨るまゝに、硯の面に、ぎし〱と音して、きしみたる、齒も浮くやうにて、いと憎し。また、不意に發病したる人あれば、これが、平癒の祈禱をせむとて、修驗者を探し求むるに、常に居る處には居らずして、全く、外の方に居る故、更にその邊を尋ね廻れば、此方は、非常に待遠くて、時も久しくかゝれり。それをば、やうやうに待ちつけて、打ち喜びながら、病人の爲め、物の怪退散の祈禱をなさしむるに、修驗者も、此頃諸處に招かれて、物の怪調伏を賴まれし故ならむ、座りて祈り居る間に、すぐに、眠り聲になりたるは、いと憎きものなり。

○硯上の髮墨中の石、いづれも、まが〱しき心地するは、今もまた然り。されど、何人も、特に、これに對して、さほどの注意を拂ざるなり。少納言よく、これを寫して、眼前に躍如たらしむ、妙手といふべし。驗者の懇請にも拘らず。祈禱しながら、黑甜鄕裡に入る。これ、また、憎むべきの事なり。迎ふるまでを精

叙し、迎へたる後を畧叙す。精粗の對照、甚だ、力あるを覺ゆ。但し、わづらふ人の在るに、驗者もとむるに、外に在るに、尋ねありくほどにの、にの重複は、句法を單調ならしめて、甚だ趣を殺ぐ心地す。文をつくる者、また、留意するを要す。

なでうこととなき人の、すゞろに、えがちに物いたう云ひたる。火桶、炭櫃などに、手のうらうちかへし、皺おしのべなどして、あぶりをる者。いつかは、若やかなる人などの、さはしたりし。老いばみ、うたてある者こそ、火桶の端に足をさへもたげて、もの云ふまゝに、おし磨りなどもすらめ。

○なでうこととなき人。いはゆる、何でもなき人、何の取り處もなき、平々凡々の人なり。○すゞろに、えがちに。すゞろは、そゞろに同し。みだりに、むやみに位の意。えがちに、心得顏とに、云ふと等し。得意らしく、と云ふや、尤も、よく、當らむ。○手のうら、うちうち返し。手のうらは、手の裏面、乃ち、手の平なり。うらかへし、は、手を裏返し〱しながら、火にあたるを云ふ。○老いばみ。老いになりたる人を云ふ。ばむは氣色ばむ、黄ばむなどの、ばむとおなじく、その方にすゝむを云ふ。○うたてあるもの。此處にては、惡しくある者、下品なる者の意なり。元來うたて、は、うたゝとおなじ。物ごとの移りて、甚しくなりゆくを云ふ。○火桶の端に、足をさへもたげて云々。下品なる者共は、たゞ手をかざすのみにては滿足せず。火鉢の緣に、足をも持ち上げて、物言ひながら、其足を、互に、磨り合せすなどの擧動をも爲す、といふなり。

○何の取り處もなき、平凡なる人の、むやみに得意らしく、饒舌り散らすは、いと憎きものなり。また、火桶(圓形の火鉢)、炭櫃(角形)などに、あたるに、手の平をうちかへし、うち返し、又は、手の皺を押しのばしなどしつゝ、手をあぶり居る者も、憎し。かゝる下卑たる擧動を、何時、若き人達の、したることとありしか、決して、爲したることとあらず。かゝる擧動を爲すは、大抵、老人に限ることとなり。年老いて野卑なる者こそ、火桶の緣に、手ならば、猶可なるも、足をさへ持

ちわけ、うち掛けて、物語りしつゝ、双方の足を磨りあはするなど、汚なき擧動をもなすならめ。他の人は、爲すべくもあらぬ事なり。

○老人の、己れが年高きに誇負して、傍若無人の行をなすさま、寫し出して、生氣あり。手の裏、うちかへして暖を取る 小兒などならば、愛らしからむも、年長者に在りては、決して、見よき擧動に在らず。かゝる事、著者に敎示せらるゝ處、實に尠からず。

さやうの者は、人の許に來て、居むとするところを、まづ、扇して、塵はらひ捨てゝ、居も定まらず、ひろめきて、狩衣の前、下ざまに、まくり入れても居るかし。

○此節は、前節の續きなり。○さやうの者。前節に云へる、火桶の緣に足まで持ち上ぐる人の事。○居もさたまらず。ひろめきて。塵もなき處に坐らむとするが爲め、座も定らず、彼處此處、うろつき廻るの意。ひろめく、春曙抄には、「座ると等しく、居ひろごりたるなり。傍若無人のさまなり、」といへり。ひろめくのみを取れば、かく解する方適當のやうなれど、前の居も定まらずとつゞけて考ふれば、猶、うろつき廻るといふ方、穩當ならむかと思はる。○狩衣の前、下ざまに まくり入れて云々。狩衣は、もと鷹狩用の衣裳なりしが、後、常服の一となれるものなり。領はまろく、帶にて腰を占め、奴袴を着く。而して、これが前は、坐るとき布くべきにあらず然るを、氣品卑き人々は、これを膝の下に捲き込みて、坐るといふなり。

○火桶の端に、足持ち上ぐるが如き無作法の擧動をなす人々は、人の處に來りては、常人とは異なり。まづ、その坐せむとするところを、塵埃などのありてはと、扇を出して、あたり打ちあふぎて、塵を悉く掃ひすてゝも、さて、猶、座も定らず此處彼處とうろつき廻りて後、漸く坐りても、普通の人の如く、狩衣の前を、前に伸しおく事はせず。膝の下に捲き込みて居るなり。かゝる無遠慮、無作法の擧動をなす人もあるなり。

かゝる事は、いひがひなき者のきはにや、と思へど、すこし、よろしきもの、式部大夫、駿河の前司などいひしが、させしなり、

○これ、また、前の續きなり。○式部大夫。式部省の官吏なり。大夫は、式部丞の敍爵したるものを云ふとぞ。乃ち丞は六位相當、大夫は五位相當なればなり。○駿河の前司。駿河國の前の國司なり。○させしなり。さはしか、なり。さやうにしたりしなりの、意。

○かく、扇にて、居る處をあふぐなどの事は云ふに足らざる者、乃ち、卑賤なる階級の輩のみが、することとなるらむと思へど、また、それに限らず。幾分か、品格あり、身分ある人、乃ち、式部大夫駿河の前司などいひし人々も、かゝる無作法をなせしなり。實に、世の中は、意外なるものなり。

○無作法の攻擊、筆鋒甚だ鋭し。儀式作法、むしろ、よく整頓せる王朝時代に在ても、彼れは、猶此言をなせり。若し、彼れをして、今日に生れしめば、將、何とか云はむ。殊に、今日の一派の女學生中に在らしめば、何の言をかなさむとする。

また、酒飲みてあめき、口をさぐり。髯あるものは、それを撫でゝ、盃人にとらするほどのけしき、いみじく、憎しと見ゆ。又飲め、など云ふなるべし、身ぶるひをし、頭振り、口脇をさへ引き入れて、「わらはべの國府殿にまゐりて、」など歌ふやうにする。それはしも、まことに、よき人の、さしたまひしより、心づきなしと思ふなり。

○あめき。わめくといふと同し。大聲を發するを云ふ。○口脇をさへひき入れ、脣の處を、中に引き占むるやうにするさまなり。醉人のよくする事なり。

○わらはべの國府殿にまゐりし。春曙抄に「そのかみの童謠なるべし。國府殿は、國司などを云ふべし、」と云へる、よしと覺ゆ。一說に、「うたふは訟ふにて、童部の國府へまゐりて、訟ごとする如く、わけもなき事に爭ふは、醉ひしれたる人のさまなるべし」云々、といへり。此說、おもしろけれど、これにては、「など歌ふやうにする」のあたり、解しがたし蓋し、國府殿云々は、其時の俗謠にて、今傳はらざるものなるべし。この歌を、醉人の歌ひしならむ。國府殿は、國司

なること、前の如し。そは、國々に、國府ありて、國司は、此處に詰め居るものなれば、やがて、かくは云へりしなり。○心づきなし。心にはいやに思ふ位の意。○前に記せる事ども、いづれも見苦しきものなれど、酒飲む人の樣も、また、憎きものなり。酒を飲みて、醉のすゝみに、大聲を擧げてわめき、また、口の邊を探り廻し、髯のある人は、それを撫で廻して、我もてる盃を、人に與ふる時の有樣は、甚だ憎く見ゆるあり。人に、また、一盃傾けよといふ意なるべし。身ぶるひをなし、あるは、頭を振りたて、猶、口脇を引き占めて、當時の俗謠の「薦部の國府殿にまゐりて云々、と歌ふやうの風をなすも、いと、憎きものなり。それも、卑しき人ならば、恕すべき處あれど、實に、位置の高き人の、左樣にしたまひしかば、いよ〳〵、好ましからず思ふなり。

○醉人の狀を叙して、殆んど、睹るが如し。口を探る、髯を撫づ、身ぶるひをす、頭を振る、俗謠を歌ふ、今も昔も變らぬは此痴態なり。酒に淫するの人、これを讀みて、猛省せざるべからず。

# 漢文評釋

## 天女使（四）

文學士　久保天隨

女使從容正襟。起出戶外。卜星曰。天明近矣。妾卜其夜。不卜其晝。頤指命駕。趨從應唯。傳呼曰。女監回駕。女使從金碧輿中。令侍婢將命曰。主人勞矣。主翁赤跣拜送門外。不覺額點地也。既而星曙雞叫。人影陸續。不知其所之。

●●（訓讀）女使從容、襟を正うし、起つて戶外に出で、星を卜して曰く、天明近し　妾は其夜を卜して、其晝を卜せず、と。頤指して駕を命ず、趨從應唯、傳呼して曰く、女監回駕、と。女使金碧輿中より、侍婢をして命を將てせしめて曰く、主人勞せり、と。主翁赤跣　門外に拜送し、額の地に點するを覺えざるなり。すでにして、星曙け、雞叫び、人影陸續、その之くことを知らず。

●●（字解）女使は女の使といふことで、前の使女とは意味が違ふ。從容、しとやかに靜かなる態度○正襟　襟

をかき合はせて、そろへること○卜レ星、星の光を觀て、何やら物を占ふ樣な眞似をしたこと○天明近矣、夜明けに程もない○卜其夜、不卜其晝、夜を卜つて、此に來たのだが、晝は卜はない。天女の使たるもの、特に下界に降つたのであるから、卜はないときまて居ると、如何なる不時の災難があるかも知れない、早く歸るに若かすといふこと○この語は、左傳の臣卜其晝、不卜其夜から轉化して、晝夜を顚倒したのである○かゝる來歷のある語だからして、何にやら莊重に聞えるのも無理てはない○頤指命駕、頤で供人に知らせ、轎を持て來いと命ずること○趨從、趨は走る、從は附き添ふ。二字にて、矢張り、供人といふ義○應唯、應は答へること。唯はハイといふ返辭。二字にて、單に返辭と見るを可とす○傳呼、傳へ呼ぶ、呼んで觸れ廻はること○女監、監は何にか官職あるものに用ひるので、中老尾上などいふ中老に當る○金碧輿中、金物作りて、光り輝いて居る轎の中○將は、以てと訓するので、傳へるといふ意味もある○主人勞義、主、まことに御苦勞であつたといつて、犒ふこと○赤跣、素足、はだし○頳點地、額が土に付く○

---

星曙、明方になつて、星が消えるといふことだが、修辭上から、かくの如く言ひ廻はすことが普通になつて居る○陸續、引き續いて絶えないこと○所之の之は往と同じ。

●●（主義）使の女は、物靜かに濟まし込んで、襟をかき合せ、やをら身を起して、戸外に出て、夜半過ぎし空を打仰ぎ、星を視るやうな氣色をして、さていふには、夜明に程も無い樣な空の景色ぢやな、妾は唯だ夜だけ卜つて置いて、明くる佗しき明日の晝は、まだ卜はなかつた。一刻も後れてはならぬとて、頤で指揮して、轎を持つて來いと命ずると、お供の奴ども、ヘイ〳〵と答へ、中老さまが轎に召して御還りになるぞ、早く支度しろと呼び立てた。そこて、女は、金物作り、きらびやかなる轎に乘り、其中から侍婢をして、命を傳へ、主人殿、まことに御苦勞であつた、夜中に飛んだ邪魔をしましたと言はせた。その時、主人は跣足になつて、わざ〳〵門の外まで見送りに出て、ヘイ〳〵と御辭儀をし、有り難さの餘りに、額が地べたへ付くのも分らぬ位であつた。その中、東の方ほの〳〵と白み、天の河原の星も、一つ宛消え去り、くだかけの

聲、花やかに鳴き渡るやうになつたが、ぞろ〳〵と人影は引きも切らず、どことなく、立ち去つて仕舞ひました。

(評論)女使が、星を卜ふ言葉は、如何にも莊重であつて、とても下界の人の口にすべきものでなく、如何さま、天女の使であると思はれる。それから、その態度の鷹揚なることは、侍婢をして命を傳へしめ、主人勞矣といはした一語に到て、正に其極に達して居る。こゝに熟ら考へると、前に哀請をなしたるに反して、こゝには飽くまで尊大に構へて居る、この邊が、即ち手段の在るところで、若し徹頭徹尾、しだらなく、懇囑して泣き付くばかりでは、あはれ馬脚を露はす樣なことになるのは、知れ切つた事である。かくの如く、牢絡の法を得て居るのだから、親爺奴、うま〳〵と欺され、跣足て地べたへに御辭儀するまでになつたので、氣の毒ではあるが、其樣は何だへと言ひたくなる。これを文章の上から言へば、波瀾横生、變化の妙を極めて居るので、最も玩味すべきところである。

果經三數日。夜半風雨大作其聲澎湃。若驚濤撼岸。終夜喧豗、不辨人語。家人屏息密語曰。是天女遷坐也。閉戸守夜。不敢少窺其外。黎明風雨漸歛。開戸見之。府庫洞開。凡其所蓄積金帛財物。一空如洗。不復遺隻絲。

(訓讀)果して、三數日を經へ、夜半風雨大に作る。その聲澎湃、驚濤岸を撼かすが若く、終夜喧豗、人語を辨せず。家人屏息し、密かに語つて曰く、是れ天女坐を遷さるゝなり、と。戸を閉ぢ、夜を守り、敢て少しも其外を窺はず。黎明風雨漸く歛まるや、戸を開いて之を見れば、府庫洞開、凡そその蓄積するところの金帛財物、一空洗ふが如く、復た隻絲を遺さず。

(字解)三數日、三四日といふこと○大作の作は起ると訓すべし○澎湃、澎湃と同じ。湧き上つて、渦卷くさま○驚濤は、荒波○撼は動かすと訓し、ゆり動かすこと○終夜、夜もすから、夜中といふこと○喧豗、二字ともに囂しいといふこと○不辨人語、人の言葉も聽き分けられない○屏息、息を凝らして愼んで居ること○黎明、夜明け○歛、收まると訓す、靜まるよ○

府庫財寶を畜へるところを府といひ、金穀を貯へるを庫といふなど、差別はあるが、こゝでは、單に倉庫と見れば可い。多くの公の場合に所屬に就いて言ふやうたが、必ずしも、かくの如く決まつて居る譯でもない○洞開洞穴の如く開くといふので、俗に謂ふがらんどうとなること○畜積貯蓄して積み上げる○金帛財物、金は貨幣、帛は布帛、財物といふのは最も廣い意味で、經濟學上に謂る交換的價値を持つて居るもの、總名。俗に謂ふ代物○一空如洗、丸るてから、洗ひ去つた樣である○隻絲、隻は切れッぱし、とふ事だから、極めて瑣細な物といふこと。

（又義）案の如く、三四日たつて、いよ〳〵其日になると、眞夜中すぐる頃より、大風雨が起つて、天地を吹きめくる勢すさまじく、其聲さながら湧き立つかと思ふばかり、わだつみの荒波、岸邊をゆり動かす樣であつて、夜もすがら猛しく、人の言葉さへ聽き分け惡くい程であつた。そこて、家内の者ども、殘らず一室に立て籠り、息を凝らして、愼んで居り、是は乾度、御約束の通、辨天樣が御坐を遷されて、此方に御出て遊ばすのだなど、ひそ〳〵と語り合つて居て、戶を堅く閉ぢ、一室に守り居て、少しても外面をのぞく者が無かつた。とかくする中、明方になつて、さしもの風雨、やつと靜まつたから、やれ〳〵安心といふもので、戶を開いて之を見るといふと、こはそも如何に、いくつといふ程立ちならんで居た倉庫は、がらんどうに明け放しになつて居て、いまましてた一貯へて積み込んて置いた貨幣布帛以下、ありとある代物は、丸るで空になつて、絲の切れ端すら、殘つて居なかつた。いやはや、何たる大災難！。

●●（評論）夜中の風雨、その期に違はず起つたのは、何と不思儀な事ぢやないか。讀者は、謂ゆる天女の使の、𦐂は何者たるかを推測されたろうが、この一事に就いて、或は風を招き雨を呼ぶの術があるからのことだろうと考へられるかも知らないが、それは、次の一節を見れば分かる。家人の語中、天女遷坐也といふのを見ると、矢張り、辨天樣御自身が、此家へ來向ましますことゝ考へて居るらしい。この迷信上の勘違ひが、そも〳〵大災難の張本であることは、言ふまでも無い。

# 萬葉女歌人の歌（一）

塚越停春

萬葉女歌人阪上郎女が傳は女學世界第貳卷第八號「ほとゝぎす」に在り本篇は即ち郎女が歌を評釋したるものなり

坂上郎女が不朽の生命は、言ふまでもなく其詩歌に在り。彼女の詩歌は、其詩想に於ても、其詩美に於ても、優に奈良の女文壇を代表するに足り、優に奈良婦人の中央思潮を發揮するに足る。顧ふに彼女の生涯か案外に曲折多く變轉多かりしもの、適〻以て彼女の我か最始の女文壇に於ける最初の女文豪たるべき使命を全ふする所以にして、其容顏、其才華、其位置、其幸福は、全く皇天の配劑を以て其詩歌の犧牲に充つべく與へられしものなりし乎。

彼女の詩歌か、奈良時代の婦人思潮を代表したる重なる特質は、其詩想に於て、愛の生命に活くるに在りき。同時に狹義にして獻身的同情を有するに在りき。淸楚を愛するに在りき、敬神思想に富むに在りき。現代趣味を有するに在りき。其詩美に於て、含蓄多く格調高きに在りき。然れとも同時に人情を曲盡してよく趣致に富むに在りき。婉約にして情思多きに在りき。然れとも同時に男々しき所を有し、力豐に氣力健かなるに在りき。將た又天眞爛熳にしてわるびれず、而も逸氣を有するに在りき。而して其愛の生命に活き、婉約にして情思多きは婦人なるか故に非すや。其狹義にして獻身的同情あり、淸楚を愛し、敬神の思想に富み、含蓄多く格調高きものありしは、日本人なるか故に非すや。其現代趣味を有したるは奈良盛時の人なる故に非すや。其人情を曲盡して趣致多く、男々しき所を有し、力豐に氣力健かなりしは彼女の個性の存する所なると共に、又世界的時代の影響ありたるが故に非ずや。將た其天眞爛熳にしてわるびれず、而も逸氣を有したるも、彼女の個性か然ると共に、亦時代の影響か然りし故に非すや。

彼女の詩歌は其題目に於て殆ど總て戀歌也。彼女は肯と兩性間の愛を歌ひたるのみならず、或は親子の愛を歌ひ、或は弟兄姉妹親族知人間の愛を歌ひ、而して其餘のものに至ては、殆と全く無からむと欲して僅に有るのみなりき。以て彼女か如何に愛の詩人なりし乎を察すべし。蓋し我邦上世の習俗として婦人の恒に其家に

居り多く夫婿と同棲するに非ざるを以て、彼我の相思は自ら切ならざる能はず。從て發して戀歌とならざるを得ざりし也。而して彼女は毎に歌ひたる愛は、たゞ、徒に相逢へるを善び、相別るゝを悲み、相逢はむとを祈るのみに非ず、又

今は我は死なむよ吾背生けりとも
吾によるべしといふといはなくに。

つねの人の戀ふといふよりはあまりにて
吾は死ぬべくなりにたらずや。

と云ふ如き切なる情思を歌ひたるのみにも止まらず、最も自然にして、純潔に、温雅に、同情に富み、眞個の藹如たり、油然たる戀愛道德を流露しつゝあるものありたり。

吾背子が着る衣薄し佐保風は
いたくな吹きそ家に到るまで。

五月の花立花を君がため
玉にこそ貫け散らまくをしみ。

風まじり雪は降るとも實にならぬ
吾家の梅を花に散らすな。

久方の天の露霜置きにけり
家なる人も待ち戀ひぬらむ。

千鳥啼く佐保の川門の瀨を廣み、
打橋渡す汝が來と思へば。

是豈狹義にして獻身的なる同情を包むにやさしき女性の意氣を以てし、而して詩的形容を以て之を出したるものに非ずや。

彼女は自然を歌ふに當て、柳を歌へり。梅を歌へり。花立花を歌へり。夏野の茂みに咲ける姬百合を歌へり。郭公を歌へり。萩を歌へり。鹿を歌へり。淡雪を歌へり。時雨と黃葉を歌へり。月を歌へり。山菅を歌へり。川瀨を歌へり。川邊の柴を歌へり。其趣味の如何に淸楚を愛するに在りたるかは、之を察するに難からず。

彼女の敬神思想は、其氏神を祭るの歌を觀、其家持夫妻か越中に之くを送りたる歌を觀て之を知るべく、又遠く家持夫妻に在るに贈りて、

みちの中國つ御神は旅行きも
爲知らぬ君を惠み給はな。

と云へるを觀ても之を知るへし。彼女が如何に現代趣味を有したりし乎に至ては、嘗て歌ふて、

杯に梅の花浮けて思ふどち

飲みての後は散らまくもよし。
かくしつゝ遊びのみこそ草木すら
春はもえつゝ秋は枯れつゝ。

と言ひたりしに依り、之を知るに餘りあり。

若し夫れ彼女か詩歌の如何に詩美に富める乎は、先つ其尼理願の死を悲歎したりし長句を見よ。

栲角の、新羅の國ゆ、人言を、よしと聞かして、とひさくる、族はらから、なき國に、渡り來まして、天皇の、敷きます國に、内日さす、都しみゝに、里家は、さはにあれども、いかさまに、思ひけめかも、つれもよき、佐保の山邊に、泣く子なす、慕ひ來まして、敷妙の、家をも作り、荒玉の、年の緒ながく、住まひつゝ、いましゝものを、生ける人、死ぬちふ事に、まぬかれぬ、物にしあれば、頼めりし、人のことく〳〵、草枕、旅なる程に佐保川を、朝川渡り、春日野を、そがひに、見つゝ、足引の、山邊をさして、夕闇と、隠れましぬれ、言はむすべ、せむすべ知らに、たもとほり、たゞ獨りして、白妙の、衣手ほさず、嘆きつゝ、吾が泣く涙、有間山、雲居たなびき、雨に降りきや。

---

とゞめ得ぬ命にしあれば敷妙の
家をば出てゝ雲がくりにき。

優婉にして趣致に富み、克く人情を曲盡すると共に、氣力健達にして筆鋒窘滯の態なし。殊に之が結句の如きは、紆徐し來りたるものを止むるに斗健の語を以し、横風雲を吹て前山の巓に吹き懸くるが如き姿あり。是に至て殆ど男子作家の語ならむと欲するを見る。

山の端のさゝらえをとこ天の原
門渡る光見らくしよしも。

木綿たゝみ手向の山を今日越て
いづれの野邊に廬せむ子等

と云ふが如き、何ぞ其辭の超逸にして、而も其意氣の高邁なる。世界的文化を聚めたりし雄健なる奈良時代の思潮は、婦人作家の腦底にも注ぎたること知るべき也。

むらさきのゆかりの色も問いわびぬ
みながらかすむ武藏野の原

藤原定家

小説

# 寶

國田木獨歩

其昔小亞細亞のバルソラを都となせる一雄國ありしが其國王は仁愛深き君なりしかば、民のこれを慕ふこと父母の如く、されば天の慈も厚くして國王の富は近隣諸國の王の中これに並ぶ者なかりしほどなり。

天の慈は猶ほこれに止まらずして國王は玉の如き一皇子を得しかば其悦一方ならず直に國内の星卜者を一堂に集めて皇子の將來を卜はしめたるに、第一、皇子の壽命は極めて長きこと、第二、皇子は確乎不拔の氣象を有し勇氣人に優れたること、第三、されど皇子は種々の艱難に出遇ふべきこと、此三事を以て星卜者は國王に奉答せり。これを聞きて國王は敢えて驚かず『わが王子に勇氣あらば其外は問ふ所に非ずかし。困難は却て皇子の爲めには善き經驗ならん。災厄は德を玉にすとこそ謂へ』と言ひ放ちぬ。

さて皇子はアラスマンと名けられ國王父母の寵愛一方ならず六七歳に及びては國内の學者といふ學者を招きて敎育されしかば才學並び進みて、あはれ父王にも優りし國王となるべく仰がれける。然るに皇子未だ十二歳の時、國王は不治の病に罹りしが今はの際にのぞみ皇子を病床近く招きて、種々の遺言を爲し、分ても民に畏れらるゝよりも愛せらるゝやう、諂諛者の甘言に惑はぬやう、賞罰共に急がぬやうと呉れ〳〵も訓戒したり。

斯くてアラスマンは父王の死後七個年は喪に居て位に即かず八年目に皇位に昇りて始めて王權を思ふがまゝに振ふことゝなりぬ。年若うして位高きは才德の災なる哉、アラスマンは何時しか國王の義務よりも王者の權力を愛し、政治のことは思はずして逸樂放蕩のこ

とのみに耽けるに至り、高位高官は悉くこれを放蕩仲間の青年に配ち與へて顧みざりけり。

母君は才智高き人なりしかば樣々にアラスマンを戒しめ、今にして行爲を改ためずんば、父王が積み置きし富も忽ち盡き集つるばかりか人民の怨恨は次第にかさなりて遂には叛逆起り國王の位は愚か、王の生命までも危くなるべき由を懇々と說き聽かしぬ。さすがのアラスマンも母君の泣きながら說き玉ふ敎訓に漸く本心に立還り、今まで相共に放蕩を盡せし青年を悉く退け、彼等に與へし高位高官をば國の長老に授けて政治を任すこととせり。

今思更へば無益のことに費ひ捨てし富は莫大の額にて、さしもに富みし王室の金庫は九分通り空となりしを見、アラスマンの後悔遣る瀬なく、日夜心を惱して鬱閉居たりしが、或夜一人の老人夢の中に現はれ、微笑を頰に浮べながら進み近づきて

『アラスマンよ、悲哀の後には必ず喜悅あり、不運の次には必ず幸福來るなり。若し汝の苦惱より脫れんと思はゞ起て、起て埃及の都改羅に往け、必ず幸運は汝を待受け居るべし』と言ひ捨てゝ消え去せぬ。

アラスマンは夢より悟めて大に驚き、次の日大眞面目になりて之を母君に語りしに母は眞面目にこれを受取らざりしかば、

『母上よ、母上は此夢を何でもなき事と思ひ玉ふか。我が思ふ處は然らず、これ豫言者マホメットの現はれし給ひしなり、彼の老人は我々の大豫言者なり。我が今日の苦惱を憐れみて我を救はんと爲給ふなり。我は斷然豫言者の言葉に從はんとこそ思わすれ』と言張りぬ。母君は言葉を盡して止めたれど效なく、

アラスマンは國事を母に任して或夜人知れず王宮を脫け出で、一人の從者をも連れず改羅府を指して遙々の旅路を步み出ぬ。

途中の苦難は言ふばかりなく、宮中深く生育ちし王者の身を以て從者も連れざることなれば、或時は砂漠の果に行暮れて水に渴きしこともあり、或時は、野獸に襲はれて危き命を免がれしこともあり、熱沙に面を燒

かれ暴雨に衣を洗はれなどして漸のことに名高き開羅府に着くを得たり、アラスマンは疲れし足を曳きて、兎ある寺院の門に至り、其石段に腰打かけて暫時らく旅行の疲勞を休み居たりしが、何時しかトロ〳〵とまどろみしと思ふや、先の日の夜夢に現はれし同じ老人、又もや現はれて

アラスマンよ、よくこそ來りぬ、汝は我言葉に負かず途中樣々の困難にも畏れずして遂に此處まで來りしは感心なり、我の汝を此處に招ぎしは旅路の苦難を汝に與へて汝が決心のほど試さんが爲めなりしに、今や汝の勇氣、汝の不拔なる氣象を見たり。パルソラに還れ、汝は王宮の中にて未だ如何なる王者も見しことだに無き莫大の富を發見すべし。』と言ひ終りて消え去せたり。

アラスマンは夢より悟めて『さても我か愚なりしことよ！我が尊信する大豫言者とこそ思ひし老人は、あはれ、我苦しまぎれに措き出せる幻影に過ぎざりしか。たゞ〳〵豫言者のことをのみ思ひつめ居たれば　又もや同じ老人を夢みしならん不思儀にも非ず。いざ我都パルソラに還らん、最早此處に居て何かせん。』

斯くてアラスマンは直に歸路に就き、途中又々樣々の艱難を嘗めて漸くパルソラに着きぬ。母君は彼を見て

『我子よ、夢は眞夢なりしか』と問ひぬ。アラスマンは今更面目なく、有りしことゞもを語り終りて前よりも深き悲痛に沈みしかば、母君はこれを慰めて

『左までに悲しむ勿れ我子よ、天若し汝を富ましめ給ふならば何時かは汝これ得ん、たゞ汝の徳を積め。汝の民を幸福ならしめよ、民先づ幸福ならば汝も亦た遂に幸福ならん。』と説き聽かしたるは實に優しく又賢き母なるかな。

長の旅路より歸りて久しぶりに玉の床に就きしことなればアラスマンの眠深く曉近つまで夢もなく寢入りしが、忽ち彼の老人現はれて

『勇敢なるアラスマンよ、汝の幸運は遂に來りぬ。目覺めなば、直に鶴嘴を採つて父王の居間なりし部屋にゆ

け、其床下を堀らば莫大の富を得べし。』
眼を開けば、又これ一場の夢なりしもアラスマンは餘の不思議さに、起き出るや走りて母君の室に到り、夢のまゝを語りて、さて
『老人の言ひしことは、信ずるに足らざれど、せめて我が心やりに父君の居間を見分せんと思ふなり。』
斯く語りてアラスマンは母の部室を退き、直に鶴嘴を用意して獨り父の居間に入込みぬ。床を上げ鋪石を起したれど別に寳の有るべき模様も見えざりしが、猶ほ其處此處を堀るうちに突然白の石現はれ出たり。さてこそと力をこめて此石を引起し見れば、其下に戸ありて鐵の錠前を卸しあり、鶴嘴の尖を以て之を打壞し、戸を開けば白色の大理石にて作れる石段あり。アラスマンは兼ての用意に蠟燭に火を點して此石段を下りゆけば一個の小なる室ありて四方の壁は陶器を用ゐたり。而して一見彼の注意を惹きたるは四段の棚を釣りて其一段毎に十個の瓶の並べあることなり。直ちに近寄りて瓶の一個を改め見しに黄金の貨幣一ぱい塡込みありて燦然たる光を放ちて居るにぞ、アラスマンは飛立つばかりに喜びつゝ尙ほ四段の棚なる瓶を悉く改め見しに何れも金貨を充たされあり、其一握を取て母君の許に馳せゆきたり。
有りし事どもを聞きて母は非常に驚きしが、さて言ひけるは
『我子よ、これ實に父上の賜ひし寳なり、御身注意して、今日まで王室の富を浪費せしやうなる無益なる事に用ゐ給ひそ。』
『母上よ、心安く思召せ、今後決して母上の御心を煩はすことなからん。』
猶ほ母君は先王が妻なる我身にさへ語りしとなく秘め置きし穴倉を一見せばやとアラスマンを促して先王の居室に到り先の石段を下りて四段の棚ある一室に入り、其方此方と見廻す中、室の片隅に小さなる瓶あるを見出しぬ、これアラスマンの氣付ざりし瓶なり。アラスマンは直にこれを手に取りて蓋を開き見しに小さき黄金の鍵一個入れあり、母君はこれを見て

『我子よ、これ必ず別に寳の秘めある處を開く鍵ならん、其處邊を探し見よ、或は此鍵の合ふべき鍵穴のあるやも知れず』と言ひ、二人は四邊の壁を其處此處と驗めしに果して一の穴ありて、恰度黃金の鍵に合しかば、アラスマンは直に鍵を挿入れたり。戸は忽然として開き、二人の前に一室現はれぬ。こは如何に、室の中央に九個の純金の柱脚ありて其八脚には金剛石もて彫刻みし肖像を乘せあり、各々靈妙き光を放ちて一室は眩さばかりに煌けり。

更に驚く可きは九番目の柱脚の上に白き繻子の切片乘せありて次の如き文字の誌しあることなり。

『愛する我子よ、此等八個の肖像を得るには容易ならぬ辛苦を積しなり。此等は汝の見る如く美麗なり、されど猶ほ一個九番目の肖像ありて此世に存し、其美しさは此等に比ぶべくもあらず、汝の今得し此等八個よりも數千倍の價ある珍寳なりと知れ。若し汝これを得て我物とせんと欲せば埃及なる改羅府に往け。彼處にモペレクと稱ぶ、我が奴隷住めり、改羅府の民は皆な彼を知れば汝は彼に遇ふに左までの困難なかるべし。彼が許に往き有りし事どもを語り聞かせよ。直に汝の我子なることを知り、汝を導いて彼の珍寳の所在に到るべく、又安然に之を得るの法を敎ゆべし』

これを讀みてアラスマンは母君と相談爲し、不在中の國事を母に一任することにして、急ぎて旅行の用意を整へ、多人數の從者を伴ふことを避け、たゞ數人の奴隷を伴にして又もや改羅府さして出立せり。

今度は途中別に困難もなく改羅に安着し、早速モペレクなる人を尋ねしに、モペレクとは改羅府にて屈指の富豪にて、王侯を凌ぐばかりの生活を爲し、其門戸常に開かれて賓客の集まるに任し、殊に旅人に懇親なりとのことを聞き得たり。アラスマンは市民の一人を道案内に賴みてモペレクの門に到り案内を請ひぬ。内より一人の奴隷出て來り、姓名は何と言ひ用向は何ぞと問ふ。

『我は旅人なり、當家の主人は仁愛にして心寛き人と聞きし故暫時の旅宿を乞はんとて來りぬ』とアラスマ

ン答へしかば奴隸は少し待たれよと內に入りぬ。間もなく出て來りて此方へと案內す。
美々しく飾りし客間に通されしが、主人モバレクは
『旅人よ、善くこそ我家を訪ひ給ひし』と莞爾かに挨拶す。アラスマンは
『君よ、我こそペルソラの先王が一子、我名はアラスマンなり』と名告りしかば
『ペルソラの王は其昔我が主人なりし。されど君よ、拙者は更に王に一子ありしを知らず。して卿は幾歲なりや。』
『二十歲なり、卿がペルソラの王宮を去りしは幾年以前ぞ。』
『略二十二年前なり。然し卿は何の證據ありて王の一子なることを拙者に示し給ふや。』
『我父君は、其居間の下に穴倉を設けて其處に四十個の瓶を秘め給ひ、瓶には黃金を充しぬ。』
『其他に何物をも見給はざりしか卿は。』
『猶ほ九個の純金の柱脚を見たり、此柱脚の八個には金剛石の肖像乘せありしが九番目の柱脚には白き布ありて、父君はこれに我身九番目の珍寶を得るの方法を書き誌し置けり。卿は必ず此珍寶の所在を知り給はん、彼の布には卿能く我身を導いて其場所に到るべしと書き示しあり。』
アラスマンの言葉の終るや早くモバレクは膝突きてアラスマンの手に幾度となく接吻し
『今こそ卿はペルソラの王の一子なることを確め得たり。若し卿彼の珍寶の在る處に到らんと望み給はゞ拙者御案內申すべし、されど暫く我家に止まりて旅の疲勞を休め給へ。今日は改羅府の紳士達を招きて今しも饗宴の最中なれば、卿もこれに加はり給はずや』
『そは幸のことなり、余も悅びてこれに加はらん。』
然ばとてモブレクはアラスマンを導きて高堂に昇り、賓客の前に伴ひ席を薦めて即かしめ、跪きて之に仕へければ客は皆な目を見張りて驚きぬ。
食事を終りてモバレクは客に向ひ
『諸君は余が此年若き旅人に仕ふる樣を見て左までに

驚き給ひそ、これ余が其昔の主人なるペルッラ王の若君なり。王は曾て余を奴隷として市場より買ひ取り給ひしが、余を自由の身と許し給はずして崩御し給ひぬ。されば余は今も猶ほ奴隷なり。余及び余の身に着ける總ての財産は悉く王が繼統者なる此年若き君の所有なり。』と語りて未だ終らざるにアラスマンは口を開きて

『モパラク、余は今此席に連なる紳士諸君の面前にて公言すべし、卿は今より自由の身なるべし、卿の身に着ける財産は總て卿の所有たるべし。』と云ふやモパレクは地に接吻して感謝の意を表し、猶ほ今後王子の爲めに粉身して盡す處あるべきを誓ひたり。

さて翌日となりてアラスマンはモパレクに向ひて日ふやう『余の改羅府に來りしは、此處に止まりて安逸を貪るが爲に非ず、たゞ偏に希ふは、一時も早く第九の珍寶を得んか爲なり。最早余が疲勞も全く癒えたれば直に珍寶の在る處に到らんとぞ思ふなり。』

『君よ、拙者も亦た君が思ふところと同じ。されど君は未だ彼の珍寶を得るに如何ほど危險を冒さゞる可からざるかを未だ知り給はぬなり。』

『危險とや、如何なる危險たりとも余は、之を踏み越ゆべし、事若し成らずんば、死するに如ず。されば唯ゞ余を導け、卿も亦た余と共に危險を忍べ。』とアラスマンの決心動かすべからざるを見て直に家人を呼び集め旅行の用意を整なへしめぬ。

改羅を出立してより途中種々の珍らしき事物を見聞しつゝ進み行くほどに日數許多經ちて遂に幽邃なる溪間にと到着せり。此處にて皆な馬より下り、モパレクは家人に向ひて『汝等此處に止まりて能く荷物を護り、我等の還るを待つべし』と命じ又アラスマンに向ひ

『さて君よ、これよりは、我等二人にて進むべし、や世にも畏ろしき場所に近き來りぬ、其處には九番目の像秘みあるなり。卿が勇氣のありたけを奮ふべきは今ぞ。』

程なく二人は湖水の滸に到りぬ。モパレクは岸に腰打掛けて王子に向ひ

『此湖水を渡らざる可からず。』
『如何にして渡すべき、舟もなきに。』
『間もなく一艘の小舟來るべし、これ君を迎へんとて魔神の王が遣したるなり。今我が言ふところを決して忘れ給うな、君は能く口を噤みて。舟子に一言も交へ給ふべからず。舟子の容貌を見て如何ばかり驚くとも必ず口を開き給ふな。呉れ〳〵も申上ぐ若し小舟の岸を離れたる後に一語にても發し給はゞ忽ち舟は水底に沈み果つべし。』
『謹みて口を開くことはなからん、たゞ卿よく余が爲すべきを敎へなば余はたゞ卿が言ふ處に從はんのみ。』
斯く語り合ふうち忽ち湖水を横ぎりて此方へ近く小舟あり紅き栴檀にて製られ琥珀の檣には繻子の長き旗飜へり一人の舟子これを漕ぎぬ。見れば舟子の頭は象に似て其體軀は虎の如し。小舟は間もなく岸に着きしが舟子は象に似たる鼻を伸して王子とモパレクとを一人づゝ舟に乘せ移し直に又た漕ぎ出しぬ。
一碧鏡の如き湖を横りて小舟は瞬く間に彼方の岸にと着けば舟子は先の如く鼻にて二人を陸に移し、終れば舟も舟子も忽然として消え去せたり。モパレクは
『最早口を開くとも差支なし。此島は魔神の王が住家にて全世界中これに比ぶ可き地なし。王子よ見給へ實に美ならずや。此等の樹の枝もたわゝに實りて地に垂れたる、名も知れぬ鳥の彼處此方と飛び交うて囀づる音の妙なる、實に珍らしき仙境ならずや。』と語りつゝ二人は進みゆくほどに宮殿の前にと出でたり。
宮殿は美なる綠石を以て築かれ、大なる濠其周圍を圍み、濠の畔には、樹を植へ連ねて其枝高く殿宇の上に翳し綠の蔭を屋蓋の上に投げつ。黄金もて製りし正門の前には奇石寶玉を飾りし橋を懸けたり。橋の上には巨大なる魔神の一群集り居て手に長劍を横へたるは門を守る輩と見受けられぬ。
『これより先に進めば彼の魔神等の殺すところとならん、彼等の來るを防ぐには自から奇術あり』とモパレクは衣の下より一個の袋を取出し、其中より四條の絹の黄なる紐を出して其一條を腰に一條を背に巻き着

け、他の二條を王子に與へて同じく腰と背に着けしめぬ。斯くて又二枚の上着を地に敷き、其の縁邊に種々の奇石寳玉の類を並べ、其一枚の中央に自ら座を取りて他の一枚には王子を坐らしめ、さて言ひけるは

『君よ、拙者は今しも魔神の王を此處に招き寄せんとす、王は今彼の宮殿の中に在り。王にして若し我等の此島に來りしを喜ばずんば必ず恐ろしき容貌を作して現はれ出づべし。されど若し我等の目的を否まずんば必ず優しき容貌の人となりて現はれん。彼の現はるゝや君は直に起て禮を行ひ給へ、されど決して此敷物の外に出て給ふべからず。而して斯う言ひ給へ、「魔神の大王よ、君が下僕なりし我が父は死の使に招かれて此世を去りぬ、仰ぎ願くは、我が父の上に擴げ給ひし保護の御手をば我が上にも擴げ給はらんことをと、王にして之を否まぬ樣子ならば又斯う言ひ給へ「君よ若し我を納れ給ふの好意あらば願くは九番目の肖像を與へ給へ」と。』

モパレクは斯く語りて魔神の王を招き寄すべき魔術を行ひぬ。急ち電光きらめて雷鳴轟き渡り、見る〳〵全島暗澹として暗き影に包まれ、暴風吹き起り、恐ろし叫聲響き、大地は波の如く動搖ぎ初めたり。

アラスマンは此等天地混沌の有樣に膽を消し、これ必ず好ましき前兆に非らじと思ふ間もなく、忽然として一人の立派なる人物現はれ出でぬ、これ魔神の王なり。これを見てアラスマンはモパレクの教えし儘を爲して、言ふべきだけのことを言ひ放ちぬ。

王は微笑を以て迎へ、さて言ふやう

『我子よ、余は汝の父を愛し、彼の余を訪ひ來る毎に一個の肖像を與へたり。余の汝を愛するは又た汝の父に同じ。されば余は汝の父の死する前に彼に命じて白き繻子の切片に其遺言を書しめ置きたり、これ汝の既に讀みたる所なり。余は又彼に汝を保護すること及び汝に九番目の肖像を與ふべきを約束せり、此九番目の肖像こそ實に汝が既に得たる八個の金剛石の肖像に比ぶれば數千倍優りたるものなり。故に余は既に先頃より此約束の實行に取かゝりぬ。汝が夢に見たる老人は余

なり。四十個の瓶の所在を教えたるも余なり。余は汝の此處に來る目的を前知し居り其目的を叶はしめんこそ思ふなれ。然に汝の父と約束せる一事ありて直ちには第九の肖像を與へ難し、其は餘の儀にあらず、汝一先此島を去り、一人の女子を余の許に連れ來れ、其女子は年ごろ二十歲を越ゆべからず、又あらゆる敎育を受けし完全なる美人ならざる可からず。且つ其性質温良にして決して怒り易く或は愛惜の念烈しき性質を有せざる女子ならざる可からず。余は此等の資格ある一女子を得て余の皇后となさんと願ふなり。汝能く斯る一女子を撰び余の許に連れ來れ、若し斯る女子ありて汝を愛すと雖も汝は決してこれと結婚するを願ふべからず。汝神明に誓ひて能く此約束を實行せよ、然らば余は汝に第九の肖像を與へん。』

アラスマンは直にこれを承諾して嚴肅なる誓を立てし後、魔神の王に向ひて

『されど君よ、たとひ如何なる美人に出遇ふとも其性質までは容易に判定し難し、これ如何にすべきか。』

『さなり、容貌は性質を欺くものなり。容貌を見て其人を知るの知識はアダムの子孫に欠け居れり。されば余は汝に一の鏡を與へん、これ汝の知慧よりも安然なり。汝若し敎育完き絶世の美人に出遇はゞ其女子の顏を此鏡に映し見よ、若し鏡に一點の曇を生ぜずんばこれ余が求むる處の女子なりと知れ、若し少しにても鏡面曇らばこれ女子の性質の完全ならぬことの證據なれば余の望むところに非ずと知れ。』

斯く言ひし魔神の大王はアラスマンの一面の鏡を與へければ、モブラクとアラスマンは直に王に別を告げて再び湖水の畔に出しに先の小舟現はれて二人を對岸に運びたり。二人は待ち居たる從者を伴ひ無事に改羅府に歸り着きぬ

さてアラスマンは數日の間モバレクの家に滯在して旅行の疲勞を休めたる後、モバレクに向ひ、魔神の王の求めし少女を探す爲めに大都府バグダットに馳せ向ふべきを相談せり。モバレクは驚きて、此改羅府に一人の完全なる少女なき筈なければ、物慣れたる一人の老

婆に頼みて市内を隈なく探さすべしと言ひぬ。

モペレクに頼まれし一人の老婆は早速所々を聞き合はして幾人かの美人を撰び來り、これをアラスマンに紹介せしかばアラスマンは一々これを驗したるに、不幸にして一人も合格するものなく鏡は常に多少曇りたり。

こゝに於て最早モペレクも改羅府をあきらめ、アラスマンと共にバクダットを志して出立せり。さて改羅府に着きし後は宏壯美麗なる家屋を借り受けて二人こゝに住し、四方に交を求め、上流社會は勿論、士農工商の差別なく自由に我家に出入せしめ、常に饗宴を張りて人々を歡待したり。

さて斯く多人數の人々と交際する中に、ムヂンと稱ぶ紳士を對手にして或日アラスマンは完全なる少女を探しつゝある由を物語りしに、ムジンは

『君、斯くまでの完全なる少女を求めんと願ひ給ふか、さて〳〵若し拙者に遇ひ給はずんば其希望は水の泡なりしならん。拙者は一人の美人を知れり、容貌から教育から性質まで到底此世に二人とあるべき少女に非ず。其父なる人は其以前大臣の位置にまで昇りたるが今は交際社會をも退き遠く郊外の物靜なる所に住みて專ら其娘を教育し居れる。思ふに君の身分を明し給はど彼は君の義父となり得ることなれば歡んで其秘藏娘を君に許すなるべし。』

王子は直にモヂンの紹介にて少女の父を訪ひぬ。彼はバルソラ國王なることを知るや娘を呼びてアラスマンに引合はせしが、アラスマンも未だ斯る絶世の美人を見たることなく、一見して心を奪はれたり。さて鏡を出して窃に此美人を映し見しに、鏡面玲瓏として一點の曇もなかりけり。

これぞ兼ねて求むる美人ぞとアラスマンは父に向ひて其娘を我妻に許さんことを求めしに、父は異議なく承諾したり。

こゝに於て目出度く結婚の約調ひければ黄道吉日を撰びて父子をバクダットに迎へ、美々しく饗宴を張りぬ。さて宴散じて父は娘をのこして其隱宅に歸り去

るや、モベレクはアラスマンに向ひて
『君よ、直に出立せん、君が魔神の王に約したることを忘れ給ふな。』
『然り直に出立せん』とアラスマンは答へたれど、此時彼の苦悶は非常なりしなり、見れば見るほど少女は美なり、言語と云ひ擧動と云ひ、實に一點の申分なく、其品性の麗しきと天女の如きを見てはこれを戀ふるの心燃ゆる計りに、直にこれをベルソラに伴ひて終生の妻とせんと願へるなり。されど神明に誓ひて魔神の王と約したることを思ひ斷然この誘惑を退け、克く己を壓して遂に少女を伴ひモベレクと共に改羅府へ出立せり。改羅府に着くや少女を籠に入れて魔神の王が住家へと急ぎぬ。潮水を渡りて少女を籠より出せし時、何も知らぬ憐れの美人は四邊を見廻はして『ベルソラには未だ到着いたさぬにや』と問へばモバレクは
『貴女よ、最早御身を欺むくべきの時に非ず。王子アラスマンが御身の父より御身を求めしは終生の妻とせん心にはあらで、魔神の王が后となさん爲なりしなり。』
これを聞て少女は聲を放つて泣きぬ。其樣の痛ましさにモベレクも王子も思はず袖をしぼりしが、さて如何ともすべき樣なく直に魔神の王が面前に伴ひたり。
魔神の王は柔和なる紳士となりて現はれ、暫時く少女を眺め居しがアラスマンに向ひ。
『可し、これ實に美にして善なり、余が願ふ處に適へり。余は汝が不拔の心を喜みす、汝が自己の慾望に壓へて約束を完たふせし確乎たる精神に滿足す。ベルソラに歸り、八個の肖像を安置せる穴倉を見よ、汝に約したる第九の肖像を發見せん、これ余が配下の魔神をして逹しめ置きたるなり。』
王子は魔神の王に別れて改羅府に引返へし此處にてモベレクに厚く感謝して告別し、直にベルソラへと急き還へりぬ。國王歸へり給ふとの報傳はるや臣民は萬歳を叫び、母君は走り出てゝ迎へ給へり。
さてアラスマンは母に向ひて旅行中の事を物語りしに母君は
『來れ我子よ、直に穴倉に到り見ん、魔神の王は必ず既に第九の肖像を運び置きて汝の還るを待ち居らん。』と母子は一時も早く世界に類なき珍寶を見んものと穴倉

へ急ぎゆき、八個の肖像の秘みある部室にと入りぬ。

室に入るや、直に二人の眼を射たるものは光輝燦然たる金剛石の肖像には非ずして、第九の黄金の柱脚の上に立ちし嬋娟たる絶世の佳人にぞありける。二人は愕然と驚きしが王子は忽ち『アッ！』と叫びたり。何ぞ知らん此佳人こそモベレクと共に辛苦して探し出し、魔神の王に伴ひし少女ならんとは。佳人は口を開きて

『王よ子卿は此處にて我身を見しこと痛く驚き給ふが如し。卿は拙き我身の如きものならで尚ほ幾位の貴き寶を得んものと志し居給ひしに、今此柱脚の上に我身の在るを見て、今更ら斯程までの辛苦を盡し給ひし悔み給はん。』

『否、否、貴女よ、神こそ我心知り給ふ、余は實に魔神の王と誓ひたる約束を破りて卿を我宮に伴ひ還らんと悶しこと幾度ぞ。たとひ金剛石の肖像は如何に貴き寶なりとも何とて卿を我妻になす歡に比ぶべき余は總の金剛石よりも、全世界の富よりも實に卿を愛するなり。』

アラスマンの言葉の終るや、忽ち雷鳴轟き渡りて宮殿を震ひ動かしぬ。母君は蒼くなりしが忽然として魔神の王現はれて言葉和らかに

『貴女よ、余は卿の子を保護し、これを愛す。余は彼が血氣盛なる時、克く其慾望を壓へ、信實なる義心を保ち得るかを驗せんと思ひ居たり。余は彼が此年若き少女の美に心を動かせしことをも知れり、然るに彼が立派なる行爲は實に余を滿足せしめたり。見よ、此處に第九の肖像あり、これを彼が成効の賞與として授るなり。これ無限の價あり、他の肖像の比に非ず。』と語り更にアラスマンに向ひて

『アラスマン、此年若き貴女と共に幸福なれ、貴女は汝の妻なり、若し貴女をして常に汝に對し純潔にして信實なるを望まゝ、常に貴女を愛せよ、たゞ夫れ貴女のみを愛せよ。』

斯く言ひ終つて魔神の王は消え去せぬ。アラスマンは歡喜の餘、直ちだ少女をはパルッラの皇后として宣言せり。而して二人は常に相愛し、常に相信じ、最も幸福なる生涯を送りたり。

（をはり）

雜録

# 米國婦人風俗一斑

在米スタンホード大學　飯島立峰

一般婦人としては、世界に無比の好境遇に在る米國女子も、家婦としては、比較的に快樂なる能はざるものがあります。其理由は一般事業界の繁榮隆昌であり、從つて、餘裕があるよりして、家僕下婢たるものが少いのである。之が爲に一家の妻は細大の家事に從ひ相應に繁忙なるが故であります。併し家婦として一家に於ける勢力は、縱令有形上に表はす事が出來ないまでも、確に英國若くは佛國に於けるよりも、大いと云ふ事であります。獨乙に於ては、一家の妻は、單に家婦たるのみを以て滿足して居るとの事でありますから、此點は稍〻日本と似て居る樣に思はれます。家婦として米國婦人が英國婦人よりも大なる勢力を有すると云ふ一の好い證據かあります。其は米國婦人が、英國の夫婦間の關係に付いて、有し居る觀念であります。而も往〻之を口外して居ります。其觀念とは、即ち「英國の妻は、殆ど侍婢に等しくして、少しく優るに過ぎない、何とならば、英國婦人は常に夫の言ふが儘に、又欲するが儘になつて居る、從つて、夫の方では自分の欲する快樂利益は、常に之を滿すことを得ると信じ居る云々」尚歐洲一般の夫人に付いて、言ふ所を聞けば、「歐洲の婦人は、概して英人に全じくして、偶〻彼等の欲することを遂げ得るも、之は彼等の巧手段、即ち男子の弱點に乘じて、阿諛諂媚、若くは嘲弄的手段を以て、男子を陷れ、以て其意を遂ぐるのである。」と云ふて居る。果して然らば、阿諛諂媚は女子の通性にして、東西軌を一にして居ると云ふも可ならむか、然るに米國では之と正反對であると見て誤りはありませぬ。米國に於て、夫の義務冀

望とする所は、成るべく妻をして滿足ならしめ、幸福ならしむる、と云ふ點にありますから、世間の事は勿論、家事上に就いても 努めて勞苦は身自ら之を荷ふと云ふ結果になります。澤山ある例でもありますまいが、私の知り居る大學教授の某氏は、世に識られたる紳士でありますが、往々夫人を助けて炊爨拂拭の役務に從はるゝを見ます。啻に夫妻の關係が斯の如くであるのみならず、兩親も、伯父伯母も、兄弟も、朋友も、婦人少孃に對しては、自己の快樂便益を犧牲にするに躊躇しませぬ。實に亞米利加全州は、其國の女子に貢献しあるかの如き觀があります。女子の勢力が右の通りでありますから、一令孃が四千余哩を距る、東方諸州より、西海岸に單身旅行するが如きは、殆ど普通の事であり、又一の危險もありませぬ。又富豪紳士の夫人令孃が、單身市內を徒步往來して居ても怪まれない有樣であります。

偖て又茲に廣く知らるゝ話があります。其は、米國の婦人が其友人中に、若し英國人其他歐洲人に結婚するものある時は、之に祝辭を述べずして、反對に、人情にあるまじき弔辭を贈るといふ事であります。之は辨明する迄もなく、幸福なる米國婦人社會を去りて、從者の如く扱はるゝ歐洲に赴くを諷刺するのであります。而して此語を送ると共に、朋友互に戒めて、決して此例に倣はざる事を誓ふといふ事であります。斯る有樣であるとして見れば、往々日本人の妻となるものがありますが、定めて一[illegible]しき非難を受くるであらうと察せられます。併し斯々はいふもの丶人情風俗は國々各異るは言ふ迄もなく、特に夫婦間の關係は、亦一種異樣のものでありまして、米國婦人が觀て以て悲み痛む事も、一方の本人にとりては、然程悲む事もなく、却て反對に非常に安樂なるやも知れませぬ。甲が國に惡しき事が、乙の國に善しといふ事は、澤山ある例でありますから、米國婦人強ちに羨むに足りませぬ。要するに米國人一般の考は、女子を男子同等の位地に進め、同樣に取扱ふ事は、家庭の和合幸福を來す上に、頗る必要有益なりといふ點にあります。之は一考に價する問題と

信じます、冷水と熱湯とありて、中温適度の湯を得る如く、同等同權は、必ずしも和合統一の基礎といふ事は出來ませぬ。英獨人か米國の家庭を評したるを讀みますに、其團欒和樂は、米の家庭に少しと謂ふて居ります。尙之に付いて澤山議論したる大家の文もあり、又私の考へもありますけれども、論より報道に重きを置く考てありますから、擱筆します。

○女子に對する男子の觀念、　前に既に述べたる點もありますが、尙一二を重ね記さば、女子は何となく一の魔力を持つて居る、從て彼等の歡心を得、寵愛を受くるを得ば、社會に出て幅がきく、勢力がある、甘い事が出來る、選擧にも勝を得べく、官職も得られ、金も儲くる事を得る等の事が、男に一般特に靑年輩の有する觀念であるやうてす。從つて萬事萬端何ても蚊ても女を尊ぶ、女を愛するといふ事になり、少し無理の事でも服して置くといふ風が見えます。之を一面から言へは、弱者を愛し扶くるといふ立派な事になりますが、反面より言へは、米國男子は、其女子に對しては自屈自卑、殆んど自尊自重の念がないといふ事になります。英人は同一の評を米國男子に下して居り、而して自國の男子の事を評して居るを見れは、「英國男子は女子に對しては、微少の謙遜を拂ふのみてある、假令女子が智力に於て、性質行動、幷に社會の地位に於て優る所あるも、尙男子は男子として女子の上位を占むるものてある」と云ふて居ります。其れてすから、英人か女子を談するに、米人の如く、殆んど自屈一方に傾くといふ風かありませぬ。されはとて英婦人は其甚しからざる限りは、毫も之に對して憎怨の念を起しませぬ。之か英婦人の美德否な女子の天然の德性と思ひます、他の歐洲諸國も英と風を一にして居ります。然るに斯る觀念は米男子には概してありませぬ。何事も女子を第一にする、愉快は先づ之を與へ、衣食も先づ彼に與へ、其他萬事に就いて同樣です。實例の一二を述べますれは、門口を出入する時、女子は男子に先たち、狹路に於て二人幷行する能はざる時は、女子か先行し、會合に於ても先つ女子に席を與へ、食堂にては女に先づフオーク、ナイフ

(日本ならば箸)を手にし、又汽車の最後の客車を特に女子に備ふるが如き、(之は機關車を遠く離れて居、炭煙の侵入少きが故てあります併し同行の男子は同車するを得ず)大旅館に於て婦人の會話室は最美を盡くし、特に甚しきは男女會合の場合に椅子は先つ婦人に之を與へ、若し殘餘の椅子が、男子の數に滿たざる時は、婦人を伴はざる男子は立往生するか、又は他の室に放逐せらるゝが如き、其他乘合馬車に於ても、男子は避けて女子に席を與ふるが如き、其他云ひ盡くせない程に實例はあります。併し是等の事は一般に通する風とはいはれませぬ。例へば露國に於ては、車中に於て必ず女子に席を讓ることをなさぬ。亦婦人の面前にて喫煙するも差閊ないといふ事は、諸君も知らるゝ通りである。獨り露國に限らず、現に米國に於ても、同一の事があります。某觀察者の記事を見れば、紐育、ポストン等の市街に於て、縱令婦人が乘車するも、男子が席をゆづらぬ事が往々あるといふ事てす。是は桑港に於ても、稀に見受けます。曾て一婦人が車中に入り來りたる時に、一人の男が立つて席を與へました。然るに右の婦人は之を辭退したのてあります。其理由として其婦人は、斯る群集の車を見ながら、乘車したる妾は、當初より空席なき事を知り居る次第てありますから、他人樣に御迷惑を掛くる事は、妾の本意てありませぬ、と言つたさうてす。之は誠に正當なる理てあります。それてすから、右に同一の場合に於ては、男子は必ず席を避くる必要がないと思ひます。元來斯る事は禮義上より來る事てありますから、少しく考あり、智ある婦人は、之を辭退するは當然てあります。

玆に私の日々實驗する一事を記さば、前記の通り門戶の出入には、女子を先にす、且つ扇は之を開き與ふるか、一般の風となつて居りますから、私も郷に入りては郷に從へといふ古き敎に從つて、門扇を開き與へます。すると或女はサンキユ(有難ふ)といひ、或る女は無言て通ります。諸君は前者の禮を知り、智あることを賞せらるゝてありませう、元よりてす、後者は結局大學の敎育を受け居るも、其價なき女てあります。米國の

女は一般の禮義に遠い事をも要求し、若しくは非難する權利を持つて居るといふ論者がありますが、之は不當の言であると信じます。又煙草の事に就て少しく述べますれば、婦人席にて喫煙せぬといふ事も、一の禮義に過ぎませぬ。それですから、互に親しき女の前では、無遠慮に喫煙して居ります。又婦人も斯る人に對してはマッチを擦りて與ふる等の事を見受けます。

然うして見ると、强ち女の前では喫煙が出來ぬといふ事はありませぬ。併し改りたる場合會合等の時には、之を爲さぬが一般の禮としてあります、是は寔に善き事と思ひます。一躰車中其他群集の場合に、ドシドシ煙草を吹かれては、之を嗜ぬものは勿論、彼等同志の中でも隨分迷惑爲る事が度々あります。婦人は概して喫煙しませぬから、彼等に面して之を止むるは禮であると共に、一般の集會の砌りは、之を止むると云ふ事は大に望しき事と信じます。

活潑なる雄辯も婦人の沈默よりは効驗なし

# 婦人と職業

江湖生

## ▲電話交換手

一家の妻君となつてからは出來ないのは此電話交換手て、畢竟處女時代の職業といふべきである。ツイ一昨年迄は男女二組の交換手があつて男子は夜勤、女子は晝勤と區別されてゐたのだが、五十嵐局長が歐米の電話事業を視察されて歸朝してからは、其事業の女子に適してゐることを極めたので、いろ〳〵の物議はあつたけれど大英斷を以て從來の男子を廢し、晝夜とも女子を用ふることになつたので、愈よ女子專門の職業となつて了つた。是れは實にさもあるべき事で、一躰女子には肝走つた徹る音聲を具へてゐるので、濁つたのや、透明を欠てゐる男子から見ると適當には違ひない。それに男の交換手の多くは學資を得るが爲めにホンの片手間に遣つてゐたのに過ぎなかつたから、何うして

もお役目的不親切に流れ易いが、女子にあつては乃ち然らず、渠等は先天的細心で、萬事が綿密で、親切であるから、お話中とか混線とかの場合に於ても徒らに加入者と爭ひをする樣なことはない。畢竟するに愛らしく徹る音聲と、職務に忠實で親切な所とは男子に優ること萬々で、女子の職業としては交換手位適當のものはあるまい。

さて此交換手とならうとするには如何なる資格を要するかといへば。先づ年齡十四歳以上で、無論身體强壯でなくてはならぬが、必要條件の中として音聲の鮮明なるもの、聽管の敏きもの、此二點は是非とも備へなければならぬ。それから學業、是れは左したる難かしいことはない、高等小學第二年生修業以上の學力を有つてゐれば充分である。て、其入る手續きは、人員に不足のある場合、交換所に於て時々募集するからその時に制規の願書を差出して試驗を受けるのだ。が、試驗といつてもたかゞ高等小學二年生の程度だから苟しくも普通の教育を受けるものなら合格するのは易々たることだ。この科目を擧げ樣なら、

一讀書　電話交換所規則。
一作文　書牘文。
一算術　和洋の加減乘除。

まあ此樣ものに過ぎない。

試驗にも首尾能く合格して愈よ採用さるゝとゝ極まれば、最初の六ヶ月間は見習をしなければならぬ、此間は日給十錢内外を給せらるゝ。斯うして毎日怠りなく交代て通つてゐる中に一通り熟練もなし見習の期限を經過すると愈よ交換手として日給十七錢以上二十錢以下を受け、なほ勉强次第で進級して二十五六錢の日給を受ける樣になれば、一ヶ月の收入最下給五圓、最高級七圓五十錢となる勘定だ。是れ敢へて多額の收入とはいへないが、十五六歳の女子として、又僅かに高等小學二年生の所得としては決して少額とはいはれまい。殊に男子が廢せられてからは女子も夜勤宿泊をする樣になつたので、歳月を重ねて行く内には五六十錢迄の日給は給さるゝのだ。兎に角中流以下の處女にあつては優

に一家の經濟を補助して行くことが出來樣と思ふ。

### ▲看護婦

身は病床にあつて呻吟すれど、妻なきの人、母や姉妹のなき人は、誰れに依つて介抱され、又誰れに依つて慰められ、病苦を忘るゝことが出來樣か。是に於てか看護婦なるものゝ必要が起つて來る。渠女は是等不幸の人の爲めに、時に或ひは妻となつて優しい手を病める人へ下して介抱し、時に或は慈母の如く溫顏を以て慰め、姉妹の如く暖かき語を以て勦はるのが其職業である。

あゝ、渠女の職業は廣き意味に於ての慈善事業である。天賦の優しく、暖かい性質を有つてゐる女子諸君の、正に欣んで就くべき職業ではあるまいか。

雖然、優しくつて、親切で、同情の深いばかりては此美しい職業を全ふすることが出來ない。病める人の死活を双肩に擔つてゐるのは元より國手の責任に屬してゐるけれど、俗に一に看病、二に藥との例への如く、國手と相俟つて同じく病者へ對して責任の或部分を傾たねばならぬ最も大切の職業であるから、夫れ相應の經驗を積まなければならない。が、中央首都の東京、病院も澤山あるが、其處此處に看護婦會なるものも大分見受けらるゝが、何うも完全なる看護婦の摸範となるべきものは稀れの樣だ。

では、看護婦の修業は如何。先づ少くとも高等小學全科卒業の學力を有つてゐるもので、東京市內では大學病院、赤十字社病院、慈惠病院、其他私立の病院等へ入つて三ヶ年の修業を積むか、又は看護婦會へ入會して制規の研究を經て來なければ、醫學上から出た看護をすることが出來ぬ。否、看護婦となるの資格を得られないのである。斯うして先づ一と通り看護の道を卒業したる後、更に病院附の看護婦となれば、人の忌み嫌ふ傳染病院、其他專門の病院、普通の病院などに依つて一樣の給料を得ることが出來ないけれど、一ヶ月七圓から十五圓迄の收入は必ずある。併し以上は大概官立とか縣市立とかの病院で、それが私立となると最初の

六ヶ月間の見習をしなければならぬし、其間は僅々十錢内外の日給しか受けることが出來ぬ。それて見習の期間を過ぎ去ると始めて看護婦として採用され、一ヶ月六七圓の給料を支給さるゝのだ。一躰、看護婦なぞは醫者と同様で多くの病人に接して實驗を經て來ねば役にたゝぬので、随がつて過分の收入を得られぬのである。看護婦の收入としては前記の通りだが、此外に患者からの心附もあるからそれや是れやを合す時は二十圓以上の月收を見るのはいと易いことだ、尤も病院に依つては此心附なるものを堅く禁じてゐる所はあるが、裏面へ行くと熾んに受授されつゝあるのだ。併し病院附となるよりも渠等の爲めに最も收入の多いのは病人の自宅へ聘されて行く塲合て、これは大抵看護婦を雇ふといふ家は大家と極つてゐるから、一日一圓乃至二圓の日給を受け、又病氣全快の時などには過分の貰ひものもある。又地方などに傳染病の流行する塲合に其地方へ聘されて行く時なぞも、一日一圓以上の收入があるから、多い月は三十圓以上の收入があれば、平均一ヶ月十四五圓以上二十五六圓は誤りがない收入だ。それに病家へ聘されて行く時は食事は凡べて雇主の賄ひだから給料は其儘殘るといふ勘定だ。

以上はその收入に就て語つたのみだが、前にもいつた通り看護婦の職業は慈善事業に屬してゐるのだから、患者へ對するや、常に金錢以外に、暖き心と同情とを以て、能くその妻となり、母となり、姉妹となつて慰め劬はるの心懸がなくてはならぬ。既に此心懸あり、看護婦の職務の、恰かも身に纏ひ居る白衣の如くに清く、又神聖のものとなるのてある。

## ▲媬姆

髮は手數の係らぬ夜會結、木綿ながらも小奇麗とした衣服を着た、何處となく人懷つこい、謂はゞ身體の或一部分に愛の神が宿つてゐる様な十七八の女が、七歳位の、髮を長く後ろへ垂れて華やかなリボンで一寸と止めて、蝦茶の袴に護謨靴を穿た愛らしいのに附て只有る學校から出て來る所を見掛けることが度々ある。渠

は果して何者であらうか。

ガバチアス、婐姆乃ち高等子守で、良家の家庭に雇はれて專ら子女の養育係となる一種の家庭教師である。一体我が邦では古來からの慣習として子守といへば、直ぐに頭恣には手拭で向ふ顚巻をして、溫袍で嬰兒を脊負つて其處の神社や彼處の佛閣なぞに集まつて聞くに堪へぬ俗謠を歌つてゐるなど、無敎育の少女が爲すべき最も卑しく、又最も耻かしい職業の樣に思つてゐた、否、從來の所謂子守なるものは全く無敎育ものばかりであつて、本人は勿論、愛兒を托してゐる雇主その人も之れを遇するや極めて冷淡で又卑しんでもゐたのである。で、假し『高等』の二字はあつても子守といふ名の付くからはその耳に怪しい響きを與へて、忽ち聯想されるのは從來の卑しい子守であるが、玆に余輩の、女子の職業として紹介する高等子守なるものは去る不見識な、卑賤なるものではない。西洋各國の家庭で熾んに行はれつゝある最も高尙な、最も神聖なる職業としてのガバチアス（婐姆）乃ち是れ！。

---

まだ罪も汚れもない白絲の稚兒を養育するの困難なるは今更謂ふまでもないことで、最初の導き樣一ッで善くも惡くもなるのであるから、人に母たるもの丶苦辛はなか／＼容易ならぬことである。が、華族とか紳士とか謂はるゝ人の夫人には外面から見れば氣樂で何一ッ用事らしい用事がない樣に見えても、良人が世に時めけば時めく程それに引續いての交際やら、一家の料理やら、奴婢へ對する心遣ひやらで氣の休まる暇がない位で、從つて大切なる子女の養育も氣を配らないではないが、自分の氣に休まる時が少いので自然と等閑に附せられて了ふて自分に代つて子女を監督し、養育して呉れる者に信賴せねばならなくなつて來る。玆に於てか高等子守即ち婐姆なるものの必要を感ずるのである。して見ると婐姆の責任や甚だ重く、從來の子守と比較すれば其職業の淨く尊いことは啻に宵壤月鼈の差のみではない。女子の職業としては實に立派なものである。

て、高等子守、乃ち保姆として完全なる資格は如何なも

のかといへば。第一品行方正なること、第二一點の邪心なく能く子女と同化し得らるゝこと、第三萬事に優しく柔順で親切なること、第四普通の教育あること、先づ此樣ものである。此内普通の教育といつた所で高等小學全科を卒業すれば充分であるが、此外に是非とも心得て居なければならぬのは子供の養育方、家庭教育の大躰、高尚なる趣味、此三者は必らずなくてはならぬのである。如上の資格を備へてゐれば高等子守として完全なもので、例へが一時に二三人の子女を托されても決して人の子を誤まる樣なことはあるまいと思ふ。斯うして良家の家庭に入つて高等子守となる、この收入は何樣ものであらうか。

元より一定の額は極つてゐないけれど大抵一ヶ月四五圓から七八圓の給料は得らるゝのである。食料は無論雇主から賄つて呉れるし、この上夏冬の二季に衣服を給されるから女子の職業としては決して最下に居るものではない。殊にその相手が自分の導き次第で何うにでもなる謂はゞ神樣のやうな清いものであるから四六時中念頭を去らないのは只善い方に導かうと思ふの外は一日罪のない、あどけないことを言つたり、したりして愛らしいものゝお相手をしてゐれば其職責は盡してゐるのだから、別段氣兼も苦勞も入らないし、自分が丹精して養育して行く稚兒の智識の日に月にメキメキと進んで行くのが明かに認めらるゝばかりではない、その稚兒から誰れや〳〵と慈母の如く、姉の如くに慕はれて、片時居なくつても大騷ぎを遣られる樣になつては、その美しい、僞りのない愛情に駈られて我が子の樣に眞から可愛くなつて來て、その前途を見るのが樂しみになつて來る。此位光明ある、光榮ある、又希望ある職業は、女子の職業中他に多く類を見ない。

海に行くの道を知らざる人は川を教導せよ

## 饑饉の話

T、K生

本年は春より夏へかけて雨多く殊に土用はまる潰れと

なりて盛夏の候一日の晴天なく多くは曇り勝にて氣候涼しく動もすれば土用中重衣をしたる日さいありき、其れが爲にや世間に諸種の病人多く、衣服器什は概ね黴を生じ簞笥長持の物乾かす暇さいもなし。斯る有様なれば畑物は一般に不出來にして實り惡しく、各地方には水害の沙汰を聞くこと頻りにして田畑家屋の流失浸水せしもの擧げて數ふべからず、中に就て最も痛心すべきは米穀の不作なり。米は日本人の主食物にして開闢以來我が國人の依て以て命脉を繼ぎし處ろのものなるが維新以來國民生活上に變遷を來せしもの多きも米の需用は國民の膨張と共に益々增長して、これなくば一日も生存すること能はざるものなるに其の米穀の生產に影響を來すとありては世間一般の不景氣も思ひ知らるゝ事にぞある、扨てその米も土用二十日の間燬けるほど照りてこそ實のりも良かるべきに今年の如く雨勝にして春の彼岸この方碌々の晴天なく、爲めに氣候昇らず例年八十度より九十二三度の間を往來する酷暑も稍七十五度を上る事尠く、平年ならば氷を呼びラムネを呼び、瀑布、海水の邊に暑を避けたる都人士も本年は殆んど避暑の必要を感ぜざるほどなれば、この氣候が稻作に及ぼす影響は容易ならざるべしと人々言ひ合へり、若しこの儘にて秋の日和も雨天に閉さるれば稻の不作たる事は最早爭ふべからず、旣に東京附近の早稻產地に於ては丸潰の噂さへありけり、全國を平均して六分作か七分作か、いづれにしても凶作たるを免かるべからざる事なるべし、扨て凶作の後は世に恐るべき飢饉にして、經驗ある故老の心を苦めつゝあるもその故あらんかし。

方今の如く世に交通開けて物品通達の機關全備したる世の中にありては、又昔時の如く凶歲に當ッて飢饉の慘狀を見る事尠しと雖も、這般の便宜は世に富める人かさなくば概ね通邑大都、若しくは都會に近接せる地方の住民にのみ幸して交通不便の山間僻陬に於ては文明交通の恩典に浴すること極めて尠きのみならず、縱へ大都通邑の地に住する人民とても平素貯蓄の資力なき小民にありては物價の騰貴に苦み、たとへ餓死する

に至らざるまでも生活上の困難よりして、昔時の人々が蒙りし飢饉と同樣の慘狀を呈するに至らん。現に東京市内の場末の小民は連月の霖雨の爲めに稼業を爲す事能はずして飢餓に迫るものさへありといふ、又先年露國の飢饉、印度の大飢饉の如き、數萬の餓莩道路に横はりて旻天に號泣したる慘話を齎らすに至る。況んや世の災害は唯これのみにあらず、今こそ政治上、社會上の機關完備してさる患はなしとするも昔時の飢饉には必らず所在に盜賊起りて良民を殘害し、若しくは一揆暴動起りて家屋を破却し、官府も亦之を制するに苦しみたるの例尠からずその上飢饉には必らず疫癘の伴ふものにて飢死の外には病死するもの數を知らざるに於てをや。されば、飢饉の害は單に一部の寒民の災たるのみならず引いて社會上流の富民もその餘響を蒙る事大なるべく實に社會上の一大難事なれば、大に警戒して一家としても之れに處するの方法は豫じめ講じ置くべき事なるべし。

## ▲むかしの飢饉

これを故老の實驗に聞き又、世に書き殘されし古昔の雜書に徵するに飢饉の恐るべきは海嘯大地震、洪水、火災と同じく天下五大災異の中に數へられたり、されども地震洪水海嘯等の如きは概ね一局部の變災にしてその慘狀も自から限らるると雖も飢饉に至つては概ね全國通じての變災なれば隨て金穀を募りて救濟するも(平穩の地より災厄の地に向けて施すとも得べきなれど)版圖極めて廣くそれが爲めに縱へ義捐の金穀を募りて災厄地に救濟せんも容易に手廻らず爲めに益々飢莩の數を增して天下の慘狀を現出するに至るべし。

古來日本に於て飢饉の生ぜし歲甚だ多し、史を案ずれば崇神天皇の六年に見へたり、此年天下大に餓へ盜賊所在に起るとあり、又欽明天皇の二十八年に諸國大水人大に飢へ隣人相食むに至り勅して之を救ふとありしが、これ等は上古の事故何程の大飢饉にして將た如何なる狀況なりしや仔細に見ること能はざるも古昔草創の世その慘狀は甚だしきものなりしならん。由緒ある寺院の緣起などに書き殘されたり下ッて推古天皇の三

十一年霖雨大水五穀不登とあり尋て天武天皇の白鳳五年五穀不登百姓飢とあり、又元正天皇の天平五年に諸國大飢饉、同じく諄仁天皇の天平寶字七年に五穀不熟民飢死多く、それより洪水、旱天、蝗蟲の害にて諸國に飢饉ありしこと、大なるは五七十年に一回、小なるは十二三年に一回あり、近世に於ては延寶三年の大飢饉、天明三年の大凶、並びに天保七年の不作を以てその大なるものとす維新前後まで世に行はれたる諸國の凶年準備即ち備荒貯蓄は大概延寶、天明の大飢饉に遭遇したる人々がいよいよ凶年の恐るべきを肝に銘じて考へ付きたる處にして或ひは盛んに籾を藏し稗を蓄へ、葛の根を製し、芋を植へ、蕎麥を植へ、藁餅を作り松皮を搗くなどいづれも細民が危急に應ずるの策と爲せしは畢竟は鎖國の習慣にして交通不便なる時代には止むを得ざる手段なりしが、今日に至ては幸に此の如き不便と窮屈なる方法を取るを要せず、平素貯金して以て外國米の輸入を仰ぐの方法を取るに至れり。



## ▲饑饉の慘状

凶年に飢饉なしとの諺あり、これは實際なり、思ふに不作の年は前年の持米にて兎も角も生活を爲し得べきが故なり唯貧農にてその年の青稻を刈りて食糧となすものはその年の秋より飢餓に迫る事あるもゆたかなる農家は一年分の食糧を前年に收穫するを以てその年の秋までは飢餓の沙汰を聞かざるなり扨て翌年に至つて殆めて飢饉の慘状を實現する事古來の例なり、去る二十九年の不作にて翌三十年に各地方に飢饉の聲を開く事甚たしかりしが如し、一毛不作の大飢饉に至つてはその年の冬より餓莩を生ずるあり、大概翌年二月三月に至り、稍く田圃に忙しからんとする頃よ

り食糧の欠乏を訴ゆるを以て生產上に影響する事著るしく古來の大凶年には播種に宛てたる籾を食糧に供せし爲めに耕作の基を失ひし例屢々ありたり。

天明三年の大飢饉は奥羽地方に於て殊に甚だしかりし由、米盡きて始め稗糠を食ひしがそれも盡きて、後にはいのこ葛、蕨の根を掘り、又は野花、海帶、百合、山慈姑などに及び終には天下制禁の牛馬、犬猫の肉を食ひ、甚だしきは死人の肉をも食ふに至る。

穀物盡きて山菜を掘り、海藻を集めて食料とせしものゝ平素食し馴れざるものを腹に充せし爲めとて不時の病者を生じ、一村擧つて枕を並べ倒ふるゝの慘狀を呈するに至る。

食物の欠乏は直ちに疫癘を生じ、飢死の人病死の人相繼ぎ、死するも葬る人なく、病むも看護するものなく、爲めに病者と死屍とは累々として道に滿つるの慘景を呈せし事、寺院の緣起などに畫の如く記されたり。思ふに鎖國にして交通の便開けさりし時代にありては一朝の飢饉によりて萬民の蒙りし災害は中々今世の人の想像の及ぶ處ろにあらざるべし。

小川顯道といふ人の著したる塵塚談に天明の飢饉を敍せり、中に曰ふ予東海道藤澤驛に寓居せし所、天明四年春、米穀高直なり。都て田舍は極貧の者といへど正月松の內に飯米を調ふる事は大なる耻辱として冬の內に調へ置く事なり、然るに懇意な麥屋喜三郎方にて當元日二日に白米四斗賣れり、變事なりといへり、正月十三日白山へ參りがけ品川三丁目加賀屋武右衛門方へ立寄、昨十二日一兩に付玄米四斗四升に調へ候よし、小賣は百文に付き六合のよし、閏正月四日小石川邊白米百文に付六合五勺、廿日小網町町人共申合粥の施行をなす二十日一日に玄米十六俵焚けるよし也（中略）此節藤澤宿貧賤の者、食物、稗、糠、麥、二番糠、かじめ、ところ、百合根、藤の葉、榎の葉、まゆみの葉、大はこの葉、松の皮、草の芽は何によらず、是等の類を食とせり、予が親しく見聞せし處なり。

又齋藤彥麿の寬天見聞記に天保七年の飢饉を記せり、曰く諸國大風雨にて其年五穀不熟、天下大飢饉とぞ聞

こえける、されば諸色の價次第に上りて同八年には御藏米の相場は百俵に付百五十兩ほど、錢百文に付白米四合より二合五勺までに至りしかば、下賤の者難義いふばかりなく、火附盗賊多くして同八年正月二十八日の夜は江戸中に火災九ヶ所ほど有て、日々物さわがしく其うへ大疫流行して人多く死す、飢にくるしみ道路にたほれ死す者昨日はこゝ、今日はかしこ、幾人といふ數を知らず、市中の人々は此の倒死の者のかたつけにのみ奔走せしに、有難き御仁政により兩國廣小路、神田佐久間町、同鎌倉河岸に御救小屋を建られ、道路に迷ひ飢に苦しむものどもを入置れ日々に飯を賜はり、病者には醫藥を賜はりしかば窮民の喜び限りなく、されば町々の富豪どもゝ粥を炊て飢人に施し、又は我家近きあたりの窮民に米錢をあたへなどせしかば、飢を助かる人、數を知らず、此時近國には窮民蜂起して富豪家に亂暴を働らくなど聞へしが逍がに江戸ばかりは斯く仁政によりて爭闘を知らず云々。

又山崎美成の隨筆中にも奥州南部癸卯(天明三年)の饑荒を記す、其の中、奥州八戸の惠比壽屋某より本店江戸田所町井筒屋某へ宛てたる書狀に當地當年の凶作は前代未聞六七月頃より次第に不順にて土用中袷、山吹咲き九月下旬に筍を生じ稻作は七月下旬に至りても出穗なく、又た穗出てゝも葉の中へ隱れ、花もかゝらず、それ故一粒も實入なく大豆、小豆、粟、稗、蕎麥等は八月十三日夜霜に打たれて種なしとなり、古今未曾有の大凶作、その爲め穀物は一向無く相場は市毎に引上げ當時の相場左の如し(天明三年十一月十一日)

| | | |
|---|---|---|
| 玄米 | 一升に付 | 二百五十文 |
| こぬか | 仝 | 五十文 |
| 大豆 | 仝 | 百五十文 |
| 搗粟 | 仝 | 二百三十文 |
| 蕎麥 | 仝 | 百二十文 |
| 豆腐粕 | 仝 | 廿五文 |
| 片舂麥 | 仝 | 二百文 |
| フスマ | 仝 | 六十文 |
| 粗稗 | 仝 | 百文 |

兩替　六貫二三百文

右の通り食物になるべきものは過分の直段なれども至つて乏しく據ろなく山野をあさりて蕨、野花、葛等を堀り食ふも、それすら大勢の飢人にて何程ありても足らず、さしもの大山も忽ち堀り盡し、今は唯葛蕨の粕あもそゝめなどいふもの計り食ひ爲めにその毒に當り身躰腫れ大小便不通となりて忽ちに死歿するもの枚擧に遑あらず。

九月頃乞食等は犬、猫、猿等を食事とするより人々驚ろき膽を潰せしが十月頃よりは通常の人々も犬猫は申に及はず牛馬を打殺して食事となし非人乞食はその死肉を鹽もつけずして食ふ事宛然鬼の如しと人々淺猿しくおもへり。

それ故在々所々押入强盜夥しく起り家内殘らず縛り置きて穀物家財までも奪ひ取り其上家に火をかけて逃げ去せるなど物援言はん方なし。

當時難澁者の食事とする處ろは松皮香煎、あも香煎、藁しべ香煎、豆から香煎、犬たて香煎等なり。

佫餓死の者は國中半分以上と見積り、然るべき農夫も非人乞食の群に入り、顏色憔悴、髮は亂れ、眼は星の如く色靑ざめ衰へ頰骨高く、口尖り手足骨の如く、赤裸に菰をまとひし有樣言語に盡すべからず云々。

元來死牛馬を食するは一般の禁制なれども非人乞食等はその牛馬を引來り皮を剝ぎ鹿と稱して賣るその樣平生のおつとせい杯の如く目方にかけて賣買せり、又餓死さするを不愍に思ふて小兒を海中へ投入る者あり又名を惜むものは淵川へ身を投ぐるあり、山林の奥へ入りて縊れ死するものもありき、されど未だ親を捨たるもののあるを聞かずこれ實に殊勝の事なり云々。

是によつて見るに飢饉は餓莩飢人を生ずるのみならず又諸種の疫病を生じ、强盜、一揆の犯罪人を生じて社會の秩序を紊亂するのみならず又更らに妻を棄て子を棄つる等道德上の壞敗を來すこと眞に痛み且つ恐るべきの事共なり。

## ▲天明の荒饉江戸市中の破却

又曲亭馬琴の天明の荒饉記に曰く天明三年より六年

まで凶年打つゞきて四五年を經し事なれば米價の高き事いふばかりなく、されど商賈は猶利を得ん爲めにあちこちの米粟をいち早く買取り藏めて蠹み朽るまで出さず、中買小賣の商人までもおのおの彼に倣て且利の上に利を見されば、あれども無しとて賣らざりけり、この故に貧士、賤民命を繫ぐに由なくして、事の由を奉行所へ訴へ出でつゝあはれ米商人等が隱しもてる米を出して賣らしめ給へと願ひまうせしもありしとぞ このあはひ舂米屋等相謀りて舂米を買はんとて來る人每に百文或は二百文と定めて、それより以上は賣り與へず。それすら黎明より買ひ後れずとて立ちつどふ男女老若、囂しく罵るもあり推さるゝもあり、果は突倒し摑みあうて泣き叫ぶもの尠からず、それも後には札を出して何所の米屋も賣らずなりぬ。この故に麥を買はんと欲するも麥を得ず、野菜を買はんと欲するも價廉ならず、詮方なく賤民は昆布、海帶、鹿尾菜などを食として一兩月を凌ぐもあり又豪家と唱へらるゝ三井、越後の呉服店、糸店、兩替店ともに琉球芋を多く蒸して半切の桶に入れ店の四隅便宜の處に据置て十五歳以下の小斷の走り廻りするものに恣にとり喰せしかば毎日に穀を省きし事大方ならざりしと聞こゆ。



さるほどに五月晦日の事にやありけん夜に入り俠客ども群がり立ちて麴町なる米商人の肆を理不盡に破却せり、これぞ世に打こわしといふものゝ手はじめとぞ聞へたり、かくてその次の日より或は百數人一隊となりて江戸中なる米屋の店を破却すること、日として間斷なかりけり、はじめは夜中もしくは早朝のみなりしが後には白晝にもこの騷劇ありその破却する物の響罵り叫ぶ人の聲、弗撥囂塵として十町の外に聞へたり、

予は京橋區南傳馬町なる米商人萬作が店を破却せられし跡へゆくりなく通りかゝりて見てけるに米穀はみな俵を斫り斷ちて、その店前に引きちらし、衣類雜具は簞笥長櫃をうち破りて。路中へ投げ棄てたればゆくもの道を去りあえず、その米を拾はんとて貧民妻、婆に小女さへ乞兒と共にうち混じりて袂に掴みこみ嚢にいるゝ有様は恥を知らざるものに似たり、さりとて制するものはなし、この頃小日向水道町にて豐島屋といふ米商人の其店を破却せられし有様事の爲體これに同じかりきといへり、これにより市の正より與騎同心を出して制させ給ひしかども勢當るべくもあらず、只今此所にあるかと見れば忽焉として隣町にあり、あふれものどものそが中に年十五六の大わらわのいつも衆人に先立ちて檐に手をかけ矮樓に飛び入り奮擊すること大ならずこれは人間業ならで必ず天狗業なるべしとて人皆畏き怕れけり（中略）

この頃御藏米を開かせられ江戸中へ米の價下直にして下されけり大畧一人に玄米一升五合と定めて隈なく頒下されたる御仁政人皆感激し奉りて市中靜謐するほどに新麥も出來古米も諸國より運送入津するにより八九月に至りては百文に白米六七合になりけり、されど其日稼ぎの寒民は猶白米を求むるに力及ばず或は虫喰みたる陳米或は穀麥を一升二升づゝ購ひ求めてこれを日毎に一升德利に入れ舂精げて炊て食しけり云々。

質素儉約は近くば目下の救荒の爲め遠くは國家數歲のための基礎なり汝等みな予が身を以て摸範とすべし若し予にして言を食まば遠慮なく直言せらるべし衣食足りて禮節を知るかくする時は廉恥を重んずるの風もおのずから進むべく武士道も奮ひ起るべし　松平定信

懶惰は世界中に於て浪費の最大なるものなり何となれば時間は現に之を用ゆれば無量の價値あり既に之を經過し去るの後は自然と雖も人工と雖も決して之を如何とすること能はざるものなるに懶惰は惜氣もなく之を徒費すればなり　ジエフヲー、テーラー

# 名家談叢

## 虎列刺病の歷史(下)

(東京市教育會席上に於て)

警察醫長 醫學士 山根正次君

是より私は豫防上の事に就てお話を致しまする、總て此傳染病を防ぐといふ事はドウすれは宜いかといふと、傳染病のない中に防ぐのが一番易いのであります、若も傳染病が出ましたならは、則ち其少數のときに於て之を防ぐのが易いのであります、若も又澤山に出ましたときに於ては必死になつてやらなければなりませぬか、それは傳染病豫防に適つた所の方法てはない、出ない中によく防がれはなりませぬ、就きましてはドウいふ事が大切てあるかといふと、總て傳染病でも何ても强壯なる所の人といふものは冒かすとの出來ないものてあります、それであるから身體を平素に於て錬へて置くといふ事が大事てあります、それ故に學校へ行く所の人てあつても、十分に身體といふものがよく運動をしたり何かして丈夫に拵へられなければならぬのであります、それで此傳染病を總て防ぐ上に於て身體の抵抗力といふものを强くするには、學校に於て體育といふものが盛んにならなければならぬのであります、私は體育の事に就ては平生申して居りまするが、本校の如きは立派な新らしい學校が出來て、空氣の流通もよし光線の取方もよしパンクの工合もよし、總て御注意になつて出來た學校で、殊に雨中體操場抔が設けられまするし、他に於ける所の學校とは殆と全く異なる所の觀を呈して居るのであります、斯の如き立派なる設備のある所に於て私が體育をなさい一言はなくても既に設備は十分てありませうが、學校に於ける所の體育といふものは十分に行はれませぬと、此兒童といふものが弱つてしまうのであります、兒童が盛んでありますれば抵抗力が强いのでありますから、消化力もあり胃にはよく分泌され、十分黴菌に對して堪ゆる力があるのであります、黴菌といふものは隨分人を殺すやうな强いものでも案外弱い、人の體中に這入つて來ても病氣を拵へすに經過するとがあるのであります、殊に强い人に向つては出來ぬのでありますから、それは平素に於て十分なる用意がなければならぬといふのは、即ち學校に於ては私は體育を十分御奬勵になるやうにしたいと思ひまする、日本に在ては智育の方の發達の上に於ては骨を折るが、體育の上に於ては餘計骨を折らない、是は夙成の教育の方法といふものではあるまいと考へる、教育に就ては智育德育體育——是は何人でも言ふ事でありますが、此事は固より並行しなければならない、併なから私は寧むらくは日本に於ては、智育より何より此體育といふ事を盛んにしなければならぬと思ひます、何故かとこれは智育の方は此頃はズン／＼進むけれとも體育の方は進まない、頭が大く尻が小さく、頭が大きくなくなつても身體が小さくなるといふ結果が現はれて居るのであります、頭を澤山使へは使ふ程體育といふものを盛んにしなければならない、それが並行しない、併なから是に就て並行しなければならぬものが澤山ある、即ち身體の營養といふものを進めるのであります、日本人は——或は學校は六歳からで宜い、歐羅巴に於ても多數の國に在りては六歳から悉く學校へやつて居るから、日本もそれと同じく差支ないといふ議論をする人もありますが、私共は大に反對なのであります、西洋に於ては智育を盛んにする上に於ても、モウ既に家庭に於て十分なる教育が出來て居るのである、それから又種々の物を覺ゆるのに日本の如く骨を折りませぬ、虎抔といふものは無料で行つて見るとが出來る、種々博物館抔といふものは都會に於ては整つて居るから、小兒の中に學校へ行かなくても覺えられるやうに出來て居る、日本人は之に反して何も彼も覺えなければならない、學校へ行つて始めて物を習ふのであるから、學校の課程といふものは隨分多いのであります、それから又體育といふものは進んで居らぬのみならず、頭を使へは使ふ程營養をしなければならぬにも拘らす、日本人は茶漬に茶漬或は偶々朝汁を吸ひ茶漬を食つてさうして學校へ出る、西洋の人は朝から牛乳を呑みパタを付けて物を食ひ、殊に英國の如きに至りては朝から大きなビフテキを拵へて食つて居る、さういふやうに營養が足り、家庭に於ては物を覺えられ、外に於ては博物館的教育を受けて居る、私は中々日本人がそれと同しやうに進んで行くといふとは難い事であらうと思ひます、身體が惡るくなつても構はぬといふ理屈はあるまいと思ふ、小學校に居

る間は大概堪へられて行くけれとも、中學校へ行くと モゥ身體が弱つて來る、男の生徒は進んで學問をしやうと思へは中學へ這入り、中學を出て高等中學へ行くには試驗といふものがある、さうして競爭試驗に及第しけれは大學へ這入れないといふ有樣てあります、其拍子に種々身體を使つて居るから、學問が出來ても其結果はドゥてありまするか――ハイカラ黨が出來る、學校に居る時からコン〳〵咳が出る、大學を卒業した頃には血が出て來るといふ譯になつて身體が非常に弱つて居るのてあります、今日てはパンクの制が置かれて以來足は大分延ひて來たといふとてありますけれとも、量目の上に於て決して増して居らぬのてあります、それてありますから私が考へるには、智育のみ發達しても役に立たないから、身體の發達の上に於て十分に骨を折られねはならぬと思ふ、

それて序なから虎列剌豫防の細かいお話をする前に於てお話しますのは、衣服の改良といふ事てあります、一体日本人の衣服を改良する上に於ては、家屋といふものゝ改良をしなけれはならない、家屋の改良が出來て始めて衣服も改良するといふ事になりませう、けれとも日本の一体の衣服といふものは、昔から今日のやうな衣服であつたかドゥかといふ事を考へて見まするど、昔は却て便利な衣服を着て居つたのてあります、昔は皆な筒袖であつたのてあります、それが今日に至りて非常に袖の長い着物が行はれるやうになつたのであります、私は是に就ては改良服といふものゝ中に書いてありますけれとも尚ほ少し申します、第一私が婦人服に就て申しまするど、非常に衞生に適はぬ所の服である、それは何であるかといふと第一袖が長い、裾が重い、加ふるに眞中に結ふ紐が澤山あります、紐は冬になりますと十二本位結はれてある、下裳の紐から襦袢を引下にする爲めの紐、或はパチン殊に上等の帶ほど衞生に害がある、板のやうな帶を結んて居る、それも一人や二人では結へない帶がある、さうして其上へ持つて行つて三味線の胴を包んだやうなものを入れて、其上へ帶留といふものを當て居るのてあります、斯ういふ帶を結んて裾の重い三枚襲抔を着ては、迚も運動抔といふものは出來るものてはない、加ふに其上に不都合なる下駄を穿いてガラ〳〵歩るくから中々困難てあります、此帶や紐の衞生に害になるといふとは、今日私の喋々を要せすして皆さんもよく御存してあります、それのみならす日本の人はドゥいふ禮式をして居るかといふと、禮をするときにまるて疊をするやうなお辭儀をする、其故に婦人のお辭儀をするときに頭の毛が引張られるのてある、腹には板のやうなものがあり、頭には小枕が突張つて居る、西洋の婦人には肩の張る病氣はないのてあります、然るに日本の女には肩の張る病氣が澤山ある、皆な禮式から來るのてあります、それてあるから私は家屋の改良と共に禮式も變へれはならぬと思ふのてありますが、今日は既に學校に於ては家といふものゝ改良が出來て皆な腰掛になつて居りますから、學校へ通ふ所の兒童は宜く總てそれに適した所の着物を着るといふとにでもして貰いたいのてあります、第一体育をやる上に於て、腰掛をしなけれは袂が邪魔になる、教師がボールドへ書くに袂を咬へて書いて居る、さういふやうな態では迚ても可かない、それ故に私は常に袂をお切りなさい、昔に戻るがよいといふとを申して居る、帶を廢するとドレ程の益があるか分らない、

それて私の今日自分の子供を運れて來たのは、着物の工合を見せる爲めてありますから、後にお孃さん方は注意して御覽になつたら宜からうと思ひます、然ろに近頃袴といふものが行はれ出した、此袴は華族女學校から行はれたものてありますが、これはドゥいふ鹽梅であるかといふと、此頃は胸から結付けてある、あれは甚だ宜くない、胸脇を非常に締めてあるから呼吸の上に於て大變な害を爲すのてあります、折角帶や紐を廢しても、彼樣に胸の邊り呼吸をする部分を締るといふと、ドゥしても新呼吸といふものは出來ないのてあります、それてお孃さん方の着物を脱かして見るといふと（胸が鳩胸のやうになつて居るこれは結核に罹り易い人を拵へるのてあります、何故なれは肺といふものは常に自在に膨かるやうにしなけれはならない、然るに成る丈け其所を締めて居られるものでありますからよく働かない、働かない所へ這入つて行つて結核の黴菌抔といふものは宿り易いのであります、それてありますからドゥしても彼樣に高く袴を穿かぬやうに着物は膝まて切つて、袴は成る丈け低くお結ひになつて紐を用ひないやうにしなけれは可けませぬ、私の拵へた着物は細帶を帶ひますから一つも呼吸に差支はない、袂がないから体育をするに自由であります、又靴を用ひて居りますから歩るく上に於て大變宜い、日本の下駄は鼻緒が眞中にあります、親指と次の指を以て挿みますから下駄が斯ういふ（手にて示す）鹽梅に向く、日本の下駄て歩るくと　　形になつて便所へでも行くやうな歩るき方になつてしまう、アゝいふ下駄て歩るかしては可けませぬ、ドゥしても學校に於ては靴を許して貰はれいはならない、靴は汚れる、往來が汚いから往來

の疾とか其他種々なものを持つて來るから、道は許さぬ方が宜からうといふ說もありますけれとも、板の間を歩るくには靴が宜いのであります、其代り靴のよい習慣を付けて貰はなければならない、何所の入口へ持つて行つても靴を掃除するとにしなければならない、さうして靴を穿いて上るときに汚れて居つては先生に對して失禮だ、上の人に向つて失禮であるといふ觀念を敎へますると、靴を拭いて上るといふ習慣を付けるのであります、然るに日本人の今までの習慣がこういふ譯に行つて居らない、ドンな奇麗な段通が敷いてあらうが泥靴を穿いてベタ〳〵上るといふやうなとがありますから、斯ういふ習慣は學校でよく付けて貰ひたいのであります、

それから序ながらお辭儀をする事に就てお話を致しますが、學校に於て手の消毒といふとをやつて貰ひたいのであります、此事も私は敎へて貰ひたい、日本人の手ほど世界中に汚い手はあるまいと思ひます、斯く言ふと人が怒るかも知れませぬが、禮をするときに日本では今日疊に手を突いてお辭儀をして居ります、其疊は何であるか、足て踏んで居ります、露蹬の草履を穿いた足て踏んだ疊であります、其踏んだ疊へ手を突いて其手て物を食ふ習慣があります、それて若も足て饅頭を握んで出したら手を出して戴く者はない、手て出すと難有く頂戴する、其手も足も汚れ方は同しものであります、況や兒童は往々汚いものを弄るものでありますから、手を洗ふといふ習慣を學校に於て付けて貰ひたいと私は思ふ、而已ならず一般學校に於て手を洗ふ所を澤山拵へて貰ひたいのであります、歐羅巴の學校に於ては澤山水を置いて、どこでも手を洗はれるやうに石鹸が付いて居るのを見たのであります、總て外國に於ては物を食ふ時には必す手を洗つてゞなければ食せぬとになつて居る、日本に於てもドウかさういふ習慣を學校に於て付けて貰ひたい、手といふものは汚いもので、手から傳染病が染まるのであります、それであるからよく下婢に言付けて、坊ちやん孃さんの物を食ふ時には、手を洗つたかドウか見て吳れといふやうに注意しなければなりませぬ、私は人に向つて言ふ丈けに、家に在ては此事を下婢に言付けて居ります、子供が飯を食ふ時に、手を洗はなければ食はせないといふ習慣を付けて居る、是等は大切なる學校の衛生であります、殊に傳染病を防く上に於ては最も必要な事であります、

それから又學校の衛生として食事の事に就て申しまするが、學校で飯を食ふ時の有樣を見ると如何であります、茶椀抔といふものは皆な家から持つて來てある、箸も箸箱に入れて持つて來て居ります、所が是等の物か一つも洗はれて居ない、何時まて經ても洗はれない、唯たお茶を少し貰つたときにヂヤブ〳〵ッとやつて其儘て伏せて置くのであります、それであるから學校に於て私は何とかして此茶椀だの箸だのといふものを十分消毒する、即ち其度毎に洗ふやうにしなければ危險であると思ふのであります、種々食物の附いたものであれは蠅が香を嗅へてやつて來る、蠅の足には澤山物が附いて居りますからして、學校に於ての食事といふとに就ては大に注意して貰はなければなりませぬ、

それから他の方に移りまするが、どうか此學校に於て飮む所の水といふものに就ては餘程注意しないと可けない、今日は日本橋區の如きに於ては全區内に水道がありますから誠に結構な事てあります、結構な事てありますけれとも、往々水から間違が起るのであります、水といふものはよく傳染病の媒介を爲すもので、一日もなくてはならぬものであるけれとも、同時に大變傳染病の媒介を爲すものである、日本人の習慣として其家の臺所の有樣を見ますると、米抔は水道の水て磨いて居ります、水道の水て炊いて居ります、然るに餘り冷たくないといつて飲む時には井の水を飲むものがあります、又茶椀抔を洗ふ爲めに井水を利用して洗ふものがあります、是等は必す井の水を漉して用ひなければならぬのであります、然るに日本橋區に於ては是等の事は十分注意してあると見えて、水道が敷かれて以來傳染病が大に減つて來たのであります、三十年の頃には赤痢のみて百四十一人の患者が出ましたが、三十三年になると二十七人になり、三十四年には十五人になつた、それから腸窒扶斯はドうであるかといふと、三十一年の頃は百十八人あつたけれとも、三十四年には三十七人といふ數になつて來た、斯ういふものを以て證據立てゝも日本橋區は衛生がよく整ふて居つて、水道の水を用ひらるゝ結果斯ういふとになつたのであらうと思ひます、其他申上げまする事は學校に就てのドういふ事であるかといふと、それは學校の便所であります、學校の便所といふものは十分なる淸潔法が行はれなければならぬと思ひます、爲々一生徒の中に於て赤痢であるとか或は虎列刺であるとかいふものに罹つて、外に特しない兆候を以て、下痢をするといふやうな場合があつても分らないとがあります、故に日々學校に於て消毒をして貰ひたいと思ふのであります、左樣致しませぬといふと、之が爲めに他の兒童に虎列刺病が傳染する赤痢病が傳染するといふ場合があらうと思ひます、それ

から學校に於ける塵溜であるとかいふものは平生奇麗にして、消毒藥を撒いて香杯の起らぬやうにしなければなりませぬ、殊に夏期に於ては空氣の流通をよくしなければなりませぬ、さういふやうな黴梅に氣を付けて行きますと傳染病がないのであります、若も傳染病が誤つて學校に發した場合にはドうすれは宜いか、其時には狼狽せぬやうにしなければならぬと思ひます、傳染病の出たときには突然吐瀉を始めることがありますから、其時に於ては遠ざかつて居る生徒は一應他の室へ移して、先づ第一に健康診斷をする、さうして消毒をして歸すといふやうな方法もありませうが、患者の近くに居つて、病毒が感染したかも分らないといふ時に於ては、其兒童を一定の場所に移して遮斷するとか、家へ歸しても遮斷するといふ方法を執らなければならない、突然吐瀉した下痢したといふときに、一緒に居つた兒童がそれを知つて、逃けて他の兒童と混じるといふことがあると非常に危險でありますから、さういふ場合にはよく注意しなければなりませぬ、さうして消毒を常に十分やつて置いて貰ひたいのであります、

次に私は個人衛生として一寸申して置きたい事があります、個人衛生の中でも最も注意しなければならぬものがある、それは何であるかといふと井端のことでありまするが、共用栓を餘り澤山用ゆると税が出るといふので、掘拔井の水を洗濯に用ゆることがあります、之が大變な傳染病の媒介をすることがあるので、私は伊皿子の例をお話致しますが、明治二十八年に於て芝の伊皿子で非常に虎列刺が出たことがあります、其原因を調へて見ると、薪炭屋の爺さんが虎列刺に罹つたのでありますが、それが他の病氣と診斷をされて葬られたのであります、さうすると其中に婆さんがドウいふ事をしたかといひますると、自分の家では洗濯が出來ないから、爺が穢した所の着物を向側の井へ持つて行つて洗濯をしたのであります、日本人の洗濯をするのを見ると、初め手の穢れぬ中に水を汲んで置くのではありませぬ、洗濯物を井側へ持つて行つて、井側で大きな桶の中へ汚い物を入れて、さうして其手で以て水を汲むのであります、それ故に直ぐに病毒が其邊に附着するのであつて、それからザブ／＼洗ふ、甚しきに至りては其絞つた所の洗濯物を、ジウ／＼絞つてさうして生絞のものを井側へ掛けて置く、それ故に糞汁杯が其邊へ落ちるのであります、兎角井側に掛けるといふ習慣がある、若も其水が奇麗なのであるならは尚更水を澤山汲んで置いて、手を洗つてゞなければ井縄に障らぬといふことにしなければならない、所がそれが一つも行はれて居りませぬ、其結果他の人が糞汁の附いて居る井側で香物を洗つたり茶碗を洗つたりするからして、澤山の人に傳染病を傳へるといふことになつて居るのであります、是等の事に就ては詰らぬ事でありますけれども、家庭に於て十分注意しなければならぬのであります、

それからモウ一つ手のとて申殘した事がありますからお話致しますが、日本人の便所へ行つて手を洗ふ所の摸樣を見ると、今日では水が澤山出るやうになつたから人々が奇麗に手を洗ふことも出來ますが、往々水を入れてある中に子孑が涌いて居るのであります、又掛つてある手拭には眞黒な迹がある、是等は黴菌が涌いて居るので、子孑の湧いて居る水で手を洗つて、さうして黴菌の棲んで居る手拭で拭きますから、手に黴菌を塗付けるといふ有様であります、ア、汚い習慣は止して貰いたい、手拭の如きは毎日熱湯を注ぐかドウかして、乾して絞つて置かなければならぬのに、日本人の手を洗ふといふ習慣｜鷹隔から出るときは宜いけれども、拭く所の手拭が如何にも汚い、それから其水には往々子子が湧いて居るといふ有様であります、是等の汚い所の習慣な形遠らないやうに、家庭に於て一般に注意するゝが出來たならば大に宜からうと思ひます、まだ他のお話を澤山したいのでありますけれとも、工學博士近野先生が待つて居られますから、請ら以客てございますけれども是丈のお話を致して置く次第であります、それから終りに臨んで、申上げて置きまするが、安政年間の虎列剌の時に、千代田城の中に於て徳川将軍が虎列剌に罹つて薨去になつて居ります、それからいの際老も死んて居ります、皆様御存じでございますが孝明天皇は如何なる御病氣で崩御になつて居りますか、往々是は知らぬ人もあります、孝明天皇は即ち今の天子様の父君で在らせられますが、京都に於て其年非常に疱瘡が流行致しまして、其時に種痘の法といふものが洽く行はれなかつたのであります、それでありますから非常に流行して、遂に此病氣が宮城へ這入つて、孝明天皇は恐多いとでありますが疱瘡に御罹り遊ばして崩御になつて居るのであります、シテ見ればお互に此衛生上の事を無視して用心をしなかつたらドウでありませうか、虎列剌病が一般に蔓延して、或は安政年間の如く千代田の城即ち今の宮城へ傳染病が這入らぬとも替はれぬのであります、傳染病を防ぐといふ事は即ち國家に對して及君に對して忠義といふ事であらうと思ひます、時罹病彼の支那の宮城の如きは今日既に傳染病が這入つて、非常に困難をして居られるといふ事でありますが、日本に於ては斯等の事のないやうに致したいと心掛けなければなるまいと思ひます、聊か虎列剌の歴史を申上げて、皆さんが體育を勤み十分強健になるやうにといふとな願ふのであります。（完）

# 月旦

## 跡見花蹊刀自

苫米地奥南

○一日余は跡見花蹊刀自を小石川柳町（跡見女學校の構內）の邸に訪ふた、すると直ぐに奧の廣間に通して面會せられた、刀自は六十餘歲の老婦人で、容貌溫雅、應接の言語や禮儀は極めて懇切、其淑德を具へてゐることが何んとなく風采の上にも現れて居る、ことに目立ちて見えたのは、女史が高齡で且つ立派な先生の身分ながら、生徒と同じく木綿の五ッ紋の上着にメリンスかの紫色の袴を着け、甚だ質素の服裝にて出で來たられたことだが、これは評判高き跡見女學校の一特色で、斯校の本色は此一種の徽章の上にあらはれ、しかも先生自ら行うて生徒に摸範を示めすものであらうとは察しながら、此の一事已に女史か實踐躬行に勉めらるゝ様子が見え、其の高風高德のそゝろに想はれて余を感ぜしむることが頗る深かつた、サテ之れよりは此の人望高き女史の經歷及び人物を紹介して見やうと思ふが、しかし其れに先だちて、余は其住居につき少しく述べて見たいと思ふ、そは人物と住居とは關係の深いもので、人物を示めすに住居より說くのは頗る趣味あるものだと信ずるからである。

○さらば、刀自はいかなる住居に生活されてあるてあらうか、廣い邸を繞らすに長い白っぽい石垣を以てし、邸內には欝々として樹木が茂り、門前より校舍らしき建物一つと、普通の住宅らしき建物一つの見えてあるものゝ、之れが夙に世上に知れわたれる跡見女學校の外觀である、そうして女史は數多の女學生を敎養しつゝ其邸內の一部分に住居せられて居る、余の引かれて入りしはその住宅らしく見えたる家にて、玄關側の事務所をぐるりと廻りて奧手の一室なるが、此所は十疊以上もあらんと覺ぼゆるほど手廣く、且つこれは此の家の客間でもあらうか中々立派てある、がそれよりも余の眼から見て感んじたのは、此の坐敷の內部の裝

飾や、對境に在る庭園の趣などの、頗ぶる風雅に作られて何んとなく一種の情興の此間に溢れつゝよである、

いま少しくそれを言つて見ようならば、床間の上に、晩翠（閑院宮の雅號）の揮灑に成れる「和神養素」と書したるのと、又た其側の下方には、同宮殿下御息所の詠且つ筆に成れる「さかえ行く御代もろともに日ごとごとまなびの道のすゝむうれしさ」と書したる二つの扁額を掛けてあり、其扁額の文句がほのかに主人の氣風をあらはしてゆかしく見えるのでまづ余の心を惹いた

また此日は久し振りにて晴天てあつたから、庭園に向いた坐敷の兩面は明け放しにして風を通し、椽側には風流なる涼み提灯數個を下げ、すぐ其前に控へ居る御庭には、蒼欝たる草木の生ひ立てる間に、自然的なる小さき築山の見え、また其下には小池の水に樹の影うつりて、美しきこと恰かも畵の如くてある、そうして其お庭は手廣くて頗ぶる趣に富み、坐敷に坐しつゝ御庭を眺むれば、彼方より清風徐ろに送り來りて顔を吹き、其快や實に言はれない、そこて審美家ならねど一種の美想を有する余は、直ぐに此所の夜の景色は何うだらう、椽にさげてある提灯に點火し、月でも御庭の彼方より上ぼつたならば、無、涼しくてまた好い景色てあらう、と自から心の中に思ふた。無駄口はあまり言はぬが、實に理想的のよい住居てある、そこて多感なる吾れは、こうも想ふた、此の住居は主人の氣風と理想によりて作られ、また能く其の氣風と理想を表示するに足るものてあらうと、しかし、余は何にも住居其の者の立派ナのに惚れ込んで現をぬかした譯でもないが、つまり斯人物にして斯住居ありといふのが、余をして甚だしく感に打たれしめたのである。

さて、刀自は靜かに此の清涼なる客室に出て來り、余と對坐して、其の經歴談や平素の意見などを述べられた、余は之れにより刀自について未だ知らざりしことをも聞き得たれば、其れを參考として左には其閲歴と人物の一斑を紹介しませう。

○刀自は、攝津國の木津村なる跡見重敬氏の次女で天保十一年を以て生れた、幼より性質怜悧であつたから

讀書といへ、習字といへ、他の女子より早く進歩したがことに、字を書くのは、父重敬氏も能書家であつた爲めに其の遺傳でもあらうか、幼い時より中々巧みであつた刀自が幼少の時には、大阪では後藤松陰先生、京都では宮原節庵先生といひて、二人とも頼山陽の門人て、當時の有名なる儒者にして且つ書も能くせられたから、刀自は幼少で大阪に居りし頃は後藤先生に就き、後ち十五才の頃京都に出でゝより以來は、後藤先生に紹介せられて其親友たる即ち宮原節庵先生に就いて、學問及び書道を修めた、其勉强の効に由りて學問も隨分發達したに違ひないが、ことにも天性特長の書道に至りて著しく進歩された、それは十四五歳の頃より父が留守の時には他人より頼まれて立派な商店の看板などを書きたることもありしといふ事でも分る、そうして刀自の學問は年月と共に漸々研究を積み來たりて、遂に今日の如く立派な學識を有するに至つたのであらうが、それは暫く措いて、以上の如く刀自は、其の最初に於ては後藤、宮原二先生に就て敎を受けたが、其の後ち漸々其の技の進歩するに從ひて、古法帖を習ひ初め、黄山谷や蘇東坡を習つて見たが面白くないので、遂に王羲之と定めて熱心に之れを習ふた、書道は其れよりズーッと上達せられた、今では、刀自は當今第一流の女流書家である、余の見る所では、刀自とか故湘煙女史とかいふのは、女流社會には實に稀れに見る能書家であらうと思ふ、刀自は又た畫も能くせられ、畫家として見ても立派なものだ、で、刀自の嗜好は書と畫で又た其特長の天賦も此に在るのだから、余は刀自に向つて書と畫について得意の御話を聞いて見た、これは、何んの道を問はず、達人の談話は大なる利益を受くると思ふからである、いま刀自の御話中で趣味あり且利益ありと思ふ節丈けを述べて、讀者に示しませう。

○刀自が自ら話さるゝには、書畫の道は、私も天性嗜好する所でありましたから、幼少の時より今に至るまて多年の間研究して參りましたが、之れに上達するといふことは中々容易でありません、けれど、本當に好きで遣るなれば趣味もあり、又た研究しつゝある間には

だん／＼上手になるものでありますよ、書を學ぶの心得ですかナ、ソレハ一口にも言ひますまいが、まづ極簡明に述べませうならば、古來書道については種々なる議論もありますけれど、私は其れ等の諸論をも見、又た年來の實驗にも照らして見まするに、何うしても書を正しくかくには心から正しくしなければなりませぬ心が正しくなければ決して書は正しく出來るものでありません、即ち心の正しきもの曲めるものそれは皆書に現れて來るものであります、心正しからざれば書も正しからずといふ事はどうしても爭はれない、昔から書道の人々が「書は心印也」と申してゐるのは能くも言つたものです、だからいろ／＼の書論もありますけれども、要は精神を正しく持てよいといふ一點に歸するのであると私は信ずる、そこで心を正しくして正しい書をかくと云ふことは、書を學ぶものゝ第一の用意とする所でありまするが、そうして書が最も正しくて、而かも正しい心が現れて正しい書となつたので、之れを精神が書に宿るとでも申しませうか、洵に正しくして活々として居て、特別の嗜好のある人は格別、之れを一般の人々が書を學ぶの手本として最とも適當であらうと思ふのは、私の見る所では王義之であらうと思ひます、他の人のはよい所もあれば癖もありますが、義之の書には少しも癖が無い、そうして其の正しいといふ所は殆んど及び難いものである、で義之を習ふにはまづ其精神から眞似て掛からねばなりません、たゞ其書風のみを眞似やうと思ふた所ろで到底義之のやうな書が出來るものでない、昔し蘇東坡が義之の書を好み、熱心に之れを習つたけどもどうも甘く行かない、所が其母が注意して、義之は書が上手だ許りでなく、所謂精神を以て勝る人であるから、お前なぞが幾ら義之を習つた所で、とても義之そつくりの書が出來るものでなし、いツそ自分の流義でも始むるがよいと言つたれば、東坡は大いに其言に感じ、爾來及びがたき義之をば止めて、自己流の書風を創めやうと勉めた話がある、といふやうなもので義之は中々えらひ書家である、昔から義之を稱して「書の聖人」といふのは決して過褒とは申さ

れません、私なども天性書が極く好て、いろ〳〵な法帖も習つて見ましたが、何うも王義之がよいので、遂之れに私淑するやうになりました、つまり私も義之を習つた一人ではありますけれど、東坡の如き奇才でさへ習つて出來なかつたのを、吾れ〳〵共の如きものが出來やう筈はなし、矢張り或點までは習ひましたが止めて、あとは自家の書風を立てるやうにと勉めて居りますが、しかし義之に由て得た所が決して少くは莫い、私は何處までも義之に私淑するものであります、義之の法帖ですかラ、それは私共もよく習ひましたが、「三藏聖經」といふのがありまして中々よく出來て居ります、私は小松宮樣や三條家などで隨分よく出來たのを見たこともありますが、王義之の法帖には實に立派ナものがあります、假名ですかラ、假名は私は專ら紀貫之を習ひましたが、假名では貫之はよい方だらうと私は思ひます、それから私は畫も好きで多年やつて居りますが、いま話の序でに私が畫を學んだことを一言申しませう、私は最初に圓山風の畫を習ひましたが、圓山風は即ち寫生畫で、言はゞ實物の形躰其儘を寫し取るといふやうなものであります、それから後で南宗派を習ひましたが、南宗は別に文人畫と申しまして、言はゝ氣韵や風格を現すもので寫生畫とは餘程違ふのです、私は此二派を習ひましたが、頑固に一方に偏するのは何うも面白くないから、今では此二派を折中して、書に於けるが如く矢張り自己流でやつて居ります、私は畫も好きですから之迄隨分畫いたのもありますが、今度は少し骨を折つて「春山」と「秋野」の繪畫二幅を書き、來年の內國博覽會に出品しようと思ふて目下遣つて居る最中てあります。

○刀自の閲歷を述ぶれば、勢ひ其教育事業に付いても述べざるを得ない、何んとなれば、刀自は書家として畫家として名高いと同時に、また教育家としても名高い人だからである、跡見女學校といへば直ぐ女史を聯想するが如く、女史は跡見女學校長として夙に有名なる女子教育家である、其の跡見女學校は、明治八年に初めて神田仲猿樂町に設立されたが、其創立者は跡見花蹊

刀自である、其前には竹橋女學校(後ち女子師範學校となる)の一校があつたきりで、それも官設で、私立として我國に女學校の出來たのは跡見女學校を以て嚆矢とするのである、當時は女學校といふのが此二校の外には無かつたので、其後ち三年ばかり立つて學習院が出來て、其内部に女子部(後に華族女學校に改む)が設けられた位だから、跡見女學校の評判大層よろしく、貴族女子の私學校に入學するやうになつたのは跡見女學校が初まりであらう、其後ち漸次隆盛に赴きて校舍も狹隘を感んずるに至り、二十年に今の小石川區柳町に校舍を移し、大いに校摸を擴張して爾來殆んど三十年間中流以上の女子敎育に盡瘁したことが少くない、そうして跡見女學校の初めて設立された頃には、竹橋女學校の女生徒は縞の襠高袴(男子用と同じもの)を着けて居つたが、それは見えもあしく且竹橋のと同じ物を用ゐるのも面白くないので、跡見女學校では紫色の袴を生徒に着けしむることゝ決めた、爾來之れを襲用して今日に至つたのであるが、今では五ッ紋に紫色の袴を着けてゐる女學生を見れば、あれは跡見女學校の學生であると誰れでもわかるやうになつた、これは確かに跡見女學校の外形に現るゝ所の特色であると余は思ふ、そうして、此外形上の特色あると共に其內容に於ても特色を具えてゐることが認められる、さらば跡見女學校の內容的特色とは何であるか、此校の趣旨を見れば、

本校の敎授する所の學藝は、專ら本邦婦人に適切なるものを選び、繁にして粗ならんよりは、寧ろ簡にして精ならむことを務め、材に因り力を度り以て其才器を成就せしめんと欲す、殊に德育に至りては本校の最も力を用ゐる所にして、實踐を重むし躬行を尙ひ、涵養誘掖、自然に自得せしむることを期す云々

とある、之れを以て見るも、跡見女學校は、日本婦人に固有なる道德品性を陶冶せしむると同時に、日常婦人に必要なる普通的學識を修養せしめ、以て品格のある而かも實用的婦人を造らむとするものである、しかし、何方かといへば、物識りといふよりは德望の備りたる、言はゞ高雅なる日本風の婦人を養成するのが寧ろ此校の眞目的であらう、此の點に於て他校の、只生活の方便

として何等かの職藝を仕込むにのみ汲々たるものや、またイヤに文明的教育をてらひ女ハイカラの養成するを主眼とするが如きものに比ぶれば、甚だ趣きを異にしてゐるので、之れを一種の善良なる特色否校風を具ふる學校といふも決して不可は無い、そうして其規則面は兎も角も、斯校の創立者にして校長たる跡見花蹊女史は、性來溫和篤實で、且何事にも實踐躬行を尙ぶ人であるから、其學校に於ける敎育の如きも、身自ら之れを行うて生徒に摸範を示めす事を勉められるので、其校の趣旨は空文に歸せずして能く貫徹されてゐる、だから刀自の理想は化して斯校の特色ある校風となり、而して斯校に集り來る數多の女學生は、皆其校風に感化せられて刀自が理想の婦人と爲らむとしつゝあるのである、とういふ具合に善良なる校風を有し、信用を置くに足る學校であるから、此學校の卒業生には頗るよい人物を出だして居るが、いま記臆にあるもので、文學者ては三宅花圃女史だとか、貴婦人ては閑院宮御息所智惠子殿下だとか、毛利公爵夫人美佐子、島津公爵夫人田鶴子だとかいふ人々は、皆此學校の出身者中であるのだ。

○終りに刀自の人物を少しく批評して見ようならば日本固有の婦德を具えたる傑型的婦人である、其智識技藝は措て問はずとしても、德行家として尙ぶべき價値を十分備へたる女流人物である、そうして其道德的觀念は、實踐躬行を以て主眼とし、彼の世俗の如く言ふて行はざるは最も其好まざる所である、其雅號の花蹊及び不言は、古語に桃李物言はず、下自ら蹊を爲すといふより取りしといへば、亦た其主義と人物を表示するものと見てよからう、女史は實に其名の示めすが如き人物であると余輩は思ふ。

暑退新凉透碧紗　砧聲不斷是誰家
酒醒小立殘陽裏　閑數籬邊紫豆花
明　館　泰

# 雜俎

## 鳥島の噴火

鳥島と云へるは横濱の南二百二十浬の海上に在て小笠原島と八丈島との間に在り（此程米國との間に問題と爲りたる南鳥島には非ず）明治廿年迄は全くの無人島なりしが同年に至りて東京の人玉置半右衛門氏が拜借して開拓に着手し千辛萬苦の末にて追々同島を切開き現今同島の産物としては年々信天翁の羽を外國へ輸出する高年々五六萬圓に上り島内には學校も病院をも設けありて男女百六十三人の人口あり周廻三里に過ぎざる小島ながらも南洋の小仙境として何れも一種特別なる樂しき生活を爲し居りたる場所なるが今回の噴火によりて全島の住民擧つて慘死を遂げ一島滅燼に歸したるは慘憺の極といふべし

### ▲兵庫丸船長の報告

郵船會社の定期航海船兵庫丸船長は會社の報告に曰く

本船第三十二次復航明治三十五年八月十五日小笠原父島二見港を出帆し鳥島に向て航海、晴天北東の和風にして波浪あり

翌十六日午前六時三十八分寡婦岩（俗に筍岩と云ふ）の東方約五浬を經過し尚針路を鳥島に採り進航せしに午前八時頃鳥島の南西に當り海底火山の高く噴出するを遥に認めたり約二十五六浬の距離漸く近寄るに該島の中央より黒烟の時々噴出するを見る

午前十時三十分頃に至り該島二、三浬の處に近寄り南方より週廻を始め東方北方終に西方に到る其間機關の緩急を應用し又海底の淺深を測り而して陸岸に近寄ること三浬乃至一浬の距離に於て絶えず汽笛を以て住民を呼べども更に人形及家屋を見ず只海底火山の噴出と山頂の黒烟を見るのみ殊に該島千歳浦の如きは海岸土砂崩壞灣形全く變じ其慘状言語に盡し難く實に慘憺を極む

本船は正午十二時鳥島を出帆し翌十七日午前五時二十八分八丈島に着す同日午後六時三十分八丈島を出帆し翌十八日午前九時十五分横濱に着港す

一、噴火口の最大なるものは該島の中央にして元住家ありし直ぐ上より其他山頂に二三ヶ所噴火あるを認む

二、全島に人畜の生殘る者無かる可く北西部の小區域を除く外、全島只噴出せし砂石あるを遙見するのみ

三、鳥島の位置（北緯三十度廿八分二十六秒、東經百四十度十四分二十秒）

四、海底火山位置概測（北緯三十度二十七分卅八秒、東經百四十度十三分二十七秒）鳥島より南西一點南約一哩

五、海底火山噴出最高は水面上より約六百四五十呎、其面積約一千呎、噴出の最も激しきものは、十五分乃至二十分間に噴出し、其間屢々小なるもの噴出するを認む、但し距離三十哩より認む

六、鳥島南方大略二十五六哩より海水黄色を帶ぶ、但し風位に依り其方位變更するならん乎

七、本船往航七日鳥島寄港の際異狀なし

八、帆船愛坂丸十日同島經過の際、慘狀を見たる趣きを父島に於て十三日聞知す

▲乘組員の直話

同島は八丈島を去る事南方凡そ百四十浬の沖合に在る一小島で、其面積は漸く一方里に過ぎない位である、餘りに地質が粗惡で僅か四五十人位の住民を養ふ食料も出來ないので內地及び八丈島より積送る樣な始末であつて甚だ不便な島で有るけれども大變に鳥が多いから其羽毛を取て是迄餘程の利益を得つゝあつた（全島を東京玉置新右衛門氏借地す）、右食糧品を積送るにも同島へのみ特に通航する船舶はないので、詰り小笠原島定期航船を年に二回寄せる事に決つて居るけれども餘り海が深くつて碇泊する事が出來ないから浪の穩やかな時に貨物及船客を揚げ下しする間だけ機械を止め、陸揚げの濟次第出帆する事になつて居た

兵庫丸は今回が丁度第二回目の鳥島寄港で在つたから豫定の如く今月も五日に横濱を出帆致し其の翌朝八丈

島三ッ根港に着き同所にて鳥島行の貨物及び出稼人三十四名を搭載して八日の午前八時に同港を發し鳥島へ着いたのは九日の正午で有つたが、前にも申した通り此附近は甚だ深く極く淺い所でも八百尺より千尺も有るので到底碇舶が出來ないから微速力にして海上に停まり漸やく荷物物び船客を下し午後二時頃に小笠原島へ向けて出帆した、其時は別に何事もなかつたが其後一時も經たぬ間に西南の風烈しく吹來り怒濤山の如く中々船が進まない僅か二百五十哩の所を一晝夜半も費やして漸やく十日の朝小笠原の父島へ入港し十二日迄同港に碇泊し同日朝母島へ向て出帆した其後母島から歸つたのは十三日の九時頃であつたが、父島の灣内に南洋行の小さな帆船が來て居て同船乘組員の話す所を聞くに同船は九日の午前十時頃鳥島附近を通航の際非常に海中が泥土にて眞黑にニゴリ所々に死だ魚や樹木が浮ひて居たから多分鳥島が爆烈したに相違ないと申して居た、併し實際噴火した事が譯かれば直に同島へ向ふ筈なれども眞僞が判然しないから矢張定規時間迄同港に碇泊して期日即ち十五日の正午、父島の港を出發し翌十六日十一時頃に鳥島附近に來たから能く〳〵海中を見れば噂の如く海中が非常に濁りて四方に樹木が漂流して居るから望遠鏡にて遙かに鳥島の山の絶頂を見れば盛んに烟を吐て居るから急に船の速力を減じて一浬許りの近さに來て見れば、海中より猛烈なる勢ひを以て海底より土砂を空中に吹上ぐる事殆んど百尺の餘に達する所三ヶ所を認む其他海水を噴出する個所數ヶ所なれば愈々船躰の危險を恐れ海岸より一哩半許りの沖合を半速力にて週回を初め島の東北隅即ち人家の有つた場所を眺むれば人家は勿論島の東半部は一面に土砂の爲め埋沒せられ毫しも元の形跡を認むる事が出來ないのみならず山陰に繋いで有つた六艘の漁船が只の一艘も見えない、西北面に樹木の殘り居る所があるから其所の沖合一浬餘りの所に至り運轉を止め汽笛鳴しつゝ望遠鏡を以て樹木の間を見るに一人の人影も見えないから端艇を下して現場に向ひ樹木の間を捜す事に決し既に下艇の用意に取り掛らんとする所へ船

首を隔てる僅十間許の所にて突然海水の噴出を初めたから此様子にては何所より爆裂を初むるか分らないから止むを得ず一と先づ視察を止めた
夫より八丈島へ避難者の有無を探すが必要と云ふ事になつたので急に出帆して十七日八丈島へ歸港したから早速島民に様子を尋ねたら十五人漁船で漂着したけれども三晝夜半の間飲ます食はずに浪にもまれた爲め一時に衰弱を來たし十五人の者が丸て死人同様で今尚ほ口を利く事が出來ないので爆裂の實況を未だ知る事が出來ないが察する所爆發を初めたるは多分本船出帆の翌日即ち九日より初て山の最高點の部より爆裂を初め山の頂が漸次に凹むに随がひ次第に噴火口を變じたるものに相違ない、又島の東半を埋沒したるは本船が小笠原島へ向け鳥島を出帆した當日西南風が烈しかつた爲に吹上げたる灰砂が島の東部へ降り來つたものと見える云々と是れ兵庫丸乘組員安倍直榮氏の直話なり

又愛阪丸の船長の談によれば同船は硫黄島に向ふ途中去る十日の朝鳥島附近を通過せしに島中より噴火盛んに起りて白烟は山の半腹まで打上げ凡そ四哩の間は魚族の死したるもの浮き上り大砲の如き音響の連續して家ほどある燒石の落下するを認め熱氣甚だしく十五哩以内に近寄る可からず其外鳥島を去る西南半哩の海中よりも盛んに噴火し居るを認めたれば大に驚きたれども船を寄すべくもあらねば直に父島に航して其の次第を急報したりと

又小笠原父島にては右の變事に驚きて何にか兆候もありしやと穿鑿せしに二百餘哩を距てたる所とて之れはと云ふ兆候もなく只だ七日の午後父島にて近年稀れなる地震を感じたるが或は鳥島爆烈の兆候にあらずやと云ふものありき、それは兎に角鳥島爆發の時日は七日より十日迄の朝にしておそらく十日の朝愛阪丸の通過せし時は其の盛んなりし頃ならむと

兵庫丸は十五日の午前父島を出帆して歸航の途次十六日午前十一時鳥島沖合に着したるに水の色は黄濁色となり島の中央よりは黒烟盛んに立昇りて風向に依り

ては二哩を距て、碇泊せる兵庫丸の船上に細き土砂を持ち來らすほどにして全島は殆んど土砂に埋沒せられ港口は陷落して形狀變じ其附近にありし人家は影も形もなく幾百丈の燒土の下に埋沒せられ其の慘狀實に言語に絕ゆ只だ西北部にある僅少の區域は幸ひに土砂の埋沒を免れ薩摩芋の畑は歷々と見えければ若しや生殘れる人もあらんかと兵庫丸は滊笛を鳴らすと七八回倘ほ望遠鏡にて限なく探り見たれども人らしきものなく全島百八十餘名の人々は全く土砂の下に埋沒せられたるものと知られたり噴火は十五六分間每に盛んとなり間斷なく土砂を噴出し居れりと。

## 夏時膳に上る魚貝

日本女子大學校講師　赤堀峰吉

鯛の「たまりやき」には、目の下八寸位のもので、先づ、一尺前後の鯛ならば宜しい、鯛を切つて、「たまりやき」にするのであります、それをするには、少し許りの醬油の中に、並味噌少し許り加へて、中に、一寸浸して、直ぐに引上げて、串に插して、堅炭を能く熾して、燒きたい、一面燒けた時に、其串を廻はして他の一面を燒きたい、若し表裏全躰ともに、燒けて仕舞ふと、串が拔け難くい、それから、全躰が燒けたら、生ま醬油を兩面から注る、注けたら、極く、ざつと、炙つて、烈火へ掛けて燒く、長時間燒くといふと、焦げ臭くなる、醬油が焦げるから、ざつと炙ぶる、さりとて、生醬油を注け流しては、生醬油臭いから宜かない、それから、鹽燒は鯛の切目に少量の鹽を振り掛けて、さうして二三分經いて、水て洗つてそうして串に插して、矢張前の如く、燒くのです、火の能く熾つた時に、するのです、それで宜からう、それには、百合の白煮抔を附け合せて宜からうと思ふ、鮑を蒸貝に致しまするには、鮑を五六分位に、釆の目に切り、さうして少々、鹽を振り懸けて、それから、其配合には、桃、梨子も宜しからう、それに、此新薑の赤貝を一寸入れて、さうして、前の鮑の鹽を一寸洗つて、丼のやうなものに入れて、さうして、桃とか、梨とか、薑とか、さういふものを入れて、さうして、水の中に鹽を少し入れる

そうですな、一合の水なら、鹽を三摘も入れます、三本指で摘んで三摘も入れまする、一寸鹽水にして、それを今の「どんぶり」に入れて上げる鮑の調理は、其位に致します、

鮑を食しまするに、注意すべきことは、鮑と章魚とは、食ひ合せが宜しくありませぬ、鮑を煮ても、焼ても、生でも、章魚と同時に食はない方が宜しい、中毒まする、いや、實際私の年來の經驗でありますから、御注意なさることを願ひます、

それから、能く其美味のもので、且それて價が廉でありまする故、之から能く「ふぐ」を調理して食するものかありまするか、私は「ふぐ」は自分でも、食つたこともなければ、食はしたこともない、何れ其中に「ふぐ」の躰中に居りまする虫を圖に示して、お目に懸けたいと思ひます、「ふぐ」に限つて食さないやうにした方が宜しからうと思ひます、之は序でながらお話し致しましたことです

蝦の調理に就て話しますか、車蝦といふものは、湯出るに能く湯の煮立つた所で湯出る、鹽を少し、僅に、中へ入れる、さうして湯出る、湯出たら、一寸水に浸して、それから皮を脱いて、背の方から庖丁を入れまする、そこで蝦には、背膓といふものがあります、それには砂を食つて居ますから、能く取り除けて、さうして、蝦の腹を五つ位に切つて、それから、ざつと、鹽を當て、後にお汁を作る、煮汁を作りまするに、鰹節の材料は各所の産地がありますけれども、鰹節は大躰土佐が宜しいです、それから伊豆の産です、其次ぎが薩摩の國です、其外、靜岡でも、何處でも、到る處に出來ない所はない位です、併し、其中でも重なるものは、今の三ヶ國の産です、

鰹節の大節は、味が惡いのでございます、小節で、小さなものを見立て、汁に入れて用ひたい、其中にも、土佐伊豆杯と謂つたら、小節と謂つて、何れも甘い、薩摩の産も、煮汁は能く効ますけれども、實際の味はひつこひ、

そこで、種々鰹節を削りまするに、念を入れて削るのが宜し、なまぬるにて洗つて、それから鉋でも、小刀でも、

よろしいから、鋭利やうにして、御承知の通り、鰹節の鉋といふものは、鈍刄い方が通りになつて居りまするが、實際鈍刄い鉋を以て致しましては、其味が生臭くてさうして、鰹節の餘計に要るやうになります、且つ甘い煮汁も取れない、それで、どうぞ、其煮汁を取るには、毎に入用のものですから、能く注意をして、削る器を鋭利し、さうして、煮汁を取つて、用ひたいものです、

●●「ぼら」は三まいに、おろして、皮をひいて、小骨を能く無いやうにして、「さしみ」のやうに薄く切つて、盆の上に鹽をふつて置いて、鹽の上から、盆へ鹽を宜い加減に振つて、其上に、即ち其鹽の上へ、美濃紙を載せます、丁度、一番下が、盆で、其上に鹽、其上に一枚の美濃紙を敷き、其上に「ぼら」の「さしみ」を置いて、又上に少許鹽を振つて、其上に美濃紙を置いて、丁度、美濃紙で、「さしみ」を挿むやうにして、それから、水を指の先きに附て、ぱら〲と紙の上を振りますると、鹽が溶けて、「ぼら」にしみるやうになります、斯ういふやうにやるのが、紙鹽の料理方といひます、それて、肉の、厚さにも依るが、二三分も經つたならば、鹽が漸々に浸はりませうから、紙を離して、そのまゝ皿に浸けて、さうして「わさび」杯を添へたらば宜しからうと思ひます、それで、三倍酢を注ける、

三倍酢の拵へ方は、味淋一合ならば、其味淋を三分の一までに焦がさないやうに煮詰める、煮詰つたならば、其中に、詰つた味淋の容積程、酢を入れる、それに醤油、少々入れる、「ぼら」には鹽氣がありますから、醤油が過ぎると不味ございます、

割烹のことに付て、一寸申上げて置きたい、それは小學校の生徒にも、高等の方には少しつゝ習うやうに致したい、近頃は、大分講義録や、或は通信教授抔も出來て參りました、併し初進のものは、唯講義録を見たばかりでは、却々六ヶ敷い、それ故に、小學校に於て適宜の時間を設けて、實驗して修らしたらば宜しからう、其節、口授したならばよからう、近頃此割烹のことが盛になりましてから、稽古するものも大分出來まして御嫁に行く前に習ふものも多く見受けます、併しお嫁に行く

先きになつて、斯ういふことを習ふといふことは、却々不自由の家にては、出來ぬことであらうと思ふ、併し、私の考へでは、小學校では、衣服を裁つことを敎へて居ります、衣服を裁つことも、成年の後婦人の一家を治むる婦人の手技として、必要なるものであれば、矢張成年の後一家の主婦として、割烹も知らなければならぬ、衣服の裁方を小學校で敎へて居る以上は、割烹の方も敎へても宜からうと思ひます、別に金を費して、甘い料理を作ることを敎へるのが割烹科の主眼ではない、芋を煮るとか、大根を煮るとか、鰯を煮るとかいふやうに日常食事に用ひます食物に就てやることであります、此位に煮上つたら、砂糖を入れるとか、味淋の注ぎ方は斯ういふ風にして入れるとか、其心得を敎へるのであります、其心得を知らなかつたならば、味淋を使つた効力がないやうになります、此の如く、日々入用なる煮汁の取り方、豆の煮方、靑うて、白うてに致しまするは、どうてあるか、大根を煮崩して仕舞うやうのことが間々あります、御承知の通り、煮物に醬油を入れるには、醬油を入れる時期があります、これを敎へるに、別に小學校で長時間を費さなくも、一週間に、一時間半位、高等小學校の最終の學年にても入れて敎へるのであります、それて一々それを習ふことも要りませんて、大體を習ひましたならば、他の同樣の食品には應用が出來るのです、身分の貴い御方計りでなく、身分の卑しい方にも廣く御勸めになるやうに願ひたい、どうも割烹を習う奥樣達は、習ひまする料理が高尙になつて困まるのであります、毎日の料理に、醬油、砂糖、味淋といふことも實際用ひぬ場合が多いのでありまするから、贅澤に流るゝことは大いに戒めなければなりませぬ、(完)

長壽の要訣は
適度の食餌と
適度の運動にあり

# 才媛詞藻

（天）離別　伊勢山田町大字岡本町　宮鈴子

御手とりて御面影仰ぎてうつむきてさても別れの言の葉のなき

（地）仝　伊勢國宇治中之切町　河原芳子

脊の君の門出おくれば抱ける子の共にとなげく露のあけぼの

（人）仝　下野眞岡　秋香善子

國の爲め君の爲めとて勇むせを見送る門に村雨のふる

（人）仝　備中玉島新町　大西益子

御戰に召さるゝと聞きて勇みます兄の門出は泣かじと思へど

（秀逸）（離別、虫、殘暑、）

遠く行く脊子がうしろで露にきえてあらゝまつはら時雨ふりきぬ　大阪　小野雅子

穂に出てし尾色に秋を見せながら夏の暑さを招き顔なる　新潟　小林靜枝

夕まぐれ今ぞ別れの野に立てば星二つ流る北に南に　和歌山　平田靜子

秋立てど暑さ去らねば心せよとなさけこめたる母の玉章　下野　田波秀子

野げさりは醉にねふりて滑きえて廣きあら野はたゞむ

しの聲

君に殘すわか歌よしや拙くもわかれて後の思出にせよ　横濱　長谷川さく子

尋ね行くしるべの方は聲やみて過ぎ來し道に蟲なき初むる　仙臺　鈴木なつ子

わかれちの露そそぼちて佇めば傾く月になくほとゝぎす　信濃　中澤喜和子

夕されは稻田に通ふ秋かせを眞菰にかへて吹かせてしがな　牛込　村上たけ子

來る秋はパリスの空になかむらん今宵の月を君なりすれそ　越後　坪井和歌

みかへれば雨にくれゆく渡場にたゝずむ君のかげかすかなり　同　同　人

あとになくねむりし妹が面影を思ひ浮ぶる汽車のうちかな　和歌山　前山すみ子

わけゆかん道こそなけれ秋の野はむしの音をふむ心地のみして　廣島　淸　江

古郷の初秋風に送られて又も都の夏に入ぬる　愛知　石黑すゝむ

君を送りきみに別れてひとりかへるさと川堤夕日落んとす　神戶　杉田鶴子

(伊勢　岸田ちゑ子)

さらばとて里の畫頭に別れけり杉生がくれに雁なく夕べ　伊勢　宮田貫美子

取りかへし指環にのこる溫をはまたあふ日までさましそね君　横濱　長谷川さく子

月影にかつき姿のほの見えて虫の音しげし嵯峨の萩原　河內　櫻井喜子

あつさゆみはりし心も何となうはなちかねたる一人子の旅　香川　きせ子



## 佳調

◎離別

おもてには笑みつゝ君を送れどもうらはづかしくぬるゝ袖かな　京橋　奥津らく子

◎同

今一つ受けよ別れのさかづきに宿らむ月を花むけにして　信濃　中澤梅子

◎虫

思ふこと絕えせぬ夜半の獨寢の枕に近く秋の虫なく　香川　有信露子

◎同

入相の鐘に淋しく木の葉散りて我家の秋を虫ひくうなく　信濃　阿佐野美代子

◎離別

語らんとすれどなみだのむれにみちてさきくとの外にはいひも得さりき　松江　西村はる子

◎虫
馬賣りてさびしと思ふ夕ぐれに秋風立ちつくつは虫なく　常陸　海老澤すゑ子

◎離別
鐙はなりぬ次の揺く手をたゆたへよいまぞ別れの我は野邊に立つ　岐阜　佐藤そふ子

◎虫
馬買ひて歸る松原月出て古城のあたり轡虫なく　和歌　平田紀子

◎同
たらちれのいたつきみとる夜もすがらあわれ身にしむ虫のこゑ〳〵　小山あき子

◎虫
たらちれの父いますればと思寢の枕にかよふ蟋虫の聲　伊勢　船越露子

◎同
月影に宿れる萩の下露に聲もしめ咽て鈴虫の啼く　伊豫　田中重子

◎虫
虫賣の少女を訪へは母なくてめしひの父のやみふせるかも　河内　大矢男尾子

◎同
秋野の葉末の露に月ふけて誰をまつむしなきあかすらん　横濱　寶愛子

◎殘暑
秋はたゞ名のみに立ちてやれ扇かたみと思ふ昨日今日かな　山形　椿子

◎虫
母の藥あたゝめ居れば霜冴ゆる夜さびしくこほろぎの鳴く　信州　山崎左近子

◎同
宿もなき秋の野中の夕ぐれにたれを松むし聲ばかりして　伊勢　前田久子

◎離別
喜びの門出なれどなにとなく別れといへばかなしかりけり　備後　靖香

◎虫
豐の秋を小田に下しゝ天津神の歸りと見えて飛ぶ螽かな　本郷　堀口菊江

◎同
ひろのまに生けたる床の萩の葉に聲あはれにも鈴虫のなく　大村　吉田みれ子

◎同
語りあふ聲もかすかになりにけり虫の音しげきあさぢふの宿　德島　波奈子

◎離別
夕立の露もかわかぬ草村に秋をしりてやむへむしのなく　小石川　荒川豐子

◎同
朝ぎりのきえ行くまゝに見ゆるなり名殘惜げにたどる夫の君　三重　雅子

◎離別
恩愛の綱に引かるゝ後髮一歩ゆきては振かへり見つ　長州　今藤歆子

◎虫
今日といへはいとゞ名殘の惜しまれてはなれともなき故郷の空　府下　菅原まさ子

◎離別
螢追ふこともの聲のいまたへてむしのれたかしせとのほそみち　橘　あや子

◎同
とにかくに錦かざりてかへる迄老ひたる母よつゝかなくませ　新潟　吉田梅子

◎離別
後の世の千年はしらず今の世に君とわかれて誰ともとせむ　向島　吉野はる子

◎虫
望たてゝかしまたちする君なればわれはをしましをしきわかれも　備前　重松竹子

◎離別
しづかやに通ふ松風音たへてさびしき夜半になく虫の聲　[illegible]　ゆき子

あすよりは乳やる事もかなふまじこのやをあとにかへるこの身は　横濱　ゆき子

◎虫　宮城　千葉きみ子

荒れはてゝ訪ふ人もなき古寺に昔を語るこうろぎのこえ

◎離別　赤坂　内藤操子

又も見む又もあはむとちきれとも志ばし別れにぬるゝ袖かな

◎虫　横濱　鳥居靜子

あばらやのかべのこぼれの月かげに夜寒をわぶる虫の聲かな

◎同　山城　野口ふじ

志らつゆの玉とみだるゝくさむらに聲ふりたてゝ鈴虫のなく

◎虫　信濃　山崎さこん子

古のあはれをかけて琴の音にかよふ嵯峨野の虫の聲々

◎離別　熊谷ふさ子

明日は遠く別るゝわれに歌へとて實の姉上琴彈き給ふ

◎殘暑　丹波　村上八重子

そのまゝに小簾まきやらで秋の日の殘るあつさを垂れこもりけり

◎離別　東京　桑田錦子

渡守しばし棹の手たゆたへよ永き別の人もあらむに

◎虫　長崎　古賀秀子

秋の野に誰まつ虫ぞ踏分けて我とめ行けばなく音とゞむる

◎同　伊勢　船越露子

宵々の涼みの人も見えずなりて軒端さびしくこほろぎのなく

◎同　神戸　柳田ふじ子

しいの木の下にいこへる賤が女の足下ちかくきりぎりすなく

◎同　河内　かつら

賤の男が馬草かりとる秋の野にふり出て鳴く鈴虫の聲

◎同　菅原まさ子

過ぎ行きし馬士の小歌の遠く消えて更け行く月に鈴虫のなく

◎虫　神戸　松岡喜峯子

里とふみ問ふ人もなき柴の戸にたれまつ虫のなきあかすらん

◎離別　常陸　海老澤のぶ子

泣きぐ\て涙はかれぬ別路のいまはの胸よはり裂けんとす

◎虫　大阪　伊藤つな

古里のなき我家のあとゝへばしげる芝生に松虫の聲

◎同　新潟　柳原露子

れさむればれやもる月の影さえてむし籠のむしのこゑのさびしき

同虫　安藝　楢立まつ子

つばなぬきし淺茅が原も今は早や虫撰む夜とはなりにけり

◎虫　神戸　今村竹子

背の君の病はいえず藥資つき物思ふ夜半に鈴虫のなく

◎同　大阪　太田すゑ子

秋の日の風は身にしむ夕ぐれをなのか時とや虫のなくらん

◎虫　下谷　みき子

夜もすがら明くるも知らで壁ちかく音もかれぐ\にこほろぎのなく

◎離別　赤坂　高梨幸子

また逢はんことはかたみに契れともなほなしまるゝ今日の別れ路

◎殘暑　河内　大矢多稲子

秋きぬとおもふ心のゆるびよりあつさにたへぬきのふけふかな

◎同　大阪　田中俊

朝ゆふは涼風吹けとひるは猶殘る暑さにうちわ戀しき

◎離別　紀伊　秋川初枝

戀しさに立ちさりかれて眺むればあはれかなたに汽笛のひゞき

◎虫　和歌山　南方澤子
たをやめの彈く玉琴に打つれて歌ふもあはれ鈴虫のこゑ

◎離別　紀伊　秋川初枝
言の葉もなく〳〵君に別れけり虫の音悲し秋の夕ぐれ

◎殘暑　伊賀　村尾尙子
秋風はいつくに立ちしわが里はまた夏衣かへもあへなくに

◎虫　長野　西澤とく子
秋風にした葉色づく夕まぐれ小萩がもとにこほろぎの鳴く

◎同　越後　平野琴柱子
おこたりのわが身をせむる虫ならむつゞれさせとてなきしきるなり

◎同　難波　櫻木櫻子
音に立てゝたれにうらみむきり〳〵ずおなしおもひにわれもなくなる

◎離別　高田　平野ことぢ子
玉しきの都の花になれぬとも露わするなよ古里のには

◎同　越後　合田かう
何事もむつびかたりし友にわかれ明日よりのちをいかゞくらさむ

◎虫　本郷　入江まつ
風のこゑ枕に絶えてふくる夜の燈火細く虫のなくなり

◎同　山梨　渡邊よし子
病院の人の苦吟は靜まりて月ふくる夜を秋の虫なく

◎虫　本郷　齋藤はな
肌寒き透き間の風に驚けば月漏る壁にこほろぎの鳴く

◎離別　保谷てい子
去らるとも誰を恨みんみつからのたらぬ心を悔みこそすれ

◎虫
おもしろき夜半もありしをきり〳〵すひとりさびしき窓になく哉

◎離別　駿河　林すぎ子
今よりはおよび折りつゝひたすらに共に月見る時をまたまし

◎虫　內堀しま子
やれきぬのひろよりもれてふるあめにつゝれさせてとやはたおりのなく

◎離別　匡子
とはいへと櫻井驛の夕まくれあかぬ別れの西と東に

◎殘暑　岩田たれ子
秋たゝは涼しからんと思ひしに暑さは夏にかはらざりけり

◎離別　神田　島田かつま
わかれにし君を思へはたそかれの鐘のひゞきもなみたなりけり

◎虫　和歌山　荒岡隆子
酒買ひに里まで出づる道一里聲ふむばかり虫の色々

◎離別　牛込　てる子
なつかしき君か姿はかき消えぬうす霧こむる横濱の海

◎虫　大阪　近藤いざよひ
つゆ深きあさじが宿のくつ虫は浮世の秋をわびておくらん

◎虫　下野　田波秀子
物思ふ身の悲しさもまさりけり夜每に虫の聲しげくして

◎離別　和歌山　三田村鶴子
船の上にきぬ打ふれる我が友の姿も波の奥にきえ行く

◎虫　堺　宅さく子
馬買りて淋しと思ふ夕ぐれにすだく虫のねあはれなりけり

◎離別　寺本うめ子
來むはるをかたくちきりし君はなくてつひのわかれのことの葉あはれ

◉虫　駿河　林すぎ子
露しげき野邊の千草になく虫の聲あはれなり秋の夕ぐれ

◉虫　島根　まつなみ
燈明の光かすかにまたゝきて通夜する夜半にこほろぎの鳴く

◉虫　東京　關内きよ子
雨の夜の庭に様々なく虫の品さだめせん友達もかな

◉離別　安藝　松阪梅子
せのきみのかど出ます日のうつしゑをはりの手やめてまたも見るかな

◉離別　近江　岩本つな子
病癒えずおもひはならずつく／＼と世を恨む窓にこほろぎのなく

◉虫　神戸　なかむら
衣うつゝちのひゞきは打たえて虫の音しげし淺ちふの庭

◉離別　駿河　林すぎ子
はる／＼とこきいつるとも友舟よもとの海の波をわするな

◉虫　周防　野木とみ子
さなきだに淋しき秋の夕暮に哀れをそふる鈴むしの聲

◉離別　下総　三田はや子
汽笛高く海の面に浪立ちて黍朧らに御聲かすかに

◉虫　弘前　今ちか子
軒端なる破れし忍の舟の上に片足のなききり／＼すなく

◉殘暑　河内　矢守はぎ子
秋といふ名のみたちつ蟬の羽の袖かろしともおぼえざりけり

◉離別　河内　平尾まさの
巴里の花エルベの月に泣かなむよなみぢを遠く今日別れては

◉離別　伊勢　森いと女

老いませる一人の母を里におきて君が仰に洋行するも

◉虫　大阪　向井嶽子
あはされの古城の趾のくさ村に聲いさましきくつは虫かな

◉虫　長門　紅村花子
秋風の身にしむ夜半に虫の音の哀さそふる淺茅生のやど

◉殘暑　長門　紅村花子
秋來ぬと桐の一葉は音づれどまだ熱しさの杜の下かげ

◉虫　河内　河崎ひさへ
虫の音をきくにつけても故郷のかきねこひしき秋の夜半哉

◉虫　河内　河崎ひさへ
月見せん友のいほりに近よれどふみあけがたき虫の聲哉

◉納涼　大阪　富問きぬ子
涼みする瀬見の小川の夕風に夏も家路も忘られにけり

◉離別　扶佐子
すや／＼とゆめにほゝえむいとし子を振り捨てゝきし我身なりしか

◉虫　河内　大矢たれ子
幼兒のゆれて七日のこのゆふへかこなる虫をはなちやるかな

◉虫　信濃　竹鼻はる子
こそやけし我家の跡のくさむらに雨のふる夜をむしなきしきる

◉虫　東京　駒田稲子
木葉もる月や聞くらん鈴むしのなく音さゆる神なひの里

◉虫　弘前　平山春江
刈りはてし山田は風に黄昏れて案山子の下に虫細く鳴く

◉虫　千葉　米耳嶺
賤のめがいとくろ小屋に月おちてなく音さやけきはたおりのこゑ

# 甲賞

## 日記の一節

甲斐　りう

(七月廿五日)家人と共に曉の涼しき間にと立ち出でゆく幾村をか過ぎて差出のほとりに出でぬ笛吹の流はいと清く岩にむせび岸を洗ひ濤々して見るからに心も涼しく覺えぬ繞りの松原遠く迴り峨々たる山はうしろに聳え遙に見ゆる富士の根は白妙の衣涼くしくさながら夏をよそなる景色なりやがて日下部も過ぎゆく程に彼方に鹽の山里は雲絡の如くあらはれぬ車上に踉りて行くにいつしか鹽山に着く宿は樓上にて眺めよし齋餉したゝめて後浴室にゆくいと清らかに水は恰も氷の如し夕つく程にあたりの山々より暮れそめ彼方の森には二つ三つともし火見え空には星もきらめきて流れの水音澄み渡り野邊草くも虫の音きそひて秋深き心地す更けゆくに山風吹きて椽のすだれに訪れ燈し火も消えんとすやがて床につく

(七月廿六日)曉に起き湯に入る清き事鏡の如し窓より見渡せば草屋の軒にみどり滴る松が枝茂りそがひまより星の光りの幽かにもれくるもおかしやがて座敷にゆくに早や全く明け渡り日光は東より花やかにさし昇り富士の山も匂ふ許り美くしく前なる堤には小笹梁の木など小暗き迄に茂りそが下道を朝露ふみ分けて行く人もあるなど朝のけしきいとすが〱し暮るれば又むしの音しきり風吹き來り涼しさたとしへなく夏も忘れはてけりあられかゝる折に琴など掻きならさばいかに興ある事ならんと思ゆ

(七月廿七日)朝とく起き湯あみして惠林寺へとゆくかうもり片手に道芝の露ふみはけゆくに程なくつきぬ門のほとりいと古びて庭々一片の塵もなく清し前庭の池のほとりをそゞろ歩みやがて僧に導れ幾間をか見物し信玄公の用ひ給ひし古物古刀など示され尚進みゆくに鶯廊下驚廊下あり歩むにそれに似たる音を出す珍寶數を見る室内香のけむりに滿ち置る裝飾品もいとつぎ〴〵し庭には鶴龜の松、臥龍松琴引の瀧等あり大石こゝかしこに散在し水は自在に流れていと涼し齋餉したゝめてそを辭し尙奥深き所にある一寺を見る造りはよく似通ひたれどやゝ小さし諸々を見物し夕つ方むら得に吹きくる風を袂にしめ山々にひゞく曉鐘をきゝつゝ宿にかへりぬ

評、文章老熟、されど未だ洗煉の足らざる所あり

## 朝顔

伊國宇治中之坊町　河原芳子

朝な〱咲にきかへて、と稱賛せられし花光榮よ、よしや短かき「時」なりとも、盛り久しき露の色は、優に自然の美を發揮して、恰も美術の神の畫筆に成りしごと、塵の汚れの誘ひ來ぬ間を、清き曉の空に匂ふよ。あゝ、其の垣の朝顔には、自由あり、光明あり、清き情あり。たとへば、田舍育ちのくわしき少女が、美しき胸のひびきを神に捧げて、崇嚴なる影を抱けるが如く、愛と、威との二つの御靈が、氣高き笑みを洩らせるに非らずや。

さばれ、人の迫害を蒙りて僞りの美を衒ひ、僞りの形ちを誇る花よ、大なる姿、小さき姿、眞紅のもの、薄紅のもの、紫のもの、黄なるもの、青きもの、白きもの、筵線とれるもの、斑紋あるもの、獅子の躍れるさま、蝶の狂ふさま、牡丹の如きもの、菊の如きものなど、各自然以外の奇態を飾りて、狭き、淺き、小さなる鉢に盛られた　、美は美なれども、妙は妙なれども、それを以て誠の美と稱し、誠の妙と賞す可からざるは、所謂これ黄金の爲めに咲きたるものなればなり、されば其の花に隨には、慾望あり罪惡あり、僞善あり、たとへば、色里に身を賣れる少女が、汚れたる胸の琴線を奏でて、腐敗せる血汐を迎ふる如く、嫉妬と、罪との二つの邪心がおぞき笑顔を粧へる非すや。我は僞の花となて一時の光榮を得んことをねがはず、とこしへ美術の神のみ手に彩らるゝ自然の花たらんことを願ふものぞ。

あゝ、あゝ、清き垣根の朝顔よ。よし汝を心なしとそしる人あるも、のめ其の言の葉になびきなせそ。かくて塵の汚れの誤ひ來ぬ間を、この尊き曉の空に匂ひ出てよ。あゝ、わが友よ、朝顔よ。

評、辭句の堅くるしきが疵なれど意を達して餘あり

## 海水浴

大阪府泉北郡北上神村井上徹方　藤井登美子

わらは少しのつゝがありて、背の君はぐせられ車はせつゝ高師の濱の海水浴に到りぬ。先づ浴舍松濤館に入れば、少女等出迎ひ二階にあないしぬ。室はこの頃しつらひたりとて、前は海に向ひたれば、眺れば鹽風に捻れたる磯馴松さながら齒にかけるものゝ如く、汀の白くよするさまといと美しく、ことに潮風たえず吹りて涼さいはん方なし。こゝにて汗つきたる衣など着更へ、ほつれたる髪をすきかへしぬ。頓て晝飯たふべぬれば暑さ一しほまさり、いざ浴みせむとて支度成し波穩かなる岩間に到れば、爰には知れる人の誰彼浴し居いと心地よげに見ゆ、わらはも輕き麥藁帽子をかしげに頭をおほひ、背の君に手を引かれて徐かに海水に入る。打よする波は岩にくだけて打亂るゝ胸のあたりの冷やかさ心とゞろき身しも震はるゝを、岩かどに取りつきしばし濱に打たれては礒の清らなるいさごの上に匍匐ひ、冷たる身うち暖む心地よさ何にかたとへん。おのれの水に浮べるさま、さながら浮寢せる水鳥に似かよひぬとて背の君の笑ひ給ふもはづかし。かくてしほれ衣干すひまなく、顔も膚もこげたりとて鏡に向ひてあさみ笑ふ。

潮風すゞしき夕衣の裾をあほらせつあちらこちらと海邊を漫ろ歩くに、夕日の光海にて輝き黄金の波遠く、淡路島かけて歸る舟の、眞帆あげて遠くすゝしけなり。こなたの磯邊には男女とも四五人立居て、今しも歸る舟の呼ぶは漁りの多きを媚ぶならむ。あなたにも人の多く集ひて漁り舟をよぶ聲起り、夕の礒は喧はしうなりぬ。しばらくありて日は全く入りはて、月はなやかに登れば、先の人影すくなになりゆきて、灘には燃え殘れるかゞり火の影かすかなり。よる波ごとにうつろふ月影の渚にくだけて白玉迸るさま清し。涼しさたとへしげなく、袖に早や秋は通ふかと思ふばかりなり。

評、辭句富贍

## 乙賞

## 西瓜を送るにそへて

高知市本町三丁目四十二番地五號　高橋ゆき子

今日久々にて歸省いたしなつかしきまゝのそゝろありにいつしかせとの畑なは御記憶になし給ふべしまだ筒袖のいたづらさかりなりし頃まゝ事すとて諸共に瓜のなり花もぎとりてはゝきみの御小言うけしかの畑にさまよひ入り五年ばかりのむかしに返りてうりなすなと數へはべりしにゆくりなく見出しは色つやゝかに實入りたる西瓜になんいとうれしう足をかへして家にかへりはしためしてとらせ侍りこば年老ひし祖父君の御てづくりに侍るよし味のいかゞは知られど一ツ二ツわかち參らすよし品はあさくともふかきわらはの心こもれるを幸にあぢはひ給ひてよなほ今宵はかの長瀨川に舟うけて夕涼しはべる何も御もてなしとては侍られどむかし今の物語せんもいと興多からんと存じ參らすをあはれ君よさしたる御用事おはさずは今よりいかで御とまりがけにいらせ給はらすやよろづは御たいめんの時にゆづる

あなかしなや

評、文章は稚なれど眞情こもれり、

## 鞠流

遠藤せき子

夏の夕べの凉しきまゝに庭下駄輕く苔を踏みつゝ出づるともなく我すまひする庵を出でまじかき海邊に只一人渦まく汐の面白く思はず徧中の人となり興に誘はれ彳み居しに沙が持て來し戯れか汐を力にたよりしか不圖眼にうつる鞠一つ浮きつ沈みつ漂ひぬ

誰が手すさびの糸鞠にや眞紅の糸のから摸様に白もて縫ひし狂ひ獅子げに見事なる手鞠なり

朝な夕なの手のすさび汝をめでし人やだれなればお主に厭かれしか主は汝をは見すてしにかあなあはれなる身の果や我救ひあげ悲とせかぎりなくめでいたはりやらんと思へども手のとゞくべくも見えずとやせんかくなざばと思ふうち舞ひつ廻りつ主を慕ひてか水上遠く上ぼり行くげにあはれなる身の果や今は何所に漂はん

評、あとけなき少女の情描き得てよし

## 夕暮の散步

米澤市明神堂町　馬場はる

晴れわたりし夕立の空に一群殘りしうす紫の雲の色凉しく淡き夕まぐれ白百合の露にそぼちつゝふとおもひいで都の空に夢見てし故山の野外にさまよひいでぬ一本柳に風おこる　あたり黑川の水車の凉しさをのせて廻れる音の何となく幼時の歷史語るにも似てなつかしや見上ぐれば去年茸かりし名寺山は暮色の中にも偉大なる姿けだかく綠こき木立の間幾條の水簾をたれて昔のまゝなり麓なる蹊路に名負へる古寺は繪の如くて鐘樓高し青葉ゆらぎて夕露こぼるゝ夏の小田は東に開けて畦のうなひの歌輕く折々交じるは蛙の聲いと高しやなれし畦道左に折れ石に曲りて例の農家近ういたれば畦の垣根にぬれ色白う咲きいでし夕がほの花の愛らしさ房折りてとのたまひし大將の上しのばれつふとのぞけばほの〴〵と立つ夕煙脊子まつ妻の心づかひや。

いつしか寺の門前にいたりぬ例の唐めきたる門軒は朽ちましたれど寺守の心づくしはまだらなる染幕のあとにさだかなりかしこより立ち上る一縷の煙あなたふと住むべき僧の出てしにやと見ればあらで例のチョン髷の爺唯獨り坊の方にて蚊やり火たけるなりけりとく認めてあゝ爺さん何時江戸よりとの言葉まづ覺づきて怕からずそれより話勢ゆるやかに若き氣になりて尋づれ出づる江戸時代の有樣いつしか口まがりぬたゞ爺公一

千年祭の間にや翁を満足せしめえてほゝ笑みぬさらばと語をかへて如何に此住居の淋しとは思召ずやといへばいなとよ聲ある寺のそれなられば人魂幽靈などのいかでかはたゞ雨夜の螢三つ四つ青き光をはなちつゝ清水のほとりとびかふさまの氣味あしかりしは十歳の昔何のその御屋敷の檀那樣より賜りし古刀一ふりさびぬ限りはと小ぶき竈床の上快げに眺めたる樣たのもしや。

あはれ友とむかし遊びし其まゝの築山よなつかしくと躑躅の綠ふみ分けて春の佛尊ぬれればげにや心つかざりし清水は苔むしたる岩かけより涼しげの響ふるはして湧きたつ樣の清らさ天女の乳の雫よと掬ふ双の手少さく見えて清々し時しも後れし一羽の夕鴉耳をかすめて山になきぬいでやと寺守に別れ門をいでゝ草路ふむ。夕がほの垣根ゆかしきあたり燈の影見えそめてしづか。折しもひゞく古寺の鐘あはれ灑落なる翁よ幽界にとてひゞかす鐘かはた俗界にかあゝ幽玄の鐘の音やとひとりごつ時かなたの綠樹黑影一つ高く吐きて涼氣淸し。

評、練達

## 蜘蛛の糸

廣島市西寺町賀名方寓　臼杵龍女

深山の奥は秋もひときはさびて、松吹く風ぞまづは音につれにける、古へ人が心盡しと云ひけん頃も、四とせ五歳歴てふ物なき山の菴に過ぎぬれば中々に浮世の人こそ妾にはうたてけれ、佐保姫織がりなす錦ふみ別けつゝ鳴く音わびしく妻こふ鹿も、いつちよりそかすけく聞ゆる小夜の砧の時に絶えなんとするもいみじうあわれなり、岩間をくゞる水の音さへ常なれば天楽としも響くらんを、頼みなき世を頼みきて戀しき人に後れ、唯獨り悲しき菴に起き伏す身は、この山にある限のもの皆すさましと思ふもわびしや。

かゝる山奥に物恐ひつゝ明け暮るゝ身にも、反故などしらぶる業こそ朝な夕なに變らぬものなれ、あはれ秋高き今日の一と日を、戀人が殘して去にし文ひもときて、ありし昔を忍ばんかな。

いさとて荒し菴に瞼うちかくれば、軒端にやせたる柳のふる葉を包みて、露を宿せる蜘蛛の糸ぞかゝりぬる、あはれ蜘蛛の糸よ、なれこそは妾が思ひのつまち知るものなれ、思へば昔し戀人が、蜘蛛の糸に露見えそめて曇る日の降るとはしるき秋の雨哉と云ひおこせけん歌の心にもかなひぬ。ゆかしき歌、妙なる蜘蛛、されと今の身には見るもなか〳〵にあはれなり。

汝がふる葉を包めるは荒たる柳を隠さん爲か、露を宿して秋雨をしらするは、塵に埋れし菴を洗ひ清めんとての業か、あはれ蜘蛛の糸。妾に似たる昔の少女が、さゝかにの蜘蛛のふるまひと云ひけん歌くり返しつゝ、くべき宵なりと我背まちわひし昔をも、汝の姿を見し時に浮み出ぬ、あわれ戀しのいにしへやな。

八千代をかけて織りなせし戀の衣は殘れども、着る人なきをいかにすべき、鳴らす妻琴も今は誰か爲めとてすべきぞ、琴柱におとす其聲も、曲もむかしにかわられど、聽く人なきをいかにすべき。柳のふる葉吹き込む野わきの夕風おとすさましく、なき人をとむらひ顏に、秋雨さへもいみじうわびしや。秋風すさし菴のあれし軒端を朝日のもりきて、眠るともなく眠りにし戀痩顏を照らしぬるに夢おとろかれつゝ、夕への名殘やいかならんと、とく起き出て軒の柳うち見やれば、あなつれなし、友と頼みし蜘蛛の糸にかゝりて、羽ばたく秋の蝶一つ哀れなり、

評、文に多少の瑕ありこれを去らば一しほ見るべからん

# 田舍生活の一日

大坂府豐能郡　田中いふぐれ

日は今や山の端より半ば出でましぬ、色雲は横に斜に流れて其美はしさ云はん方なし、それよ、自然の神の「春」を描き給ひしあまりの繪具にやあらん、靑きむき、紅き花、其外ありとあらゆる草木は少しも姿みださず、天に向ひ何事をか讃み聞ける樣なり、げに靜かなるよ此の時の天地、聲あるものは只だ讃美の歌を神にさゝげつゝ有る小川のせゝらきのみ、

後の方にあたり柏手の音聞ゆるに、ふりかへり見れば母上の一家の無事を神に祈り居給へるなりき、

兄上は車ひき給て都に、妾は鍬かたげて野に出てぬ、日はうら〳〵とかすみ鳥はさえづりかはし、花は咲きにほひ、袂に通ふそよ風もいと心地よし、草笛高く吹すさべる羊飼あり、ゆるく流るゝ小川に筏舟うかして打興ずる童あり、鄙うた唄ひつゝ畑うてる人あり、はなかたみ打すて胡蝶を追ふに餘念なき少女あり、花に詩へるみやびをあり、咲きみちたる櫻の樹にこまつなき花下かげに眠れる白髮の翁ありげに面白きは春の野べよ、十一時頃仕事なし終りて家に歸りぬ、

兄上は常より早く歸り給へり、四時頃鎭守の祭りに著るべき衣縫ひ終り、母上よりよく出來たりとの御言葉たまはる、いとうれし、此の衣にはいよ美はしく仕立てん物とおもひつゝ、

夕日は餘光をおさめ彼方の森ははや黒ずみぬ、いざや慈愛ふかき母上やなるしき兄上にゆふげをまいらせんかな、

兄上のあす都えひき行き給ふ車の支度てつだひ終り、樂しきまとゐの席と定めたる、例の三疊の間に至れば、母上は妾等の來れるをまち居給へり、うづ高く薩摩芋を盛りたるみ鉢を指さし給ひ、こは隣りのお竹婆さんとこより貰ひし物、今はさめはてたれど之をたふべつゝ語りなば興も中々多からんと、の給へる母上の樂しげなるみけしきに妾はそゞろ笑まれつ、薄墨もて描きたるが如き遠山、廣き〳〵野べ、黃金白金を流したるかとあやまたる、小川、これ等の影色を我が園とながめ、語りつ笑ひつする程にいつしか夜はふけたり、あすの夜は母上の若かりし時の面白かりし話して頂く事をやくして皆床につきつ、

平和なるかな田舍生活樂しきかな一家團欒さるにさるに之等を自らすてゝ僞り多しと聞くなる都に出行き給ひし友は、そもや何を得んとてなるか

評、幼稚なれども自然にして飾らざるはめでたし

# 内賞

## 寫眞を惠まれし友の許に

甲斐り

今しも學びやよりかへい來れば母上の笑み給ひつゝ我が前に小包一つ置かれぬ何物ならんといぶかしうてとく見るになつかしき都の御許樣よりの送り物なればとびたつばかりうれしく書物もそこに投げ捨てゝいそぎ開き見るにいとも美事なる御姿に添えて柄よき明石縮の單衣地給はりありがたく眺め入りすげに御姿の氣高うなり給ひ御つむりの結び方さてはお御袴のいかに似合しうある事よなど家内打ちより御噂申上候又浴衣地の松に小波の模樣の目もさむる許り都風の派手にはあらで高尙優美なる殊に御許樣と揃ひのよし給はる身もいとうれしく早速仕立つるつもりにて

候げに御宅樣御一同當地に御出での頃は日每むつまじう學びやに通ひて數へなうけ花さく春も夏の夕べもあるば月かげ淸く雁金の門田に落つる秋の頃も樂しく過しゝをやがて御轉任となり山河へだてし都へと御引き移り遊され朝夕見まゐらせても尙あかずおもはれしをかく遠ざかりては御なつかしさやる方なき内にも月日は早く三とせを過ぎし今日此頃御上をのて思ひ居しにかゝる賜ものこそほとゝぎすの初音のそれにもましてうれしくひたすら御禮申上候こは見苦しきながら此頃うつし物なれば月の雫、水晶細工と共に小包として差上候尙御家內樣へもよろしく御傳へ下さるやう願上候末ながら鐵道も早や近き內に開通するよし其節は何卒もとの野中の淸水をも思ひ給ひて今一とたび御出で下さるやう願上候

## うつし繪

伊勢宇治
中之切町　河原芳子

會者定離は浮世のならひ、榮枯盛衰は人世の常とはいひながら、空行く雲の失れよりもなほはかり難きは人の身の上なる哉。

あゝ、この十年前にうつしとりたる友垣の繪姿よ。

庭の調への正しきが中に、一本際立ちてすぐれ給ひし撫子の君は、露添ふ露より脆く消え給ひて、芳はしき名のみ後の世に遺るはかなさ。かくて榮えまさんには、聖ある日本婦人として、大和男兒の母として、いみじき龜鑑となり給はなむなど言ひ合へりしに、佳人薄命のたとへに洩れざりしぞ口惜しきや。

千代の緣の松子の君よ、かれて軍人を好ませ給ひて、日頃の御氣性いと活潑なりしに、其の希望は空しからで、遂に某中尉の令夫人と成り給ひしも、千代の契りは短かき夢の間にて、中尉の君は凛將士匪の爲めに慘殺せられ給ひし悲しさ。夫のかたみの玉のやうなる男子を抱きて、無限の苦悶に悩れ給ひつゝある、そもいかにぞや。

まだ其の頃はとかく病勝ちにて、色蒼く、骨高まりて、見るもいたわしかりし玉枝の君こそ、幸薄き運命なりけれ、餘りに才敏きがおそろしかりとて、人皆危ふみ居たりしに。高等女學校に入りまし〻頃より次第次第に壯健となりまして、驚くばかり筋肉肥え、因循なりし性質は頓に快活となり、學業共に秀で給ふめでたさ。同校卒業後、間もなく某文學士の室に迎へられ、和氣藹々の裡に嗜好の樂品を弄し給ふと傳へ聞くに。壯士俳優の甘言に誑かされて、野山の露にさすらひ給ふ蝶子の君の上など思ひ合すれば、彼我の間にいかばかりの感慨を催さゞらむ。

今なほ、良緣なくして深窓に苦吟し給ふ淸子の君の、夙に詩人を以て名聲を揚げられたる。看護婦となりたまひしいさをの君。農家に嫁ぎて鍬を手にせる光子の君など。いづれ、一箇の女性として其の適々可き所に適き、行ふ可き職分行ひ給ひつゝあるに。あゝ、あゝ、妾はいかにせんとするぞ。

醜きが爲め彈劾せられ、資産なきが爲めに辱しめられ、才なきが爲めに疎んぜられつゝ、只一卷の溫かき詩集を我が千歲の友として、問ふ人も無き破家を守る妾よ。

あゝ、行く雲の失れよりもなほはかり難き人の身の上を胸に描きて、十年前のうつし繪に向へば、など、涙なからんや、悲しからざらんや。

あはれ、はあれ。

## 夏の夕暮

浪華の里　櫻木櫻子

あしたよりそぼ降る雨欝陶しく土用といひながらさても梅雨の頃かとぞかたがはれぬ夕つかたをやみたるにそゞろうれしくてうらの園生にまがきの本の朝顔しるへにおりたちぬ雨にしほみし花の亂れつゝもかしら重げに我を迎ふるに哀つれなき雨よとつぶやきつゝもまがきのもとにさまよひゐはれいとしの前やといひつゝも手をさしのばせばわれよりさき蓐にぬる者ありともおらはぬに花の中より美しききぬきたる愛らしきもの二つ計りとびいでぬあゝようなき事してけり今我雨をつれなしといひしにさぞや今の胡蝶はわれを無情とや恨みなんあゝようなき事してけりとかえてどもせんなしやあばれいかにせしやと見まわせばかなたの朝顔のつゆしたゝれるもとにて上となり下となりつゝ樂しげに花にくるへるさまいと愛らし折からそよ吹く風にこぼるゝつゆの玉をあざむきぬあたのしとひとりごちつゝ砕打あふけばいつしか雲晴れて三日計りの月影淡

## 親しき友へ殘暑見舞を送る

はる子

殘暑の烈しい事はどうですか、まるで日あぶりにあうやうな心地ですれ、あなたは如何ですか一寸伺ひたいと存じますけれど、例の足痛みで御無沙汰いたします私などは殊に暑がりて内に居てさへ惱みますのに弟等は毎日日中もかまはず蟬をさがしてあるきますのを見ても我身を燒かれるやうな氣が致します。此梨は只今八百屋が持つて參り甘味が强くて水が多いとまうしますからおかはきの折に召下りませ、又是れは泡雪と申す菓子て名が凉しう御座いますから差上ます、あまり暑さに苦しく此度の和歌叢題は何れとも思はしい句が出ませんから此次の初紅葉になりと存じて居ます、夕方などは御運動がてらお話しに入らして下さいませ、私はお琴を所々忘れたやうですから、其節はおさらへを願います、さやうなら。

## 女學世界懸賞和歌兼題

### 秋風

### 老翁

### 月

（〆切九月十五日）

◎賞品天、地、人、の外秀逸十種に呈す

## 女學世界懸賞文

▲消息文（二十四字詰二十行限）

▲韻文（二十句限）

▲抒情文（二十四字詰四十行限）

▲叙事文（仝上）

◎〆切　九月十五日

◎披露　十月五日

◎賞品　以上四種中より甲、乙、丙、を選び十二名に呈す

### 懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一篇にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴ろべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

# 秀逸

## 納涼の詞

伊勢山田古市一五　白井きの子

てりはたゝく日影のあつき盛は、草もゆるがず汗もしどろに、ふしながら扇うちならして、ゆふべをまちつゝ實殺するのみなるものから、なか〱に暑さ忘るべうもあられば、けふは思ひ起して親しき友垣をおとづれ、打とけたる物語などしてまぎらはさばやと、西日のたへ難き頃よりものしつ、あるじはかれて心あひの人なれば、いみじうよろこびまちとりて、けふの暑けさなどかへすがへすいひつゝ、ひと間にせうじいれたり、伊豫簾涼しげにかけわたし、かまむしろさはらかにしきつめて、あたりいと物心地よかなるに、やをらすの子の方にゐざり出て見いだせば、せきいれたる水の流いさぎよう、石のたゝずまひこと更ならずしなして、庭の木どもいづれもしげりあひたるが、さすがに日影さしおほひたれば、さもうとましからず、ふきくる風もいと涼しきに、暑さはほと〱わすれはてぬ、日もくれなむとするに、軒端のくれ竹打そよぎて、やう〱うちとの方くらなりゆけば、月まつ程の手すさびにとて、あるじわらはべめしよせて、庭のやり水むすびあげ、心ゆくかぎり打ちそゝがするをりしも、青葉の露にほのめく光りは、月出るならむと思ひしもしるく、とばかりありて水のおもあかう浮び出てたる影の又なく涼しう、風さへふきそひたる、こひわたる風もその桂のかげにや宿りぬらむ、かげのえならぬはざるものにて、いづれば必ずふきくる風の涼しさも、げにいひしらずこそ、かへさの道たど〱しからぬうちとくいぬべかりしに、さうくれすぎてはかいゞあらむを、とみにかへるべき心地もせず、涼みがてらにむかし語りなどして隔てなう打語らふほど、夜やふかくふけぬらむ、松風の音も身にしみて、淺茅にすだく虫の音さへ、あやしきこゑ〱のまじりて、またきに秋立つかとおもはるゝにも、すゞろ肌さむき心地のせられてなむ。

## 子を失ひし人の許へ

河原芳子

老少不定は浮世の常と申しながら、さても痛はしき事にて候かな、忘れはべらぬ、おとゝしの水無月の中の五日、千代の若竹すく〱しかれと、誕生祝ひの莚に御行末を壽ぎまつりしは夢か。さ程、逞ましくや健かなりし邦雄君の、今にしてみまかり給はんとは、かへす〱も口惜しうこそ存じ候へ。まして長男の君にましませば、只ならぬ御いつくしみもて、神のまな子とおをしたて給ひけんに、いかなる惡魔のねたみなりけむ、嬉き笑顔をみ膝に殘して、あえなくなり給ひし御悲しみ、お許は更なり、祖母君、父郎の御心の内、推量りまゐらすだにいとたえがたきを、片言交りに妾の名を呼び、紅葉のやうなる手を翳して、縋りつき給ひ愛らしさなど思ひつゞけはべれば、胸ふたがり、眼くもりて、いかにとも言はん方なく、只々深き涙に淵に沈みはべり。夫れにつけても邦雄君の御守袋にと、拙なき業して縫ひ上げ侍りしが候ふものから、あはれ、十日の菊の花模様とこそなり侍りつれ、御目に懸んとこめ心はいさてはじめにかはる可きやとて、玉串のしろと共におふけなくもみ靈の前にたてまつり申すを、あつきみ心もてよしなにお計らひ下され候はんには、せめて妾の本意となり候はん。よろづは、いづれ御目もじの節、悲しき秋の様御伺ひ申さんとて。　あなかしこ。

## 八坂神社

陸前國古川町横町　富士ふゆ子

八坂神社は一に祇園社と稱へ素盞男ノ尊を祀れる所にして稲葉村にあり緑樹欝蒼として晝尙ほ暗くいと神々しき處に鎭座ましませり、陰暦六月十五日は其祭日なれど拾壹日は夜祭とて殊に榮ゆる日なれば近き村町の人は言はずもがな、遠き人々も腕車をかりて來たるを見受くるなり、されば其盛大なる事はわらわが拙なき筆もてえ盡さざれば其詣しときの思のまゝを書かん。

さて前日より二三の友とかたらへて雨天つゞきの空を打ち見やりつゝ晴天をぞ祈りける、されば神もわらわが願をや聞し召しけん、忽ち晴れて午後五時頃よりは最もいと忙しく人力車の往來織るに似たり、丁稚小僧等は其日の至るを一日千秋の思して待ちに待ちたる事なれば今日を晴と着飾りて顔はしく笑顔を作るも亦おかし、わらわ等は約束の地より手に手をとりて裏道より歩を運びしが千々の人々は幼老を劣りながら笠など取せて行くもいとなづかし、かくて社内に入ればさしも廣き境内も處せきまで商人の小屋もてみたされ僅かに人道をおきて立ち並べる様は譬へん方もなし、或は見世物師の聲高らかに說明し或は氷屋の蕭娑も今日に限り何となう趣味あるやうに覺えし、先づ本堂を拜すれば鈴の音は人の心をしましめ信神心を起さしむ、それより人々の行くがまゝに從へ行けば高さ數丈にして數人の合抱に餘れる大樹聳然として天を摩しあり、是なん神樹とて古此社内に植えしものなりと參拜せばわらわも之れに倣ふ、夫より歩を轉じて大門に至れば仁王は時を得顔に厳しく恐しき中に笑を含みたれば小兒等は怖氣もなくまたなくゞれどもわらわはくゞらずして社務所の前庭に至れば壯丁の人々爭ひ鈴をつく、其すさまぢさ耳を劈くかと怪まる、ために耳に手をおしあて群集を打見やるに其さま恰も潮の一時に侵入するが如く立錐の餘地だもなし若し之を潮に例へしめば商人の燈は恰も之に漂ふ燈籠の如く松島の流燈もかくやと察し侍りぬ、夫より本街道をたどりつゝ遂に町端に至ればそれ〴〵袖を南北に別ち家路をさして急ぎしが汗はしたゝかに襟を濕し首を振るだにいたはしく家に着きしに時針銷々として拾壹時を報じぬ。

## 避暑へものしける友のもとに

北信　富士子

山里とは申しながら、はるけき梢の蟬のこゑも、なか〳〵暑かはる心地いたし候て、しのぎがたく、つゝしみもうちわすれ候て寛のもとに彳む我がさま、人の見候はんにはと我ながら淺間しくおもひ申候、まことや白銀をとくてふたとへも古めかしけれどこのわたりのさまは此の如くにて候を、風光といひおつれ様といひ二なき其御地の御すゞしさ、いかばかりにて候はん、花ならばぜひ御文の中へと乞ひ參らすべく、さくら貝まちわたるそれよりも切なるは廣き〳〵海邊の凉風と岩間にむせぶ白浪に御座候、重なる山のはよりいづる月、それは我等めなれなり候まゝ、よしや一點雲なき其眺とて、さなん珍らかに覺し候べき、おなじ雲井の光なれど、海上千里たゞよふ數々の影、いかになかしう眺め給ふらん、定めし〳〵今ごろは御湯衣に御着かへなされ、鮮魚に夕飯御しまひありて、欄干のはしにくれゆく海の景色御らん遊ばし、御手帳にそと御しるしなされしは歌か詩かと、妹と共に種々想像いたしをり候、御歸りには必ず〳〵旅日記のすぐれたるを拜見致し得らるゝ事とまち奉候御連の中へと仰せられしにそむきし我等に、はたいかばかりの悔、さしおこさせ給ふらん、病人はおかげ様にて快氣にむかひ遠からず我等こたびの御伴にはづれしを氣の毒がりをり候、妹よりも宜敷と　わらく〳〵かしこ

# 韻文

## 失題

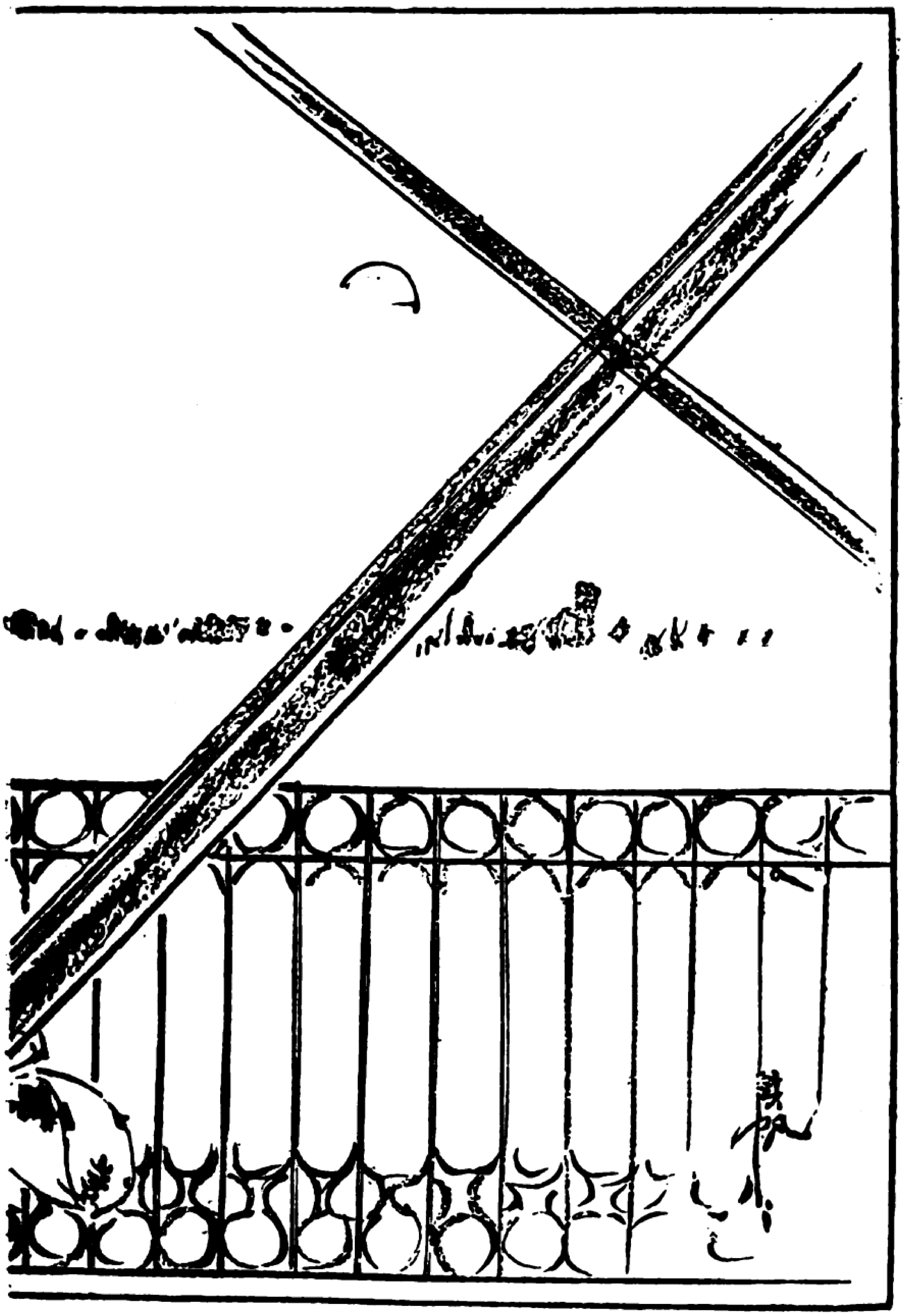
信州上水内郡柴村　小林柳烟女史

ちとせの後もかはらじと　ふかくちぎりし戀ごろも、
かさねしこともゆめなれや　立ち出でゝゆく夫の家。
心ひかるゝうしろ髪　かへりみがちにわれゆくを、
知るやしらずや門のべに　匂ふもあはれ花菫。
かざしの玉とおく露は　今もゆかりのいろふかく、
そよぐあしたの春風に　ほゝゑむさまのいとほしや。
想ふ三とせのそのむかし　われの嫁ぎし春なりき、
袖ふりはへて背の君と　ときにものせしさくら狩。
花にむれつゝ飛ぶ蝶を　二人が胸にゑがきつゝ、
いともたのしく暮してし　昔戀しき今の身や、
今日の遊びを思ひ出に　末のちぎりの長かれと、
新むらさきの花すみれ　根びきてみしは汝（いまし）なり。
くる春ごとにふりして　水を灑ぎつ培かひつ、
こひのゆかりの濃紫　花咲く春をたのをしを。
すみれは今も匂ひども　つまの心の花のいろ、
仇し野川のしがらみに　せきとめられしかなしさよ。
去りねとかけるこのふみを形見となしてわれはいま、
泣きて汝れにも別るなり　まさきくあれや花菫。
われに代りし少女子の　もし此家に來りなば、
今の如くに咲き出でゝ　千とせをちぎれ背の君と。

評　凡調なれど、敢て惡作といふにもあらず、結末の一句は、詩情の裕々たるを見る(おうなむ)

## 橋上の夜景

よしや川開きにその橋が落るとも、よしや煙火にその川が埋るとも、大都會百萬の群勢は是を物の數ともせさるなり市中の八方より來り眺むるもの、都門の炎塵を此の一橋に洗はんとして却て苦熱に溶さるゝがごとし、風流と塵俗と兩つなが



東京風

ら備へたる橋邊左右の旗亭は皆に吊燈を照らして軒を焦すのみならず更らに鄭聲を漲らしてその風俗を淫にすと由來東京一の名勝としてその名江湖に高し。さもあらばあれ納涼として是に來るものはあながちに塵寰の喧しさに過ぎたるを嫌はず、盛夏三伏の日人肩相摩して左右の勾欄す隙を撰ぶ

の處なし、夜の東京第一の勝區として塵寰の遝き元より納涼一遍の場所にあらず下町三區の要衝にして四通八達の中心點、陸上の人喧、水上の舸影、本所深川へ通ふ、炊事用の水船あり、葛西、千住へ上る田畑の肥料船あり、納涼の家形船、往來の小蒸滊船、氷、水菓子、麵包、煙艸を賣る舟、蕎麥、溫飩、豆腐、煑豆を商ふ舟、一舸の火、一舟の燈、點々燦々として相連り相交はりて水上一面星を浮ぶるがごとし、川より橋を見れば頭上に市街あり、橋より川を臨めは脚下に市を爲す、兩岸の客亭石階を疊みて勾欄高く水に臨むの處紅燈、花氈、朱器、銀碟を陳ねて漂客の蛙聲、絃娼の喃語所謂、絃歌湧き、唱聲覆へるの醼席あり



俗雜觀

## 逝く水

伊勢山田久世
戸川上鏡一方　西井霞川

野べに亂るゝ百花や　佐保姫踊ふ袂の
其甘酒の香に醉ひて　世をば樂しと思ひなし。

春の光の短かくて　世はとこしへの春ならず
今日は移ろふ花の色　飛べる蝴蝶も力なく。

日毎にたちしうす絹の　霞の幕もあとたへて
青葉に迷ふ鶯の　なく音もいとゞ哀れ也。

あゝ逝く春は流川の　よどみに浮ぶ白泡（しろあわ）の
消ゆるにやすきそれのごと　いとゞはかなきもの也や。

さらばと云ひて世の人よ　嘆きなしそ世の春は
やがて二度かへり來で　花も皆に榮ゆるを。

## 失意乙女によする

茨城　山口すみ子

靜とは名のみ人の世は　すさぶ海風音も凄く
光きへゆく荒磯に　涙はされし海草の
悲しきものと知れや君
あしたにかざる殿原も　夕べによそほふ姫たちも
一夜のうちに苔の下　春の夜結ぶ手枕の
はかなき夢に似たらずや
擢とる弱き人の子が　惱みはげしき世に立て
そがゆく旅やいかならん　見ようなだれて息吐きて
つらき運命をかこてるを
清くやさしく美しき　自然の戀もやがてまた
空しく消えんそのならひ　葉末の露のもろきより
思へば果敢な世の戀や
君も人の子幸うすく　やさしき胸にかざしたる
愛の一花しぼみはて　昔を春のそは夢と
さとりし時やいかなりし
つれなき風のふきすさび　戀を命の愛の花
つらや野末に捨られて　闇へくるひし末つひに
世をうき秋とさとりしか
玉より清きまなざしの　まつ毛にやどる白露は
つきぬうらみを思ひてか　さても消えたる夢のあと
惡びてまたも泣くなるか
されと乙女よ世を外に　鳥飛ぶところ花さきて
小川の流れ水きよく　天の情のつくるなき
自然の景色あるものを
あゝその景色その水に　塵の想ひをとく捨てゝ
心の闇を照らしめよ　心の闇を去らしめよ
人の命の短きに
そこにやさしきさとしあり　そこにつきせぬ快樂あり
そこに慰藉の影ぞ滿つ　泣くも笑ふも夢のまと
さりとてうたへ君よいざ　土に歸らんそれまでは

# 懸賞家庭小說

## 乙賞

# うつせみ

京都 前田美子

## その一

「藤田さんは此頃餘程何かしていらつしやるよ「眞個ですわ、嫌に考へごとばかりしてネ。」「妾なんかはお尻から何番といふ位の成績でも、今日卒業證が頂るかと思ふと、嬉しくつて仕方がないわネ。」「爾ですとも、藤田さんなんか四年間優等の突張りて、加之に品行が方正だから、異例の賞品さへ下さるといふじやありませんか、もし妾だつたら逆せて氣が狂つてゐるかも知れないわ。」「オホ・・・・眞個にさ、節子さんが彼樣に蹄いてばかりいらつしやるのは、乾度何か理由が有るんでせう、あの方はお母樣が御飯でいらつしやるからネ。」「ヘエ御飯ッて何？」「オホ・・・・まゝじやありませんか。」「アラ嫌だ、御飯がまゝて、まゝが御飯位は三尺の兒童と雖尚且知れりてすわ。」「况んや堂々たる高等女學校の卒業生に於てをやですか、オホ・・・・マア大變な氣焔ですネ。」「何となと仰しやい。」「オホ・・・・マア好いじやありませんか、喧嘩兩成敗ですよ、それよりかお母樣の御飯とは何のことです？」「マア山本さんの眞面目な・・・・繼母といふ意味ですよ。」「是は驚いた、飛んだ新語ですネ。」「オホ・・・・野村さん眞個によく出來てよ。」「マア笑ひごとじやないわ、夫じや實にお氣の毒ネ。」無邪氣な少女の眼にも流石に、同情の涙の浮ばうとする刹那。

「アラベルだ。」

＊　＊　＊　＊　＊

藤田英郎は辯護士中でもう、老將株ではあるが、まだ中々の腕利である。然し口善惡ない京童は此樣なことを唱へてゐる『訴訟には勝つても、報酬で財產を捲き上げられるから、迂濶にかゝれないよ』と。

男春郎は去年法科大學を卒へて、目下洋行中であるが、

頗有望の青年との評である。節子は其妹で、今日高等女學校の卒業證を握ると頓て、父の同業中でも當時日の出の西山弘に嫁ぐとかいふ噂。

前の藤田夫人は至極貞淑の女でよく夫を助け、二子の敎育に專意を注いだから、內外の聲も高かつたが、惜しい哉、病魔の侵す處となつて、一昨年の夏終にはかなくなり了つた。處で今の夫人お花は、英郎が曾て川竹の流れから拾ひ上げて、圍ひの中に手活けとして愛てゝ居たのを、引き入れたのであるから、素より夫人といふ資格には餘程遠ざかつてゐる。

## その二

「お父樣難有うございました、お母樣只今」節子の卒業式に列した英郎は、今しも莞爾として歸つて來たのである、お花は夫を迎へて、「オヤお歸りなさいまし、貴所何でございましたネ。」「ヤレ〳〵マア旨く遣つて與れた、校長も大變賞めてをつたぞ、節子早く夫をお母樣に見せないか。」「ハイ」と答へて徐に母の前に差出した、二通の證書に根來塗りの硯筥を添へて。一通は言はずと知れた『本科卒業を證す』の所謂月桂冠、他のは『本校在學四年の間終始成績優等にして品行方正實に學生の摸範とするに足る依て特に賞品を授與す』といふお墨付である。「何だか珍紛漢で妾にはさつぱり解らないわ？」「アハ…辯護士の奥樣がそれ位のものが、讀めないでは困るナ。」「ハイ何せ妾等は學者といふ柄じやござんせんからネ、節子樣のやうに結構な御賞品は戴けませんよ。」「マアサ、爾う憤然にならなくても好いじやないか、解らなけりや解らないでいゝよ……それよりか節、大切にしとくがいゝ、夫れさへあれば、何處へ行つたつて引けはとらないからネ、アヽ春郎が聞いたら嘸喜ぶだらう。」「まだ一人外に喜んで下さる方が、在らつしやるにと思つて、節子は俯いた、夫れは抑誰で有らう、西山か否。

お花は何を思ひ出してか、急に膝を進めて、「貴郎お留主中に谷口さんが見えましてネ、西山さんの方でも大層急いていらつしやるさうで、來月の三日が日も好いから、是非其日に極めて貰ひたいといふとてしたよ。」

「神武祭にかい、大分急じやないか」と一寸妻の顏色を覗つて「然し何せ一度は大層をせなけりやならんのだから、早い方がいゝかナ。」「爾ですとも、貴郎かういふことは、故障のいらない中に、濟ますことですよ、では不取敢谷口さんまで、承知の旨を申してやりませうナ」と云ひ切つて、座を立ちかける、今迄無言で膝ばかり見詰めて居つた節子は、慌てたやうに面をあげて、「お母樣一寸。」「何ですよ」と片膝立てかけた儘、「アノ妾は何あつても、西山さんへ嫁らねばなりませんか」と言葉尻は消えるやうに言つて、又俯いて仕舞つた。「オホ・・・・・」とさも可笑しさうに口に手を當てゝ、お花は笑ひながら、「何をおいひだナ、今も今お父樣とお話してたことが聞えませんかへ、婚禮といふ間際になつてさ・・・・來月といつても、もう是十日しかないのだもの、お前も些とは氣丈しなけりやなりませんよ。」「お母樣お願ですから、何卒兄樣のお歸りなさるまで、西山さんへ嫁ることはお待ち遊ばして」もう聲は濕めつてゐる。お花は眉の邊りをぴりくと慄はせて、「エ何ですつて、兄樣の歸りなさる迄待つて呉れつて・・・春郎さんはお前今年歸りなさるか來年だかさへ解らないじやありませんか。」「でも」といひかけるのを被せるやうに、「爾う當もつかない人をべんくと待つ譯には行かないよ、又素より春郎さんに異存の有りそうな筈もなし。」ですが、妾は是非一度、兄樣に相談がして見たうございますから、夫れが叶ひませんことなら、せめて手紙で・・・申して遣りますから、其返事の參りまするまで、お母樣、後生ですから・・・・。」

「節」と英郎は眼鏡越しに睨みつけて、「春郎に何を相談するんだ、全體汝は親の眼力で定めた、緣談が氣に入らないんだナ。」鋭い聲で呶鳴り立てられて、節子は今更のやうに吃驚しながら、「イエ、爾といふてはありませんが・・・。」「爾でないものが何故、お母樣の言葉に喃喋と抗辯するんだ。」「でもお父樣、妾は一旦島田さんへ嫁るお約束の身體でございますから、今さら他へ緣付きますことは、良心に對して何もいたし兼ます」と今は思ひ切つて惡びれた容子もなく云ひ放つ。

「アハ……汝も餘程偏屈者だナ、成程一時は島田の親爺と約束したこともあつたが、彼は畢竟向ふが全盛時代だつたからよ、マア云はゞ一時の方便さ、夫れに重の今の狀態は何だ、中學の助敎師位に甘じて……エ何だと、島田の冷落したのは全く災厄の爲だといふのか爾さ、別に重が放蕩をして財産を失くしたと云ふではないが……たつて餘り意氣地が無さ過るてはないか、汝のやうに馬鹿正直なことばかり云つて居ては、何して今の活世界に立つて行くことは出來ないよ、ナアお花爾てはないか。」待つてゐたと云はぬばかりにお花は殊更らしう退き襟を一つしして、「爾てすとも、島田のやうな意氣地のない貧書生に誰が娘をやるものですか、第一お父樣の面皮に關はりますよ、夫れから見ると西山さんは立派なものさ、お金はズツシり有るし、同業の方でも若手の派利だし、實に言分のないお聟樣ですよ、此樣な結構な好い緣を彼是云ふ位なら、尼にでもなるより仕方がない」思ひの儘に罵られて、節子は口惜しさうに涙をハラ／＼と流して、「お母樣、妾寧そ」尼になりたうございます。」「何だ馬鹿な、尼になつて何するものか、お花もう打棄つとくがいゝ、親の命を用ひぬやうな者に、いくら諭したつて無益だ。」腹立たしさうに室を出て了つた。「學問をするとかうも片意地になるものかしら、いくら汝が一人で、島田に義理を立てた處で、お父樣が嫁らぬと仰しやれば、仕方がないではないか、よし又向ふから彼是云つて來た處で都合に依つて前の約束を取消すと、かう云つて仕舞へば夫迄だもの、別に證文が入れて有ると云ふではなしネ、世間にそんな例はいくらもある、別して相手の親は氣が狂つて鐵道往生を遂たといふてはないかへ、テモマア外聞の惡い、夫れに汝は活計のことなんか、些とも氣に懸けてはゐなからうけれども、ネお父樣が今年の總選擧について運動をなさるといつても、又春郎さんが洋行してゐるに就ても第一入るのはお金ではないかへ、島田なんかいくら逆に掉つたつても、十兩の融通もむつかしからうじやないか、成程汝は學問ては賞品まで貰つただけれど、世間のことにはまだ／＼少女だからネ……だからお

母様は決して惡いことは云はないから、素直に西山さんへ嫁つてお呉れナ、ナ、爾すれば汝もどんなにか幸福だらうし、皆が沾ふといふものだよ。」流石は辯護士の夫人だけあつて、口は中々旨い。恐らくは法廷に於る、藤田辯護士の辯論も此右には出まい。不意にガクリと振り上げた節子の面には、決心の色が表はれてゐる、眼は涙で輝いてゐるけれども口の邊には淋しい笑を示して、お母様　私が惡うございました、もう〳〵我儘は申しませんから、何卒御堪忍遊ばして。」お花は我を忘れたやうに、節子の膝を捉まへて、「エッ何ですッて、汝合點が行つたの」「ハイ、全く妾が惡うございました、アノ私西山さんへ嫁りますから‥‥。」「アヽ其れてこそお父様も何んなにかお喜びなさるだらう、では妾は一寸谷口さん迄いつて呉るから。」「爾でございますか、何も恐れ入りますアノお母様がお歸りなさいましたら、妾一寸雪子様の宅まで、遣らして頂きますよ、試驗の成績のことや御賞品のことも云つて、喜んで貰いたうございますから‥‥。」「アヽいゝとも、何せ是れから暫時は無暗に出られないから、今晩はお名殘に緩々と遊ばして貰ふがいゝ、迎ひをやるまでネ。

## その三

「アヽ兄様が居て下すつたら、乾度妾の肩を持つて下さるだらうに。」薄暗い疏水の邊りを悄々と歩きながら節子はかう云つた。

何う考へて見ても、此事ばかりは父母の言葉に、道理が見出されぬ、一旦親と親どが立派に約束をして遣らう貰はうと定めて置ながら、相手の家が不慮の災厄に遇つて冷落したのを救はうともせぬばかりか、剰へ恣に約束を取消すなどゝ是が抑人道てあらうか。

願はぬこととては有るが、若しも反對に此不幸が、我家を見舞つたものとすれば、何なるものぞ。

意氣地なしといはゞいへ、重さんが中學教師をしてゐなさるのは、萬止を得ぬのてある、勉強盛の靑年時代に家は燒け財は亡び、加之お父様は心配の餘り發狂して變死をなさる、重ね〳〵の不幸に心あるものは皆同情の涙を灑いて居るてはないか、是が抑良人とするに

恥づるの人であらうか。

成程中學敎師の重さんとは異つて、弘さんは法學士の肩書もある立派な辯護士で有らう、然し素性を洗つて見ると、金満家の後室に旨く取り入つて、今の地位と財産とを占めたのではないか、是が抑良人として待つに足るべき人であらうか。

畢竟父母は金錢のために我身の節操を賣らうとするのであらう?。

「アヽお母樣、實のお母樣が居て下すつたら、お父樣もあれ程まで我慢にはおなりなさるまいに」「アヽお母樣の一言をあとに殘して哀れ!

半時間の後藤田家け上を下への騷動で有つた、折よく通行の人が救つて與れた處へ、節子の遺書に吃驚て出した追人が行き遇つた爲、幸に手當が早く屆いて節子は再此世に生を保つた、サアゝたと醫師を始め勢付て看護に力を盡す中、パッチリと眼を開いた節子はムックと起き上つて、突然枕頭に坐つて居る醫師の手を把つて「オヽ貴郎は島田さんですヨ、アヽ重さん私滅多に西山なんかに嫁かあしませんよ」といふかと思ふとよろくと立つて、踊りながらゲラゝゝとの笑ひ聲。

種々苦心慘憺の末、辛と醫科大學の學生となるを得た島田重は、當時一意專心精神病の治療法について研究しつゝありとか。

趣向は平凡なれど、女は約束を守りつめて、精神病となり、思ひ止まれたる男、奮發して醫者となり、精神病を研究せむとする末の一節に多少の妙味あり。女が繼母に說かれて、決心する所、少し物足らぬ心地すれど、全躰の書き方に才氣あり。數十百の募集小說の中にて一頭地を抜けるものといふべし。

(桂月)

前號落椿の作者橋本紫明女史の住所を至急當編輯局へ報知あれ

○家事科講習會　麹町區下二番町成女學校にては目下世間に需要多き家事科敎員志望者の爲め一方には檢定試驗の豫備補習を目的とし他方には高等なる家政學的知識を附與するの趣旨により來十月より同校内に家事科講習會なるものを開設せんと企畫中の由。因に記す科目は倫理、敎育、心理、生理、經濟法制、家政、國語、割烹等にして修業年限は一ヶ年半の豫定なりと。

女學世界定期增刊秋の卷

第貳卷第拾貳號

# はつもみぢ

（九月十五日發行）

秋は一年四季の中最も書に親しむべきの時なり、驕陽の熱去って金風淅瀝として肌膚に快く、叢間の虫聲唧々として晩に徹する好季節となれり、此際燈火に對して書に親む、又人生の一樂事たるべし、「初紅葉」は女學世界の定期增刊秋の卷として來る十五日を以て發行せんとす。その躰裁はつとめて高尚優美を旨としその內容は專ら趣味の多饒なるを期せり、全篇二百八頁中才媛の競爭になりたる▲小說十五種▲和歌貳百種▲新體詩三十種▲消息文二十種▲抒事文各三十種を收む誠にこれ秋草の亂れ咲きて錦繡を織り成すがごとし、猶附錄として左記の六篇を收め、口繪は例により內外の人物、風景の嶄新奇拔なるもの十二面を添ふ。

## 附錄

▲工藤眞葛女史（傳記）　石井研堂
▲お春の敎訓（小說）　堺枯川
▲新竹取物語（小說）　武田櫻塘
▲英雄と美人　千山萬水樓
▲慈善家の日記　鈴木冷露女史
▲光明皇后の母（傳記）　須藤求馬

# 彙報

## ●西村茂樹翁の遠逝

古稀の頽齡に及んで日本弘道會を設立し大に社會道義の爲めに盡されたる碩儒西村翁は去廿二日病を以て向島の自邸に溘焉逝去せり、翁は佐倉藩より出でゝ明治維新の初め政府へ種々建議し後明六社の社員となり、修身學社を起し國民道德の進興を謀る等世態變遷の際に當りて倫常綱紀の振興に努められたり、其間官は文部大丞より宮中顧問官に進み、傍ら民間道德書の著述に從事し、教育史、婦女鑑、修身訓、心學講義、國家道德論等世に行はるゝもの數十種に上り本誌第一卷第一號にも婦女の三大教育と題して女德の根本に就て論述されしことあり、要するに翁は碩學にして學德一世に高くその言行は又家庭に移して子女の教養に資すべきもの多かるべし

## ●本邦の女禮服（口繪參照）

露國大公主殿下の保護の下に聖彼得堡府なるトーリド宮殿に於て來る十一月一日より來年四月一日まで萬國服裝博覽會を開設するに就き三井吳服店にては外務省よりの通知に基き參考として婦人式服一襲を出陳することとなし去る三月より京都なる同店染工場に於て調製中なりしが此程漸く出來して東京の本店へ送り來り意匠係等の撿分を經たる上愈々去十三日を於て露國へ向け發送したりぬ扨式服の模樣は元祿時代に當世樣を參酌したるものにて頗る華美に仕上りたるが其大畧を示せば

▲振袖　は縮緬の納戸地を地落染となし模樣は萌黃擬ひの大浪の間に金泥にて槌車を現はし其傍に茶色の疋田染にて蛇籠を据へ袖より裾へかけては所擇ばず紅葉と櫻を散らし總じて模樣の利目は悉く金糸と色糸とにて刺繡せり

▲下着　は紋羽二重地に松形の大模樣

▲長襦袢　は紋縮緬の肉色地にて半襟は白の鹽瀨に古代模樣を色糸にて刺繡。

▲裲　は紋羽二重の緋色地にて模樣は雪輪と花物なるが雪輪は日向の雪を鹿の子に絞り陰の雪を紫紺と納戸の兩色に絞上げ花物は梅藤菊萩の四花に松と蘆を加へ之を友禪に染上げ开を色糸にて刺繡り模樣の間に金箔もて源氏雲を摺り出せり

▲裲下帶　は萌黃の繻子地に孔雀の尾を金糸と色糸とにて刺繡り其上に牡丹の花を金糸、赤糸、納戸色の糸等にて繡潰し花の輪郭は紫紺と茶の兩糸にて括れり

▲紋　は五ッ所にて古代の蝶鳥、草花等を色糸にて加賀紋に刺繡れり又以上式服の外に白羽二重の足袋をも添へたる由

## ●東京女學校

下谷東黑門町なる同校は鳥尾子爵の總裁にかゝり本科、專修科、受驗科、裁縫教員養成科より成るものなるが鳥尾總裁には德育に付き深く注意する處ありて自著道德經一部宛を職員一同に、兒戀草一册宛を生徒一同に與へ九月より每月一回子爵自身臨校して修身上の講話を爲す由

## ●三輪田女學校開校式

麴町なる同女學校は校舍新築落成に付九月下旬開校式を擧行する由設立者三輪田眞佐子女史は該事業を以て自家の紀念となさんと家產を傾けて敷地を購ひ又女子大學の教授近刊の著書等に依りて得たる處を擧げて建築費の一

部に投ぜし由なるが舍息文學士三輪田元道氏は猿て郷里香川縣より推されて衆議院議員たらんと志せしも女史の諫止に止むなく之を辭し教頭の任に當ると云ふ尙女史の知人等は獨り老女史を勞せしむるに忍びずとし最も親交ある左の人々を擧げて評議員となし其規模を擴張すと云ふ

濱口儀兵衛、男爵細川潤次郎、伯爵大隈重信、田邊爲三郎、中川謙二郎、伯爵松平直亮、森村市左衛門、齋藤鎔、原銈子、佐藤靜子

### ●府下細民の困難

下谷、淺草兩區内に住居する貧民を始め綠日商人又は大道商は勿論下層社會に生活し居るものは雨天續きの不景氣の爲め三度の常食さへ成し能はざる狀態にて近頃は一錢二錢の味噌を買ひ汁に製して漸くに露命を持續し居る有樣なれば人氣殊に惡しく貧民の住居する近傍は狐鼠々々竊盜の多きこと近來稀に見る處にして先月以來下谷、淺草、本所、深川の如きは諸區の中盜難届三割以上に及びたりと

### ●倫敦の貧民賜宴

先般の戴冠式につき英國皇帝の聖意により去る七月五日貧民五十萬人に宴を賜はりたることは其頃の各新聞に見えたる如くなるが右は其五十萬盡く之を一堂の下に集めたるにあらず是は到底場所の求めらるべくもあらねよりの事ならん而して各區に於て所在に催されたる其數八百十五箇所最も多くを集めたる區は一箇所に四萬八千の多きに達したり何れも學校又は公會堂を擇びて之が食堂に供したるものなり皇太子、皇太子妃は他の皇族數名と共に皇帝の勅語を携へて其及ぶべき限り各食堂を巡回せり試みに當日此宴に用ひられたる品物の數量を擧ぐれば牛肉三十五萬斤、羊肉十三萬斤、燻肉七萬斤、豚肉五萬斤、麵麭七萬五千斤、レッチュース一萬一千束、キューカムバー四萬三千箇、トマトー二萬五千斤、馬鈴薯四十萬八百斤、乾酪六萬二千五百斤、麥酒三萬六千ガロン、ジンジャービール十五萬パイント、ライムジュース七萬五千パイント、ヨークシャーレリッシュ五萬本にして其座席及び食卓に用ひたる板の長は二百六十哩に達したりと云ふ

### ●英國皇后戴冠式の正服

は巴里の裁縫店に命じて造らしめられたるが其材料は直に英國及び其殖民地製のものを用ひられたり其中には印度にて造りたる紗の繡箔あり金絲にて英國のあざみ及び愛蘭士のかたばみ草の花を縫模樣とせり服は金絲を以て織りたるものにしてクリーム色の絹の紗を以て之を被ふ裾は赤色の天鵞絨にして其長さ二十碼なるが黃鼬の毛皮にて裏を附け金にて皇室の徽章を飾りたるものなり此服は巴里の裁縫店に於て皇后の眞形大の摸型に合はせて造りたるものなれば只一度假縫を爲したるのみなり此摸型は右の裁縫店にて皇后の服を造るに常に用ひらるゝものなりと云ふ

### ●歐米人の時の觀念

我々日本人は東京においてすらも、日常の生活における時の觀念は平均三十分位が單位てある、尤も十五分位な人もあれば甚だしきは一時間位な人もある、更に甚だしいのは明日お訪ねしますとか、午後伺ひますとか云つて平氣て居る、然るに歐米の中心に行くと大槪十分か十五分が一般の單位になつて居つて、約束などにも何時何十分といつて居る、時の觀念の粗大なほど未開を意味するので、心理學者は一秒の千分の一を單位として研究するのぢや、されば文明になるに從つて秒迄は進步しなくても二分迄は確かに進步するに相違ない。

# 女學世界第貳巻第十參號記事豫告

（十月五日發行）



右の外、講義、史傳、裁縫、等毎月連載の有益なる記事あり


## 毎月一回五日發行

### 定價表

| | | |
|---|---|---|
| 一冊 | （紙數二百八頁）…… | 金二十錢 |
| 四冊 | （三ヶ月分）…… | 前金七十五錢 |
| 八冊 | （半ヶ年分）…… | 前金一圓四十五錢 |
| 十六冊 | （一ヶ年分）…… | 前金二圓八十錢 |

内（定刊數……十二冊 / 增刊四回…三、六、九、十一月價格同一）

郵稅 一冊 二錢

### 廣告料

| 二十四字詰 | 特等 | 一等 | 二等 | 三等 |
|---|---|---|---|---|
| 一行 | …… | 四十三錢 | 三十五錢 | 三十錢 |
| 半頁卅二行 | …… | 十三圓七十六錢 | 十一圓二十錢 | 九圓六十錢 |
| 一頁六十四行 | 割引三十三圓 | 割引二十七圓 | 割引二十二圓 | 割引十八圓 |

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

### 注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添へ申込あれ。





明治卅五年九月五日發行 第貳卷第十一號

編輯人 松原岩五郎
發行人 內山正如
印刷人 石川金太郎
印刷所 株式會社秀英舍 東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

電話本局 三百三番 千十八番 二千六百二十番

發兌元

文藝倶樂部
定期增刊

# 京都と奈良

正價金貳拾五錢
郵稅金貳錢五厘

世界の大公園と呼はるゝ我日本の其公園と許さるゝ京都と奈良は今や京阪の文士と美術家に依て此冊子の中に縮められぬ加ふるに關西旅行の栞なる一編を卷尾に添へ京都と奈良は言ふまでもなく其近傍の名勝舊跡をも丁寧に案内して旅行の伴侶となし兼ては古都を追懷し今昔を俯仰して文の友とし詩資の料たるを得んと期せり尚卷頭には祇園の櫻飄蕫池の藤御室嵐山は云はずもがな東西兩本願寺の名所及奈良の舊蹟其他の風景美人を紹介して餘すなし

文藝倶樂部定期增刊

# 大阪と神戸

日本商業の中心たる大阪關西唯一の港たる神戸此二大市場の風景風俗を評悉せし大阪と神戸は其地の文士と美術家との手に藉て成りたり加ふるに關西旅行案内と關西名勝案內との二編を卷末に添へ大阪と神戸の活寫眞たると共に兼て關西全体の指南車たらんとす正に是れ旅行者の好伴侶涼風窓下の好讀本なり關西の山光水色は此冊子の中に縮寫せらる卷首の口繪には兩地の美人風景風俗寫眞版數十面中にも本書には特に三色刷寫眞版を插入して新生面を啓けり旅行する人風致に飽ける文士騷客は云ふも恐文藻詩料に心掛くる人は一本を几上に備へざるべからず

正價金貳拾五錢郵稅貳錢五厘

博文館

(後付の一)

高山文學博士著

# ●世界文明史（第七版）

●●上製五拾錢　郵稅拾錢

●●並製卅五錢　郵稅八錢

文明史は人類生活の統一的歷史なり、歷史的發達の精神は是によりて釋了せらる、本書は筆を有史以前の民族に起し佛國革命に至る迄章を重ぬる廿有五主として宗教哲學文藝政治の上より東西歷史の隱微を描破して洩す處なし

## 再　版

海軍大尉長尾耕作君編

# 海軍出身案内

全壹册洋裝　正價四拾錢　郵稅金六錢

新造の戰艦裝甲巡洋艦は續々本邦に歸着し水雷艇の組立てらるゝものも亦日を追ふて竣工す數十の鐵艦水雷艇は日本國民をして心を強ふせしむるに足るも之を操縱する將校下士卒に至ては未だ吾人をして滿足せしむるに足らず之れ邦人の智識は未だ海軍々人の眞價を知らさるに非ずや本書の出づる豈夫れ偶然ならんや著者は海軍部內に於て名聲嘖々たるの人書中收むる所海軍の如何なるものなるかを詳述して亦遺憾なし卷末にわる帝國海軍法規は地方官衙公署に於ける兵事主任及び部內當事者の爲に必要なる現行法規を編纂せしもの其召集事務に關しては疑義に渉る條項に同指令等を加へたり吾國民必ず一讀せざる可からず

## 再版出來

佐々木信綱君校註
●百人一首講義（第八版）全壹册　正價二十錢　郵稅四錢

佐々木信綱君校註
●校註更科日記（第八版）全壹册　正價十二錢　郵稅四錢

第一高等學校教授落合直文君著
●中等教育國文軌範（第六版）全壹册　正價廿五錢　郵稅六錢

第一高等學校教授落合直文君著
●新撰歌典（第十一版）全壹册　正價四十錢　郵稅八錢

宮澤春文君著
●作歌自在（第六版）全壹册　正價廿五錢　郵稅六錢

飯泉規矩三君著

# ●學術自修法（第八版）

正價十二錢　郵稅四錢

學問の正道、捷徑を詳叙し、兼て研究すべき諸學科の參考書目、各學校の科程等を舉ぐ故に本書を讀む者は坐ながらにして、志す所の學問に精通するの良法を合得し勞少くして益多かるべし、學問自修の篤志者は必ず一讀すべし

山伎、內閣寺候、杉子、東久世伯、土方伯、伊東子、榎本子、芳川子、稲羽子、湖山翁、一六翁、鳴鶴若、親愛君、松本雅邦、川端玉章、黒田清輝、安藤仲太郎、熊谷直彦、荒木寛畝、鈴木松年、寺崎廣業、松本楓湖、小山正太郎氏等の名家

## 口 絵 一 {

海上に於ける日本の位地を紹介し全國民に海國思想を皷吹せんが爲め人を沿海に派遣し詳に水路國防貿易産業風景風俗の實況を視察し痛快の筆を以て之を叙す正に沿海各港繁昌記と海上漫遊案内とを兼ぬ況んや當代第一流專門諸名流の海事に關する意見と文士の小說的筆を加へたるは錦上の花となす

博文館

# 風雅文庫全部完成

發兌

鶯亭長井金升君著

## 風雅文庫第壹編 都々逸の栞

●正價金貳拾錢●郵税金四錢

天文地理鳥獸虫魚等各部に別ち古今の秀吟を添へ季題と雅題とを親切に說き卷頭には初心の爲めに作法を掲載し卷末には雅題見立物詠込折句其他數百吟を集めたる無比の珍書にして啻に雅俳家のみの重寶にはあらさるべし

## 風雅文庫第貳編 冠句の栞

●正價金貳拾錢●郵税金四錢

本書は冠句中別に東京調の名ある一派を初め全國作家の秀吟を網羅し、卷頭には冠附の作例を擧けて初心の爲めに東西を指し冠付題林中には冠句の題數百を蒐集し、附錄には上句附下句附の佳作を掲げたれば俳諧の參考ともなるべし

## 風雅文庫第參編 狂歌の栞

●正價金貳拾錢●郵税金四錢

天明の昔にありては狂歌の流行は今日の新体詩の如く甚だ盛なりし明治の今日又追々熱心家顯れて昔の俤を見るに至るされど初學者の好伴侶となるもの世に稀なるを歎じ鶯亭主人玆に此栞を編せり最初其詠方名家の說を掲け作例を春夏秋冬に分ちて詳に斯道の奥窟を指導せられたり

## 風雅文庫第四編 狂句の栞

●正價金貳拾錢●郵税金四錢

川柳點の惡口と一口に云へど狂句はあらを探す斗りでなく、人情を穿ち敎訓の意を含み、雅となく俗となく世に廣まりしは柳樽なり、然れど中には巧みに穿がち過ぎて一寸意味の分らぬ句多し、本書は柳樽中の名句を一々丁寧に評して何人と雖も一見してあゝ成程と感心する程に委しく意味を說明せり

## 風雅文庫第六編 狂体句の栞

●正價金貳拾錢●郵税金四錢

狂俳の可笑しみは狂句を離れて別に一の調あり本書は狂俳の名附親なる金升君が狂俳始つて以來今日迄の狂吟を四季に分けて集めたるものなれば俳人は古池に蛙の飛だとをいふたものだと呆れ雜俳家は乙なものだと嬉しがり一讀腹を抱へる珍書にて旅行の苦中にはなくて叶はぬ珍書なり

## 風雅文庫第六編 雜俳の栞

●正價金貳拾錢●郵税金四錢

雜俳は江戶時代の名物にして明治の世となりては更に調を改めて目下流行に向ひつゝあり本書は所謂雜俳中の面白き折句冠五字上下短句の類を網羅し例の通り卷頭に作り方を委しく說き尙狂俳の一題一句集は五百題に上越す六百餘の俳題を並べ冠句は古版の粹を拔き集めたれば空前絕后の雜俳手提灯といふべく全部六卷を備へたらんには月に花に興味深かるべし

（後付の八）

石倉翠葉君著　木村武山君畫

# 日光名所圖會

近衞公爵題字
久我從一位題字
東久世伯爵題詠
冷泉伯爵題詠
福羽子爵題詠

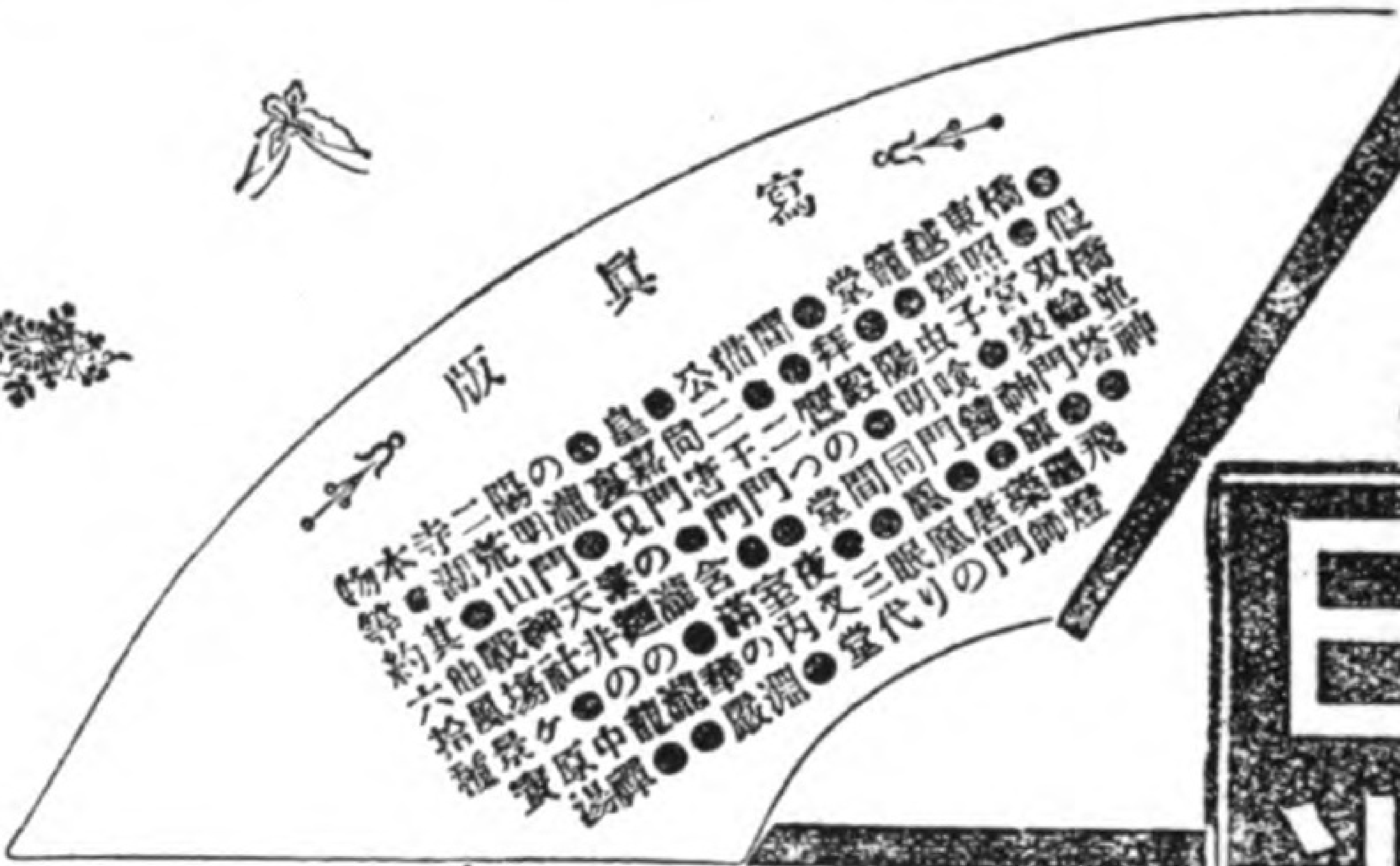
溝部栃木縣知事題字
大僧正謎照師題詠
本居侍講題詠
三島侍講題詩
佐々木信綱君題詠

城數馬君序文
大町桂月君序文
尾崎紅葉君題句
長谷川天溪君紀行文
田山花袋君序

（紙數約三百五十頁）

（近刊）

博文館發兌




日光觀ざれば結構と云ふ勿れとさへいふ彼山紫水明にして殿堂の偉觀壯麗なる日光山の事蹟につき明細に記せるものは實に汗牛充棟も啻ならず或は日光山志の如き或は晃山拾葉の如き其他何その他何としかも時日の變遷は在來の史書を以て到底余輩を滿足せしむるを得ず著者玆に見るあり即ち幾多の舊史漫筆と幕府の諸記錄に據りこれを現況に照して史的考證を試み且つ文中一々精巧美麗なる寫眞銅版木版二百餘種を挿入して通俗に記述せるもの是を本書と爲す苟も日光一山の事蹟と沿革を詳細に知らんと欲するものは宜しく本書を繙くべきなり蓋し日光を記せる幾多の出版書中未た曾て見ざるの珍書なるべし、

（坪內製本）

女學世界
毎月壹回五日發行
第貳卷第拾壹號
明治參拾五年九月五日發行
明治參拾貳年拾月廿五日第參種郵便物認可



(定價金貳拾錢)


東京秀英舍印刷